

第2部

学部・研究科のFD活動報告

・ 法文学部、人文社会科学研究科	2
・ 教育学部、教育学研究科	10
・ 理学部	13
・ 医学部	18
・ 歯学部	30
・ 工学部	51
・ 農学部、農学研究科	56
・ 水産学部、水産学研究科	70
・ 共同獣医学部	87
・ 理工学研究科	99
・ 医歯学総合研究科	129
・ 保健学研究科	139
・ 司法政策研究科	150
・ 臨床心理学研究科	156
・ 連合農学研究科	164

法文学部・ 人文社会科学 研究科

法文学部・人文社会科学研究科 FD 活動報告

法文学部・人文社会科学研究科における FD 活動は、1. 法文学部学生による授業評価アンケート調査、2. 法文学部授業公開・授業参観（研修授業）、3. 人文社会科学研究科授業評価アンケート調査、4. 人文社会科学研究科 TA アンケート調査であり、平成 24 年度の成果は以下のとおりである。

1. 法文学部学生による授業アンケート調査

今年度の授業評価アンケートは、6月 25 日から 7月 13 日の間、各教員が担当授業のいずれか一つを選ぶ形で実施された。調査方法等について、平成 23 年度に大きく 2 つの改変を行った。その一つは、アンケート用紙の質問項目を簡素化・整理し、より回答しやすいものとしたことであり、もう一つは、実施時期を授業公開・授業参観も実施される後期から前期に移し、業務の分散化と学生・教員・事務職員の負担の軽減に配慮したことである。平成 24 年度はこれを全面的に踏襲し、実施した。実施率は学部全体で 91.5% となり、23 年度とほぼ同率であった。また、アンケートが行なわれた授業の形態を分析すると、講義とそれ以外の演習・実習・実験がほぼ 1:1 の比率であった。学科毎の結果を分析すると、おおむね以下ようになる。

1. 1. 法政策学科

(1) 講義

昨年度が全般的に一昨年度を下回る評価結果となったため、本年度は上昇を回復することは比較的容易だったようである。この 3 年間の比較で、いわゆる V 字ターンの上昇傾向にある項目としては、「5 授業を通して、自分にとって発見があった」、「7 シラバスで提示された学習目標に到達した」、「8 この授業に対するあなた自身の受講態度の総合評価を 10 段階で回答してください」、「10 教員は授業の目標をはっきり示した」、「12 教員は授業を時間どおり行った」および「B 教科書や補助教材が効果的に用いられていた」が挙げられる。また、この 3 年間の比較で毎年上昇傾向の項目として、「3 あなたは不明な点を積極的に教員に質問した」、「4 この半年間でこの授業のオフィスアワーを利用した」、「6 この授業に対して満足している」、「9 この授業はわかりやすいものであった」、「13 教員の授業に対する意欲や工夫が感じられた」、「14 質問や意見に対して適切に対応してもらえた」および「15 この授業に対する総合評価を 10 段階で回答してください」が挙げられる。

他方、昨年度を下回った項目としては、学生自身に関するもので「1-1 あなたのこの授業への出席状況について」が挙げられる。

過去 2 年間の比較では、数値上、教員は改善の努力をしていると思われる。今後も更なる教員の側から学生との意思疎通を図るなどの工夫が求められていると思われる。

(2) 演習

従来と同様に本年度も、講義の評価と比較して演習に対する評価は高い水準にある。演習についても、昨年度が一昨年度を下回った項目が多かったため、今年度は殆どの項目がいわゆる V 字ターンの上昇項目に転じている。具体的には、「2 あなたは授業に意欲的に取り組む努力をした」、「4 この半年間でこの授業のオフィスアワーを利用した」、「5 授業を通して、自分にとって発見があった」、「6 この授業に対して満足している」、「7 シラバスで提示された学習目標に到達した」、「8 この授業に対するあなた自身

の受講態度の総合評価を10段階で回答してください」、「9 この授業はわかりやすいものであった」、「10 教員は授業の目標をはっきり示した」、「11 教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった」、「12 教員は授業を時間どおり行った」、「13 教員の授業に対する意欲や工夫が感じられた」および「14 質問や意見に対して適切に対応してもらえた」が挙げられる。教員の側が学生の自発性を引き出す工夫をしたとともに、教員自身の改善の努力があったものと思われる。

また、学生生活全体の支援として整備・充実してほしいものという設問17に対する回答として、講義とは異なり、「4 参考書等の図書」の整備・充実への要望が高くなっていることから、演習・課題研究に必要な法学・政治学等の基本的文献の整備・充実が求められているものと思われる。

1.2. 経済情報学科

(1) 講義

昨年度と比較して、総体的に評価はあまり変わっていない。今年度は、昨年と同様に前期にアンケートを行ったためにアンケートの回答数があまり変化がない事もその要因になっているのかもしれないし、1年生が大学に入学してすぐにアンケートに回答していることも影響しているのも昨年と同様であるからだろう。多くの項目についての評価はほとんど横ばいで、評価の分布の形も変化がなかった。このことから授業評価が導入されてから一定の時間を経て、教員の授業への取り組みとそれに対する学生の評価が落ち着いてきていることがわかる。その中で、例えば(3) 教員への質問についての結果と(14) オフィスアワーの利用の結果といったようなその評価が連動しているものについては、比較的、改善策を模索することが出来ると思われる。とりわけ、オフィスアワーの活用については工夫が必要だろう。また、(17)の学生生活の支援については、昨年度、一昨年度と同様に学生の不満が浮き彫りになっており、物理的に解決できる部分は教員側が早急に努力していく必要があるだろう。

(2) 演習

演習については、昨年度と比較して、総体的に評価が横ばいか高くなっている。これは、昨年度から前期にアンケートを実施したことで、演習に参加してすぐの2年生が演習に対しても講義と同様の評価を行ったためではないかと考えられる。このことから授業評価が導入されてから一定の時間を経て、教員の授業への取り組みとそれに対する学生の評価が落ち着いてきていることがわかる。今後はさらに、学生の演習に対するモチベーションや積極性をいかに引き出すための努力を引き続き進めていくことが必要だろう。また、例年のことながら、演習についてのアンケートは教員と学生が見えるところで行うことになり、どうしても講義よりも匿名性が損なわれてしまい客観的な評価になりにくい側面がある。したがって、アンケートの取り方も依然として今後の課題となるであろう。

1.3. 人文学科

(1) 講義

今年度は、質問項目自体は昨年度と同一である。各質問項目の平均値も、ほとんどすべての項目で昨年度と同一という珍しい結果となった。

しかし、見かけの平均値は同一であっても、(A)(B)のように内容的には改善された項目を見落としてはならない。また反面、ほとんどの質問項目において平均値も分布型もほぼ昨年と同一の結果になった

ということは、高い平均値を示す項目に関しては継続して授業の質が維持されていることをしめしているが、逆に低い平均値の項目に関しては、根本的な改善がなされていないということを示唆している。後者について具体的に言えば、項目（3）「あなたは不明な点を積極的に教員に質問した」の平均値は2年連続で2.16であり、また（4）「この半年間でこの授業のオフィスアワーを利用した」の平均値も2年連続で1.28である。この結果は、学生が質問等をしやすい環境が整備されていないということを示唆している。

このように、今後改善へ向けての努力が必要であることを示す結果はあるが、全体としてみれば高い平均値を維持しているということができる。

(2) 演習

新しいカリキュラムの学生が3年生になりゼミに所属したことが、昨年度と異なった要素としてある。共通のテキストやテーマがあらかじめ提示される通常の演習とは異なり、個人研究の発表を中心にするゼミにおいては学生の参加がより強く求められる。この点が今回のアンケート結果にどの程度反映されているかを厳密にいうことはできないが、たとえば(a)(b)の質問などはその点が影響しているとも考えられる。即断は慎むべきであろうが、今後注目していくべき点であると思われる。

全体の傾向としては、おおよそ例年並みの結果が出ている。

2. 法文学部授業公開・授業参観（研修授業）

今年度の授業公開・授業参観は、11月20日から12月24日まで実施され、法文学部の全教員に対して、期間中に1コマ以上の科目を公開するとともに、公開される授業の中から1コマ以上参観することが求められた。また、平成23年度に引き続き、FD活動をより実効あるものとする目的で、授業参観報告書の中に「授業をよりよくするアイデア」を募集する欄を設け、各教員の幅広い意見を募った。その成果は、おおむね次のように総括される。

2.1. 授業公開実施による成果について

全員参加による授業公開・授業参観は、今年度で7年目を迎える。過去6年間の取り組みを通して、さまざまな工夫や改善が図られてきた。これまでの工夫や改善は講義形式の授業に関しては以下の3点に要約される。

- (1) 受講生の興味・関心を高めるための工夫や改善
- (2) 受講生の理解度を高めるための工夫や改善
- (3) 双方向的な授業スタイルを確立するための工夫や改善

授業公開報告書・参観報告書の回答からまとめると、(1)については受講者が身近に感じるテキストの選択や実践的な知識の教授、実体験や実例による説明、アクチュアルな問題に関連付けた解説、受講者の興味を引きそうな知識を意識的に盛り込むなど、種々の工夫が試みられている。

(2)については学生の理解度に応じた講義はもちろん、補足的資料の配布や板書の工夫、図表や映像（ビデオやパワーポイント等）を用いた解説、Q&Aのレジュメや質問票の配布、授業冒頭での前回内容の復習・確認など、それぞれ講義の形態や内容に即して受講生の理解度を高める試みが採り入れられている。

(3)に関しては、受講生の質疑応答を促す雰囲気づくりに始まり、難解な用語を受講生自身に調べさせ

発表させたり、相互に発表を評価させたり、受講生を指名して質問やクイズに答えさせるなど、教員の一方通行を避ける試みが行われている。

演習形式の授業については、改善や工夫は次の2点にまとめられる。

- (1) 受講生の自発的な発言を引き出すための工夫や改善
- (2) 受講生同士の意見交換や討論を活発にするための工夫や改善

これらに関しては、受講生が発言しやすい授業の雰囲気づくりや受講生の関心を惹くテキストの選択に始まり、準備段階からのレジュメ作成指導、班ごとの発表や討論、司会役と報告者の役割の確認、次の報告内容の予告、質疑の時間の確保、TAの活用など、授業内容に応じてきめ細かな工夫が行われていることが読み取れる。

また参観報告書の「工夫していると感じた点・取り入れたい点」からは、参観者が他の授業から改善のヒントを得ていることが窺える。授業方法はそれぞれの講義や演習の内容と密接に関わっており、必ずしも改善方法が参考にならない場合もあることは言うまでもないが、これまでの授業公開・授業参観の取り組みが着実な授業改善に結びついている状況が確認できよう。

2.2. 授業公開の在り方について

まず今年度を含む過去4年間の授業公開の結果を下に表で示す。

(1) 参観者数（参観率）

今年度は公開科目が87コマと過去最高を記録し、総公開コマ数は107コマにのびた。教員が積極的に科目提供に応じてくれたことが分かる。一方、参加者は48名で昨年比横ばいであった。そのため、(C)の参観率は昨年から5ポイント低い55%にとどまった。

(2) 被参観率

被参観率は昨年比-2ポイントの33%となった。参観者のいた科目数は1科目増えているが、公開科目数が増えたために下がったものである。これらの数字をどのように評価するか見方は分かれようが、母数となる公開科目・公開コマの提供増に見られる教員の積極的な姿勢を評価する一方で、形骸化の指摘も真摯に受けとめねばならない。

	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
(A) 公開された科目数	83科目	80科目	80科目	87科目 (107コマ*)
(B) 参観者数	40名	39名	48名	48名
(C) 参観率 [(B) ÷ (A)]	約48%	約49%	60%	約55%
(D) 参観者のいた科目数	34科目	30科目	28科目	29科目 (31コマ)
(E) 被参観率 [(D) ÷ (A)]	約41%	約38%	約35%	約33% (約29%)
(F) 推薦授業の参観者数	6名	6名	11名	4名**

*コマ数には同一授業の複数回の公開が含まれる。

**2012年度は経済情報学科の推薦授業指定はなし。

次に報告書の「授業公開・参観に対する意見」を参考に、今後の授業公開のあり方について、以下の3点を中心に考察を行いたい。

- (1) 実施時期・実施期間について
- (2) 実施方法について
- (3) 実施内容について（推薦授業等）

(1) 実施時期・実施期間

今年度は実施期間を昨年より1週間延長して参観の便宜を図った。しかし参観者数は昨年と同じ数に留まった。その要因としては、例年後期のみでは参観できる授業に限られることがまず挙げられよう。従来から実施時期の見直しの要望は出されており、昨年度も実施時期の見直しについて「今後真剣な議論が必要」と報告書で指摘されていた。

今回のアンケートではこの項目に回答した30名のうち6名から前期に実施すべき（通年実施の意見を含む）との意見が寄せられた。とりわけ経済情報学科については9名中5名から前期実施の要望が出されたが、その背景には同学科の公開科目30科目中12科目を「演習」が占めていることに窺われるように、公開科目の偏りがある。形骸化、マンネリ化の指摘、また「演習」（ゼミ）の公開の意義に対する疑問を含めて、前期の実施を検討すべき時に来ている。

(2) 実施方法

今年度は複数科目の提供に加えて、同一授業の複数回の公開も呼びかけた。その結果、公開科目は87科目と微増（昨年比+7）ながら、公開コマ数は107コマと大幅に増えた。その結果、たとえば法政策の科目で4回の授業に1名ずつ計4名が参観したように、参観条件の改善が図られたと言えよう。今後も継続すべきと考える。

一方で、公開科目数および公開コマ数に対する参観率の低下には歯止めがかからなかったことは反省材料である。広報の徹底や(1)の実施時期の問題などにも関わるが、下記(3)の実施内容と併せて総合的に検討を進めたい。

(3) 実施内容（推薦授業等）

FD委員会の選定による推薦授業は今年度は法政策と人文の2学科、計4科目であった（経済情報は有意のデータを欠いたため選定せず）。推薦授業の参観率（全参観者に占める推薦授業参観者の比率）は一昨年度が約15%、昨年度は約23%、今年度は約13%であった。必ずしも推薦授業に参観者が訪れていないケースもあるが、公開科目が増加する中、新任教員にとって参観授業選択の際のひとつの判断材料になることから、今後も継続すべきと考える。

全体として今年度は参観された科目数、参観者とも昨年比でほぼ横ばいであった。公開科目ならびに公開コマ数が増えたため、参観率はやや減少する結果となっている。しかしアンケートの回答からは授業公開自体の意義や必要性について否定的な意見は寄せられず、教員は総じてきわめて真摯に公開および参観に関わっていることが窺える。

したがって、評価に当たっては年度ごとの単純な参観率のみではなく、たとえば「2年間で全教員の何割が参観できたか」というような、学部全体の授業改善につながるような統計数値を求めることも必要ではないかと考えられる。

一方、アンケートの回答の中には、従来の授業参観の限界や形骸化を指摘し、ローテーション方式を含め、むしろ公開授業数を絞って特定の授業を多くの教員に参観させるという、一種の「研究授業方式」

を提案する意見があった(4名)。この方法はあるいは推薦授業の延長上に位置づけられるかもしれない。公開授業の負担軽減を求める声や意見交換会の充実を求める声なども勘案すると、今後従来の授業公開との併用も含めてその実施に向けた検討が必要となろう。

3. 人文社会科学研究科授業評価アンケート調査

今年度の「人文社会科学研究科授業評価アンケート調査」は、6月25日から7月13日にかけて実施された。調査の対象は、各教員の担当授業のうち1科目としたが、博士後期課程を担当している場合は、博士前期課程と博士後期課程それぞれ1科目とした。アンケートの項目内容は、継続性を重視する観点から、従来と同様としたが、今年度は、調査の実施率を向上させるために、学部授業に対する授業評価アンケートと実施期間を同一とし、教員への周知徹底を図った。アンケートの結果は、おおむね次のようにまとめられる。

(1) 大学院課程の授業評価アンケート調査は今回で7回目だが、研究科全体の実施率は82.1%で、前年度の80.5%とほぼ同等であった。本アンケート調査は、授業改善のための基礎的データを収集するために不可欠なものであるから、実施率を高い水準で維持するため、今後もアンケート実施に対する各教員の意識向上、アンケート実施依頼の徹底措置が必要であろう。

(2) 今回の調査でも、授業についての5項目(1~5)と受講者に関する2項目(6,7)のすべてにおいて5段階評価で4以上の評価が9割を超えており、大学院課程の授業が高く評価され、受講者も熱心に取り組んでいることがわかる。自由記述でも、授業や担当教員に対する肯定的評価が多く見られた。ただし、いくつかの授業については、自由記述において「授業がむずかしい」との声もあり、さらに学生の理解度に応じたきめ細やかな対応が教員側に必要だと考えられる。

(3) 過去6回の調査と今回のアンケート結果を比較しても全体的傾向は一貫しており、全ての調査において全項目は5段階評価で一貫して高い評価を得ている。こうしたアンケート結果の一致は、本研究科の授業に対する受講者の満足度が高いことを示しているといえよう。

以上のように、人文社会科学研究科では、受講者から高く評価される効果的な授業が実施されていると評価することができる。今後は、このレベルを維持するだけでなく、さらにより高いレベルの授業を構築していくためにFD活動に取り組んでいくことが望まれよう。

4. 人文社会科学研究科 TA アンケート調査

「TA アンケート調査」は、授業における教育支援者としてのティーチング・アシスタント(教育助手。以下、「TA」と記す)の在り方を教員間で検討することを目的に、平成19年度より開始された。今年度は、法文学部後期授業にTAとして働いた人文社会科学研究科の学生全員を対象として、平成25年1月16日から2月6日にかけて実施された。その結果は、以下のようにまとめられる。

(1) TAに対するアンケート調査は今回が6度目であったが、全てのTA担当者からアンケートの回答を得ることができ、TAの活動実態を知る上で有意義なデータが得られた。

(2) 「事前準備」「教員の指導等」「T Aのメリット」の項目の結果から、T Aは教員との間で適度な連絡をとりつつ、熱心に業務に従事し、T A制度が効果的に実施されていることが確認できる。また、「T Aの負担」については、研究活動等の大きな支障にはなっていないが、T A自身の授業との兼ね合いのなかで負担と感じられている場合もあった。この点については、指導教員がT Aの状況を把握し、柔軟な対応をとることが求められるだろう。

以上の結果から、今年度も、人文社会科学研究科のT A制度は、学生へ教育経験の機会を提供し、業務の遂行も高く評価できることが確認できた。

教育学部・ 教育学研究科

教育学部・教育学研究科FD活動報告

【1】はじめに —平成24年度の主な活動—

平成24年度の教育学部教育改善委員会の委員構成及び年間の活動内容について簡単に報告する。

教育改善委員会委員

- 日隈正守 : 文科系 (委員長)
肥後祥治 : 教育系
磯川幸直 : 理科系
石田匡志 : 実技系
中島祥子 : 生涯教育系, 自己評価委員会
川崎晃央 : 教務委員会
黒光貴峰 : 研究科運営委員会
松井智彰 : 全学FD委員会

教育改善委員会は原則毎月1回開催され(本年度は11回開催), 教育学部及び教育学研究科の教育改善のための活動を行った。主な活動は次のとおりである。以下それぞれの活動の概要を報告する。(但し, 7の平成24年度教育改善委員会報告書を作成については省略する。)

《平成24年度の主な活動内容》

1. 第5回学生FDサミット・2012夏(於:立命館大学)に参加
(平成24年8月25日~8月26日)
2. 教育学研究科の授業アンケートを実施
(平成24年10月16日~11月14日)
3. 授業公開および授業参観を実施
(平成24年11月5日~12月7日)
4. 教育学部の授業アンケートを実施
(第一回:平成25年1月16日~1月22日,
第二回:平成25年1月28日~2月1日)
5. 教育改善委員会学生実行委員会主催第8回FDシンポジウムを開催(教育学研究科と合同)
(平成25年1月25日)
6. 九州地域大学教育改善FD・SDネットワークQ-Conference 2012(於:九州産業大学)に参加
(平成25年3月2日)
7. 平成24年度教育改善委員会報告書を作成
その他, 日隈委員長が, 学生実行委員会にオブザーバーとして参加した。

【2】教育学部の教育改善に関する活動報告

1. 第5回FDサミット・2012夏

教員が学部学生を引率して, 立命館大学衣笠キャンパスにおいて開催された「第5回学生FDサミット」に参加した。このFDサミットでは, 全国の学生FD委員が集結し, 2日間に亘って授業改善に関する活動等について議論がなされた。他大学のFD委員と交流し意見交換や議論を行うことで, 問題意識を共有することができた。教育学部・教育学研究科合同FDシンポジウムを行う上で大いに参考になった。

2. 授業公開および授業参観

公開授業数が94(参加教員数95名)に及び, 昨年度に引き続き殆どの専任教員が授業公開したにもかかわらず, 実際に参観がなされた授業科目数は26科目で27.7%に止まった。参観率の減少傾向に一定の歯止めをかけることができたが, なお全体の70%以上の授業が参観されない状態である。

授業参観報告書の記述内容の中に見られるように, 教員の中で様々な授業改善の試行錯誤が行われてきている。また, それを参観した教員も自らの授業実践への振り返りのきっかけや, 指導方法の工夫のヒントとして用いようと刺激をうけていることがうかがえる。参観者数が多くないことは今後の課題として検討を要するが, その多寡にかかわらず授業公開の場を設定することは, 教員間の指導方法の改善やそのための情報交換の場を提供する意味で重要な活動であると考えられる。

3. 教育学部の授業アンケート

今年度の授業アンケートは回収率を上げるために, Moodleシステムを使わず, 紙に記入する方式に戻して今年1月下旬におこなった。

アンケート内容は学生自身に関する事, 授業に関する事で16項目の質問から構成された。回答を分析した結果, 学生の欠席回数が今年度になって目立って増加していることを除いて, 過去4年間の授業アンケート回答にほとんど変化はない

ことが明らかになった。また、質問項目間の相関係数から、学生の授業に対する満足度は、授業の理解度・教員の話し方の明瞭さ・授業に対する教員の熱意・授業における資料の提示の適切さ・質問への対応の丁寧さ・授業中の教員と学生の対話に強く関係することを読み取ることができた。教育改善の立場からすると、学生の自主的な学習（予習・復習を含む）が相変わらず少ないことが、最大の問題であると考えられる。

4. 教育改善委員会学生実行委員会主催第8回FDシンポジウム（教育学研究科と合同）

教育学部教育改善委員会学生実行委員会の学生が中心となって、教育学研究科・教育学部教育改善シンポジウム「EDU会議2013—みんなの理想の大学にするために—」が開催された。学部学生アンケートと大学院生アンケートの集計結果を踏まえて、より良い大学の実現に向けてのグループ討論及び全体討論がおこなわれた。

シンポジウムでは、以下に示す3つのテーマ

- (1) 理想の授業とは、受けたい授業とは
 - (2) カリキュラムについて
 - (3) 教員志望者・大学院進学者を増やすためには
- を用意し、参加者を9グループに分けて、各テーマについて3グループがディスカッションした。その後全体で発表・質疑応答がなされた。

学生及び教員が、教育学部・教育学研究科における授業や教育課程について現状を再認識し、より良い大学像に向けての課題を共有することができた。

5. 九州地域大学教育改善FD・SDネットワークQ-Conference 2012

教員が学生を引率して九州産業大学で開催されたQ-Conference 2012 Being as a Cultivator 私が育む学生の実りに参加し、教育学部における日頃の学生FD活動の様子を発表した。参加した本学部の学生にとっては、他大学の教職員や学生等と交流することによって、日ごろの活動の位置付けを客観的に再確認する貴重な経験となったと思われる。今年度の成果と課題が次年度学生実行委員に引き継がれ、教育学部における学生FD活動が更に活性化していくことが期待される。

【3】教育学研究科の教育改善に関する活動報告 教育学研究科の授業アンケート

教育学研究科の授業内容と学習環境に関するアンケート調査を、昨年11月14日から12月14日にかけて大学院生全77名を対象に行った。その結果を基に、1月25日に学部と合同で開催した教育学部教育改善シンポジウム「EDU会議2013—みんなの理想の大学にするために—」において議論をし、授業内容や学習環境に関する様々な意見が得られ、改善方法について検討した。

今回のアンケート調査では、回答者の半数以上が授業内容・授業形態・研究・学習環境に満足していた結果であった。学部・研究科合同でおこなったことにより、学部生にとっては大学院におけるFD活動を垣間見る機会にもなり、今後の進路を選択するうえで大いに参考になったと思われる。

アンケート調査を通して、大学院生の求める大学院教育について把握することができ、あわせて、これまでの教育改善活動の成果を確認することができた。しかし、アンケート調査に回答した者、シンポジウムに参加していた大学院生や教職員は限られていたため、今後は、これまでの活動に関する成果と課題を皆で共有化し、少しでも多くの者が、更なる大学院教育の充実に向けて考えていくようにしていく必要がある。

【4】おわりに

昨年度に引き続き、本年度のFD活動においても、他大学の先進的な教育改善活動を視察した学部学生らが主体となって学部シンポジウム（教育学研究科と合同）を開催し、内容の充実が果たされるなど、複数の事業を有機的にリンクさせることによって成果が出たものが幾つかあった。この背景には、教育学部学生FD委員会を中心とした学生自身の教育改善に対する意識の高まりがあると思われる。しかし一方では、授業アンケート回収率や授業参観者数の低さや、相変わらず学生自身の授業内容理解のための自主的な学習が不足したままで改善が見られないなどといった課題も残されたままである。教育学部・教育学研究科では、これらの課題とその原因を正確に認識したうえで論点を整理し、教育改善に向けた具体的な取り組みを実行に移していくつもりである。

理学部

平成24年度理学部FD活動報告書

平成24年度に理学部で実施したFD活動の概要を記載する。

- (1) 学生による授業評価アンケートの実施（7月、12月）
- (2) 授業公開および授業参観の実施（6月、11-12月）
- (3) FD講演会の開催および学生・教職員ワークショップへの参加
- (4) FDミニ図書館の運用

1. 学生による授業評価に関するアンケート調査の実施

理学部における授業アンケートの目的は受講学生の率直な声を担当教員に還元することにより個々の授業や学科のカリキュラムをより有益なものへと改善していくことにある。平成13年度に初めて実施する際に集計結果を教員評価のための資料として利用しないことを取り決めている。今年度の授業アンケートは、原則として不定期実施科目、集中講義、教職専門科目、非常勤講師担当科目を除く全科目を対象に行われた。アンケート用紙は、授業ごとに受講者分を担当教員に渡し、授業時間の適切なタイミングで記入させた。13の質問項目を設定し、それぞれ5を最高値（高評価）とする数値で評価するようになっている。自由記述欄も設けている。記入済みの用紙は所定の封筒に入れて教員が学生係に持参することにした。

このアンケート結果は、授業ごとの回収済みアンケート用紙の現物と、集計したデータを担当教員に返却し、担当教員からは結果に対する自己分析書を提出してもらっている。理学部FD委員会ではアンケートの集計結果と提出された自己分析書を保存し、必要に応じて学部及び各学科のカリキュラム改善のための基礎データとして活用できるようにしている。以下に24年度のアンケート結果について報告する。アンケート回収枚数・回収率については例年とほぼ同じである（回収枚数／実施科目受講者総数は前期69%、後期68%）。24年度の全質問項目の評価点平均値は前期、後期それぞれ3.86、3.85であり、4に近い高い値となっている。この種のアンケートでは回答者である受講生にとって最高または最低の評価点はつけにくいと思われることを考慮すると、平均値が4を大幅に超えるようになる（大多数の学生が5と

回答し、3以下の回答がほとんどないような状況)ことはなさそうである。平均値が4に近いということは十分に高い評価に到達しているものとみなすことができる。今後もこのような高い水準を維持するには、各教員による継続的な授業改善の努力が必要であろう。

24年度理学部前期
授業アンケート結果

部外報告用(集計処理済データ)

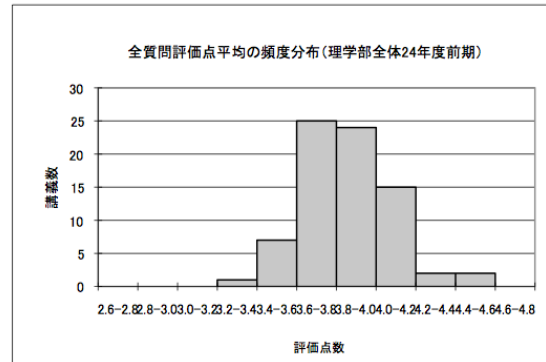
学生によるアンケート結果をまとめましたので、授業の改善にお役立て下さい。

注意点

1ページ目にアンケート全体のみ、2ページ目以降に質問項目ごとの回答平均値と頻度分布が書かれています。各ページの赤い表示(文字とグラフ)が本授業のデータです。開講学科別の集計の際には、複数学科で開講している科目は代表する担当教員の所属学科が開講学科であるとみなしています。

回答平均値の計算では、「わからない、その他」の数を除いてあります。質問11、12以外では、この平均値の数値が高いほど、学生の評価が高いことになります。さらに13個の質問全体の評価点平均を計算しました。その際、質問11と12では、回答3に5点、4と2に4点、5と1に3点を与えて平均してあります。右図は、このようにして計算した理学部全科目の授業点数の頻度分布です。自分の授業がどの程度の位置にあるかの参考にしてください。

「受講者数」は理学部所属学生の数です。他学部生を含む授業では回答枚数が受講者数を超えることがあります。



時間割コード	講義題目	代表担当教員名	学科	受講者数	回答枚数	学生の所属							回収率	評価点平均値			
						数理	物理	生化	地環	その他	学科未記	全質問		質問1,6,7	質問2-5	質問8-13	
学部合計			全体	3315	2289	580	466	778	327	45	113	0.69	3.86	3.86	3.51	4.09	
平均																	

24年度理学部後期
授業アンケート結果

部外報告用(集計処理済データ)

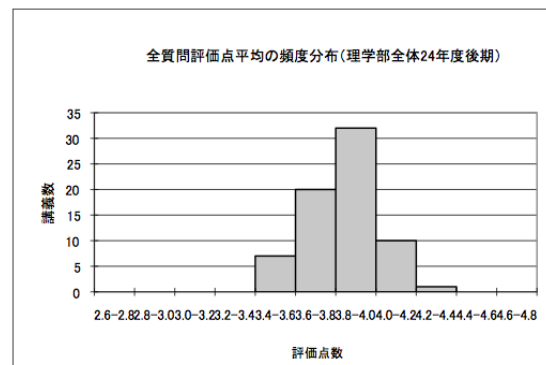
学生によるアンケート結果をまとめましたので、授業の改善にお役立て下さい。

注意点

1ページ目にアンケート全体のみ、2ページ目以降に質問項目ごとの回答平均値と頻度分布が書かれています。各ページの赤い表示(文字とグラフ)が本授業のデータです。開講学科別の集計の際には、複数学科で開講している科目は代表する担当教員の所属学科が開講学科であるとみなしています。

回答平均値の計算では、「わからない、その他」の数を除いてあります。質問11、12以外では、この平均値の数値が高いほど、学生の評価が高いことになります。さらに13個の質問全体の評価点平均を計算しました。その際、質問11と12では、回答3に5点、4と2に4点、5と1に3点を与えて平均してあります。右図は、このようにして計算した理学部全科目の授業点数の頻度分布です。自分の授業がどの程度の位置にあるかの参考にしてください。

「受講者数」は理学部所属学生の数です。他学部生を含む授業では回答枚数が受講者数を超えることがあります。



時間割コード	講義題目	代表担当教員名	学科	受講者数	回答枚数	学生の所属							回収率	評価点平均値			
						数理	物理	生化	地環	その他	学科未記	全質問		質問1,6,7	質問2-5	質問8-13	
学部合計			全体	3074	2100	503	415	530	492	39	121	0.68	3.85	3.86	3.46	4.10	
平均																	

本年度は、通常のアンケート回収と集計結果の返却に加えて、過去7期にわたるアンケートの集計結果を総合的に分析し、全教員にその内容をフィードバックする

ことも行った。一般的に、実験・実習を伴う授業は評価が高くなる傾向があること、および、学生側の不満は「教員の話し方（声が小さく早口）」、「板書（読み取りにくい。書いてすぐ消す。）」、「スライドの送りが早すぎる」ことに起因する場合が多いことがわかった。

2. 授業公開と参観の実施

前期は6月25日から29日、後期は11月30日から12月11日に実施した。前期の公開授業数は8件で参観者数は3人、後期の公開授業数は10件で参観者数は0人であった。教員の多忙化が進むなかで、この種のイベントにノルマのようなものを課すと、FD活動を形骸化させることになり、教員をFD活動から遠ざける恐れがある。今年度の方針として授業公開・参観への参加は教員の自主性にまかせることとし、委員会としては数値目標などを掲げなかった。結果的に公開授業数は増えたが、参観者は前年度より減少した。参観の有無にかかわらず公開授業を担当した教員全員が「授業公開・参観報告書」を提出している。報告書の内容からも参加した教員が授業改善に真摯に取り組んでいることがわかる。

3. FD講演会の開催および学生・教職員ワークショップへの参加

3.1 FD講演会

理工学研究科・工学部との共同企画として講演会を企画し、名城大学教授の川勝博氏による講演が以下のように行われた。大学における科学基礎教育改革の視点及び国際的な科学技術教育の改革の動きについて学び、これによって将来の基礎科学の内容を想像することによって本学教員の意識改革に資する内容であった。

参加人数 理学部 12名（教員8名、大学院M2名、大学院D2名）

工学部 14名（教員5名、大学院M1名、学部学生6名、事務2名）

研究科 4名（事務4名）

合計 30名

講師：川勝 博

所属：名城大学総合数理教育センター長

講演タイトル：科学教育の国際的転換と科学リテラシー

日時：2012年12月21日（金）16:00～17:30 講演、17:30～18:00 質疑応答

会場：理学部1号館1階101講義室

講演要旨：いまは文明の誕生以来の大転換期です。この大変革の時代に日本は、高度経済成長の成功体験にとらわれて、新しい時代の展望を切り開いてはいません。そのために政治も経済も教育も、国際的にみれば、恐ろしいほどの劣化が進行しています。この時代に、未来の時代を育てる大学人は、どのような大学教育を考えるべきか、それをともに考えてみたいと思います。

3.2 全学におけるFD関連活動

11月10日開催の「FD・SD合同フォーラム」に理学部から教員1人が出席した。12月18日開催の「学生・教職員ワークショップ」には理学部から学生1人、事務系職員1人が出席した。

4. FDミニ図書室の運用

23年度に全学FD委員会において申請・配分されたFD活動経費によりFD活動に関連する書籍を購入し、理学部の各学科の図書室または事務室に配置して利用に供している。本年度は前年度に引き続き、このFDミニ図書室の運用を継続した。

医学部

医学部医学科 FD 活動報告

1. はじめに

医学部医学科における教育は、国際的な医学教育の動向に対応する必要性から、本邦の全ての医学部においてグローバルな教育の基準（計画、実施、成果）を超える医師養成が求められるようになってきている。特に改善が求められている点が臨床実習の長期化と診療参加型臨床実習の推進である。平成24年度のFD活動は、望ましい臨床実習を実践するために本学のカリキュラムと指導医の指導技能の改善が必要となっていることから、臨床実習担当者が先進的な教育を既に行っている医学部の視察を行い、本学の実習に還元することを計画した。また、医学科では教育到達目標と3つのポリシーによる教育を実践するために、アドミッションポリシーに基づく入学試験のための面接試験の評価方法について平成22年度より講習会を実施しているが、平成24年度も面接担当教員を対象とした講習会を実施した。平成23年度から全学年の学生を対象として実施している授業評価アンケートも、学生の教育への自主的な取り組み、学習計画と成果、教員の指導等の評価と改善に有効であることから、継続して実施した。これら医学科FD部会の活動を報告する。

2. 東京医科歯科大学臨床実習視察と討論

東京医科歯科大学は2001年に教育を最重要課題とする方針を掲げ、2002年よりハーバード大学での教員研修と学生交流を行っている。文部科学省の事業では診療参加型臨床実習の指導方法の「モデル」として東京医科歯科大学が全国の医学部に紹介され、多くの医学部教員が視察に訪れている。

今回は視察を希望した3名の指導医（小児科 西山 永田、消化器内科・臨床研修センター 瀬戸山）が11月29日朝7:15~12:45に、担当者による説明を受け、診療科個別見学、全体質疑を行った。

以下の点が参加者から報告されている。

- 1) **実習のあり方**：ハーバード大学への定期的な教員や学生の派遣などにより、参加型臨床実習の実際を、教員のみならず学生にも周知している。学生が臨床問題解決の場に主体的に参加し、臨床推理や問題解決の過程や方法と医師としての態度を学ぶことが目標であることを学生、教員が十分に理解している。
- 2) **指導体制**：教育の中心はシニアレジデント（後期研修医）であり、その他に、卒後4~7年目程度のクラークシップ・チューター、クラークシッププログラムの各診療科の実務代表としてクラークシップ・ディレクターというのをそれぞれ1名設定している。それぞれの会議もあり、定期的に評価を行っている。
- 3) **指導の質の向上**：指導医がそれぞれの職務として任を受けることにより自覚と責任感が高まっている。指導医のモチベーション向上のためには、学生によるプログラム評価をフィードバックし、その評価を昇進判定へ反映させている。既に医科歯科大学の臨床実習を受けた医師が学生の指導にあたっているため、円滑な指導と学習が行われていた。また学生が診療の一部を担って指導医の業務を軽減する give and take の関係で維持されていることも強調されていた。
- 4) **学習環境整備**：各科の実習での到達目標を設定・周知し、さらに院内 PHS を配布（検査時等には呼び出せる状態）し、学生が書いたカルテの院内電子カルテへの反映ができるシステムとなっている。
- 5) **臨床実習の準備教育**：座学を主とした症候学、診察法、カルテの書き方、プレゼンテーションの仕方、小グループで各臓器別に症例を用いた臨床問題解決（所見をとり、問題点を挙げ、鑑別を挙げ・・・という一連の診療手順）を習得した上で、臨床実習が開始する。
- 6) **実習のローテーション**：短期見学型臨床実習（CB：コンビネーション・ブロック）と長期新診療参加型臨床実習（CC：クリニカル・クラークシップ）に分かれている。CCは、コア科ローテーション（内科、外科、ER、小児科、周産・女性診療科）と選択科ローテーションに分け、4週間毎、計10クルールの臨床実習を行う。診療参加型実習とするためには長期の実習が必要となる。また、学生は個人毎に実習計画が異なり、様々な学

生と実習をすることで、馴れ合いが生まれにくく良い刺激が増える。

参加者は本学の実習と比較し、改善点と実施可能な実習について検討するきっかけとなった。これらは臨床実習委員会（教務委員会医学科部会の下部委員会）において報告された。

3. 学生による授業評価アンケート

平成24年度は引き続き、全学年の全科目を対象として、学生による授業評価アンケートを実施した。

1～4年の42科目53領域から4532枚（平均85枚/領域）、5年次臨床実習では2189枚（平均95枚/診療科）、6年次臨床実習では289枚（平均96枚/診療科）の回答が得られた。1～4年の科目では自身の学習に対する評価4項目、科目について8項目、講師の指導について5項目、全体評価1項目のアンケートを用いた。

医学科の授業はセメスターではなく、不規則な時間割で編成されている。5年の臨床実習では実習オリエンテーション時に評価の目的、内容、方法を説明した後に、2週間毎に小グループでの実習が終了するたびにアンケートを実施した。アンケートは学生が記入後、教員や指導医の目に触れずに医歯学教育開発センターに届けられ、速やかに集計して結果と自由記載内容を科目・領域責任者に報告した。5年の臨床実習では3期に分けて各期毎に集計し、全てのアンケート結果は医学科FD部会、医学部教務委員会医学科部会、医学科会議に報告した。

全科目のアンケート結果の詳細は省略する。

医学科のアンケート項目には、学生の自主的な学習への取り組みを評価する項目がある。1～4年次科目において4,5の回答は53-59%であり、自主的な学習とは言えない学生も半数近くいた。5年の臨床実習では4,5の回答が88-89%となり、非常に自主的に臨床現場での学習に取り組んでいることが明らかになった。

1～4年 講義、実習等 53領域平均	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	平均	SD
積極的に学習した（質問・予習・復習）	1.3%	7.3%	33.3%	42.4%	15.6%	3.6	0.83
教科書は参考文献で広く、学習した	2.2	9.3	35.2	38.6	14.7	3.5	0.87
原理の理解や臨床への応用を考えながら学習した	1.2	6.6	33.3	42.1	17.1	3.7	0.85

5年 臨床実習 平均	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	平均	SD
積極的に学習した	0.5%	1.7%	8.5%	40.1%	49.1%	4.4	0.75
実習に関連する項目を自主学習した	0.6	1.9	9.4	42.1	46.1	4.3	0.77

臨床実習のアンケートは昨年度より導入し、経時的に経過をみている。診療参加型実習の比率は昨年度よりも上昇し改善が認められているものの、いまだに主要な実習形態とは言えない状態であり、今後の改善が臨まれる。全体評価は、昨年度は向上が見られたが、本年度は横ばいであった。

5年 臨床実習 平均	H23			H24		
	1期	2期	3期	1期	2期	3期
診療参加型（割合）	3.10	2.94	3.33	3.56	3.62	3.45
この実習を来年度の学生にもすすめたいと思う（1-5）	4.44	4.57	4.61	4.57	4.57	4.57

4. 講習会

- 入学試験における面接の評価方法

日時： 2013年1月29日（火） 15:00～17:00

主催： 医学部FD委員会医学科FD部会

共催： 医学部入試委員会医学科部会

会場： 第一会議室

- 講師：** 医学部FD委員会医学科部会委員、佐野 輝、米澤 傑（入試委員会医学科部会長）
- 参加者：** 医学科入試面接試験担当予定教員（前年度までの講習会を未受講のもの）
- 概要：** 受験生の能力を引き出す面接を行い、医学部医学科のアドミッションポリシーに基づいた評価基準に従った、公平で信頼性の高い評価を行う方法を講義とロールプレイで習得した。

5. 学習支援システムの活用

医歯学総合研究者主催講演会、講習会の共催ならびに「桜ヶ丘Moodle(e-Learning システム)操作説明書(教員用)」(20 ページ、カラー印刷)の作成を研究科FD委員会、医歯学教育開発センターと協力して行った。

6. 授業公開

医学科で本学の医学教育に関わる教員が希望し、科目責任者が了承した場合は、授業参観が可能であるが、平成24年度の授業公開、授業参観は実施していない。

7. おわりに

平成24年度は、診療参加型臨床実習改善のための取り組みとして、他大学の視察と現行の実習に対する学生による評価を実施した。本学の臨床実習の改善すべき状況が明らかになってきており、認証評価制度の導入をふまえて教務委員会での検討が必要である。また、大学教育の課題となっている学生の自主的な学習への取り組みに関しては、講義を中心とした1~4年次科目では不十分であるものの臨床実習では自主的に学習していることが明らかになり、臨床現場という学習環境が学生の学習態度に関与していることが示された。

FD委員会の活動が、大学教育及び医学教育で必要とされている課題に対し、教育の実態を測定して情報提供し、教員の教育改善に寄与していると考えられた。

平成 24 年度 医学部 FD 委員会保健学科部会活動報告

1. はじめに

平成 24 年度医学部 FD 委員会保健学科部会の活動として、
(1)学生による授業評価、(2)教員による授業公開・授業参観、(3)講演会、を実施した。
それぞれに活動について、概略を述べる。

2. 学生による授業評価

実習、演習と非常勤講師による授業を除く、全ての授業科目を対象に、学生による授業評価を実施した。実際に授業評価が行われた科目は、専門支持教育科目 67 科目（全専攻 14、看護 30、理学作業 23 科目）、専門教育科目 44 科目（看護 19、理学作業 25 科目）であった。

評価項目は以下のとおりである。

授業評価アンケート

学生自身の自己評価

101 出席状況は良好だった。

(5 : 非常に良好だった、4 : かなり良好だった、3 : 良好だった、2 : 良くなかった、1 : 非常に良くなかった)

102 授業に意欲的に取り組む努力をした。

(5 : 非常に努力した、4 : かなり努力した、3 : 努力した、2 : あまり努力しなかった、1 : 努力しなかった)

103 授業の予習あるいは復習をした。

(5 : 非常に予習復習をした、4 : かなり予習復習をした、3 : 予習復習をした、2 : あまり予習復習をしなかった、1 : 予習復習をしなかった)

授業について

201 授業科目にふさわしい内容だった。

(5 : 非常にふさわしかった、4 : かなりふさわしかった、3 : ふさわしかった、2 : あまりふさわしくなかった、1 : ふさわしくなかった)

202 シラバスの内容は明確だった。

(5 : 非常に明確であった、4 : かなり明確であった、3 : 明確であった、2 : あまり明確でなかった、1 : 明確でなかった)

203 授業内容はシラバスに沿ったものであった。

(5 : 非常に沿っていた、4 : かなり沿っていた、3 : 沿っていた、2 : あまり沿っていなかった、1 : 沿っていなかった)

204 授業の難易度は以下の通りだった。

(5 : 丁度良かった、4 : やや簡単だった、3 : 簡単だった、2 : かなり難しかった、1 : 非常に難しかった)

205 この授業を他の学生にも勧めたいと思う。

(5 : 非常にそう思う、4 : かなりそう思う、3 : そう思う、2 : あまり思わない、1 : 思わない)

206 この授業は自分にとって価値があった。

(5 : 非常にそう思う、4 : かなりそう思う、3 : そう思う、2 : あまり思わない、1 : 思わない)

教員について

301 話し方は明瞭で聞きやすく、説明も分かりやすかった。

(5 : 非常にそう思う、4 : かなりそう思う、3 : そう思う、2 : あまり思わない、1 : 思わない)

302 授業は時間どおり行われた。

(5 : 非常にそう思う、4 : かなりそう思う、3 : そう思う、2 : あまり思わない、1 : 思わない)

303 教師の授業に対する熱意を感じた。

(5 : 非常に感じた、4 : かなり感じた、3 : 感じた、2 : あまり感じなかった、1 : 感じなかった)

304 授業中、オフィスアワー等で、質問や相談に丁寧に応じてくれた。

(5 : 非常にそう思う、4 : かなりそう思う、3 : そう思う、2 : あまり思わない、1 : 思わない)

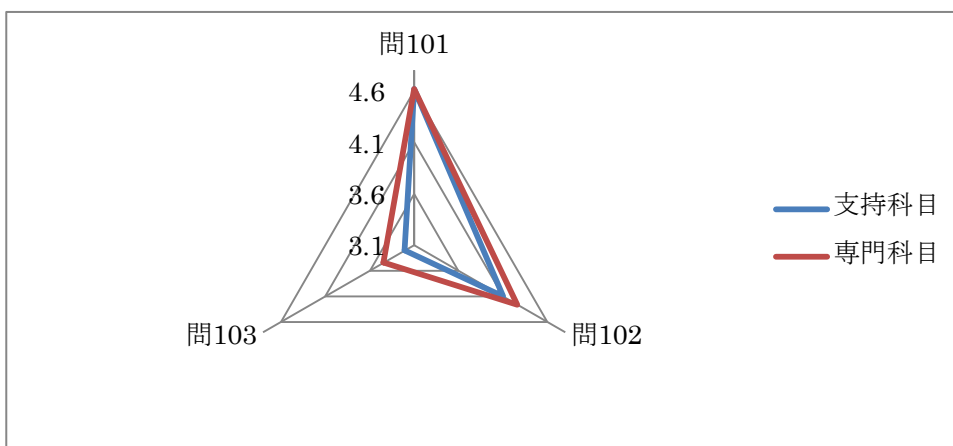
自由記述

この授業をより良くするための意見や要望、受講者としての自分を省みた上での感想などを自由に書いてください。

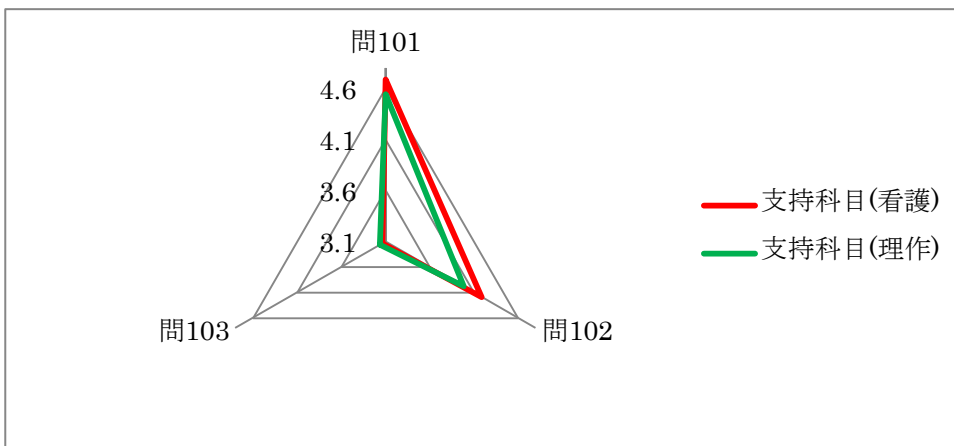
この学生による授業評価は毎年実施している。その結果は、毎年わずかずつ向上、あるいは年度によっては横ばい状態となっており、今年度の同様の傾向であった。そこで今年度については、より詳細に、科目群別及び専攻別で分析した。つまり専門支持教育科目（専門教育の基礎に相当する科目、以下支持科目）と専門教育科目（以下、専門科目）、及び看護学専攻（以下、看護）と理学療法学・作業療法学専攻（以下、理学作業）別に結果を検討した。

【問 101－103】

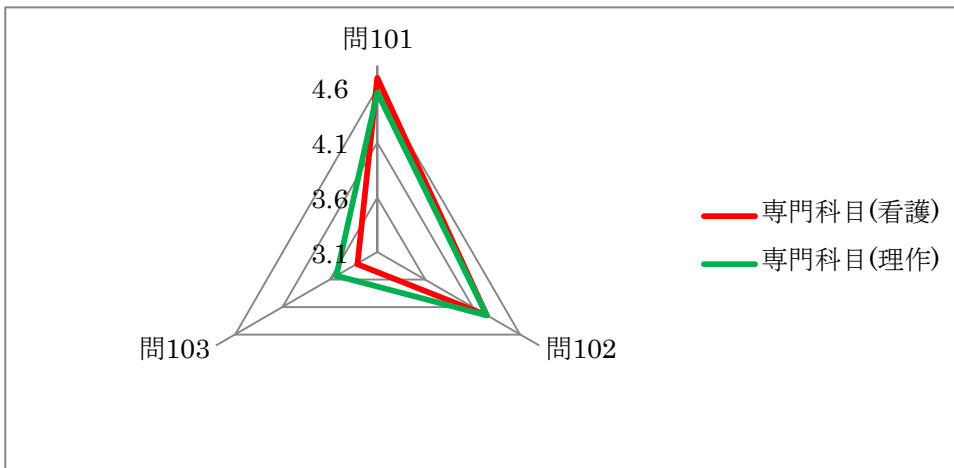
(1)支持科目 vs 専門科目



(2)支持科目(看護)vs 支持科目(理学・作業)

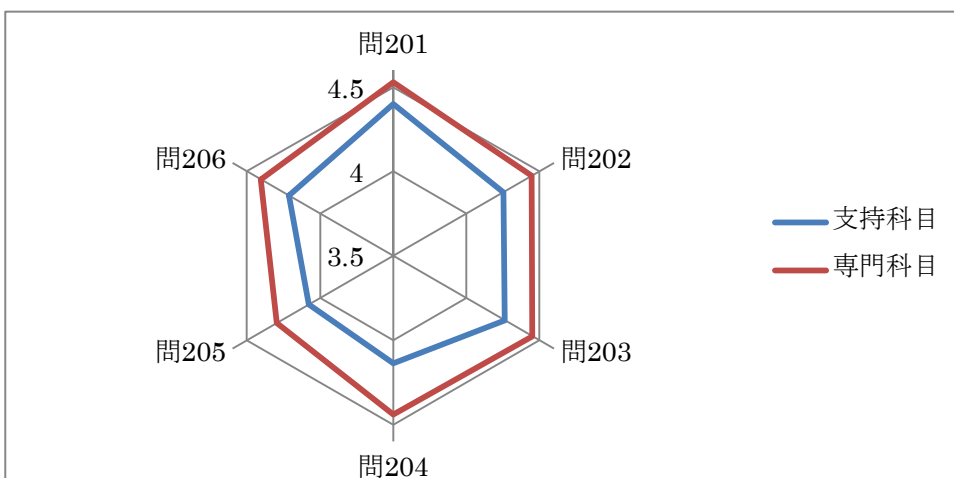


(3)専門科目(看護)vs 専門科目(理学・作業)

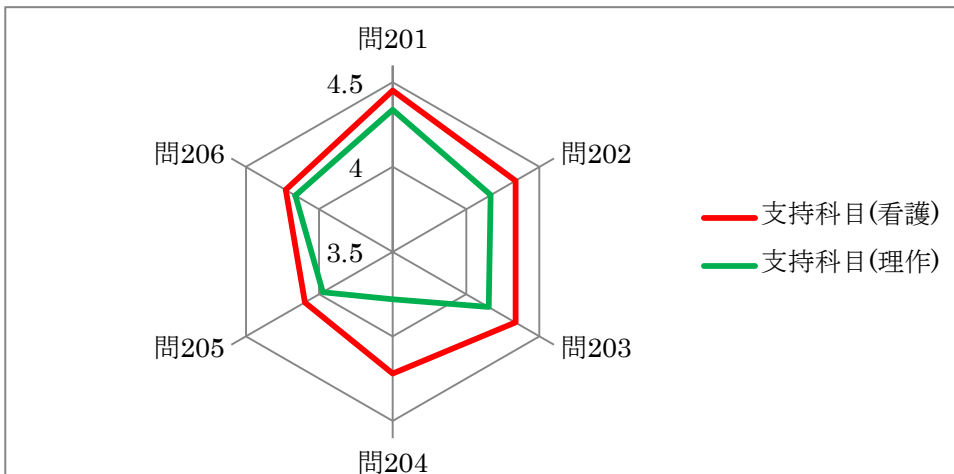


【問 201－206】

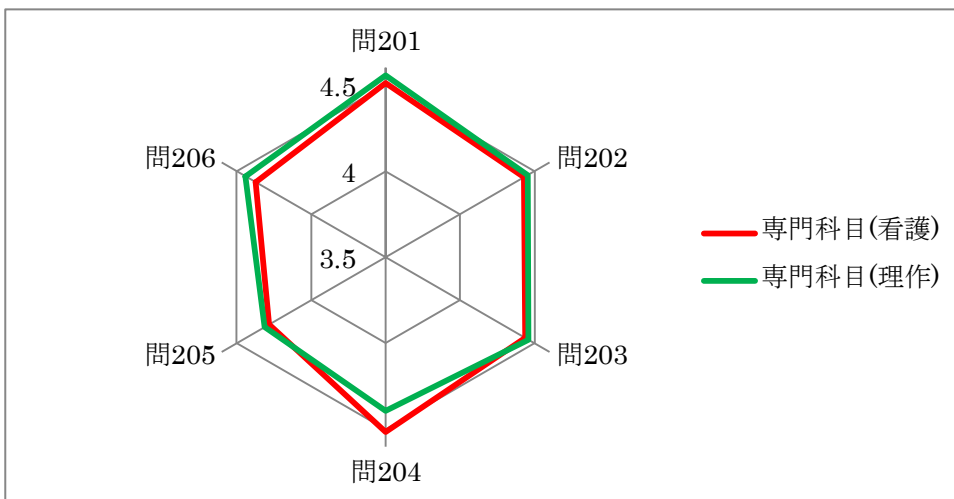
(1)支持科目 vs 専門科目



(2)支持科目(看護)vs 支持科目(理学・作業)

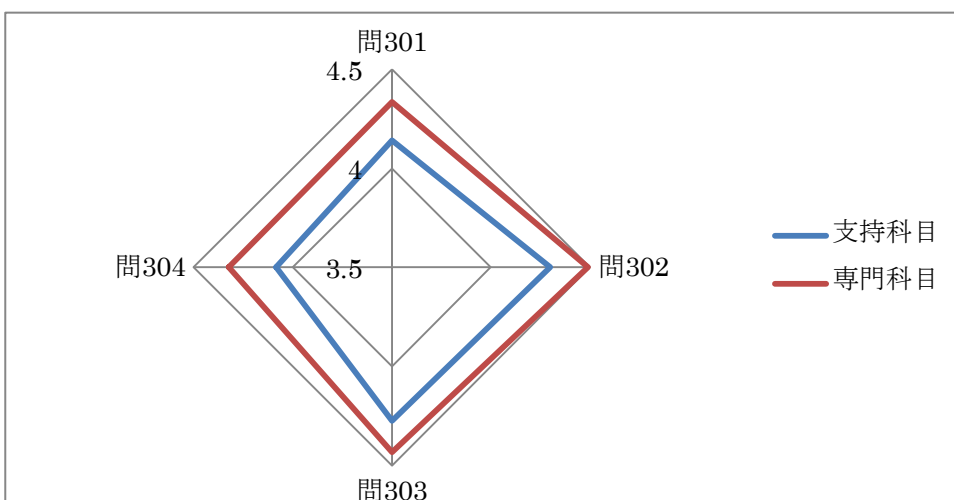


(3)専門科目(看護)vs 専門科目(理学・作業)

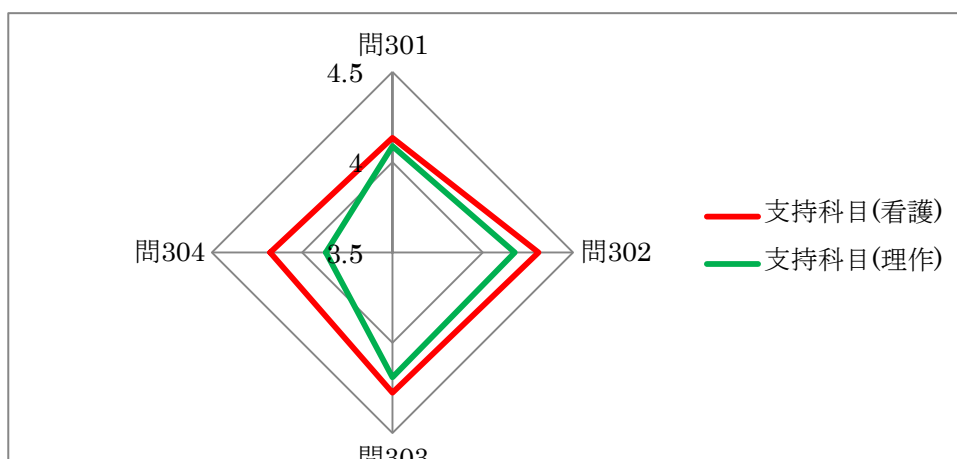


【問 301－304】

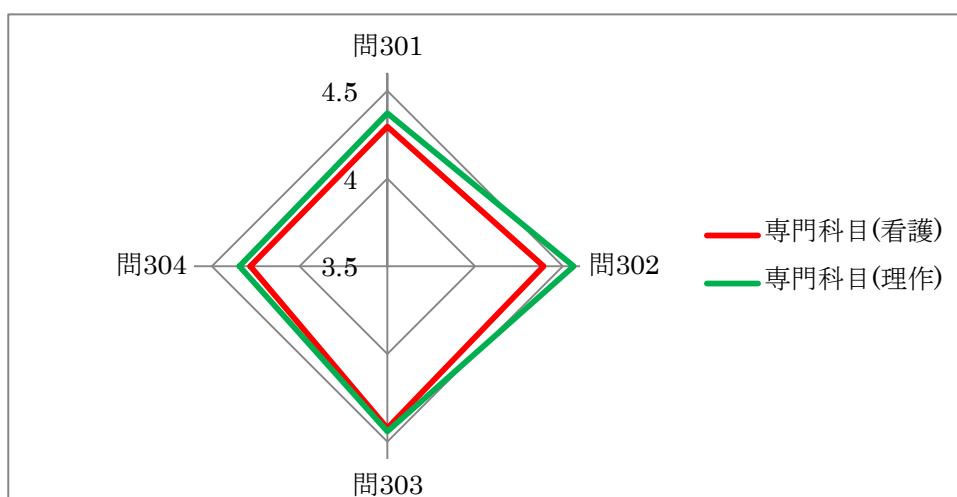
(1)支持科目 vs 専門科目



(2) 支持科目(看護)vs 支持科目(理学・作業)



(3) 専門科目(看護)vs 専門科目(理学・作業)



学生自身の自己評価 (【問 101-103】)

全体的に出席状況(問1)は良く、意欲的に取り組む努力(問2)も行われていた。ただ、意欲面では支持科目特に、理学作業の支持科目において少し意欲に欠ける傾向が示された。

また、著しい特徴として、予習復習(問3)を行っている学生が全般的に少なかった。その中でも特に、看護、理学作業の支持科目、看護の専門科目でより低いことが示された。この予習復習の不足は共通科目の授業評価アンケートでも指摘されており、鹿児島大学教育全体の問題とも考えられる。

授業について (【問 201-206】)

一部を除き、各問とも一定レベル(平均4以上)は維持されている。ただ科目群別、専攻別に詳しく見ていくと、いくつかの傾向が認められる。

まず専門科目と支持科目では、各問とも明らかに支持科目の得点が低かった。さらに支持科目の中でも理学作業において看護より低い傾向であった。特に問204「授業の難易度」において支持科目の理学作業において3.78とかなり低い得点であった。この問は平均ではなく、各段階の得点分布を調べる必要があるが、おそらく難易度の高い科目がいくつかある結果と推測される。科目で設定した教授レベルを維持することも大切ではあるが、学生の反応を確かめながら達成目標に到達する柔軟な工夫も必要で

あろう。

教員について（【問 301-304】）

ここでの問も、ある一定レベルは維持されてはいるものの、相対的に支持科目が低い得点となっている。そして問 304「質問・相談に応じる」では、理学作業の支持科目でかなり低い得点であった。問 301-304 は教員自身の工夫・努力で改善される項目なので、今後の早急な対応が求められる。

3. 教員による授業公開・授業参観

教員による授業公開・授業参観を、前期は6月20日より7月31日、後期は11月1日より11月30日の期間で実施した。その結果は、

前期公開科目 54 科目 参観教員 17 名

後期公開科目 41 科目 参観教員 11 名

であった。参観教員には、参観後、授業参観報告書を提出してもらい、公開した科目の担当教員にフィードバックした。

保健学科では毎年、授業公開・参観を実施している。今年度は公開科目数及び参観教員数の増加をはかるため、公開科目及び参観教員の募集期間を延長して行っていたが、顕著な増加は見られなかった。例年の活動で、公開科目及び参観教員が固定化する傾向があるので、今後さらに工夫が必要と考えられる。また、これまでは参観教員の授業参観報告書提出に留まっているので、それに基づく担当教官による授業改善計画書の作成・提出まで検討する必要があるだろう。

4. 講演会

今年度、医学部 FD 委員会保健学科部会は2つの講演会を主催・共催した。

- (1) 「高度専門職の養成に向けた現状と課題への取り組みについて—修士課程における保健師・助産師・NP 教育が人々の生活の質の確保と学術の向上に及ぼす効果について」

日時：2013年1月10日（木） 17時～19時

場所：鹿児島大学医学部鶴陵会館

講師：村嶋 幸代（大分県立看護科学大学学長・東京大学名誉教授）

主催：医学部 FD 委員会保健学科部会・保健学研究科 FD 委員会

共催：全国保健師長会鹿児島支部、社団法人鹿児島県看護協会

（講演会の詳細については、後述の保健学研究科 FD 委員会活動報告を参照）

- (2) 作業療法の魅力を伝える講演会

「太宰府病院における精神障がい作業療法の実際」

日時：2013年2月15日（金） 13時40分～15時40分

場所：鹿児島大学医学部共通教育棟 6F インテリジェント講義室

講師：平野 かほり

（福岡県立精神医療センター太宰府病院リハビリテーション科 作業療法士

保健学科作業療法学専攻 1 期生)

主催：保健学科作業療法学専攻

共催：医学部 FD 委員会保健学科部会

保健学科作業療法学専攻では、保健学科教職員・学生に広く作業療法の魅力を伝えるとともに、作業療法学専攻学生に対して、講義・実習で学んでいることがどう実際の作業療法に活かされるのか、作業療法士の臨床現場における役割や活動はどのようなものなのか、について理解してもらうため講演会を実施した。講師は、現場で活躍している保健学科作業療法学専攻卒業生に依頼した。

参加者は保健学科教員、学生約 80 名であった。講演は精神障がい作業療法を主テーマとして、①太宰府病院の歴史と概要、②精神障がい者の地域での生活をみるということ（統合失調症の症例を通して）、③アルコール依存症と治療（アルコール・リハビリテーション・プログラムの紹介）、④精神障がい作業療法について感じることを、について豊富な症例の紹介を含めて進められた。

講演終了後の学生に対するアンケートでは、

「講演会の内容について理解できましたか？」・・

「とても良く理解できた」74.3%、「だいたい理解できた」25.7%、

「どちらでもない」「あまり理解できなかった」「全く理解できなかった」各 0%

「本日の講演会に参加して“精神科における作業療法士の仕事”のイメージができましたか？」・・

「とてもよくできた」68.6%、「だいたいできた」31.4%、

「どちらでもない」「あまりできなかった」「全くできなかった」各 0%

「本日の講演会に参加して作業療法への興味がわきましたか？」・・

「とても興味がわいた」94.3%、「少し興味がわいた」5.7%、

「どちらでもない」「あまり興味はわかかなかった」「全く興味はわかかなかった」各 0%

「本日の講演会の内容はこれからの学習に役立つと思いますか？」・・

「とても役立つと思う」97.1%、「少し役立つと思う」2.9%、

「どちらでもない」「あまり役立たないと思う」「全く役立たないと思う」各 0%

「本日の講演会のように臨床の場で活躍されている作業療法士の話聞く機会の必要性についておたずねします」・・

「とても必要性を感じる」94.3%、「やや必要性を感じる」5.7%、

「どちらでもない」「あまり必要性を感じない」「全く必要性を感じない」各 0%

という結果であった。これは作業療法学専攻学生 1~4 年生が参加し、特に 1 年生はほとんど作業療法学に関する知識がないことを考慮すれば、この講演会の目的は十二分に達成されたと考えられる。

また、自由記述欄にも多くの意見・感想が述べられていたので、以下にその一部を掲載する。

・「今回臨床でのリアルな話を聞いて、授業で習ってきた知識とマッチングする部分もたくさんあり、臨床での OT のイメージがとてもよく伝わりました。臨床実習への不安が高まる中、特に精神障害 OT 実習は患者さんとしっかりコミュニケーションがとれるかどうか不安で仕方がなかったけれども、実習が少し楽しみになりました。OT になりたい!!と改めて感じました。」(作業療法学専攻 3 年生)

・「アルコール依存症のスライドが一番衝撃を受けました。講義の中で治療場面や患者さんたちの会話などの映像は見ましたが、本当に一側面だったのだと思い知りました。少し逃げ腰になりましたが、学生のうちに実際の場面を見ることができて、少し覚悟ができたように思います。」(作業療法学専攻 3 年

生)

・「現場で働かされている作業療法士の方の話を聞く機会が全くないので、このような場で聞くことができ本当に良かったです。2年生になり、だんだんと精神分野にも興味がわいてき始めた時の、この講演会だったので非常に良い時間となりました。」(作業療法学専攻2年生)

(文責 医学部保健学科 深野 佳和)

歯学部

歯学部 FD 活動報告

1. はじめに

歯学部 FD 委員会では、従来からの全学的な取り組みとしての「学生による授業評価」、「授業公開・授業参観による教員相互の評価」に加えて、「共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する講習会・研修会」、「学部 6 年生対象の教育に対する卒業時アンケート調査」、また「外部講師を招いての講演会」とともに、2 年前からの新たな取り組みとして、「外部教育系セミナーへの参加者としての教員派遣」、「外部教育系セミナーへのスタッフとしての協力」等を行った。本報告では各活動について、その概要を記す。

2. 学生による授業評価

歯学部 FD 委員会では、年間の FD 活動の一環として「学生による授業評価」について、昨年度より更新した新しい評価票を用いて実施した。この授業評価は平成 24 年度に開講した全ての授業を対象に、各授業の終了時に適宜実施した（評価への参加は各教員の自由意思に任せた）。評価対象者は各授業担当教員であり、職位は教授、准教授、講師、助教であった。本調査票は記名式とし、学生が評価記入後、各学年のクラス委員が回収し、学務課歯学教務係へ提出してもらった。また無記名での提出を希望する場合は、所定のボックスへ各自で提出してもらうよう依頼した。得られた記入済み調査票は OCR により読み込み処理後、集計作業が行われた。

次表に調査結果を示す。集計の結果、本調査に参加した授業数は合計 30 件であった。個別の数値については、各授業の難易度や背景、授業担当者もばらばらのため、総体としての数値で論ずることは避ける。個別のデータは集計直後、各授業担当者に生の調査票を PDF 化し返送することにより、学生の意見や指摘事項について、次の授業へすぐに生かせるような体制を、昨年度より構築した。そのため、教員も調査に参加するモチベーションが上がり、調査の手法としてはある程度機能したと考えられる。また、自由記載欄には多くのコメントが寄せられており、授業改善に直接つながるような内容が多かった。次年度以降も同様の方式を進めていくとともに、より多くの授業で活用してもらうような広報を検討していく予定である。

	2年生	3年生	4年生
回答数	8	4	18
1. 今日の授業は、あなたにとって有益と感じましたか？	3.74	3.58	3.67
2. 今日の授業は、理解できましたか？(分かりやすかったですか？)	3.62	3.43	3.50
3. 教員の声や話し方は聞き取りやすかったですか？	3.66	3.58	3.60

3. 授業公開・授業参観における教員相互の評価

歯学部教員による授業公開・授業参観による相互評価は、全学的な取り組みの一環として例年実施しており、平成 24 年度については 6 月 25 日（月）～7 月 13 日（金）、および 12 月 17 日（月）～21 日

(金)の2度の期間で行われた。この期間の歯学部における授業は原則として全て公開とし、教員はFD活動の一環として、随時授業参観することを可能とした。授業を参観した教員は、授業修了後に次のアンケートへの記載を行った。質問項目は下記の14項目とし、5:極めて優れている、4:良い、3:普通、2:やや劣る、1:よくない、の5段階での評価とした。結果を下記に示す。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
シラバスに沿った授業がなされたか	3	3	3	3	4	3	4	3	3	4	3	3
授業の主題・概要・到達目標等の説明があったか	2	2	4	3	4	3	3	3	3	3	4	3
授業の準備がよくなされていたか	3	3	3	4	4	3	4	4	3	4	4	3
教材(プリント, スライド, 教科書, 参考書, 板書等)は適切であったか	2	2	3	4	4	3	4	4	4	3	4	3
実習器具・材料は適切であったか	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
実習は授業内容の理解に役立ったか	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
明瞭で聞き取りやすい話し方であったか	4	4	3	3	4	4	4	4	3	4	3	3
質問や学生による発表の機会を与えたか	1	1	3	3	4	2	3	3	4	3	4	2
質問をしやすい雰囲気であったか	1	1	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2
適切な難易度であったか	3	1	3	4	4	3	4	4	4	4	4	3
学習意欲が刺激されたか	1	1	3	3	4	4	4	3	3	3	4	3
教員が学問分野の専門家として信頼できたか	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
教育に対する熱意が感じられたか	3	3	3	4	3	3	4	4	3	4	3	3
上記項目以外の観点も含めた「総合的な評価」	2	2	3	3	4	3	4	4	3	3	3	3

授業参観に参加した教員数は12名であり、従来に比較して増加傾向であったものの、本データは調査数が少なく個別の項目について具体的に論じるには限界があるため、避けることとする。この取り組みを通じて、教員が同僚の授業を見学することにより様々な意味で刺激を受け、よりよい授業の作り方を考え、自己の授業方法のあり方を再考するきっかけになればよいのであるが、未だ十分その趣旨や意義が各教員に浸透していないと考えられる。教員が相互の授業を見学し互いを評価・批判し合うには、互いの遠慮もあり、それ相応の環境整備が必要不可欠である。そのためには今後、本活動の目的や意義を広く周知する手段を検討するとともに、より多くの教員の本取り組みへの参加を促す必要があると考えられた。

4. 学部6年生対象の卒業時アンケート調査

歯学部FD委員会では歯学部教育委員会とともに、学部6年生の卒業時に、6年間受けてきた教育全体の振り返りという意味で、各種教育内容、活動、施設などについて、「歯科医師になる立場」から有効であったかどうかについて、無記名式アンケート調査を実施している。本年度は、平成24年度学位記授与式が挙行された平成25年3月25日に、歯学部6年生を対象に行った(回収率80%)。調査項目は下表の18の各種教育内容、活動、施設などについて、5:極めて有効であった、4:どちらかと言えば有効であった、3:どちらとも言えない、2:どちらかと言えば無意味であった、1:全く無意味であった、の5段階で評価を行うよう依頼した。以下にその結果を示す。

<回答者に関する事項>

	県内	九州	他
出身	9	9	22
卒後研修先	16	9	13

<鹿児島大学入学後の教育内容、活動、施設などについて、歯科医師になる立場で、あなたにとって有効であったかどうか、ご記入ください>

	5	4	3	2	1	平均
オリエンテーション	4	17	15	2	2	3.48
共通教育	4	14	16	5	1	3.38
導入系科目	7	21	10	2	0	3.83
基礎系科目	21	16	3	0	0	4.45
臨床系科目	24	12	4	0	0	4.50
医系科目	14	17	6	3	0	4.05
統合系科目	12	19	7	2	0	4.03
臨床実習	25	10	4	0	0	4.54
選択科目	20	12	7	0	0	4.33
共用試験CBT	18	20	2	0	0	4.40
共用試験OSCE	16	19	5	0	0	4.28
総合歯科学	13	19	7	1	0	4.10
チューター制度	5	19	9	5	2	3.50
課外活動	17	16	7	0	0	4.25
学術情報基盤センター	2	17	13	8	0	3.33
図書館	18	15	6	1	0	4.25
学習室	19	11	6	3	1	4.10
学生控室	13	18	5	3	1	3.98
学務課	15	18	7	0	0	4.20

調査の結果、評価の平均値が「4」を超えた項目は、「基礎系科目」、「臨床系科目」、「医系科目」、「統合系科目」、「臨床実習」、「選択科目」、「共用試験 CBT」、「共用試験 OSCE」、「総合歯科学」、「課外活動」、「図書館」、「学習室」、「学務課」であった。質問が「歯科医師になる立場で」ということであり、また調査時期が歯科医師国家試験合格発表直後であったことから、特に「臨床実習」や「臨床系科目」の項目が高く評価されたことは理解しやすい。また昨年度は「4」以下であったものの今年度が「4」を超えた項目は「医系科目」、「総合歯科学」、「学務課」であり、今年度に新規に追加した項目「統合系科目」は、「4」を超える結果であった。逆に評価が「4」以上であったが「4」以下へ下がった項目は認められなかった。相対的に評価が低い傾向であった教育内容は、調査時期や質問方法による影響かもしれないが、学生のニーズに合っていない教育内容や改善の必要なカリキュラムや組織であった可能性もあり、今後詳細に検討していく必要がある。

5. 共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する講習会

(平成 24 年度第 1 回歯学部 F D 講習会)

1) 目的

共用試験歯学系 CBT において、より質の高い作問を行うとともに、作問の教育活動上の意義に対する認識を深め、教員の教育能力開発に資するために、学内の CBT 作問委員会コアメンバーおよびアドバイザーが講師を務める講習会を開催した

2) 日時

平成 25 年 1 月 15 日 (水) 18:00~19:30

3) 場 所

歯学部第4講義室

4) 講 師

梶山加綱先生（歯科麻酔全身管理学分野）

白方良典先生（歯周病科）

松尾美樹先生（口腔微生物学分野）

田松裕一先生（人体構造解剖学分野）

岩下洋一朗先生（歯科医学教育実践学分野）

5) 参加者

歯学部教員：69名

6) 講演テーマおよび内容

本学部では共用試験歯学系 CBT の作問を、全講座を挙げて取り組んでいる。本年度は平成 24 年 12 月より作問を開始し、例年通り共用試験実施評価機構からの正式な作問依頼が来る前にある程度の作業を進めておくようスケジュールを組んだ。各講座への作問依頼は 12 月下旬、提出締め切りを 1 月下旬とし、その作問作業に直接的な参考となるように本講習会を企画した。特に平成 23 年 3 月に歯学教育モデル・コア・カリキュラムが改定され、新しい基準での作問作業を行う必要があった。このあたりも踏まえ講演テーマおよび内容は下記の通りとした。

「モデル・コア・カリキュラムと具体的な作問方法について」

- ・モデル・コア・カリキュラム改訂と作問の割り振り
- ・PC・セキュリティ
- ・画像の取り扱い
- ・作問のコツ

7) 事後アンケート結果

(1) 今日の FD 講習会を受講して

【理解できた点】

- ・良い画像素材の作り方、選択法、取り扱い方 (26)
- ・作問のコツ、注意点 (25)
- ・情報セキュリティ（共有フォルダの取り扱い含む）の重要性 (25)
- ・モデル・コア・カリキュラム（の変更点） (10)
- ・作問において、臨床を目的とした作問を心がけるのが重要であること (6)
- ・視覚素材の位置づけ (5)
- ・画像の撮影方法 (5)
- ・悪問の例 (5)
- ・連問の割り振り (5)
- ・連問においては異なる写真を用いることとその意義 (4)
- ・今年度（前年度から）の変更点 (4)
- ・問題の言い回し、書き方 (3)
- ・視覚素材でも症例写真等臨床に近いものが良いこと (2)
- ・視覚素材を見なければ解答できないこと (2)

- ・〇〇先生の説明は、毎年少しずつ変化していて大変わかりやすかった (2)
- ・学生間での不公平が生じないような問題作り (2)
- ・前回の採択率 (2)
- ・IT、サイバー犯罪の最近の傾向
- ・語句の選び方が具体的で分かりやすかった
- ・視覚素材、作問に関する基本の見直し
- ・視覚素材は単にテクニカルな問題だけでなく、次を思考させるものを選択する必要がある
- ・〇〇先生の講義はいつ聞いても素晴らしい
- ・各校に採択率を競争させる目的
- ・デジカメでの撮影では中央 (1/3) に必要な画像を集める方がトリミングしやすい
- ・Q 問題の 4 問目はストーリーを完結させる
- ・CBT で実際何をやっているのか
- ・ブラッシュアップ専門部会の活動状況
- ・作問のねらいに入力→新コアカリ番号を入れる
- ・今回はキーワードは不要
- ・プリントがあり、どのような問題が好まれるのかがわかった
- ・同じ内容でも復習になった
- ・要求される問題の質および水準
- ・作問ソフトの更新について
- ・ICT のスキル

【理解できなかった点】

- ・特になし (13)
- ・作問ソフトの使用方法 (3)
- ・セキュリティはどうすれば良いのか (2)
- ・画像の撮影で技術的なところ (2)
- ・ブラッシュアップの廃用・方法 (鹿大では実際にどのようにしていくのか)
- ・項目反応理論
- ・W 問題の 2 問目、1 問目に” 関連する” まで内容を拡大しないと、問題が枯渇するのではないか、また問題のテーマが絞られすぎる気がする。問題のレベルも低いものばかりになるのでは？
- ・CBT 採択率向上が良い学生を作る？
- ・非採択問題の解説が機構から示されていないこと
- ・学生が別な問題を解いている？→なぜ同じ問題を解かせないのか？
- ・全ての項目を一度に網羅するのは難しい
- ・ウィルスチェックにかからない新しいタイプの攻撃対策

【ご意見があればご記入ください】

- ・採択、不採択 (問題とその理由) をフィードバックして欲しい (2)
- ・ハンドアウトがあって良かった (2)

- ・ どのような問題が悪い問題か、をさらに多く時間をとって欲しい (2)
- ・ 参加されている先生は毎年ほぼ同じ方々のようです。参加されていない先生方がいかに参加して頂くか、を考える必要があると思いました
- ・ 会議があり遅刻してしまったので、事務的に会議のチェックをして開催して頂けると有難い
- ・ ブラッシュアップの効率化、特にできるだけ長時間のブラッシュアップは避けてもらいたい
- ・ 教室を超えて意見（特にネガティブな意見）を言うことへの理解の徹底、周知
- ・ 今年もわかりやすかったです
- ・ 連問をテーマ毎に各科に割り当てたのは良いと思う
- ・ タイプ A に関して、コアカリごとの依頼数を強調して、作問の集中を避けるようにしたら良いと思う
- ・ FD 講習会は私たち教員の意識向上に非常に有用であると感じました
- ・ 大学によっては CBT 作問用のマニュアルが独自の書類として用意されていますが、別に C B T と限る必要はなく、作問のガイドがあれば鹿大で行われる試験レベルに影響すると思います
- ・ 今年もたくさんの良い問題が集まると良いと思います
- ・ 初めて参加しましたが大変参考になりました
- ・ 診療が入っていることがありますので、なるべく早く時期（日程）を教えてくださいと有難いです
- ・ セキュリティの講義は良かったと思う
- ・ ○○先生の講義はとても役に立つ。ビデオ撮影して講義を学内で配信し、いつでも視聴できるようにしてはどうか
- ・ 視聴覚素材の作り方は毎年勉強になります
- ・ Q 問題について具体的な作問例を多く出してもらいたかった
- ・ マックのセキュリティについて説明してほしい
- ・ CBT 問題は医局で作成されるので登録の際には CBT 担当者の名前で登録されます。その場合、作成者と登録者が異なり、その結果採択されたら登録者のみが評価されます。大学内でブラッシュアップするので、登録者名の使用については問題があるのではないのでしょうか。

6. 平成 24 年度第 2 回歯学部 FD 講習会

講 師：植田紘貴先生（歯科矯正学分野 助教）

中村典史先生（口腔顎顔面外科学分野 教授、歯学部臨床教育部会長）

講演タイトル：平成24年度文部科学省先導的の大学改革推進委託事業

「歯学教育者のためのワークショップ」および「高齢社会を踏まえた医療提供体制見直しに対応する医療者教育の在り方に関する調査研究」参加報告

日 時：平成 25 年 3 月 8 日（金）17：30～19：00

場 所：歯学部第 3 講義室

参加者：歯学部教職員 60 名

【講習会受講後のアンケート結果】

1) 理解できた点

- ・他大学の取り組み、実習状況 (7)
- ・臨床実習改善の必要性 (6)
- ・鹿大の臨床実習改善の進捗状況 (5)
- ・診療参加型実習の重要性 (4)
- ・臨床実習と研修の連携 (2)
- ・フォローアップ調査の要点 (2)
- ・高齢社会における歯科医療の課題 (2)
- ・高齢者歯科の教育体制を充実する必要性 (2)
- ・一口腔一単位の臨床実習 (2)
- ・医局、教育もチームワークを重視する。お互いを尊重し、信頼しあうことが大切であると考えています。そうしないと医局も学生も同じ方向は向かないと思っています。そんなことを思いながら、上田先生の有用な講義を聴かせていただきました。
- ・大学改革の難しさ、患者さんをタテに診ていく臨床実習の実現が喫緊の課題であるということ→講座、診療科間のコミュニケーションが必須であるということ
- ・鹿児島大学歯学部教育の改善が必要であること、他大学ではいろいろな歯学教育改革が行われていること
- ・各大学での大学・地域の特色を生かしたカリキュラム
- ・本院臨床実習の今後の方向性、早めに意識の高い方で取り組むのが良いと思います
- ・教員は学生の最高のサポーターであれ
- ・チーム医療、高齢者医療について
- ・鹿児島大学の現状
- ・広大の教育プログラムについて、大分進んでいると思った
- ・徳大の見学実習の反省から診療参加型に戻したことの具体的な内容は鹿大にとって参考になる。
- ・受け身ではなく自主性のある実習
- ・大変たくさんのテーマについて勉強できた
- ・自験例を増す必要がある
- ・歯科医として臨床能力を担保するような教育
- ・総合診療部で一口腔一単位での診療を患者が行う
- ・自験の内容
- ・臨床実習のカリキュラム
- ・PCDA サイクル
- ・鹿児島大学の臨床実習の水準が低いこと
- ・卒前卒後教育の質が社会から評価される時代になっていること
- ・異業種と連携したチーム医療の歯科治療を実践しなければならないこと
- ・電子版連携ログブック
- ・学部のミッションの重要性
- ・技工を体験することのメリット
- ・学生自身に考えさせる教育
- ・高い志なくして教育はできない

2) 理解できなかった点

- ・本来、医科歯科連携や多職種連携は「高齢社会」に限らず必要であると思われる。→「高齢社会」のラベルの持つ力に驚いたとともに、「高齢社会」＝連携が大事、という表面的に捉えられてしまうことに危惧を感じた
- ・見学による臨床実習は望ましくなく、一口腔一単位を対象とした診療参加型臨床実習に転換する必要があるが、なぜすぐに移行でないのか？
- ・鹿児島大学歯学部のカリキュラムの中で地域特性にあたる部分（コア教育以外の40%を占める部分）はどんなものが考えられるか
- ・本学歯学部での「ふりかえり」を重視したらせん型教育の具体策
- ・徳大は患者が少ない中で、どのように自験症例をクリアされているのか？
- ・徳島大学の臨床実習の改革に比較して鹿児島大学は8年も遅れている？
- ・具体的にどうなるのか？
- ・鹿大の方向性
- ・臨床教育部会の会議内容が周知されていない
- ・一口腔一単位を意識した基礎実習
- ・大学の特色を出すカリキュラムも大事だが、そればかりにとられるのはどうかと思った。→一般的な水準をまず高める必要があると思った。
- ・評価方法
- ・屋根瓦式
- ・一口腔一単位の診療参加型実習を実施するにあたって、ミニマムリクワイアメントをどのように確保していくのか

3) ご意見があればご記入ください。

- ・鹿大でも患者向けの学生教育協力のパンフレットを作ってもらえたら、教育協力の承諾書にサインを頂きやすいと思います
- ・アメリカの歯科教育機関から認証を受けるようなカリキュラムは可能か。
- ・診療・研究を通じて将来の鹿大を育てていくのは鹿大の学生であること、学生がまた下の学生を指導（教育）していくこと、だから学生とのつながりを持って学生を育てていくことが鹿大を育てていくことになると感じました
- ・講義形式は一方向性伝達に近いので、臨床の若い、もしくは現場で苦勞されている先生方の本音が出にくいと考えますので、手間が多いかも知れないが、少数で数回に分けてディスカッションできる様な場を作る必要があると思う
- ・各ライターとは別に少人数グループに対するメンター制を充実していくと良いと思います。メンターに対するフォロー、スキルアップの機会を歯学部全体でサポートする体制を希望します。
- ・教員の評価を作っていくべきでは（教育者として）
- ・他大学の診療参加型実習時の学年や、その前の予備実習状況（期間を含む）、患者の引き継ぎシステム等でどのようにされているかを知りたい
- ・以前は一診での学生診療の指導も経験しました。当時は医療人としての質を重視していて、現在のよう患者数、稼働額はあまり問われませんでした。昔はよかったということか？学生さんも生き生きしていたように思います。ただのスタンプラリーではなかった。

- ・このような機会を多くした方が良いと思う
- ・H 週では患者相互の自験が難しい、システム変更は考えていないのか
- ・参加者が全員ではない（認識不足）
- ・環境の整備（ユニット、PHS 等）は進んでいるので、それを活かすためにはマンパワーの整備（臨床実習教員の質の向上）が必要だと思った
- ・鹿児島大学が変わるためには、全教員を統率できる名将が必要だと思う。教員自体も診療科を超えた横の軸でのディスカッションができたらいいと思った。
- ・鹿大歯学部が社会に対応した現代、近未来を見据えた改革が求められると思った。他大学の努力、実現に比べ、当大学は取り残されていると感じた。
- ・長すぎる話（ディスカッションのしかけが必要）
- ・臨床教育に対して求められている全国的な流れが理解できて有益だった
- ・高齢者診療に対する歯科教育が未発達であることが、ある意味驚きだった
- ・歯学教育者のためのワークショップに参加し、各大学の長所を本学の歯学教育に取り入れてもらいた。
- ・離島診療を行政との連携を強化し、週一回の診療体制を構築する。島民の信頼も高くなり、より質の高い診療、教育が行える。
- ・教育に対する評価を高める（評価無くして本物のモチベーションは生まれない）

7. 平成 24 年度第 3 回歯学部 F D 講習会

講 師：菅野 武 先生（宮城県丸森町国民健康保険丸森病院 内科医長

「米 TIMES 誌」 2011 年世界で最も影響力のある 100 人選出）

講演タイトル：「苦難の時こそ医療者としての思いが現れる

～公立志津川病院での東日本大震災の体験を通して」

日 時：平成 25 年 2 月 21 日（木）17：30～19：00

場 所：歯学部第 3 講義室

参加者：歯学部教職員 32 名

【講習会受講後の感想】

- ・今日はこのような講演を聞く機会を与えて頂き有難うございました。なかなか聞くことのできない生の声だったので、なんと言っているのかわかりませんが、大変勉強になりました。復興も大変だと思いますが、記憶が風化されないことも大変なことだと思います。自分がこんな体験をしても、人の前で語るなどできないと思います。
- ・感動しました。災害の悲惨さに呆然としてその対応ができずにいました。有難うございました。
- ・被災地のあの時の現状を知ることができて有意義でした。もっと時間が長くても良かったと思いました。有難うございました。
- ・お恥ずかしい話ですが、少し忘れかけていた思いが、新たになりました。
- ・医学教育学会でも感動しましたが、何度聞いても感動します。医療者としてどうあるべきか、を深く考えさせる内容でした。社会貢献とは？患者さん、住民に何をしてあげられるか？色んなことを考えて、これからの歯科医師人生を歩みたいと思います。

- ・臨場感のある話でした。死を前にして人は案外冷静なのだな、と思いました。「何ができるか」を考える、人間一人でできることはわずかなことですが、たくさんの人の力が集まり、適切な方向に向かうと何か良い形のことのできるものだと思います。医療者である前に一人の人間として何ができるかを考えさせられる内容でした。教育学会で話された内容よりも詳しい話を聞くことができ、また感動しました。
- ・経験者でないとわからない話を聞いて勉強になりました。被災直後の援助で何が必要だったのか、何が役に立ったのか、整理できれば今後の参考になるとと思いました。
- ・なかなか聞けない貴重なご講演有難うございました。今後ともライフイベントの中で偶然を必然に変えるような活動を続けてもらいたいと思います。
- ・勉強になるお話をどうも有難うございました。
- ・RM（リスクマネージャー）会議があったため菅野先生の講演は聞けず質疑応答からの参加となり残念でした。しかし発言した方々からの様子からすごいリアルなお話だったのだなあと思えました。スライドの配布資料があると良かったです。
- ・心因性ストレス単独でも出血性潰瘍になり得る。経験的に全くその通りですが、明確なデータとして示していただき有難うございます。
- ・大変すばらしい講演を聞き感動しました。前向きに生きる力をもらいました。これからもご家族の皆様共々健康に留意してご活躍ください。
- ・覚悟していたときに結婚指輪をしたり、お互いに衣服に名前を書いている話が印象的だった。先生自身も被災されながら厳しい環境の中で人命救助に取り組む緊迫感が伝わってきた。限られた機材での医療活動の複雑な思いは相当大きなものであったと思う。偉大なことをされたのに謙虚に実情を伝える先生の姿は見習うべき点が多かった。マスコミが伝ええない現在の被災地の状況は復興にはまだ遠いのだと思った。震災からの復興を含め、今後生きていく上で自分自身が何をしていくか、より深く考える機会になりました。貴重な講演を聴かせていただき有難うございました。
- ・大変感動しました。TVで拝見しておりました先生でしたので、震災当日のお話を簡単にして下さるかと思っておりましたが、先生の不安や恐怖、ジレンマなど、大変心に響くお話を聴けて、FDを受講して大変良かったです。不測の事態とはいえ、私たちから見ると先生はできる以上の事をされたと感じるのですが、先生の感想は少し異なり、もっと命を助けられたのではないかという思いが強いことに、大変感銘を受けました。実際に被災された先生だからこそその発言の重み（避難場所や救命器具の再検討など）を感じました。素晴らしい講演会でした。コーディネート、有難うございました。
- ・貴重なお話を有難うございました。生の声で体験談を聞かせていただくことで、ニュースや新聞では感じない臨場感や恐怖が伝わってきました。私は医療者として、それ以前に人間として、きちんと立ち向かうことができるのだろうかと思いを深く考えさせられました。
- ・災害医療の要点を学ぶことができました。「自分のできることを果たす」、「人の輪の力」は素晴らしい、自分の命を自分で守ることの大切さ、他者との協力。支えられる者から、その困難を乗り越えて伝えあえる者へと変わる、このような人材を育てることが大切であることが判りました。「時に癒し、しばしば考え、常に慰む」は医療の原点。「どう生きたいか」が大切である。「何になりたいか」よりも優先される。経験から学ぶ人、社会がより良い次世代を生むということが判りました。困難を自分の事として受け止めることができるか否かが重要であると感じました。
- ・大変貴重なお話でした。被災した医療者の経験を聴くのは初めてでした。自分の命がどうなるのかわ

からない環境で、自分の事だけを考えるのではなく医療者として従事されたのは素晴らしいと感じました。また、医師としての仕事をするだけでなく、地域の特徴を行政や外部からのボランティアに伝えるなど、全体を見て行動されている点に感銘を受けた。自分も医療者として、何か起こった際には考えながらやれることをしたい、と思いました。

・避難生活のシビアな様子がよく理解できた。プライバシーが人の健康にとっていかに大切かが理解できた。

・とても参考にあるお話でした。菅野先生、有難うございました。

・胃潰瘍の話は非常に重要なお話でした。神戸の震災を経験しましたが、今回の東北大震災は比べものにならないと改めて感じました。

・良いお話が聞けました。3・11と震災の渦中の人々の様子が生で聞けて、良い経験となりました。

・震災時のリアルな状況、被災されながらも懸命に救助に尽力された菅野先生の生の声を聴くことができ、心に響きました。同じような状況に遭った場合、医療者である自分に何ができるのか、考えるきっかけとなりました。

・さまざまな災害時の備えが病院でも重要であることが実感できた。生き残った先生がたが協力し合っていたこと、全国、海外からの様々な手助けがあったこと、世界に訴えることで災害に遭った方への理解が進んだことから、世界の人々と心をつなげて動くことができることがうれしかった。

・静かな語りの中に、人間として、医療者としての菅野先生の人柄がうかがえる講演でした。プロフェッショナリズムを考える良い機会となりました。

・生死をかけて被災地で働かれた方の生の声ということで、非常に臨場感と説得力を感じた。震災時のような非常時に、自分が人間として、また医療人として何ができるのか考えさせられる良いきっかけとなった。

・時間が過ぎて震災の大変さが薄れていたようです。話を聞いて良かったと思います。自分に出来ることをもう一度考えて、やってみようと思います。

・震災を体験した方から直接話を聞くことができ、非常に有意義な講習会だった。特に5階建ての4階まで津波が押し寄せたという話は、とても衝撃的だった。そこで自分に何ができるか、と考えたときに医療資機材がない中で周りを励ます、あるもので暖をとるなどしかないのか、と感じた。これからは伝えること、忘れないこと、自分に出来ることから始めようと思った。

・震災をご自身で経験された菅野先生の講演を今日聴くができ、大変貴重な経験ができました。有難うございます。私自身、在宅医療に興味があります。先生のお話の中で出てきた「人の輪」というのは、震災後にも大事なことがあります。今後の日本の超高齢社会における医療の在り方にもポイントとなってくると思います。私も今回の話を聞いて、自分がどう生きるかを改めて考えていきたいと思います。本日は有難うございました。

・実際の体験に基づいた話で、深く感銘を受けました。大きな災害において医療人に何ができるか、何をすべきか、ということを考える上でとても参考になりました。FD講習というのみでなく、学部生にも聞きに来てもらえば良かったと思いました。

・2011年3月11日から2年経とうとしたこの時期、遠い東北で発生した災害が徐々に忘れていきそうでした。そんな時期に実際に被災し、現場で活動された先生のお話を聞くことができ本当に良かったと思います。

8. FD ワークショップの開催

1) ワークショップテーマ

歯科医学教育における教育能力開発（より良い授業を行うためには？）

2) 到達目標

一般目標 GIO (General Instructional Objective) :

効果的な歯科医学教育（授業）を行うために、現在の自らの教育（授業）方法の問題点を認識し、その改善を行う。

個別行動目標 SBOs (Specific Behavioral Objectives) :

1. 教育（授業）の原理ならびにあり方を説明する
2. 自らの教育（授業）を振り返る
3. 効果的な教育（授業）方法を立案する
4. 教育（授業）改善に積極的に関与する

3) 主 催

鹿児島大学歯学部、鹿児島大学歯学部FD委員会

4) 実施日

平成24年6月23日（土） 9:00～17:00

5) 会 場

鹿児島大学医歯学総合研究科棟1 歯学部9階 会議室、ゼミ室

6) 参加者

各講座より計12名（主に各講座で「授業」を担当している教員）

7) スタッフ

主催者	島田 和幸	教授	鹿児島大学歯学部長
ディレクター:	田口 則宏	教授	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
タスクフォース:	宮脇 正一	教授	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
	田松 裕一	准教授	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
	吉田 礼子	診療講師	鹿児島大学医学部・歯学部附属病院
	岩下 洋一朗	助教	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
アドバイザー:	西 隆一郎	教授	鹿児島大学教育センター高等教育研究開発部長
	渋井 進	准教授	鹿児島大学教育センター高等教育研究開発部
オブザーバー:	佐藤 友昭	教授	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
事務局:	鮫島 順子	係長	学務課歯学教務係
	神宮司 浩二	係員	学務課歯学教務係

8) スケジュール

8:40	受付開始
9:00	開講式 ディレクター挨拶 受講者、タスクフォース、スタッフの紹介
9:20	ワークショップの説明: グループ分け、資料確認、役割分担等
9:30	セッションI 「印象に残っている授業とは？」

	解説、グループ討論、全体発表
10:45	セッション II 「授業を行う上で、困っている点」 解説、グループ討論(KJ法)、全体発表
12:00	昼食および休憩
13:00	基調講演 I 「学習者はどのように学ぶのか?」 田口則宏
13:30	セッション III 「解決策の立案」 解説、グループ討論(KJ法)、全体発表
15:10	基調講演 II 「第 1 回教員セミナー報告」 宮脇正一
16:10	セッション IV まとめ ワークショップを振り返って、ポストアンケート
16:35	閉講式 修了証授与、集合写真撮影
17:00	閉講

9) 各セッションの概要

セッション I 「印象に残っている授業とは？」

これまで受けた授業・講義の中で「良い意味で印象に残っている授業」を、自分の事例とその理由について説明する。個々の体験を集約し、「望ましい授業」の特徴とその理由について、まとめる。

セッション II 「授業を行う上で困っている点」(問題点抽出)

KJ法を用いて、グループ「授業を行う上で困っている点」について発散的に思考し、抽出された問題点をカテゴリー別に分類する。

セッション III 「解決策の立案」(問題点分析)

セッション II より得られた問題点を、緊急度、優先度、難易度の観点から分析を行い、解決すべき最重要課題を決定する。その後、決めた課題に対して具体的な解決方法を議論しまとめていく。

10) 参加者からの事後評価

今回のワークショップ全般にわたり良かったと思われる点

- 他科の教員と話し合えたこと
- 学部の教員が分野の垣根を越えて教育について話し合った
- グループでのディスカッションと講義という 2 つの異なる手法を学べた点
- プレゼンの方法などを具体的にを見せていただいた点
- 講義の方法について実例をみせていただいたこと
- 自分の授業の問題点を振り返ることができた
- 前回と比べてターゲットを絞った点
- 効果的なスライドプレゼンが参考になりました
- 運営がしっかりしていて、スムーズに進行した
- 視覚素材の有効な使用法
- 初めて教える側からと学生側の立場から講義について考えたこと
- 授業を行うにあたっての問題点は、ある程度各人共通のものであることがわかった
- グループ討議を行う事で、色々な意見を聞く事が出来て参考になりました
- Deep approach について、学生に「考える機会」を自分の担当授業では時間を取っていないことを認識した

- グループのメンバーが基礎、臨床がそれぞれ含まれていた点
- 他大学の先生方の意見、報告などを読ませていただけた点
- 教育の考え方について自分なりに整理できたこと
- 他の先生方と授業の難しさを share できた
- 学生に学習させることの重要性が理解できました
- 集中力は 24 分で切れることが分かったこと
- 同じようなことで悩んでいることもわかり、少し改善していければという意欲が湧いた
- 学生への意欲をかき立てるため、教官も工夫をこらして授業を改善すべきと思いました
- 他講座の先生方が授業にかける熱意を感じられた点
- 他の講座の講義に関する情報を得られたこと
- 学生に合った適切な教え方があることを理解できたこと(AC etc)
- 現在、教育というものがどう変化してきているのかということが少しでも把握できた
- レクチャーも大変ためになりました

今回のワークショップ全般にわたり芳しくなかったと思われる点 (改善すべき点)

- 3 回目にして出席メンバーが固定してしまっている気がする
- 講座 1 人でなく、もっと多くの先生に参加して頂ければよかったのと思った
- メンバーが固定しつつある点
- セッションの設問が大きすぎて、何を考えればよいかわかりにくい所があった
- 経験が少なかったため、自分自身ややついて行きづらかった
- グループ討論で積極的に発言する先生と発言をしない先生がいたため、まとまりにやや欠けていたのでは
- これまでのワークショップとの整合性が必要では

このワークショップでの経験を通じて今後実施したいと考えていることは？

- 講義中における集中力の高め方など、24 分で集中力が切れることは知りませんでした
- 24 分ごとの休みまたは雑談
- 授業時間内で学生に「考える機会」を与えること
- 学生に疑問形で質問する方式を試してみたい
- 課題の提示方法を再点検する (学生が主体的・能動的に参画する機会を増やす)
- 講義の最初に学生の興味を引くような工夫をしたい
- PBL
- 学生への接し方を改善する事
- 現在行っている講義を学生がどう捉えているかについて調査する
- 視覚素材の積極的活用
- 講義スライドの改善
- プレゼンテーション技術の向上
- スライド作製 (パワポ) の工夫 (文字やタイトル、写真 etc)
- スライドを見やすくしようと思います
- パワーポイントの作り方
- 穴埋め式の配付資料の作製

- クリッカーも教育の場で使えるのではないかと思います

9. 共用試験歯学系 CBT 作問スキルアップに関する研修会

1) 目的

共用試験歯学系 CBT において、作問における基本的事項の理解を深めるとともに、より質の高い作問を行うために、教育委員会共用試験実施部会における CBT 作問委員会主催のグループ内ブラッシュアップに参加し、作問作業の実際を体験する。

2) 日時および場所

<第1回>

平成 25 年 2 月 12 日 (火) 18:00~20:00

A グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

平成 25 年 2 月 15 日 (金) 18:00~20:00

C グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 4 階 第 4 セミナー室

平成 25 年 2 月 19 日 (火) 18:00~20:00

B グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

<第2回>

平成 25 年 3 月 6 日 (水) 18:00~20:00

A グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

平成 25 年 3 月 7 日 (木) 18:00~20:00

B グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

平成 25 年 3 月 4 日 (月) 18:00~20:00

C グループ : 医歯学総合研究科棟 1 (歯学系) 9 階 第 3 示説室

3) 対象者および参加者

<対象者>

歯学部教員全員

<参加者>

第 1 回 A グループ・ブラッシュアップ : 18 名

B グループ・ブラッシュアップ : 22 名

C グループ・ブラッシュアップ : 20 名

第 2 回 A グループ・ブラッシュアップ : 17 名

B グループ・ブラッシュアップ : 20 名

C グループ・ブラッシュアップ : 20 名

4) 内容

本学部では共用試験歯学系 CBT の作問を、全講座を挙げて取り組んでいる。歯学部 FD 委員会では、教育委員会共用試験実施部会とともに CBT 問題作成過程を歯学部 FD 活動の一環としてとらえ、歯学部教職員に対して各 CBT 作問グループ (A、B、C グループ) で行われるブラッシュアップに参加してもらい、問題作成上の基本的事項の確認とともに、自らの作問能力向上へ向けて取り組んでもらう機会

を設けた。

10. 教員の外部研修会への派遣報告

1) 「第31回日本歯科医学教育学会 総会・学術大会」への教員派遣報告

報告者：中山 歩（口腔生理学分野 助教）

主催：日本歯科医学教育学会

日時：平成24年7月20日（金）～21日（土）（2日間）

場所：岡山コンベンションセンター（岡山県岡山市）

概要：本学術大会は、岡山大学歯学部の主幹により執り行われ、全国から歯学部・歯科大学の臨床系、基礎系教員のみならず、歯科医療に携わる様々な職種の医療関係者、学部学生が400名以上参加した。今回は「社会に求められる歯科医学教育」をメインテーマに、2日間にわたり特別講演、シンポジウム、一般口演、ポスター発表において活発な討論が行われた。歯科医学教育の現状と今後の展開を知るうえで、非常に有意義なものであった。

スケジュールと内容：

第1日

特別講演：「モデル・コア・カリキュラムの改訂とそのポイント」

シンポジウムⅠ：「プロフェッショナリズムをどう育むか」

一般口演：「卒前専門基礎教育／教育研究手法」、「卒前専門基礎教育・臨床実習／医療面接・学習ツール・模擬患者」、「卒前臨床実習／シミュレーション教育・倫理・態度・意識調査」、「カリキュラムの開発・改善、組織の改善」、「卒前臨床実習・臨床研修／学習ツール」、「臨床研修／教育研究手法・その他」

ポスター発表

第2日

シンポジウムⅡ：「多職種連携医療をいかに教育するか」

シンポジウムⅢ：「医療人を育てる新たな学習法～チーム基盤型学習（TBL）」

一般口演：「グローバル化とハーモニゼーション」、「卒前専門基礎教育／コミュニケーション・PBLチュートリアル教育」、「卒前専門基礎教育／シミュレーション教育・その他」、「歯科医師・教職員／リカレント・その他」

ポスター発表

特別講演：「モデル・コア・カリキュラムの改訂とそのポイント」

文部科学省高等教育局医学教育課

歯学教育モデル・コア・カリキュラムは、歯学生が卒業までに最低限履修すべき教育内容を記載したガイドラインである。本特別講演では、歯学教育モデル・コア・カリキュラム（平成22年度版）の改訂のポイントについて講演が行われた。今回の改訂では、平成20年度の歯学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議において提言された、①歯科医師として必要な臨床能力の確保、②優れた歯科医師を養成する体系的な歯学教育の実施、③未来の歯科医療を拓く研究者の養成の3点について検討されており、詳細な解説が行われた。

シンポジウムⅠ：「プロフェッショナルリズムをどう育むか」

山口育子先生 NPO 法人ささえあい医療人権センターCOML

宮田靖志先生 北海道大学病院地域医療指導医支援センター・卒後臨床研修センター

樫 則章先生 大阪歯科大学人権教育室

木尾哲朗先生 九州歯科大学医療人間形成学講座総合診療学分野

現在、医学・歯科医学教育では専門的知識、技術を教示するだけでなく、いかにプロフェッショナルリズムを育むかが重要視されている。山口育子先生は歯科に関する相談内容を通じ、社会が歯科医療に求めているものについてお話しされた。宮田靖志先生はプロフェッショナルリズム教育における省察（振り返り）の重要性を語られた。樫則章先生は倫理（学）からみた今後のプロフェッショナルリズム教育について解説された。木尾哲朗先生は歯科医学教育機関で行われているプロフェッショナルリズム教育の実践例、問題点などを示された。

シンポジウムⅡ：「多職種連携医療をいかに教育するか」

谷本光音先生 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科血液・腫瘍・呼吸器内科学分野

片岡竜太先生 昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座歯学教育学分野

曾我賢彦先生 岡山大学病院医療支援歯科治療部

医療とは、患者と医師・歯科医師という単純な関係では成り立たない。患者を中心として医師・歯科医師、看護師、薬剤師、歯科衛生士、理学療法士、栄養士、その他様々な職種が連携して医療を実践することが非常に重要である。谷本光音先生は医療から見た多職種連携の重要性について語られた。片岡竜太先生は昭和大学における多職種連携教育の実践例を示された。昭和大学では1年次に医・歯・薬・保健医療学部の4学部を一緒にした全寮制教育を行い、2年次以降は4学部と8つの附属病院が併置された環境で学生と教員の学部間交流を日常的に行うことで、チーム医療に貢献できる人材の育成を行っているとのことであった。曾我賢彦先生は岡山大学での臨床研修における実践例を示された。岡山大学では医科で行われる医療に必要な口腔内の管理・治療を行い、かつ歯科系各専門診療科の専門医などとのコーディネートを行うことを目的とし、「医療支援歯科治療部」を設置している。この部署に研修歯科医を配属することで、多職種連携医療における歯科医師の役割について学ぶという教育プログラムを説明された。

シンポジウムⅢ：「医療人を育てる新たな学習法～チーム基盤型学習（TBL）」

瀬尾宏美先生 高知大学医学部附属病院総合診療部

槻木恵一先生 神奈川歯科大学歯学部顎顔面診断科学講座病理学分野

野呂瀬崇彦先生 北海道薬科大学薬事管理学分野

チーム基盤型学習（TBL）はグループワークによる学習法で、個人とチーム単位の双方から問題を解決することを通じて学習する手法である。PBLチュートリアルとは異なり、多数の教員は必要とせず、基本的には1人の教員が行う。瀬尾宏美先生は、TBLが開発された背景、具体的な手法などを説明された。槻木恵一先生からは大阪歯科大学病理学実習におけるTBLの実践例が示され、従来の顕微鏡を用いた実習とTBLの間で、実習共通試験の成績に有意差はないとのことであった。野呂瀬崇彦先生からは北海道薬科大学薬学一年次生を対象とした薬学実務体験学習と組み合わせたTBLの実践例が示された。今後、TBLは歯科医学教育においてもますます導入が進むと考えられ、本学でも導入検討の必要があると考えられた。

ポスター発表：「教員の教育能力向上の取り組み - CBT 作問を通じて - 」

全国共用試験 CBT は、「臨床実習開始前の知識および問題解決能力を評価する客観試験」として平成 14 年度から試験的運用が始まり、平成 18 年度より正式実施となった。本大学歯学部では CBT 作問の技術向上のための FD 研修会など、問題作成作業に全学部的な取り組みを行い、問題採択率は全国平均以上を維持している。本演題では、本大学歯学部での CBT 問題作成に対する取り組みと、それを通じた教員の教育意識・能力の向上の効果について発表させていただいた。他大学でも CBT 作問作業には苦慮しているとのことで、ポスター討論では多くのご質問、ご意見をいただいた。

2) 「第 6 回医療コミュニケーション ファシリテーター養成セミナー（新初級編）」への教員派遣報告
報告者：志野 久美子（医学部・歯学部附属病院 歯科総合診療部 助教）

主 催：日本歯科医学教育学会 教育能力開発委員会

日 時：平成 24 年 8 月 9 日（木）～10 日（金）（2 日間）

場 所：邦和セミナープラザ（愛知県名古屋市）

参加者：医療コミュニケーション担当教員 24 名

（1）セミナーの到達目標

一般目標 GIO：

歯科医療者の卒前教育・卒後研修における教育指導能力を向上させるために、医療コミュニケーションの指導・評価法について態度、技能、知識を修得する。

行動目標 SBOs：

1. 対人コミュニケーションの要素を述べる
2. 医療コミュニケーションを説明する
3. スタッフコミュニケーションを説明する
4. ファシリテータの役割を説明する
5. 医療コミュニケーションの教育法を述べる
6. 医療コミュニケーションの評価法を述べる
7. 模擬患者について説明する
8. 模擬患者シナリオを作成する
9. 模擬患者への演技指導をする
10. 模擬患者シミュレーション（ロールプレイ）法を実施する
11. 模擬患者養成法を説明する
12. フィードバックを行う

（2）概 要

近年、対人コミュニケーション教育の重要性について、重要視されている。以前より、OSCE（客観的臨床能力試験）の医療面接、SP（模擬患者）セッションに立ち会うことがあり、時には評価者を行い、コメントを求められる機会があった。しかしながら、私自身、対人コミュニケーションの授業を受けたこともなければ、トレーニングも受けたことがない状態であった。今まで何とも無責任で理論を伴わない状態で、コメントをおこなってきたことか。そんな矛盾を抱えながら、日常の研修指導を行ってきたが、本セミナーに参加する機会を頂いたので、その研修報告をさせていただくことにする。

セッション I

アイスブレイキングで、まず 2 人組になって一人が手持ちの品物（時計、ボールペンなど）の良さを 2 分でアピールした。コミュニケーション力を見極めるには、1. 質問をするかどうか？2. 人の話を途中で遮ってしまうか？3. 人の使った言葉を上手く使いこなせるか？が重要である。医療人に求められる能力は IQ ではなく、話上手より聞き上手である。相手がこちらの話が理解できるよう心がけ、理解できているか意識しながら話すことが大切であるとグループ内で共有した。

セッションⅡ

レクチャー1、2 の講義を受けたのち、対人コミュニケーション教育の簡単な授業計画（シラバス）の作成と課題と簡単な SP シナリオの作成を行い、グループ内でロールプレイを行った。

セッションⅢ

このセッションでは先のセッションで作成したシナリオに従い、実際 SP の方を交えてロールプレイを行い、シナリオ修正を行った。我々の班は名古屋 SP 研究会の方に加わっていただき、ロールプレイをした。また、アドリブで学生役として言った言葉が SP の方からすごくうれしかったといわれ、改めて患者さんへの声掛けが重要であると思うのと同時に、フィードバックを受ける側の気持ちもわかり（内容は普通の声掛けだったが、うれしかったと言われ、実際私もうれしかった。）、フィードバックの内容、受け手側への配慮も重要であることがわかった。

セッションⅣ

このセッションではフィードバックとトランスクリプトを用いた、効果的なフィードバックのための基本技術について行った。

セッションⅤ

このセッションでは SP シミュレーションを用いた模擬授業を行った。実際やってみると、とくにファシリテータとしてコメント内容が難しかった。「フェイス」が気になって、何が言いたいかわからない表現になった。また、相手の言い分やどうしてそうしたかを聞くことが重要と思われる。

セッションⅥ

このセッションでは自身の授業の振り返り（Reflection）を行った。具体的にはなぜそれが起こったか、起こった結果どのようになったか、一方で何が起こらなかったか、なぜ起こらなかったか、どうすれば起こったかを議論した。我々の班のシナリオは SP の負担が多く、学生役の方がゆっくり時間を使ってしまうと話せないケースがあった。もう少し、設定のほうに書いておくと、時間的余裕がでてよかったのではないかという結論になった。

セッションⅦ

このセッションは岡山 SP 研究会の西谷りえ子さんから「模擬患者の活動と養成」について、つづいて名古屋 SP 研究会の魚津愛子さんより「SP の本音」についてご講演頂いた。SP の方々と一緒に仕事をすることはあったが、OSCE が主で、じっくり SP の方々のお話を聞く機会がなかったので良い機会となった。SP の方々の思いを学習者にうまく伝える役割、機会の設定をするのは我々教員であることを改めて認識した。

1.1. 歯学部FD委員会委員による学外施設へのFDおよび教育研修活動協力実績

田口則宏

「第3回 歯学教育者のためのワークショップ」日本歯科医学教育学会主催

平成24年12月13～16日 富士教育研修所（静岡県裾野市）

役割：タスクフォース

「第14回 中国・四国地区歯科医師臨床研修指導歯科医講習会」広島大学病院主催

平成24年12月22～23日 広島大学病院（広島市）

役割：タスクフォース

工学部

平成24年度工学部 FD 活動報告

平成24年度 FD 委員会委員（工学部）

平成24年度工学部 FD 委員会委員長

内山博之（理工学研究科教授）

1. 平成24年度のFD活動

工学部では、7学科中6学科の教育が日本技術者教育認定機構（JABEE）の認定プログラムとして認められており、残りの1学科も JABEE に準拠した教育を行っている。これまで継続的に工学部 FD 委員会が実施してきた授業アンケートによる授業改善などの FD 活動は、JABEE の求める教育改善のための PDCA サイクルにうまく取り込まれた形で実施されている。24年度の第1回工学部 FD 委員会において、既に学部に着したこのような活動を本年度も継続して遂行することが決定され、年度内に以下の活動が実施された。

- 1) 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成
- 2) 授業公開と授業参観の実施
- 3) FD 講演会の実施
- 4) 授業アンケートのデータ分析と年度報告書の作成

以下には各項目の概要を記す。活動の詳細とデータ分析の結果等は「平成24年度工学部ファカルティ・ディベロプメント委員会報告書」として工学部の Web サイトで25年6月より公開予定である(<http://www.eng.kagoshima-u.ac.jp/education/fd.html>)。

2. 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成

工学部の学生による授業評価アンケートは、平成24年度も例年通り前期は7月、後期は1月に実施した。また期の中頃に中間アンケートも実施した。期末アンケートは、5段階のリッカート尺度評価による15項目の質問と自由記述欄で構成されている。5段階評価（「大いにそう思う」、「そう思う」、「どちらとも言えない」、「そうは思わない」、「全くそうは思わない」）は5から1までの値で数値化し、科目ごとの各項目の平均値を評点として集計後、担当教員に学生の記入したアンケート用紙とともに印刷して返却した。各教員は、授業評価を受けて、授業計画改善書を提出した。授業計画改善書には24年度、23年度、22年度の三年間の各項目の評点の推移と24年度の評価値に対する自己評価と改善対策案を記入する。この改善書は全7学科で学科内での自由な閲覧を可能にしており、各教員の教育の質改善のみならず、各学科の教育の質改善にも利用されている。

3. 授業公開と授業参観の実施

平成24年度は、前期36科目、後期38科目が公開科目となった。これは授業を担当している工学部担当教員のほとんどが自身の担当科目を公開科目としたことを意味する。これらの公開科目に対して、工学部教員による授業参観が前期7件、後期6件実施された。このように平均で公開科目の18%で実際に参観が行われた。ただし参観の実施は、学科間で大きな差があった。

4. FD講演会の実施

平成24年度の工学部FD講演会は、平成24年12月21日（金）午後4時から5時半まで、理学部1号館101講義室において、理工学研究科、理学部との共同共催で、名城大学総合数理教育センター長の川勝博教授を講師に招いて開催した。30名の聴講者があった。「科学教育の国際的転換と科学リテラシー」と題された川勝先生のご講演は、大学の大衆化のトレンドを大学人が積極的に受容しなければならないとする興味深いものであった。

5. 授業評価アンケートのデータ分析

工学部においては授業評価アンケートを平成16年度より9年間継続して実施しており、多くの項目の評点についての経年的な変化やトレンドを把握することが可能となっている。各学科のFD委員は、学科ごとの評点の分析を詳細に行い、報告書を作成した。

ここでは、平成16年度前期～平成24年度後期までの18期分の授業評価アンケートによって得られたアンケート評点の工学部平均値を分析する。なお、「工学部平均値」は、まず各設問に対する講義・演習科目の評点を学科毎に平均し、さらに学科平均値を単純に平均し、得られた値である。まず、15項目の授業評価アンケート項目の内、特に重要だと思われる以下の3項目に着目して分析を行った。

設問 4：授業は理解できた

設問 14：1コマ（90分）の授業に対して、予習と復習の時間を合わせてどれ位をかけましたか

設問 15：この授業は総合的に見て満足できた

以下では簡単のため、これら6項目を「④理解」、「⑭自習」、「⑮満足度」と記す。図1～3に、上記3項目に対する、18期分の評点の推移、また、図4に、アンケート全15項目に対する過去3年間（平成21年度～平成24年度）の工学部平均値を示す。

過去9年間で見ると、「④理解」については、全体的に評点が増加傾向にあるが、平成21年度以降、やや頭打ちの傾向を示している（図1）。ちなみに、平成24年度の評点は3.7程度である。

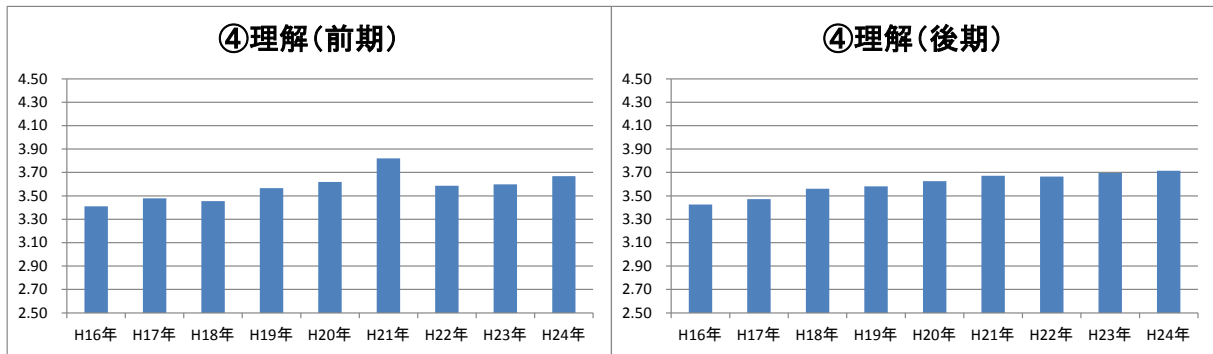


図1 授業評価アンケート「理解」評点の工学部全体の平均の推移

「⑭自習」については、過去9年間、上昇傾向にあるものの（図3. 1. 1(5)）、評点は6つの設問の中で最も低い（平成24年度：3.1程度）。演習課題やレポートの質の改善、演習書の適切な選定等の工夫を行うと同時に、学生の自主性や向学心を育む取り組みが今後必要だと考える。

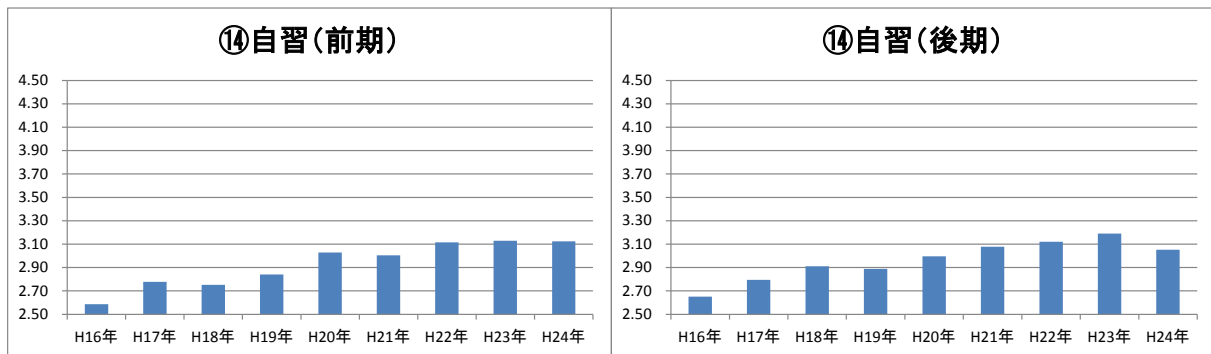


図2 授業評価アンケート「自習」評点の工学部全体の平均の推移

授業の総合的評価である「⑮満足度」も「④理解度」と同様、やや頭打ちの傾向を示しているが、評点は3.91（平成24年度）と低くない（図3）。このため、今後も高い評点を維持する努力を継続する必要がある。

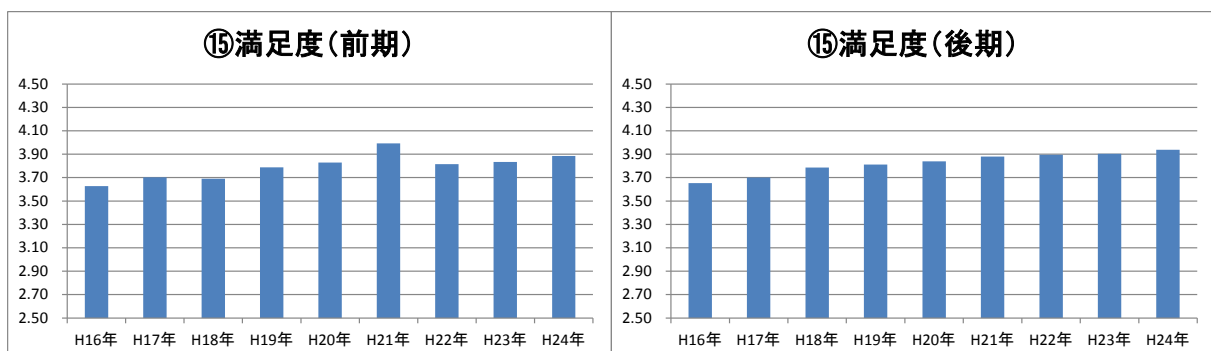


図3 授業評価アンケート「満足度」評点の工学部全体の平均の推移

次に、上記6項目以外の評点について調べた。ここ3年間、評点が頭打ちの傾向にあるが、「⑫レポートの返却」以外の項目に対しては、比較的評点が高い(図3. 1. 1(7))。

以上をまとめると、「⑪教員の対応」、「⑫返却」、「⑭予習・復習の評点」に対する評点が他に比べて低いことから、これらの項目に対する評価の意味を吟味した上で、授業改善につなげていく必要がある。

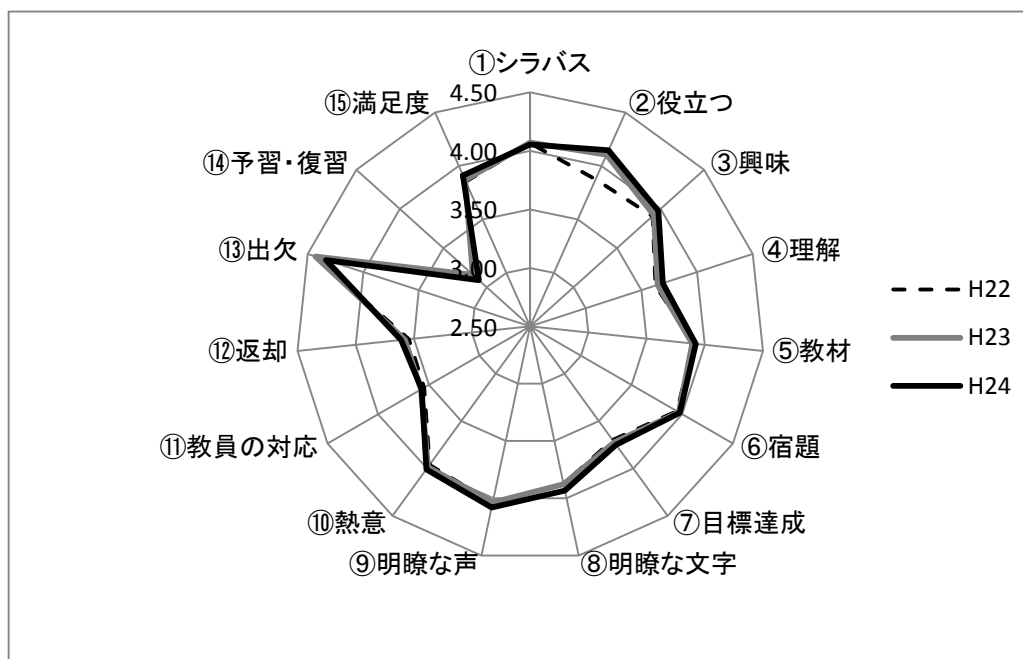


図4 授業評価アンケート15項目の評点の工学部全体の平均

6. 今後のFD活動

冒頭で述べたように工学部はJABEEに基づく教育を行っており、FD活動を通じた教育改善のPDCAサイクルが比較的良好に機能していると思われる。しかし現状では、教育システムが完成されるに連れて、学生は受け身になってしまうという皮肉な傾向も見られる。学生の自主的な学習態度をどのように引き出すか検討が求められる。そのような自主性の育成などに関して各学科、各教員の効果の見られた様々な取り組みや工夫、さらには学外の先進的な取り組みについて、学部の全教員で情報を共有し実践を支援し合えるようにする仕組みづくりを検討しなければならない。

農学部・ 農学研究科

平成24年度
鹿児島大学農学部・農学研究科 **FD** 活動報告書
(概要)

鹿児島大学農学部 **FD** 委員会

平成25年3月

第1節 平成24年度農学部FD活動の記録

まえがき

農学部 FD 委員会は、委員長、副委員長（教務副委員長が兼任）、および各学科から選出された委員4名、および、教務係長で構成されている。委員会では、さまざまな FD 活動計画や取りまとめ、また、全学 FD 委員会や、全学 FD 活動への対応について協議した。

農学部の FD 活動の3本柱は、授業公開・授業参観、学生による授業評価アンケート、および、農学部 FD ワークショップである。授業公開・授業参観の予約、学生による授業評価アンケートの集計などには、農学部 FD-WEB システムを活用している。

1. 農学部 FD 活動組織（FD 委員会の構成と活動状況）

委員長 境 雅夫
委員 岩井純夫
委員 坂井教郎
委員 南 雄二
委員 枚田邦宏
事務担当者 郡山 茂（教務係長）
データ処理 池田日出男

第1回 FD 委員会 平成24年5月9日（水）

議題：1. 平成24年度 FD 委員会の活動計画について
2. 平成23年度 FD 活動計画・経費要求について
3. その他

第2回 FD 委員会 平成24年6月13日（水）

議題：1. 平成24年度前期授業公開について
2. FD-Web システムの改善について
3. その他

第3回 FD 委員会 平成24年10月10日（水）

議題：1. 平成24年度後期授業（公開授業参観）の実施について
2. 農学部 FD ワークショップ・教育実習事後研究について
3. FD-Web システムの改善について
4. その他

第4回FD委員会 平成24年11月14日(水)

- 議題：1. 学生・教職員ワークショップの開催について
2. 共通教育における学習実態・学習成果に関する調査2012の実施について
3. 農学部FD委員会について
4. FD報告書の作成について
5. FD-Webシステムの改善について
6. その他

第5回FD委員会 平成25年3月19日(火)

- 議題：1. 教育・学生支援担当教職員講習会について
2. 平成24年度のFD活動のまとめと報告書作成について
3. FD-Webシステムについて
4. 次年度への引き継ぎ事項について
5. その他

2. 授業公開と授業参観の取り組み

農学部では、平成15年度後期より公開授業・授業参観の取り組みを実施している。平成22年度からは、授業公開科目と授業参観参加希望科目の登録をFD-WEBで行うようにし、今年度もこのFD-WEBを活用することとした。その使用法は教授会ならびにメールにて説明し、周知した。授業公開は、例年どおり全学の教職員を対象にすることとし、全学の教職員に周知した。

授業公開と授業参観のスケジュールは以下の通りであった。

(前期)

- 5月16日(水)：公開授業の実施についてのお知らせ(教授会)
6月11日(月)～6月15日(金)：公開不可能な授業科目調査
6月25日(月)～6月29日(金)：授業参観予約
7月2日(月)～7月6日(金)：授業公開(農学部FDウィーク)
7月2日(月)～7月20日(金)：授業参観報告書作成・提出

(後期)

- 10月17日(水)：公開授業の実施についてのお知らせ(教授会)
10月29日(月)～11月2日(金)：公開不可能な授業科目調査
11月12日(月)～11月23日(金)：授業参観予約
11月26日(月)～11月30日(金)：授業公開(農学部FDウィーク)
11月26日(月)～12月14日(金)：授業参観報告書作成・提出

授業担当者と授業参観者には、可能な限り、授業参観終了後に意見交換をお願いした。また、参観者には、FD-WEBを通じて、授業参観報告書を作成・提出いただいた。

授業公開・授業参観の取り組みにおいては、平成23年度の授業のうち、学生の評価が高い授業科目を農学部教員に周知した。これらの授業の選抜は、学生の授業評価アンケートの結果、「満足した」「どちらかと言えば満足した」という回答が100%であり、受講生が30名以上の授業科目を選び、各学科から満足度が最も高かった授業科目を3科目選出した。本年度の授業参観には、前期42名、後期47名の参加があり有意義な取り組みであった。

以下に、参加者による参加報告・感想を掲載した。

公開授業参観に参加して

生物生産学科 坂井教郎

農業経営経済学コースの秋山邦裕教授の「農村計画学」の授業を参観した。参観した授業では、農村における起業や市民農園の活用による農村活性化の取り組み事例、およびそうした取り組みの背景にある制度的側面の解説であった。個人的には講義の内容は興味深く、印象に残るものであったが、ここでは講義の技術的な点について気づいたことを述べたい。

①取り組みの背景となる制度面の解説は、法律の説明が中心になり、ややもすると単調になりがちであるが、この講義ではそうならない工夫が感じられた。まずパワーポイントでその取り組み事例の写真を詳しく紹介し、受講者の興味を引いた後で制度の説明に移るタイミングが絶妙であった。また法律面の解説もポイントを絞り単調になることを防いでいた。

②パワーポイントのスライドについても、1枚あたりの文字数を多くしない点や、重要事項の色使いなど分かりやすく伝えるための工夫が随所に見られた。

③これは前年に参観した授業評価の高い先生の公開授業と共通点する点であるが、かなりゆっくりとした説明を心がけておられるようであった。我々教員が行う一般向けの講演会や学会報告と同じスピードで説明しても学生の多くは話についてくるのが難しいと思われる。意識的にスローペースで、かつ眠くならないようメリハリをつける講義の技術は易しいものではないが、これを意識することが必要であろう。また1回の講義に多くの内容を詰め込まない点も参考になった。

公開授業参観報告

生物資源化学科 南 雄二

生物資源化学科2年生の必修科目である「物理化学」(八木史郎教授)を参観した。教室は307号で、学生数に対して十分な広さであった。講義はパワーポイントと板書の併用で進められた。

講義は、前回の講義に対する学生の質問の解説から始まり、学生の質問内容から、理解度が低いところや勘違いしているところを的確に指摘しながら進められていた。講義ではパワーポイントのスライドを示しながら解説とともに、関連する数式の意味や前回の講義との関連性などを板書しながら進められた。学生が理解しにくいところを何回も解説して、理解度を上げていく工夫がされていた。また、学生の授業態度も良く、集中して聞いているという印象を受けた。今後も、参観を通して、自身の担当する講義にも生かせる工夫を見いだして行きたいと思う。

公開授業参観

生物生産学科 岩井純夫

徳永教授の「応用微生物学」の講義を拝見させていただいた。食品産業に進みたい学生にとっては必須の科目であるため、開講学科の生物資源化学科以外の学科に所属している学生の履修も多く、大きな204号教室も人が満杯であった。

対象学生に合わせて基本的な応用微生物学であり、講義内容も学生が身近に感じることのできる、日本酒であったり、ビールであったりするので、学生の興味をつなぎとめることのできる素材であることが若干うらやましい思いもする。

講義はパワーポイントを用い説明。基本的な資料は開講始めに配り項目によっては追加の資料を配布する細かい対応を取っており、参考になった。

3. 農学部 FD ワークショップ

平成24年度の農学部FDワークショップの実施に当たっては、FD委員会で検討を重ね、本年度は農学セミナーと共催でFD講演会を企画・開催することにした。立命館大学 教育開発推進機構 鳥居朋子教授に「大学教育の質保証へのアプローチ- 学びの実態に基づく教育改善-」と題して講演をお願いした。農学部の教職員に加えて他部局からの教職員の参加もあり、本FD講演会への参加者は58名であった。

以下に本FD講演会の開催概要、鳥居先生から配布いただいた資料を掲載する。

日 時： 平成25年1月23日（水） 16:00～17:30

場 所： 農・獣医学共通棟 101講義室

講演者： 立命館大学 教育開発推進機構 鳥居 朋子 教授

演 題：「大学教育の質保証へのアプローチ- 学びの実態に基づく教育改善-」

概要:

学生の学習成果を高め、大学教育の質保証を実現するには、どのようなアプローチが有効なので

しょうか。今日、高等教育の質保証という国際的な課題を受け、日本の大学においても根拠に基づいた教育改善を実行していくことが要請されています。2012年8月の中教審答申でも、「十分な質を伴った主体的な学修時間」等が重要な論点となっており、教職員が学生の学びの実態に視点を投じることが強く求められています。

ここで注目されるのがIR (Institutional Research) の機能です。IRとは、「機関の計画策定、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関の内部で行われるリサーチ」を意味し、根拠に基づく教育改善を下支えします。

本講演では、立命館大学における教学IRの開発や「学びの実態調査」等の取り組みを中心に紹介し、大学教育の質保証へのアプローチについて参加者とともに考えていきます。

鹿児島大学教育学部FD講演 2013.1.23

大学教育の質保証へのアプローチ - 学びの実態に基づく教育改善 -

鳥居朋子
立命館大学 教育開発推進機構

講演の概要

- はじめに: Key Questions
- 大学の質保証
- 学習成果とIR
- 立命館大学の教学IR
 - アプローチ: 学びの実態への接近
 - フィードバック: 可視化と共有
- おわりに: 組織的な取り組みに向けて

Key Questions

いま一番知りたい「鹿児島大学(農学部)生」の学びの実態とは?

また、いま重要だと感じている「鹿児島大学(農学部)の教授・学習」の問題とは?

「問い」を立てつつ、根拠に基づき、学生の学びに科学的にアプローチし、組織的にフィードバックするには?

大学の質保証と学習成果への関心

- 国際的な課題としての質保証 (Quality Assurance): 欧州、米国、英連、中国、韓国、ASEAN等
- 質保証の中心的課題: Learning Outcomes
 - 学習成果の可視化: 一連の学修が終わった時に学生が獲得した成果を目標に照らして測定
- 内部質保証 (IQA) システムへの関心の高まり
 - UNESCO-CEPES「構築 (プログラム) の一連の活動に際する質の監視 (monitoring) と向上 (improvement)」に用いられる大学内勤の仕組み」(本稿 2008)
- 日本: 説明責任や、データに基づく教学マネジメントへの要請: 中教審答申 (2008, 2011, 2012) 等

政策的論点としての「十分な質を伴った主体的な学修時間」

中教審答申 2012

全国的な状況: JFS (新入生調査; 山田ほか)

「適切な教員と学習時間」

「学習時間の減少の予兆」(山田 2012)

教育改善および学習成果にかかわる課題

- 質保証を意図した根拠に基づく改善
 - 「学士課程教育の構築に向けて」(2008年)
 - 3ポリシー
 - DP「人材養成像」
 - CP「DPを保障する体系性と整合性が担保されたカリキュラム」
 - AP「DPIに沿った学生募集の方針と入学者選抜の方法」
- ただし、学生の成長はリニアモデルではないことに注意が必要

「学士課程教育の構築に向けて」の論点+α

学士課程教育の質保証

学生の「実容」

教員員の継続開発(FD/SD) w/さまざまな「道具立て」

「学士課程教育の構築に向けて」の論点+α

学士課程教育の質保証

学生の「実容」

教員員の継続開発(FD/SD) w/さまざまな「道具立て」

「学士課程教育の構築に向けて」の論点+α

学士課程教育の質保証

学生の「実容」

教員員の継続開発(FD/SD) w/さまざまな「道具立て」

学習成果測定における様々な方法

(Daorin 2009, 山田 2012を参照, 自作)

評価項目	試験	課題	面接	ポートフォリオ	自己申告	360度評価	卒業論文
知識・理解	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
応用	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
態度・価値観	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
卒業論文 (卒業)	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
卒業	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
卒業後 (卒業)	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
卒業後 (卒業)	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

学習成果とIRへの注目

- Institutional Research (機関調査)
 - 「機関の計画策定、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する」目的で、高等教育機関の内部で行われるリサーチ (Saugo 1990)
- 「リサーチ」と言えども、単なる学術研究や調査ではない⇒実践志向の強い組織的な調査分析活動
- 日本の大学: IR機能が学内に分散し、組織化されていない傾向

“Research Question”の重要性

- 意思決定を支えるIRには「お題」が不可欠
 - 何らかの意思決定を念頭にデータや情報に向かおう時、Research Question(お題)が必要
 - 返すべき「お題」の優先は、第一義的には自大学「Institution」に固有の文脈に根差した「お題」= 具体的な改善施策が導き出せるようなデータ
- IRの「お題」
 - 目標・計画に照らしたひとまずの現状把握か?
 - 何らかの仮説に基づく結果の検証なのか?

Research Questionの例 (Daorin, 2009)

米国ペンシルベニア州立大学

【アクセスおよび学位の取得しやすさ】異なった社会経済層の出身の学生たちは、入学から学位取得までの経路において、どれほど違いがあるのか?

【データ】世帯所得、第1セメスターのGPA、6年での学位取得率

立命館大学のプロフィール

- キャンパス、学部構成
 - 3キャンパス: 衣笠、びわこくさつ、朱雀
 - 13学部: 法、文、産業社会、政策、国際関係、経済、経済、経営、理工、情報理工、生命、薬学、スポーツ健康
- 学士課程学生
 - 32,524人 (2012.5.1現在)
 - 比較的、全国から学生が入学
 - 多様な入試方式: 一般、特別、推薦
 - 豊富なカリキュラム
 - 約半数の学生が課外自主活動

教学IRの組織体制

コアメンバー: 教員3名と教員3名(教員1・講師1) 専門領域ごとに、教育開発系、教育心構系、教員心構系、入試・入学支援系プロジェクト(専任職員)

教学IRのコトワジメ

- IRプロジェクト (2009.4~) (鳥居 2011, 山田 2012)
 - 教育開発推進機構教育開発支援センター内の特定プロジェクト
 - 学部・教学機関との協働による教学IRの開発と可視化
- 質保証を意図して立てたお題
 - 立命館大生の学びは本当に「多様」なのか?
 - 多様ならば「どのよう」に多様なのか?
 - その多様性に「学習・教授の文脈は適合」しているのか?

学習成果測定にかかわる主なアプローチ

- 学部での多様な直接・間接評価の取組
- 「学びの実態調査」(2009年~): IRプロジェクト (鳥居 2010, 山田 2011, 宮崎 2011, 山田 2011)
 - 正課における学習成果の間接的な測定
 - 学生が回答しながら自らの学びや成長を振り返る
 - 教育改善の介入点を見出し、具体的な改善(カリキュラム、授業設計、指導法等)の道筋を極く
 - 共通調査項目: 授業外学習時間、授業経験、学習スタイル、成長感等
 - 記名式: 教務系データ(入試方式、GPA、単位数、試験得点、進路状況等)とクロス集計が可能

学士課程教育の特徴と学生調査のタイミング

学生の「実容」

教員員の継続開発(FD/SD) w/さまざまな「道具立て」w/プログラム

鳥居朋子先生ご講演



質疑・討論



以下に、参加者による参加報告・感想を掲載した。

FD 講演会「大学教育の質保証へのアプローチ」に参加して

生物生産学科 坂井教郎

FD 活動として学生へのアンケートを実施することは、学生にとって負担が伴うものである。またそうしたアンケートの成果がどのような目的で、何に活用されるかが明確に示されていなければ、

講義時間を短縮してまでアンケートを実施する教員側のモチベーションも維持しにくい。そして何より、これまでの各種のFDやそれに類するアンケートによって、私たちは大学教育による学生の学習成果をどれだけ把握できたと言えるだろうか。

今回の講演会における立命館大学の取り組みの中では、FDに関するアンケート類をいかに実施し、有効な成果をあげるかについて細心の準備と配慮をしている点が印象に残った。こうしたアンケートが教員にとっても役に立つということが認識されれば、より積極的に関与することができるだろう。

現状の正しい把握は教育の改善のための大前提である。これを農学部の教員・職員だけで実施することはなかなか難しい。今回のようなFDや教育の外部の専門家の力を借りながら推進していくことが有効であると思える。

第2節 全学FD活動への参加

全学FD委員会には、農学部FD委員長が出席し、また、多くの教職員、学生が、平成24年度の様々な全学FD活動に参加し、全学FD活動の一翼を担った。平成24年度全学FD活動参加者のリストは、以下のとおりである。

平成24年度FD活動参加者					
研修等名	開催年月日	曜日	参加者		
			学科	職名	氏名
平成24年度新任教員FD研修会	平成24年9月24日	月	資源	教授	境 雅夫
			資源	助教	井尻 大地
FD・SDフォーラム	平成24年11月10日	土	資源	教授	境 雅夫
			資源	助教	池永 誠
			事務	係長	郡山 茂
			事務	係員	東屋敷 貴宏
学生・教職員ワークショップ	平成24年12月18日	火	資源	教授	境 雅夫
			生産	教授	岩井 純夫
			事務	係長	郡山 茂
			資源	3	野間 友希子
			環境	4	田淵 陽介
教育・学生支援担当 教職員講習会	平成25年3月26日	火	資源	教授	境 雅夫
			資源	教授	徳永 正雄
			生産	准教授	岡本 繁久
			生産	准教授	山本 雅史
			資源	准教授	南 雄二
			資源	准教授	北原 兼文
			環境	准教授	肥山 浩樹
			事務	係長	郡山 茂

以下に、それぞれの参加者による参加報告・感想を掲載した。

平成 24 年度 新任教員 FD 研修会に参加して

生物資源化学科 井尻大地

平成 24 年 9 月 24 日に開催された新任教員 FD 研修会に参加したので報告いたします。本研修会では、最初に教育センターの伊藤先生による「教育目標達成を目指した授業設計・カリキュラムの一部としての授業を意識する」と題した講演が行われました。伊藤先生の講演では、これからの大学教育においては学位授与の方針（Diploma Policy）を達成するための体系だったカリキュラム編成が重要であると説明されました。個々の授業科目においては、個々の教員によって各自が科目を講義するのではなく、学部や大学全体としての教育目標を達成することを踏まえて、その科目の教育目標を設定することが重要であると理解しました。同時に、個々の授業科目で講義される内容が重複しないことが重要であり、シラバスの適切な作成は内容の重複を防ぐという意味でも効果的であると感じました。

続いて、グループに分かれての研修として、「共通教育のシラバス作成」を行いました。まず、「教育目標を踏まえた授業の設計」を個々で行い、続いてグループ内で各自が作成したシラバス案について話し合い、各グループで 1 つのシラバス案を発表しました。私たちのグループでは、シラバス案の作成にあたって「共通教育の達成目標を具体的に設定」し、それを達成するために授業内容を考えることを意識して行いました。他のグループの発表を聞くと、「大人数を想定したシラバス案」や「複数人で一つの教育目標を達成するシラバス案」など、自分たちでは思いつかなかった意見を聞くことができたのが良い経験であったと感じました。

現在の大学教育では明確な教育目標を立てて体系的な教育を実施することが重要であると認識できた有意義な研修会でした。反省点としては、鹿児島大学のアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーなどの教育目標に対する私の理解度が低かったと感じました。今後は、鹿児島大学の教育目標を理解し、担当する授業の教育目標を明確に設定して授業設計を行いたいと思っております。

学生・教職員ワークショップ「学生の自主的な学習を生み出す大学へ」に参加して

生物生産学科 岩井純夫

平成 24 年 12 月 18 日、「学生の自主的な学習を生み出す大学へ」をテーマに学生と教職員が同じ位置に立ち議論を進め、授業、制度、教育環境の改善を提案することを目標としたワークショップが開催され、学生・教職員 45 名が参加しました。

まず、共通教育科目「セミナー・学問のススメ」について、伊藤奈賀子准教授と受講生の小平万瑠美（農学部 1 年）さんから説明がありました。同科目では学びに必要なスキルの獲得を目標に、学生が少人数のグループに別れ、課題設定、調査研究、プレゼンを行っていることが報告され、次に、教育学部の「学生の参加する FD 活動」について、日隈正守教授と弓削了太（教育学部 3 年）

さんから説明がありました。同学部では学生実行委員会が中心となり、毎年度、学部教育の改善に関するテーマについてシンポジウムや教員・学生によるグループディスカッションを開催していることが報告されました。

その後、参加者は7グループに分かれ、次の4つの中から、事前に割り当てられた1つのテーマについて討議を行いました。

- 「A. 新たな科目を作ろう」
- 「B. いつもの講義を変えよう」
- 「C. 学生の参加した教育改善の仕組みを作ろう」
- 「D. 自主学習のための教育環境を生み出そう」

私はDグループに参加しました。教員2名、事務職員1名、学生3名からなるグループでしたが、教員は相談した訳ではないのですが2名ともサポート役に回り、学生の意見がしやすい環境をと整えるように出来るだけ配慮に努めました。

いつもの学生との懇談と違い、どの学生も参画意識が強く、積極的に発言討論をし、和やかに討論ができ、楽しい一時を過ごしました。

新入生オリエンテーション説明者講習会に参加して

生物資源化学科 南 雄二

去る3月26日、1時から新入生オリエンテーションのための説明者講習会に参加した。はじめに共通教育科目の履修指導について説明があった。今年から共通教育のカリキュラムが新しくなったこともあり、新カリキュラムの特徴や履修指導上の注意点などについて説明があり、その後パソコンによる履修登録の具体的なやり方が示されたが、自身が一度も行ったことのないこともあり、説明に不安を覚えた。参加者からも「せめてIDとパスワードを説明者に発行して、実際の作業を試してみないと学生に説明できない」との発言があったが、来年への改善課題であると感じた。その後は、学生証・情報基盤センターの利用証の発行手続きや、共通教育常時予定・奨学金についての説明が行われた。

次に、休憩を挟んで保健管理センターの川池先生による「傾聴と対話からの自己理解」と題して講演が行われたが、時間が短く内容も心理学を中心としたものであり、理解を深めることは難しいと感じたが、学生との対話を考えると、これらの知識は今後ますます重要になるはずである。最後に、「学生生活におけるトラブルの現状と対策」についての現状説明があり、飲酒問題、不審者、カルト、学内での盗難、交通事故、ネット利用に関する諸問題、学生の懲戒など具体的な数字を上げながら問題点が示された。

水産学部・ 水産学研究科



よりよい教育環境を創るために

学生の、学生と教職員による、学生のための
ファカルティ・デベロップメントの取り組み



2012

鹿児島大学水産学部 FD 委員会

1. はじめに

水産学部では、教育に対する学生満足の実現を目的として、水産学部教育システム運用マニュアルを策定し ISO9001 を取得しています。このマニュアルに基づいて、水産学部ファカルティ・デベロップメント委員会（FD 委員会）は、教職員の力量を維持し高めるための教育訓練、学生満足度を把握するための授業アンケートを実施し、その評価を行っています。FD 委員会は、ISO9001 が求める PDCA サイクルの Check（授業アンケート）を中心に Action（教育訓練の実施）にも関わり、授業改善、教育改善において重要な役割を担っています。

本年度、FD 委員会が策定した年間教育訓練計画は以下のとおりです。

- 第 1 回 平成 24 年度前期授業公開・授業参観
- 第 2 回 水産学部 FD 講習会「発達障害を有する学生に対する理解と対応」
- 第 3 回 水産学部 FD ワークショップ「～水産学部の教育のあり方をみんなで議論しよう～」
- 第 4 回 平成 24 年度後期授業公開・授業参観
- 第 5 回 平成 24 年度教育・学生支援担当教職員講習会

また、今年度は、授業アンケートの質問項目、書式を改訂するとともに、平成 23 年度の卒業時アンケートの分析、大学院（水産学研究科）1 年生対象のカリキュラムアンケートを実施しました。以下に、それぞれの概要とその成果を報告します。

2. 授業アンケートと授業改善

FD 委員会は、受講生に対し、各学期末に授業アンケートを行っています。平成 23 年度後期からそれまで行われていたアンケート項目を一新し、学生の抱く満足度を計ることを中心に据えて質問して、各科目の評価を行いました。ここでは、平成 23 年度後期と平成 24 年度前期の授業アンケートについてまとめます。

新しいアンケートでは、受講生の満足度に応じ、満足した点あるいは満足できなかった点について具体的な記述を求める様式としました（表 2.1）。各質問項目における科目の平均値を図 2.1～図 2.2 に示します。科目種（講義・演習、実験・実習、乗船実習）別の満足度では、いずれの科目種でも満足したと答えた割合は平均で 80% を超えており、ほとんどの受講生が学部で実施している科目に満足していることが分

表 2.1 水産学部授業アンケートの質問項目

Q1: 当該科目を履修した動機	
(答) この授業に興味を持ったので	回答1
この授業に学習意欲がかき立てられたから	回答2
履修しやすい曜日や時間帯だったから	回答3
必修科目だから	回答4
単位取得の為	回答5
Q2: 授業内容に満足した はいorいいえ	
はいの場合 → Q3へ	
いいえの場合 → Q4-1、Q4-2へ	
Q3: 満足した点	
(答) この授業は興味や関心を抱かせる内容だった	回答1
この授業によって学習意欲がかき立てられた	回答2
授業の内容が理解できた	回答3
教員の説明が分かりやすかった	回答4
学習について教員からのアドバイスやサポートがあった	回答5
その他	回答6
Q4-1: この科目の学習への取り組み態度	
(答) 強く思う、そう思う、あまりそう思わない、そう思わない	
Q4-2: 満足できなかった点	
(答) 授業の内容がよく理解できなかった	回答1
授業の内容に興味や関心がわかかなかった	回答2
教員の説明が分かりにくかった	回答3
学習について教員からのアドバイスやサポートがなかった	回答4
その他	回答5

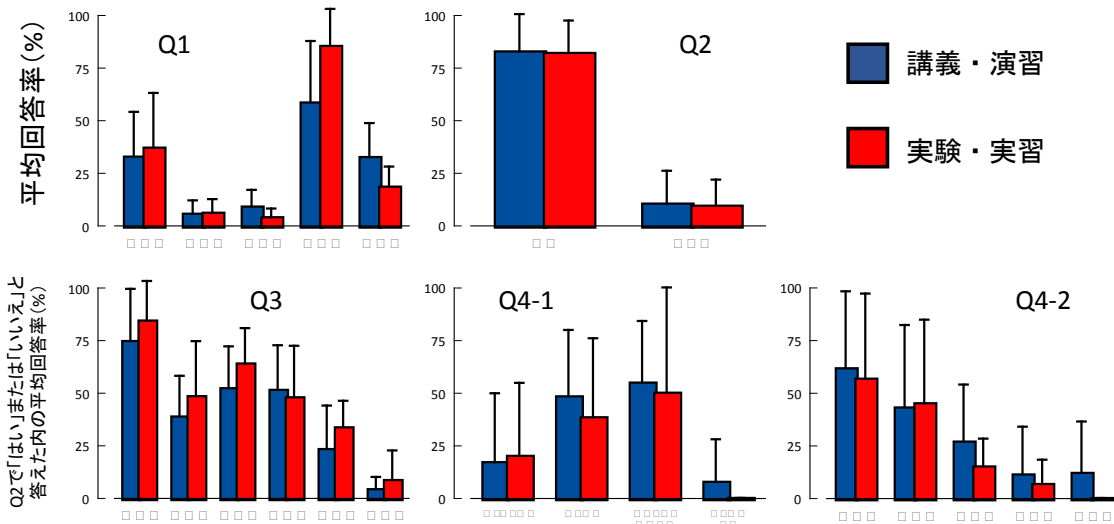


図2.1 平成23年度後期開講科目の授業アンケート集計結果

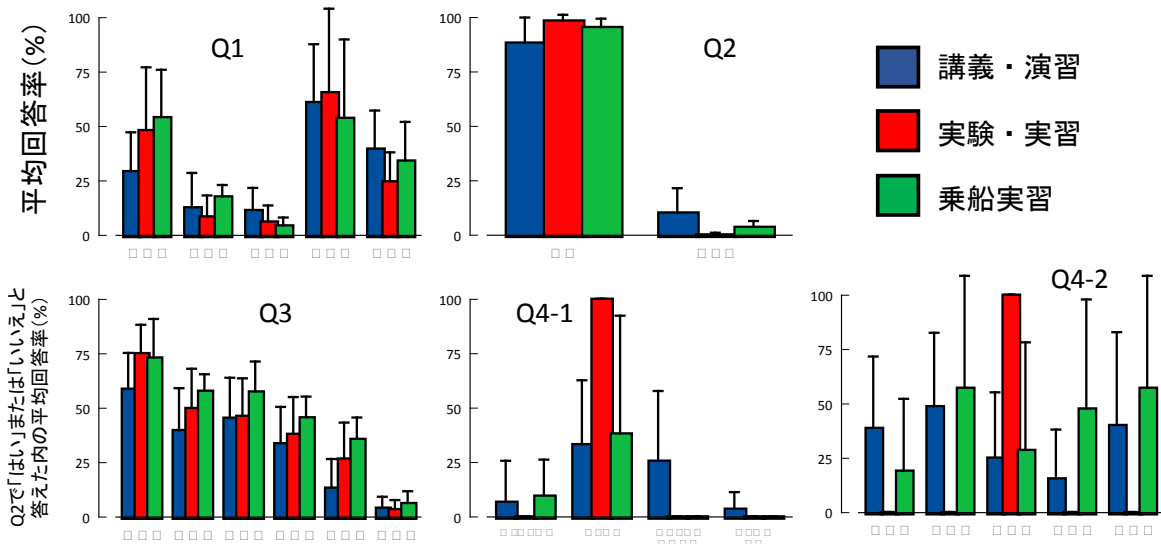


図2.2 平成24年度前期開講科目の授業アンケート集計結果

かります。講義・演習科目では、受講の動機を尋ねる質問では、平成23年後半でも平成24年前半でも「必修科目だから」、「単位修得のため」と答える割合が多く、「この授業に興味を持ったので」と積極的な動機を持つ受講生は前述の回答より少ないか「単位修得のため」と同程度の傾向でした。一方で、満足した点でも「この授業は興味や関心を抱かせる内容だった」と答えた割合が一番多くなる傾向にあり、動機が積極的でない割には、各科目で受講生の興味や関心を喚起させることに成功していたことが窺えます。また、「授業の内容が理解できた」あるいは「教員の説明がわかりやすかった」と答えた受講生が比較的多かったことから、教員の指導方法の改善と、その効果が現れていたことが示唆されています。

講義・演習科目で満足していないと答えた受講生の中で、講義への取り組みが積極的であったかどうかについて「そう思う」「あまりそう思わない」が全体の50%以上を占めており、中程度の積極さで授業に取り組んでいたことが分かります。また、満足できなかった点も「授業の内容がよく理解できなかった」、「授業の内容に興味や関心がわかenかった」とする意見が多く見られました。こ

これは、履修した動機で「必修科目だから」「単位取得のため」とする意見が多く、これを反映したものと考えられ、科目に満足できなかった受講生は、履修の動機の時点で科目に興味があるわけではなく、そのまま興味や関心を持っていないまま過ごしてしまったものと考えられます。しかし、多くの学生は履修登録の時点では興味や関心を持っていなかったのにも関わらず、科目履修を続けるうちに興味や関心が湧き、科目の内容に満足したものと考えられます。また、この興味や関心が湧いてきた要因としては、授業の内容を理解でき、かつ教員の説明が分かりやすかったことに起因するものと考えられました。同様の傾向は実験・実習および乗船実習科目にも見られました。

一方で、満足であるとした点で「学習について教員からのアドバイスやサポートがあった」と答えた受講生の割合が、いずれの科目種でも低く、講義・演習科目と実験・実習科目の満足できなかった点で「学習について教員からのアドバイスやサポートがなかった」と答えた割合が少なかったものの、アドバイスおよびサポートの印象が薄いと受け取ることも出来ます。乗船実習で「学習について教員からのアドバイスやサポートがなかった」と答えた割合が比較的多かったことから、各科目でさらに積極的に学生へのアドバイスやサポートに取り組む必要があると思われま

す。なお、平成24年度前期には一部の科目を除いて Moodle を利用してアンケートを実施しました。なお、授業アンケートの Moodle での実施については、漁業工学分野・日高正康先生にご尽力いただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

3. 授業公開・参観と授業改善

FD 委員会では、教育従事者の教育訓練の一環として授業公開・授業参観を行っています。各学期の初めに授業公開への

表3.2 平成24年度授業公開・授業参観のまとめ

	授業公開科目数	授業参観後アンケート 提出科目数	参観者数
平成24年度前期	24	5	5
平成24年度後期	10	4	4

協力を依頼し、公開可能との回答をいただいた科目について授業公開をします。水産学部に限らず、全学の教職員や当該授業を受講したことのある学生の参観も可としています。授業を参観した教員には授業参観後アンケート(表3.1)を提出いただき、授業改善の基礎資料としています。本年度は、前期で24科目、後期で10科目の授業公開を行い、それぞれ5名、4名の参加を得ました。また、後期には、平成23年度水産学部FDワークショップに参加した学部4年生の意見に基づいて、3科目を授業参観推奨科目に指定し、参観者を募りました。なお本年度は、より多くの授業への参加を促進することを目的として、授業参観参加者は赴任後3年以内の教員中心として実施しました。

表3.1 授業参観後アンケートの記入項目

本授業を選択した理由
本授業の長所 授業担当者からの意見を記入。 学生から良い点として寄せられた意見、特に留意している点、工夫している点など
本授業の改善に参考となる意見など 参観者からの意見を記入。
本授業に対する感想など 参観者の感想、参観者からのその他の感想を自由に記述。

授業参観後アンケートの記載内容を以下にまとめます(表3.3)。本年度の特徴として、受講生の理解度の向上と受講生に興味を持たせることを目的とした取り組みが挙げられます。たとえば、ミニツペーパーに書かれた疑問に対して丁寧に授業時間中に答えたり、パワーポイントを使って要

点を抽出する、あるいは注意を引くような工夫をしたりするなど、各教員が苦労を重ねている様子がうかがえます。アンケートの回答からは、個別の工夫だけでなく、受講生にとって分かり易く、かつ考えながら講義を受けられるような方向に、各教員の意識が向いていることが示唆されていました。

一方で、授業参観者数は、授業公開・授業参観報告書が提出された公開授業 1 科目当たり平均 0.3 名と昨年度 (1.0 名) より少なくなり、授業参観者がなかった公開授業は 72.7%と昨年度より増える事態となりました。今後、授業公開・授業参観が形骸化することを防ぐ為にも、授業公開・授業参観の実施方法を根本から変えるべく議論する必要があると思われます。たとえば 2~3 科目の授業に対して日時を指定し、全ての教員が指定された日時に全員参観するという形で行うのも効果的ではないかと考えます。

表3.3 平成24年度授業参観後アンケートから抜粋した記入例

当該授業を参観しようと思った動機 「満足度の高い」科目に選ばれている 授業のやり方等を担当している授業で活かしたい 取り扱う内容が担当授業と多くの点でリンクする
参加した授業の長所-授業参観者からの意見 授業で使用するスライドがシンプルで分かりやすい構成である。 学生が抱いた疑問等をミニッツテストに書いてもらい、丁寧に答えている。 配布プリントに空欄を設けて、重要事項を書き込めるように配慮されている。 理論と最新の知見とで、学生の注意をひきつけていた。 授業冒頭で今時限の講義内容と学習目的および理解のポイントを明示している。 毎回の学生アンケートに書かれている改善点を即授業に取り入れる姿勢がみられる。
本授業の改善に参考となる意見など-参観者からの意見 もう少し板書を多くしても良いのではないか。 問題の解答は、出席者から指名した方が良い。 後から指名すると指摘されれば、もう少し前方へ移動するかもしれない。 グループ討論会は、受講生のグループ活動に対する得手不得手が影響するのではないか。
本授業に対する感想など 他分野の授業参観は初めてだったので、興味深かった。 41号教室はパソコン備え付けなので、様々な授業に活用できると感じた。 本授業で得られた知識は私自身の研究を今後遂行、深化させていくうえで非常に有益であると感じた。 他大学に比べ本学部では特に、学部全体として授業の質を高めるために様々な試みがなされており、非常に素晴らしいと感じる。 担当教員の体験に基づく具体例の紹介は、参観者にとっても興味深い内容であり、楽しく参観させていただいた。

4. FD講習会「発達障害を有する学生に対する理解と対応」

教育従事者教育訓練の一環として、平成 24 年 10 月 31 日に、FD 講習会「発達障害を有する学生に対する理解と対応」を開催しました。近年発達障害を有し、他者とのコミュニケーションに問題がある学生の入学が増加傾向にあります。こうした学生が講義や実験を受講する際には、様々な問題が生じることが予想されますが、現段階では教職員の発達障害に対する知識も少ない現状です。こうした学生への対策を講じるためにも、教職員は発達障害を有する学生に対して十分に理解し、とるべき対応を学んでおく必要があります。本講習会の目的は、発達障害の種類とそれぞれの特徴を知ると共に、発達障害を有する学生への対応方法および対応する際の注意点を知ingことを目的としました。本講演会では本学保健管理センター・センター長の伊地知信二先生にご講演をいただきました。

伊地知信二先生のご講演内容を以下にまとめます。

「発達障害」とは特別な疾患であるわけではなく、「発達障害者」が特別な存在であるということではありません。世間一般のマジョリティーとマイノリティーが逆転すれば、健常者の方が「障害がある」と思われるようになる、「発達障害」とはそのような存在なのです。そのような「発達障害」に対する保健管理センターの支援は年々増加しており、個別支援を含めた支援体制も支援数の

増加に伴い充実させています。しかし、「発達障害」そのものは誤解を受けやすく、「特別な疾患である」と思われがちです。これは多様な特徴があり、複合的に現れる為にそのような誤解を受けるのだと考えられます。また「発達障害者」の物事に対する捉え方も独特で、いわゆる「健常者」とは違った物事の観察の仕方あるいは捉え方をします。「発達障害者」に対しては他と特別な扱いをするのではなく、「健常者」と同様な対応をする中で、その特徴を把握しておくことが重要であり、「発達障害」であるが故に何が理解できて、何が理解できないのかを、教える側が把握しておく必要があります。しかし、そういうことさえ注意しておけば、スムーズにコミュニケーションを図ることが出来るようになります。

講演後の質疑応答では、以下のような議論がありました。「発達障害」と思われる学生が増えていく中で、どこまで特別に、どこまで突っ込んで関わって良いのか？伊地知先生の返答は、やはり特別扱いをせず、ただ画一的な対処法はないので、その学生と正面から向き合っ、個別で対応するしかない、とのことでした。

本学部の教員だけでなく職員にも、「発達障害」について、その特徴や大学の対応について広く認識していただく機会が得られました。今後「発達障害」を持つ学生が増え、自らがその対応に迫られることが予想されますが、本講演会が、こうしたことが身近にあるということが認識できる契機となったのではないかと考えます。

5. FDワークショップ「～水産学部の教育のあり方をみんなで議論しようⅡ～」

趣旨

ISO9001 教育マネジメントシステムの運用により我々の行う教育活動の管理・運営が教職員を主体として行われているところですが、より良い教育の提供を実現することを目的に、FD委員会では平成20年度よりFDワークショップを継続実施し学生視点の意見集約を行ってきています。平成23年度には「水産学部の教育のあり方をみんなで議論しよう」と題するFDワークショップを行い、入学から卒業・就職に及ぶ各過程での、学部、教育、施設、教員指導等に対する学生の印象をタスクフォースの進行に従って記述的に聴取し、タスクフォースを構成する各分野教員等が取りまとめと学部構成メンバーへの周知を行いました。各分野等からの選出学生を対象としたこの取り組みでは、学生視点でのマイナスイメージや要改善点の抽出がなされるとともに、当初の想定とは異なるものの水産学部に来て良かった点等の通常の授業アンケートではなかなか聞き出せない意見の抽出も行え、またその結果は教職員や分野の垣根を越えて共通理解として周知することができてきております。

本年度は昨年度実施したFDワークショップを踏襲し、「～水産学部の教育のあり方をみんなで議論しようⅡ～」を企画し、学部に対する学生の意見抽出と学部構成員への情報周知を行いました。

実施方法

ワークショップは二部構成とし、第一部は平成24年11月28日（水）に水産学部各分野（漁業工

学、水産生物・海洋学、食品・資源利用学、養殖学、水産経済学) およびセンターから各5名、計30名の学生に集まってもらい、各グループの担当教員1名がタスクフォースとして最小限に介入し、6つの大テーマに沿って各グループで意見交換しつつ質問に回答してもらいました。テーマは後述の通りで、入学前から4年生に至るまでの学部や学部教育に対する印象の変化を聞き取れるように設定しました。意見聴取は Moodle を利用して行ったため学生の回答状況をリアルタイムでモニタでき、タスクフォースは学生回答のポジティブ/ネガティブな回答数が概ね同等になるようにし、両側面の意見を聴取できるように努めました。

ワークショップ第二部は平成24年12月5日(水)に実施し、第一部のタスクフォースを担った教員が各グループの意見を集約し、その結果を学部構成員に報告し意見交換を行いました。ワークショップ第一部で得られた学生意見分析結果の要所を後述します。

表 5.1 学生への聞き取り項目

分類	質問項目	質問事項
テーマ1	水産学部に対する印象	入学前・入学後・研究室配属後の印象を教えてください
テーマ2	学部で学んでよかったこと・学べなかったこと	その具体的内容を教えてください
テーマ3	実験・実習・演習で学んでよかったこと・学べなかったこと	その具体的内容を教えてください
テーマ4	卒業研究で学んでよかったこと・学べなかったこと	その具体的内容を教えてください
テーマ5	就職/進学、進路決定に役立ったこと	その具体的内容を教えてください

学生回答の概略

表 5.2 水産学部に対する印象についての回答抜粋

入学前	入学後 (1-3 年次)	研究室配属後
水族館に就職できると思っていた	無駄な授業はなかった	先輩からの引継ぎがほしかった
学生全員が魚を獲っているイメージ	水産の重要性を認識できた	分野ごとの差が大きい
水産系の就職ばかりと思っていた	広く学べる点が良い	後輩との交流が少ない
魚食普及に関する勉強をしようと思っていた	2・3年次の授業が少ない	就職活動のアドバイスがもらえた
学部パンフを見て面白そうと思った	分野配属後に将来を具体的に考えられるようになった	分かりやすい発表のスキルが身についた
あまり宣伝していない印象をもった	他学部よりも楽しそうと思った	分野間の交流が少ない
	フィールド実習が多い/少ない	主体性をもって行動できるようになった
	キャンパス間の移動が困難だった	
	3期以前に分野推奨科目を積極的に勧めてほしかった	
	授業と就職活動のつながりが今一つ理解できなかった	

表 5.3 学部で学んでよかったこと・学べなかったことについての回答抜粋

学んで良かったこと	学べなかったこと	学生提案改善策
乗船実習 座学と実習が連携していて就職活動にも役立った 専門的な知識が身についた 水産分野を広く学べた 公務員試験に役に立った 鹿児島の水産事情をよく理解できた 水族館に関する知識を得られた 小型船舶免許など資格を得られた プログラミングできるようになった	各開講期継続して英語を学習したい 生物飼育について実務的に学びたい 環境系の科目と実習をさらに学びたかった 水産関係の資格取得機会が欲しい 国内の様々な地域での水産事情についても学びたかった 水産業についてももう少し学びたかった	実験・実習を増やす 実習・調査などで学生に実施させる作業を増やす 効果的な時間割の組み方を検討してほしい 現在2・3年次で学習する科目の一部を1年次に開講する

表 5.4 実験・実習・演習で学んでよかったこと・学べなかったことへの回答抜粋

学んでよかったこと	学べなかったこと/学生提案改善策
安全実習の全てがよい経験になった 乗船実習を通じて協調性が身についた 他学部では経験できない乗船体験ができた 実習時に他大学との交流があることが良かった	実習の内容・日程の説明を綿密に行う 実験時の先生の指示を鮮明にする 声を大きく出して学生への支持を明確にする 受講したい実験/実習が時間割で重複している場合がある 乗船時の谷山港への移動手段を確保してほしい

表 5.5 卒業研究で学んでよかったこと・学べなかったことへの回答抜粋

学んでよかったこと	学べなかったこと/学生提案改善策
卒業研究に必要な知識をゼミで得られた 産業現場を肌で感じる事ができた 実験が楽しかった 自分の意思に沿った研究を行えた 理解しながら研究を振興できた 教員また大学院生のサポートが良かった 研究室間の交流があつて良かった 論文検索できるようになった 生活習慣が改善された	指示が不十分な場合があった 細かすぎる説明によって混乱が生じる場合があった 研究室配属を少し（半年）早めてほしい 研究室配属決定は成績順にすればよい 専門用語を教えてほしい ゼミを行ってほしい 実験環境を整備してほしい 文献検索方法を指導してほしい もう少し生徒に目を向けてほしい

表 5.6 就職/進学、進路決定に役立ったことの回答抜粋

他県で実施される説明会参加のための集団移動手段確保（バスの手配）が助かった
担当教員の指導
ISOWEBを利用した求人のお知らせ情報が入手しやすく良かった
学部内で実施される企業説明会が役に立った
企業説明会が水産学部で多く開かれるのは助かった
先輩の就活経験を聞いて役に立った
1年次の講義で就職活動の話をする先生がおりモチベーションを高められた
OBと話す機会があつてよかった
<改善希望意見>
就職情報の充実
公務員試験の情報の充実
他大学大学院情報の充実
エントリーシートの書き方の指導を低学年時に行ってほしい
就職活動のイメージを早いうちに学生に植え付けてほしい
教員により就活サポートの差をなくす

FD委員会による考察

各質問項目に対する学生の回答は上記のように多岐にわたりました。それぞれの項目ごとに学生意見を考察します。

学生の水産学部に対する印象は、入学前と入学後4年生に至るまでの過程で大きく変化するようです。入学前には、水産という言葉のイメージから漁業や船を強く想像し、水産学部はその専門を学ぶところという印象を持つものが多いようです。また、水族館への就職を志望する学生にとっても水産学部が希望進学先と考えられる傾向が見られました。学生のコメントにもありますが、学部案内やHPの充実が受験生への大きなアピールになるので、今後とも継続的に情報更新していくことが重要と考えられます。

学部で学んでよかったこと、実験・実習・演習で学んでよかったことについては、専門科目座学を通じて広い知識を得られたとの印象を学生が持っていることが窺われました。また、学生意見には〇〇ができるようになった、〇〇に役に立った、という回答が多く、技術を身につける、資格を得る、就職活動に役立つ、という視点が学生の満足度判断に強く作用していると考えられます。

研究室配属がなされ、かつ卒業研究が開始されると、研究室、教員、先輩、友人との関係もさらに深まり、学生生活も更に充実したものになるようです。分野ごとに経験内容は異なるようですが、研究を通じて科学や産業に接しつつ専門的知識を高めていく過程で、教員の実施するゼミ、大学院の先輩の助言が大きな役割を担っているようです。

学生生活の中で最大のイベントでもある就職活動については、近年の学部の努力も学生に評価さ

れていると言えます。学部内で実施している企業説明会、内定者による後輩への助言など、それぞれの活動が学生の抱える悩みや不安に対応しており、学生の就職活動の促進・援助となっています。昨年度にも同様の回答が得られていますが、多くの学生が水産系企業、水産業界を取り巻く経済等の事情を学習できたことが就職に大きく役立ったと意見しています。近年の学部学生の就職状況を見るとその多くが食品系商社に就職しており、その傾向に対応した学部教育の工夫も検討する必要があります。

今回のFDワークショップは昨年度と同様の内容で実施し、学生意見も類似した回答が得られた結果となりました。本紙面に記載した学生意見はここ近年の学生の学部教育に対する印象を表すものと考えられます。今後の学部あるいは個人単位での教育の検討にご利用いただければ幸いです。

6. 大学院授業アンケートの質問項目、書式の検討

水産学部では、学部で開講される全科目について授業アンケートを行っています。一方で、昨年度は水産学研究科（修士課程）の大学院生にはアンケートは行っておらず、大学院におけるFD活動は停滞した状態です。しかし、各科目の受講生数が少ないので、授業アンケートにどれほどの効果、信頼性があるか疑問が残ります。そこで、今年度はカリキュラムに対する満足度を調査する目的としたアンケートを企画・作成し、試行として大学院1年生を対象としてアンケートを実施しました。

アンケートでは、以下の内容に基づき書式の作成を行いました。

- ・ 受講生の受講に対する背景を調査する。
- ・ 受講生の授業に対する取り組みを調査する。
- ・ 様々な観点から満足度を評価できるようにする。
- ・ 英語科目の評価を行う。

大学院カリキュラムアンケートは、本年度後期から試行し、その効果を検証する予定です。

7. 卒業時アンケートの分析

水産学部では、例年卒業生対象にそれまでに受けた教育のPDM中で掲げられている学部教育目標および各分野のカリキュラム目標に対する達成度を調査することを目的として、卒業式直前にアンケートを実施しています。平成23年度には卒業した103名が対象となりました。

表7.1 学部教育目標の満足度・有効性に関する質問項目

<p>設問：次の学部教育目標について、貴方の進路に対する満足度・有効性の点から評価してください</p> <p>①地域・国際両面で、資源環境に強い、水産技術者を養成できるようにする ②専門分野に必要な実践的な知識・技術を習得させる ③基礎学力を強化し生涯学べるようにする ④英語能力を強化させる ⑤情報処理能力を強化させる ⑥報告書作成、プレゼンテーション能力に必要なレベルを身につけさせる ⑦現場対応能力を習得させる</p>
<p>解答</p> <p>目的を達成している 必要と思うが不足している まったく不要である</p>

表7.2 各分野の教育目標の満足度・有効性に関する質問項目

<p>設問： あなたの卒業後の進路に対して、所属する分野に関する以下の知識や能力等は有効だった(満足できた)か、該当するものを選んでください</p>	
<p>解答</p> <p>有効だった(満足した) ある程度有効だった(ある程度満足した) あまり有効でなかった(あまり満足しなかった) 全く有効でなかった(全く満足しなかった)</p>	
<p><水産生物・海洋学分野></p> <p>①水圏生態系の生物・化学・物理学的な現況解析と維持・変動機構についての知識 ②生物学実験と環境科学実験の基礎知識 ③魚類生理についての知識 ④水生生物相互の関係についての知識 ⑤水圏資源生物の維持管理についての知識* ⑥流体の物理過程に基づく水圏生態系の維持・管理メカニズムの理解 ⑦水圏環境解析(環境評価, 環境予測)についての基礎知識 ⑧化学についての基礎知識 ⑨資源管理, 環境解析のための統計, 数学の基礎知識及びデータ解析の素養 ⑩資源管理, 環境解析のための数値計算技術(プログラミング技術) ⑪電子媒体を使った報告書作成及びプレゼンテーション ⑫現場での実務的な業務に対応できる能力 ⑬フィールドでの調査・観察・サンプリングを行う能力</p>	<p><漁業工学分野></p> <p>①水産食品とその流通に関する知識 ②水産業に関する制度に関する知識 ③海図(地理学)に関する知識 ④資源量測定に必要な知識 ⑤資源利用に関する知識(量的決定, 採捕方法, 社会科学的要因) ⑥漁具構造, 漁獲メカニズムに関する知識 ⑦漁具に対する魚類の感覚・行動に関する知識 ⑧漁労作業とその安全に関する知識 ⑨漁具資材に関する知識 ⑩漁具設計に必要な知識 ⑪漁業計測技術に関する知識 ⑫漁船構造, 性能, 安全性に関する知識 ⑬漁業機械の構造, 動作メカニズム, 安全性に関する知識 ⑭航海・操船の知識と基礎的な技術 ⑮航海計器に関する知識 ⑯海事制度や関連法令の知識 ⑰国際的な海事事情の知識 ⑱数学・物理学・統計学の十分な知識 ⑲漁業, 船舶・海事分野の技術を支える基礎教育としての, 材料力学, 流体力学, 自動制御工学, 電子工学の知識 ⑳現場での業務能力 ・船上, 海上作業の安全確保の知識と技術 ・現場の現状の知識 ・小型船舶免許 ・潜水士資格</p>
<p><養殖学分野></p> <p>①魚類生理についての知識 ②微生物学についての知識 ③水圏環境の物理化学的性質についての知識 ④生物学実験と化学実験の基礎知識 ⑤水生生物の増養殖についての知識 ⑥食品としての水産物についての知識 ⑦化学・統計学についての基礎知識* ⑧電子媒体を使ったプレゼンテーション ⑨現場での業務に対応できる能力 ⑩フィールドでの観察・サンプリングを行う能力</p>	<p><教員養成課程></p> <p>①水産学全般にわたる知識と実習能力 ②指導計画の立案と指導案の作成法 ③水産教育法 ④職業指導についての知識 ⑤教職の意義, 教育の基本理論, 教育課程, 生徒指導, 教育相談についての知識 ⑥教育の実践 ⑦水産資源の解析管理の知識 ⑧漁具構造, 漁獲メカニズムの知識 ⑨漁業計測技術に関する知識 ⑩漁船構造, 性能, 安全性に関する知識 ⑪水圏生態系の生物・化学・物理学的な現状解析と維持・変動機構についての知識 ⑫魚類生理についての知識 ⑬微生物学についての知識 ⑭水生生物の養殖についての知識 ⑮水産物の原料特性と加工適性についての知識 ⑯科学的知見に基づく水産加工法の習得 ⑰水産業の経済的・産業政策的な理解 ⑱水産物の流通や消費に関する基本的知識 ⑲食品産業の特性や経営問題についての理解 ⑳生徒に授業内容を理解させるためのプレゼンテーション法の開発及び実施についての知識 ・水産教員として船上教育を行う際の船上での安全確保, 基礎的な機器, 道具, 用具等が取り扱え, 基礎的なフィールド調査法の習得 ・問題の発見, 分析, 原因の解明及び解決法を開発及び実践できる知識 ・水産科教員の資格 ・理科4教科に関する一般的知識(実験も含む)(中1, 高1免許) ・小型船舶免許 ・潜水士資格 ・教員採用試験に合格するための知識能力</p>
<p><食品・資源利用学分野></p> <p>①水産物の原料特性と加工適性についての知識 ②科学的知見に基づく水産加工法 ③水産食品の開発・保持・品質管理技術 ④食品衛生管理者としての能力 ⑤バイオマス資源を有効利用するための化学・生物学的知識 ⑥生化学的実験技術 ⑦微生物学的実験技術 ⑧バイオマス資源の生産環境を保持する技術 ⑨科学全般および専門の化学・生物系科目を理解するための基礎的な知識 ⑩実験・実習を行う上で必要な統計学やコンピュータ利用法についての知識 ⑪乗船実習を通しての, 漁獲物の鮮度保持と加工適性, 海洋環境の基礎的な解析技術</p>	<p><水産経済学分野></p> <p>①水産業の経済的・産業政策的な理解 ②日本や世界の食料政策や食糧問題についての理解 ③漁業生産の仕組みやその制度, 経済構造の理解 ④有用な水産資源に関する知識 ⑤水産物の流通や消費に関する基本的知識 ⑥食品産業の特性や経営問題についての知識 ⑦水産業の各業態における経営的側面の理解 ⑧資源の管理や資源経済についての知識 ⑨海洋政策及び沿岸域管理に関わる知識 ⑩水産業及び漁家経営に関する十分な知識 ⑪海洋の多面的利用や地域経済問題に関する知識 ⑫水産物流通及び生鮮食料品流通に関する専門的知識 ⑬水産物に関わる十分な商品知識 ⑭水産物消費に関する十分な知識 ⑮加工食品についての原料や製法に関する知識 ⑯統計学の基礎 ⑰水産業, 流通業等の産業現場における, 経済調査の設計・実施 ⑱水産業における全般的知識と理解力 ⑲水産業, 流通業における現場体験 ⑳産業現場における, 情報収集～解決策の提示</p>

これにより、学生が卒業するまでに受けた教育の体系を評価させ、これを分析することで将来の学部教育の戦略的な展開の材料にしようとしています。

アンケートは、学部教育目標、各分野のカリキュラム目標に基づいた質問を設け、さらに進路の決定に際して、情報の収集あるいは相談をどのようにしたのかを問う項目も設けました。進路決定に関する設問については、進路（就職、進学）で異なる質問を設けました。

結果

アンケートの結果は図 7.1 ~7.2 にまとめました。また進路決定に有効であった情報収集方法などについては表 7.3 ~7.4 にまとめました。

アンケートの全体的な評価としては、データ解析やプレゼンテーションなど実務的な項目・要素については高い評価となりました。つまり、近々で実

施した卒業研究の発表あるいは論文の作成で学んだことが、そのまま評価として現れたと考えられます。また、フィールドでの活動などといった学部あるいは各分野で特色の有る項目についても、評価が高く、分野毎で専門的に学んだことについて満足していると考えられます。一方、英語や計算、プログラミングに関係する項目については評価が低く、一般的に言われている数学やそれに伴う解析については苦手意識を持ったまま卒業を迎えた為であると推察されます。また、専門教育あるいは進路の決定で重要な資格に関連する項目について低い評価でした。これは、その資格自体が専門教育あるいは就職にそのまま結びついていないためであるとも考えられますが、個人データと

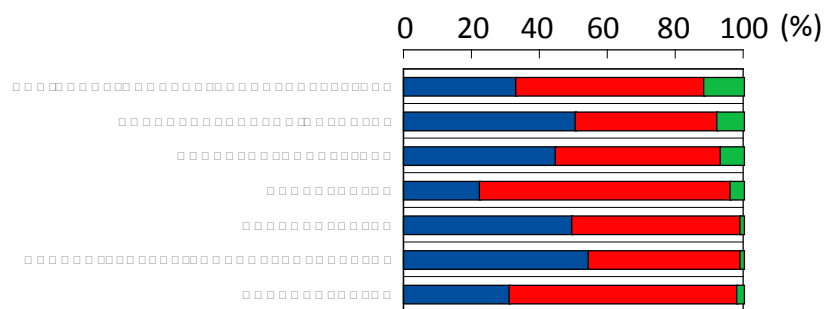


図7.1 学部教育目標に対する満足度・有効性

- : 目的を達成している、
- : 必要と思うが不足している、
- : まったく不要である

表7.3 就職希望者にとって進路決定に有効であったと感じた情報収集方法または進路相談窓口

	全体	業種別						就職未決定者
		営業	研究開発	製造	総務・管理	販売	その他	
就職ガイダンス	28	4	4	2	1	3	10	4
就職・アメニティ室	27	7	3	1	4	2	6	4
インターンシップ	9	1	1	1	1	0	4	1
学部ホームページ	5	1	0	0	0	1	3	0
合同会社説明会	39	11	2	4	3	5	10	4
学生係窓口相談	14	2	0	1	2	3	3	3

表7.4 進学希望者が進路決定に有効であると感じた情報収集方法および進路相談窓口

	全体	大学院別	
		鹿児島大学	他大学
	教員のアドバイス	17	7
大学院等の募集要項	15	6	7
家族・先輩のアドバイス	21	12	8
学部ホームページ	5	1	3

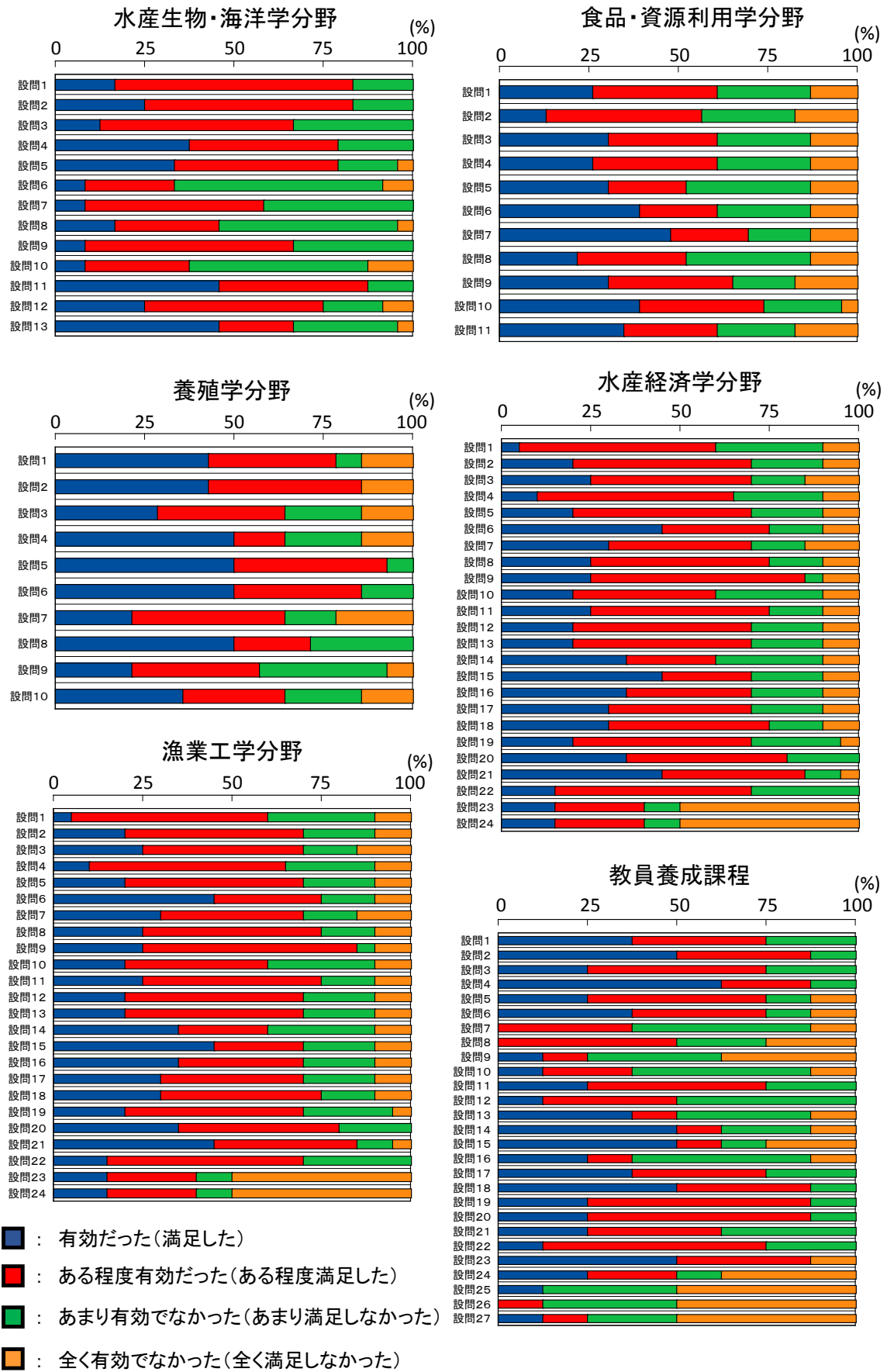


図7.2 各分野の教育目標に対する満足度・有効性

のすり合わせなどを行わなければ、この低評価に関する原因を明らかに出来ず、今後の課題として残ります。

就職した卒業生の進路決定については、全体としては就職ガイダンス、就職・アメニティー室および合同会社説明会が有効であったと感じており、学生係相談窓口がそれらに続いていました。営業職に内定していた卒業生の多くは合同会社説明会が有効であると回答していました。インターシップと学部ホームページで有効であると回答した卒業生は少ない傾向でした。進学する卒業生の進路決定については、全体として学部ホームページが有効であると感じた進学希望者は少ない傾向でした。また、鹿児島大学の大学院に進学決定した卒業生の多くは、家族・先輩のアドバイスが有効であったと感じていました。

今後に向けた改善方策

アンケート自体は卒業直前に行っているものでもあり、卒業研究の発表あるいは卒業論文の完成直後に実施されていることから、卒業生自身がその時の状況を反映した回答を行っている為、入学から卒業まで期間を網羅した結果を反映している可能性は低いと言えます。また、卒業時のものである為に、卒業した上で何が必要であるのかを批判する材料が本人達に乏しく、今回の結果をカリキュラムポリシー、ディプロマポリシーに反映させるのも難しいように思えます。ただ、分野毎に傾向が違うこと考えると、学部教育の効果を学部学生に対して等しく与えていないものとも考えられます。また、選択した進路の間でも回答に違いが見られ、進路の選択によって、学生のモチベーションが異なっていることも推察できます。

今回の回答がどのような原因を反映したものであるのかを解析する為には、設問ではなく回答の選択肢の内容を検討してみる必要があり、個人情報等もっと細かい情報を、アンケート結果と照らし合わせる必要があると考えられます。

8. 終わりに

水産学部 FD 委員会では、教育システム運用マニュアルに規定された教職員の力量の維持、向上を実現するために、授業公開・授業参観を企画し、FD 講習会、FD ワークショップを開催しています。また、学生満足度の調査を目的として授業アンケートを行い、その結果を教職員にフィードバックすることにより、授業改善に役立てていただいています。しかしながら、近年、FD の意義や重要性が十分に認識され、教員が自ら授業改善、教育改善を進めているなかで、FD 委員会の提供する FD 活動が形骸化しつつある印象も否めません。本年度は、その解消を目指し、改訂された授業アンケートの実施や水産学研究科（修士課程）のカリキュラムアンケートの試行に取り組みました。今後の課題として、これらの成果を検証するのに加え、授業改善、カリキュラム改善に資するような授業公開・授業参観の実施方法の検討、水産学研究科（修士課程）の FD の充実が挙げられると思います。その実現のために、他の教育関連の委員会との連携も図りながら、教員が積極的に関与し議論できるような仕組みづくりをめざしたいと考えています。

9. 資料編

水産学部 授業アンケート

このアンケートは受講生の皆様とともに授業改善に取り組むための基礎資料として活用します。回答内容が成績に影響することはありません。あなたの考えを率直に記入してください。

選択肢欄は、該当する枠内にチェックマーク（レ）を記入してください。

受講科目名： _____ 学籍番号： _____ 氏名： _____

水産生物 海洋学	養殖学	食品資源 利用学	漁業工学	水産経済学	教員養成 課程	未決定	その他
所属分野： <input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

Q1. この科目を履修した動機を選んでください。（複数選択可）

- | | | |
|--|--|--|
| <input type="checkbox"/> この授業に興味を持ったので | <input type="checkbox"/> この授業に学習意欲がかき立てられたから | <input type="checkbox"/> 履修しやすい曜日や時間帯だったから |
| <input type="checkbox"/> 必須科目だから | <input type="checkbox"/> 単位修得のため | |

Q2. この授業の内容は全体的に満足できるものでしたか。 はい いいえ

Q2で「はい」と答えた方に尋ねます。

Q2で「いいえ」と答えた方に尋ねます。

Q3. 満足した点を以下から選んでください。（複数選択可）

Q4-1. この科目の学習に積極的に取り組みましたか。

- この授業は興味や関心を抱かせる内容だった
- この授業によって学習意欲がかき立てられた
- 授業の内容が理解できた
- 教員の説明が分かりやすかった
- 学習について教員からのアドバイスやサポートがあった
- その他

- 強くそう思う
- そう思う
- あまりそう
思わない
- そう思わない

Q4-2. 満足できなかった点を以下から選んでください。（複数選択可）

- 授業の内容がよく理解できなかった
- 授業の内容に興味や関心がわかかなかった
- 教員の説明が分かりにくかった
- 学習について教員からのアドバイスやサポートがなかった
- その他

Q5. 授業の満足度についての意見を具体的に記述してください。

Q6. (担当教員設定項目1) 1 2 3 4

Q8. (担当教員設定項目3) 1 2 3 4

Q10. (担当教員設定項目5) 1 2 3 4

Q7. (担当教員設定項目2) 1 2 3 4

Q9. (担当教員設定項目4) 1 2 3 4

Q11. (担当教員設定項目6) 1 2 3 4

Q12. この授業についての意見、要望などを記述してください。

図9.1. 水産学部授業アンケートの新書式

編集：鹿児島大学水産学部 FD 委員会

委員長：佐野雅昭

副委員長：小谷知也

委員：安樂和彦、佐々木貴文、西隆一郎、山本美穂

鹿児島県鹿児島市下荒田 4-50-20

099-286-4111（代表）

共同獣医学部

第1節 平成24年度共同獣医学部FD活動の記録

1. 共同獣医学部FD活動組織（FD委員会の構成と活動状況）

委員長 松尾智英 准教授
委員 白石光也 准教授
委員 安藤貴朗 准教授
事務担当者 本 忠夫（学務課長）
 郡山 茂（教務係長）
 東屋敷貴宏（教務係員）

第1回共同獣医学部FD委員会

日時：平成24年5月1日（火）16：00～16：35
場所：22セミナー室（農・獣医共通棟2階）
出席者：松尾、白石、安藤
陪席者：事務部（郡山、東屋敷）

議 題

1. 委員会の検討事項について

報告事項

1. 全学FD委員会からの報告

第2回共同獣医学部FD委員会

日時：平成24年6月14日（木）16：10～16：55
場所：22セミナー室（農・獣医共通棟2階）
出席者：松尾、白石、安藤
陪席者：事務部（本、郡山、東屋敷）

議 題

1. 平成24年度授業評価アンケートについて
2. 委員会の検討事項について

報告事項

1. 平成24年度FD活動計画・経費要求書について
2. 全学FD委員会からの報告

第3回共同獣医学部FD委員会

日時：平成24年7月12日（木）16：10～16：50
場所：22セミナー室（農・獣医共通棟2階）
出席者：松尾、白石、安藤
陪席者：事務部（郡山、東屋敷）

議 題

1. 平成 24 年度及び平成 25 年度以降の共同獣医学部 FD 活動について

報告事項

1. 農学部における FD-WEB システムの今後の運用について
2. 全学 FD 委員会からの報告

第 4 回共同獣医学部 FD 委員会（メール会議）

議 題

1. シラバスの学生への閲覧提供について

第 5 回共同獣医学部 FD 委員会（メール会議）

議 題

1. 農学部 FD-WEB システムの利用について

2. 授業公開と授業参観の取り組み

まえがき

共同獣医学部では、農学部所属の平成 15 年後期より公開授業・授業参観の取り組みを実施している。平成 24 年度より共同獣医学部が発足し、本年度の 1 年生は共同獣医学部所属となったが、2 年生から 6 年生までは農学部所属となるため、本年度も農学部と共に授業公開科目と授業参観参加希望科目の登録に FD-WEB を活用して行われた。授業公開と授業参観のスケジュールは農学部と同様であった（農学部報告書参照）。授業担当者と授業参観者には、可能な限り、参観後に意見交換をお願いすると共に、参観者には FD-WEB を通じて、授業参観報告書を作成・提出いただいた。

また、授業公開・授業参観の取り組みにおいては、平成 23 年度の授業のうち、学生の評価が高い授業科目を教員に周知した。これらの授業科目の選抜は、受講生が 30 名以上のうち、学生による授業評価アンケートで「満足した」「どちらかと言えば満足した」という回答が 100%である科目を選び、各学科から満足度が最も高かった科目を選出した。選抜された授業は以下の表のとおりであった。本年度の獣医学科教員の授業参観参加者数は、前期 3 名、後期 11 名の参加があり、有意義な取り組みであった。

<特に学生の満足度の高かった科目>

学 科	曜日	時限	教室	科目名	担当教員名	備 考
獣医学科	月	1	301	生理学ⅡB	川崎 安亮 藤田 志歩	24年度授業参観日 担当 川崎 安亮
生物資源化学科	月	2	204	酵素化学	安部 淳一	
獣医学科	月	2	301	獣医臨床病理学	大和 修 矢吹 映	24年度授業参観日 担当 大和 修
生物環境学科	火	1	203	森林政策学Ⅰ	遠藤 日雄	
生物生産学科	火	4	105	鑑賞園芸学	坂田 祐介	
生物環境学科	木	2	103	水利システム工学	舛井 和朗	
生物生産学科	金	1	105	植物感染分子微生物学	中村 正幸	
生物生産学科	金	2	307	害虫学	津田 勝男	
生物資源化学科	金	2	204	食品微生物学	石橋 松二郎	
獣医学科	金	2	303	薬理学A	宮本 篤 白石 光也	参加日当日講義 不可(試験)
生物資源化学科	金	3	204	動物栄養・飼料化学	大塚 彰	

3. 学生による授業評価

平成24年度前期・後期の2回、学生による授業評価のアンケートを実施した。これについては、前述のとおり、2年生から5年生までは農学部としてアンケートを行っているため割愛させていただく(農学部報告書参照)。

しかしながら、共同獣医学部としては、今後1年ごとに共同獣医学部所属の学生が1学年ずつ増えていき、それに伴って学年毎の新カリキュラムへの移行を進めていく。その中で、山口大学と共通の授業評価アンケートを作成し、実施していく(様式は右のとおり)。本年度は共同獣医学部所属の1年生のみであったが、実施した授業評価アンケート結果は下記の表のとおりであった。

共通教育科目等は山口大学とのメディア授業について、授業評価アンケートを実施した。メディア授業とは、遠隔授業システムを使って、教員の映像や音声、授業の資料等をリアルタイムで送信あるいは受信して行う授業である。

専門教育科目は獣医学概論Aと獣医学概論Bの2科目を開講した。両科目とも、両大学の学生が合同で講義を受講した。獣医学概論Aは山口で開講され、鹿児島大学の学生が山口に移動し、2泊3日の日程で行われた。獣医学概論Bは鹿児島で開講され、山口大学の学生が鹿児島に移動し、2泊3日の日程で行われた。

平成24年度共同獣医学部

授業評価アンケート(講義・演習用)

授業科目番号: _____ 受講者氏名: _____

授業科目名: _____ () 遠隔授業システム 教員名: _____

※このアンケートは、授業をより良くするために行うものです。
 回答者の成績に影響することは全くありませんので、あなたの考えを率直に記入してください。
 ※この回答用紙は機械(OCR)で読み取り集計しますので、該当する番号の前の○印を塗りつぶしてください。

1 あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか?(括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です)
 ○1. 90%以上(14回以上) ○2. 80~90%(12~13回) ○3. 60~80%(9~11回) ○4. 40~60%(6~8回) ○5. 40%未満(6回未満)

2 あなたはこの授業において、時間外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか?総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算して計算してください。
 ○1. 3時間程度または以上 ○2. 2時間程度 ○3. 1時間程度 ○4. 30~50分程度 ○5. 30分未満

3 この授業内容の水準はどうでしたか?
 ○1. 高かった ○2. やや高かった ○3. 妥当だった ○4. やや低かった ○5. 低かった

4 この授業の分量はどうでしたか?
 ○1. 多かった ○2. やや多かった ○3. 妥当だった ○4. やや少なかった ○5. 少なかった

5 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思いませんか?
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない

6 板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか?
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない

7 授業中やオフスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか?
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない

8 この授業はシラバスに沿って進められましたか?
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない

9 あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか?
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない

10 あなたは、この授業の内容を理解できましたか?
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない

11 この授業は、あなたにとって満足のものでしたか?
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない

※以下は、遠隔授業システムに関する質問です。該当する場合(授業科目名の横にチェックあり)のみ回答してください。

12 教員の音声は聞き取りやすかったですか? 該当する場合
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない

13 教員やモニター画面の映像は見やすかったですか? 該当する場合
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない

14 教員の授業の進め方はスムーズでしたか? 該当する場合
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない

15 授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか? 該当する場合
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない

16 対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか? 該当する場合
 ○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない

自由記述
 この授業についての意見・要望・感想などを自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。 共同獣医学部ファカルティ・ディベロップメント委員会

〈授業評価アンケート結果〉

※数字は%。回答6には「無回答」を含む。設問12～16は遠隔授業システムに関する質問。

講義名：基礎生物学（共通教育科目等、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	35.5	29.0	16.1	12.9	0.0	6.5	設問9	16.1	22.6	41.9	12.9	3.2	3.2
設問2	6.5	6.5	22.6	16.1	45.2	3.2	設問10	22.6	32.3	32.3	6.5	6.5	0.0
設問3	6.5	35.5	45.2	3.2	9.7	0.0	設問11	6.5	19.4	35.5	29.0	9.7	0.0
設問4	16.1	29.0	48.4	6.5	0.0	0.0	設問12	41.9	32.3	12.9	9.7	3.2	0.0
設問5	9.7	22.6	38.7	12.9	16.1	0.0	設問13	35.5	38.7	9.7	9.7	6.5	0.0
設問6	3.2	35.5	41.9	16.1	3.2	0.0	設問14	22.6	32.3	35.5	6.5	3.2	0.0
設問7	6.5	19.4	51.6	19.4	3.2	0.0	設問15	12.9	35.5	35.5	9.7	6.5	0.0
設問8	19.4	29.0	29.0	6.5	16.1	0.0	設問16	3.2	16.1	45.2	19.4	16.1	0.0

講義名：基礎化学（共通教育科目等、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	77.4	6.5	3.2	0.0	0.0	12.9	設問9	6.5	35.5	41.9	6.5	6.5	3.2
設問2	32.3	29.0	25.8	9.7	3.2	0.0	設問10	9.7	41.9	19.4	19.4	9.7	0.0
設問3	45.2	35.5	16.1	0.0	3.2	0.0	設問11	6.5	32.3	38.7	12.9	9.7	0.0
設問4	51.6	25.8	22.6	0.0	0.0	0.0	設問12	29.0	48.4	16.1	3.2	3.2	0.0
設問5	9.7	29.0	35.5	16.1	9.7	0.0	設問13	29.0	45.2	16.1	3.2	6.5	0.0
設問6	9.7	45.2	22.6	9.7	12.9	0.0	設問14	16.1	38.7	32.3	0.0	12.9	0.0
設問7	9.7	41.9	38.7	0.0	9.7	0.0	設問15	22.6	38.7	32.3	3.2	3.2	0.0
設問8	16.1	45.2	35.5	3.2	0.0	0.0	設問16	6.5	32.3	38.7	12.9	9.7	0.0

講義名：情報セキュリティ・モラル（共通教育科目等、前期開講、メディア授業（山口大学から受信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	85.7	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	設問9	21.4	32.1	42.9	3.6	0.0	0.0
設問2	10.7	10.7	14.3	14.3	50.0	0.0	設問10	14.3	46.4	28.6	10.7	0.0	0.0
設問3	17.9	21.4	50.0	3.6	7.1	0.0	設問11	14.3	42.9	25.0	7.1	10.7	0.0
設問4	10.7	46.4	42.9	0.0	0.0	0.0	設問12	46.4	32.1	14.3	7.1	0.0	0.0
設問5	10.7	39.3	17.9	25.0	3.6	3.6	設問13	50.0	28.6	21.4	0.0	0.0	0.0
設問6	17.9	57.1	14.3	3.6	7.1	0.0	設問14	28.6	32.1	32.1	7.1	0.0	0.0
設問7	10.7	35.7	42.9	10.7	0.0	0.0	設問15	21.4	42.9	21.4	14.3	0.0	0.0
設問8	21.4	39.3	39.3	0.0	0.0	0.0	設問16	10.7	25.0	32.1	21.4	10.7	0.0

講義名：分子生物学（共通教育科目等、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	71.4	21.4	7.1	0.0	0.0	0.0	設問9	3.6	50.0	46.4	0.0	0.0	0.0
設問2	17.9	17.9	32.1	25.0	7.1	0.0	設問10	10.7	53.6	32.1	3.6	0.0	0.0
設問3	14.3	39.3	46.4	0.0	0.0	0.0	設問11	17.9	50.0	21.4	10.7	0.0	0.0
設問4	10.7	50.0	39.3	0.0	0.0	0.0	設問12	35.7	39.3	7.1	0.0	0.0	17.9
設問5	14.3	46.4	39.3	0.0	0.0	0.0	設問13	25.0	46.4	3.6	7.1	0.0	17.9
設問6	25.0	46.4	21.4	7.1	0.0	0.0	設問14	3.6	35.7	35.7	7.1	0.0	17.9
設問7	14.3	39.3	46.4	0.0	0.0	0.0	設問15	28.6	39.3	14.3	0.0	0.0	17.9
設問8	17.9	46.4	35.7	0.0	0.0	0.0	設問16	7.1	28.6	28.6	10.7	3.6	21.4

講義名：生物統計学（共通教育科目等、後期開講、メディア授業（山口大学へ送信））

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	64.5	16.1	6.5	0.0	0.0	12.9	設問9	9.7	58.1	29.0	0.0	3.2	0.0
設問2	9.7	6.5	38.7	16.1	29.0	0.0	設問10	9.7	61.3	22.6	0.0	3.2	3.2
設問3	9.7	32.3	58.1	0.0	0.0	0.0	設問11	12.9	61.3	19.4	0.0	3.2	3.2
設問4	3.2	19.4	77.4	0.0	0.0	0.0	設問12	35.5	22.6	12.9	3.2	0.0	25.8
設問5	9.7	54.8	29.0	3.2	3.2	0.0	設問13	32.3	29.0	9.7	3.2	3.2	22.6
設問6	16.1	61.3	19.4	0.0	3.2	0.0	設問14	16.1	51.6	9.7	0.0	0.0	22.6
設問7	22.6	41.9	29.0	3.2	3.2	0.0	設問15	22.6	38.7	16.1	0.0	0.0	22.6
設問8	16.1	48.4	35.5	0.0	0.0	0.0	設問16	16.1	32.3	22.6	0.0	6.5	22.6

講義名：獣医学概論 A（専門教育科目、前期集中講義）

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	100	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	設問7	38.7	38.7	19.4	3.2	0.0	0.0
設問2	9.7	6.5	9.7	3.2	71.0	0.0	設問8	38.7	41.9	16.1	3.2	0.0	0.0
設問3	9.7	29.0	58.1	3.2	0.0	0.0	設問9	22.6	45.2	29.0	0.0	0.0	3.2
設問4	9.7	25.8	64.5	0.0	0.0	0.0	設問10	25.8	51.6	22.6	0.0	0.0	0.0
設問5	16.1	51.6	16.1	16.1	0.0	0.0	設問11	35.5	48.4	6.5	9.7	0.0	0.0
設問6	25.8	45.2	25.8	0.0	0.0	3.2							

講義名：獣医学概論 B（専門教育科目、前期集中講義）

	回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6		回答1	回答2	回答3	回答4	回答5	回答6
設問1	90.3	3.2	6.5	0.0	0.0	0.0	設問7	48.4	32.3	19.4	0.0	0.0	0.0
設問2	0.0	3.2	3.2	0.0	90.3	3.2	設問8	41.9	45.2	12.9	0.0	0.0	0.0
設問3	19.4	12.9	67.7	0.0	0.0	0.0	設問9	22.6	61.3	16.1	0.0	0.0	0.0
設問4	6.5	12.9	80.6	0.0	0.0	0.0	設問10	38.7	51.6	9.7	0.0	0.0	0.0
設問5	32.3	45.2	12.9	6.5	0.0	3.2	設問11	51.6	45.2	3.2	0.0	0.0	0.0
設問6	38.7	41.9	16.1	0.0	0.0	3.2							



遠隔講義システムを利用した1年生の生物統計学講義（メディア授業）の風景

4. FD 講演会

「遠隔講義の良いところ、悪いところ –3年間の連携教育プログラムでわかったこと–」
 岐阜大学応用生物科学部獣医学課程 獣医薬理学分野 海野 利博 先生

共同獣医学部では新カリキュラムに移行するにあたり、遠隔講義システムを利用することになる。目の前にいる本学の学生のみを対象にするのではなく、システムを利用しての新しい試みである。そこで、我々より先んじて岐阜大学、鳥取大学、京都産業大学の間で平成21年度から遠隔講義システムを利用して行われている連携教育プログラムの経験を、山口大学発信で本システムを利用して岐阜大学の海野先生にご講演いただいた。以下はその要約である。

学生による授業評価を元にした

遠隔講義の悪いところ

- ・途中で映像・音声が悪く集中できなかった。
- ・授業がどんどん先に行き、集中できない。
- ・どこが重要なのか分からない。
- ・映像でやる意義が分からない。
- ・意思疎通が出来ない。遠隔講義だと質問しづらい。

などがあり、改善点として、

- ・遠隔操作をスムーズにして欲しい。
- ・こちら側にも質問を受ける先生がいるといい。
- ・もっとコミュニケーションを取りながら進めた方がいい。
- ・図を大きく、分かりやすいスライドや資料にする。

といった意見があったようである。

一方、良いところとして、

- ・映像でもこちらを向いてしゃべってくれたところ。
- ・専門の先生に聞けた。
- ・お互いの大学のみでは不足してしまう講義を受けられたこと。

などであった。

総じて、対面式とは違い緊張感や臨場感がないことによって、相手の反応が分からないなどの遠隔講義によるコミュニケーションの難しさが目立っているようだった。そのため、スライドや資料を分かり

やすくするのはもちろん、画面の向こうの学生にも意識を向けた講義が必要になると思われ、そのポイントとしては、

- ・ カメラ視線を心がける。
- ・ 重要な項目には視覚的な合図をする。
- ・ 20分に一度くらいは呼びかけをする。
- ・ 講義内容は対面式の8-9割くらいにする。

などが挙げられていた。

さらに、最も難しい点として、遠隔講義システム自体のトラブルが問題であるとの指摘があった。実際に運用する上で、

- ・ 映像トラブル：信号の消失、フリーズ、コマ落ち
- ・ 音声トラブル：信号の消失、ノイズ、音量調整不良
- ・ 接続障害：システムの起動不良、突然の終了
- ・ 機器関係：タッチパネルの操作不良

が起こっており、その対処するスタッフなどの問題、継続が出来なかった場合の補講の問題などが挙げられていた。ただし、このような機器の問題は本学に導入された新しいシステムでは改善されている面もあり、実際に運用しながら対処していくしかないようである。

実際に数年間の遠隔講義システムの運用を行った経験者からの講演で、これから導入する我々にとってはとても有意義な講演となった。



第2節 全学FD活動への参加

1. 鹿児島大学FD委員会への出席

平成24年度 第1回鹿児島大学FD委員会

日時：平成24年4月27日（金） 9：00

場所：郡元キャンパス 共通教育棟1号館2階 第1会議室

- 議題
1. 平成24年度FD委員会活動計画について
 2. 平成24年度FD活動計画の立案について

報告事項 1. 平成23年度FD経費執行状況報告について

平成24年度 第2回鹿児島大学FD委員会

日時：平成24年6月8日（金） 9：00

場所：郡元キャンパス 共通教育棟1号館2階 第1会議室

議 題 1. 平成24年度FD活動計画・経費要求について

報告事項 1. 平成24年度FD委員会ワーキンググループについて
2. 共通教育における学習実態・学習成果に関する調査2011について
3. 平成24年度FD・SDフォーラム、セミナー等開催予定について

平成24年度 第3回鹿児島大学FD委員会

日 時：平成24年7月6日（金） 9：00

場 所：郡元キャンパス 共通教育棟1号館2階 第1会議室

議 題 1. 新任教員FD研修会の事前アンケートについて
2. 平成25年度FD経費予算配分におけるガイドラインについて

報告事項 1. Q-Linksの賛同校訪問（Q-caravan）について
2. SPOD（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）フォーラムについて
3. 各WGの検討内容について

平成24年度 第4回鹿児島大学FD委員会

日 時：平成24年8月3日（金） 9：00

場 所：郡元キャンパス 共通教育棟1号館2階 第1会議室

議 題 1. 新任教員FD研修会の開催について
2. 学生・教職員ワークショップのテーマについて

報告事項 1. SPODフォーラム2012の参加について
2. 各WGの検討内容について

平成24年度 第5回鹿児島大学FD委員会

日 時：平成24年9月7日（金） 9：00

場 所：郡元キャンパス 共通教育棟1号館2階 第1会議室

議 題 1. 新任教員FD研修会の開催について
2. 学生・教職員ワークショップのテーマについて
3. 平成25年度FD経費予算配分におけるガイドラインについて（継続審議）
4. 共通教育における学習実態・学習成果に関する調査報告について

報告事項 1. 各WGの検討内容について
2. SPODフォーラム2012について
3. Q-Lab第3回ODプロジェクトについて

平成24年度 第6回鹿児島大学FD委員会

日 時：平成24年10月12日（金） 9：00

場 所：郡元キャンパス 共通教育棟1号館2階 第1会議室

- 議 題
1. FD・SD 合同フォーラム開催について
 2. 学生・教職員ワークショップの開催について
 3. 共通教育における学習実態・学習成果に関する調査報告について

- 報告事項
1. 新任教員 FD 研修会について
 2. 平成25年度 FD 経費予算配分におけるガイドラインについて
 3. 各 WG の検討内容について
 4. Q-Lab 第4回 CD プロジェクト参加報告について

平成24年度 第7回鹿児島大学 FD 委員会

日 時：平成24年11月9日（金） 9：00

場 所：郡元キャンパス 共通教育棟1号館2階 第1会議室

- 議 題
1. 学生・教職員ワークショップの開催について
 2. 共通教育における学習実態・学習成果に関する調査2012の実施について

- 報告事項
1. FD・SD 合同フォーラムの開催について
 2. 各 WG の検討内容について

平成24年度 第8回鹿児島大学 FD 委員会

日 時：平成25年1月11日（金） 9：00

場 所：郡元キャンパス 共通教育棟1号館2階 第1会議室

- 議 題
1. 教育・学生支援担当教職員講習会について
 2. FD ガイド第4号の作成について

- 報告事項
1. FD・SD 合同フォーラムについて
 2. 学生・教職員ワークショップについて
 3. 共通教育における学習実態・学習成果に関する調査2011報告について
 4. 各 WG の検討内容について

2. 平成24年度 FD・SD 合同フォーラムへの参加

テーマ：「FDの目的再考 -実質的なFDとは何か-」

日 時：平成24年11月10日（土）13:00-16:00

場 所：鹿児島大学郡元キャンパス 共通教育棟3号館2階321号教室

参加校：鹿児島純心女子大学、鹿児島純心女子短期大学、志學館大学、第一工業大学、鹿児島県立短期大学、
鹿児島工業高等専門学校、鹿児島大学

主 催：大学地域コンソーシアム鹿児島、鹿児島大学 FD 委員会

参加者（共同獣医学部）：松尾智英、白石光也、安藤貴朗

県内各高等教育機関におけるFDの現状について情報を共有し、それぞれの立場から「何のために/どのようなFDを行うのか」を今一度考え直すことを目的として、上記のフォーラムが開催された。以下のように、

鹿児島大学の阿部理事（鹿児島大学FD委員会委員長）による開会挨拶に続いて趣旨説明と問題提起、そして3件の事例報告が行われ、最後にパネルディスカッションが行われた。

趣旨説明と問題提起：「FD を巡る全国的動向と鹿児島県内の現状」（要旨）

報告者：伊藤 奈賀子（鹿児島大学教育センター准教授）

事例報告 1：「鹿児島県立短期大学における学生授業評価について」（要旨）

報告者：朝日 吉太郎（鹿児島県立短期大学商経学科教授）

事例報告 2：「医学科におけるアウトカム基盤型教育実現への取り組み」（要旨）

報告者：田川まさみ（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授）

事例報告 3：「森林科学コースにおけるカリキュラム改善の取り組み」（要旨）

報告者：畑邦彦（鹿児島大学農学部准教授）

パネルディスカッション及びまとめ

コーディネーター：大学地域コンソーシアム鹿児島FD・SD活動事業部会長

近藤 諭（志学館大学法学部教授）

パネリスト：伊藤 奈賀子（鹿児島大学教育センター准教授）

朝日 吉太郎（鹿児島県立短期大学商経学科教授）

田川まさみ（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授）

畑 邦彦（鹿児島大学農学部准教授）

3. 平成24年度教育・学生支援担当教職員講習会への参加

日時：平成25年3月26日（火）13:00～16:30

場所：共通教育棟3号館2階 321教室

参加者：

三好宣彰（教務委員長・次年度副担任）、望月雅美（学生生活委員長）、中馬猛久（次年度担任）、三浦直樹（学生生活委員）、藤木 誠（教務委員）、松尾智英（FD委員長）、郡山茂（教務係長）

本講習会は主に平成25年度新入生の支援に携わる教職員を対象として行われた。前半は、来年度から大幅に変更される共通教育カリキュラムを踏まえ、その変更点や履修内容について、適切に指導するための説明が、また後半は、学生支援に関する情報の提供、および学生の間でよく発生するトラブルの実態と学内での対応に関する現状説明があり、適切な学生指導を行うためのものであった。

ただし、共同獣医学部は山口大学との独自のカリキュラムが進んでいるため、共通教育も他学部とは異なる点が多く、注意が必要である。

13:00-13:10 開会挨拶 阿部 美紀子（FD委員会委員長、教育担当理事）

13:10-14:30 共通教育科目の履修指導について（中島あや子（共通教育企画実施部長）・共通教育係 職員）
・新カリキュラムの特徴
・履修指導上の注意点

14:30-14:40 休憩

14:40-15:10 「傾聴と対話からの自己理解」 講師：川池 陽一（保健管理センター 准教授）

15:10-15:40 学生生活におけるトラブルの現状と対策（学生生活課 職員）
・飲酒問題

- ・不審者、カルト、学内での盗難
- ・交通事故
- ・ネット利用に関する諸問題
- ・学生の懲戒 その他

15:40-16:10 学生支援について：奨学金・授業料免除・課外活動・保険・ボランティア（学生生活課 職員）

16:10-16:20 質疑応答

16:20-16:30 閉会挨拶 門 久義（教育センター長）

理工学研究科

平成 24 年度 鹿児島大学大学院理工学研究科
ファカルティ・ディベロップメント委員会報告書

(平成 25 年 5 月)

鹿児島大学大学院理工学研究科
ファカルティ・ディベロップメント委員会

はじめに

理工学研究科の FD 委員会は、大学院設置基準の第 14 条の 3（教育内容等の改善のための組織的な研修等）で「大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」とされていることに基づき、昨年度に引き続いて以下のような活動を行った。理工学研究科の教員は研究科と合わせて理学部と工学部を兼担して教育・研究に当たっているが、学部とは異なり、研究科における FD 活動では、

- (1) どのような学位を出すのか
- (2) どのような教育プログラム（カリキュラム）を組むのか
- (3) どのような人材を入学させるのか

を明確にすると共に点検を継続して実施することが重要になる。これは修了生の質の保証と学位水準について研究科として取り組む問題である。

また、中央教育審議会の答申「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」(2011) では、明確な学位プログラムとしての大学院教育を確立し、学生の質を保証する体系の整備が重要なものとして指摘されている。学生の質を保証する組織的な教育・研究指導体制の確立としては、FD 活動に関連する項目として次の項目がある。

FD の充実、ピアレビューの実施による教員の教育・研究指導能力の向上、
教員の教育業績や能力の評価の充実、人事や処遇への反映などの推進、教員の教育研究活動の評価に関する指標の開発推進

また、「教員の教育・研究指導能力の向上」に関して、答申の中では、「体系的な大学院教育を充実させるためには、大学院教育に携わる教員の教育・研究指導能力の向上が不可欠である。FD や教育指導評価に関する取り組みは、学士課程段階が中心であるため、研究科や専攻の教員がお互いに教育について活発に議論するとともに、諸外国の大学院の教育・研究指導の経験を活用するなど大学院教育に関する組織的な研修体制を充実させる必要がある。」としている。これまで大学院での FD 活動は、重要な項目として見なされてきたとは言えない。しかし、FD 活動が学生の質を保証する組織的な教育・研究指導体制の一環であるとする、現在理工学研究科で行っている FD 活動を改めて考えてみる必要がある。理工学研究科では、アドミッションポリシーの中で求める学生像を示しており、入学後は学生の能力の向上を図ると共に各専攻の掲げる目標達成を目指した教育・研究指導に取り組んでいる。理工学研究科の FD 委員会では、平成 24 年度の活動計画として、昨年度に続いて (1) 学生による授業評価とそれに基づいた授業改善、(2) FD 講演会の実施 (3) 学生の研究活動と教育成果の点検を目標にした。最後に FD 報告書の作成による PDCA の現状分析と総括を主たる活動項目とした。

なお、本報告書は、学部委員を兼務している委員各位の協力により作成することが出来ました。また、事務支援室の皆様のアンケート調査や整理に関するご協力に感謝します。

平成 24 年度鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 仲谷英夫(全学 FD 委員会委員)

平成 24 年度 鹿児島大学工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員 長	仲 谷 英 夫	(全学 FD 委員会委員(工学研究科副研究科長),	H23. 4. 1~H25. 3. 31)
委員	井 手 英 夫	(機械工学専攻,	H23. 4. 1~H25. 3. 31)
委員	川 越 明 史	(電気電子工学専攻,	H24. 4. 1~H26. 3. 31)
委員	木 方 十 根	(建築学専攻,	H24. 4. 1~H25. 3. 31)
委員	下 茂 徹 朗	(化学生命・化学工学専攻,	H24. 4. 1~H26. 3. 31)
委員	安 達 貴 浩	(海洋土木工学専攻,	H23. 4. 1~H25. 3. 31)
委員	加 藤 龍 蔵	(情報生体システム工学専攻,	H24. 4. 1~H26. 3. 31)
委員	近 藤 正 男	(数理情報科学専攻,	H24. 4. 1~H25. 3. 31)
委員	古 川 一 男	(物理・宇宙専攻,	H24. 4. 1~H26. 3. 31)
委員	瀨 田 季 之	(生命化学専攻,	H24. 4. 1~H25. 3. 31)
委員	山 本 啓 司	(地球環境科学専攻,	H24. 4. 1~H25. 3. 31)
委員	中 村 浩 二	(工学研究科等事務部長)	

第1章 平成24年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動

1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画と理工学研究科のFD活動

理工学研究科のFD委員会では、昨年度に引き続き鹿児島大学の中期目標と24年度計画を参考にしてFD活動を行った。大学院教育におけるFD活動は、「教員が授業及び研究指導等の内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」とされている。平成19年度から大学院設置基準の中で義務化が規定されている。学部のFD活動に比べて大学院に関するFD活動は活発に議論されてはいないと思われる。FD活動は大学院の学生数が増大したことにより多様な能力を有する学生の教育・研究指導に対応したような大学院教育の展開も必要になってきている。これまでは各教員の能力に大きく依存してきた大学院の教育・研究を研究科として点検して改善していくことが必要になる。FD活動に関しても、大学院教育の共通認識として教育・研究指導の点検と行うことで、理工学研究科の目標の実現を図ることができると思う。

大学院教育の共通の認識として、

- (1) どのような学位を出すのか
- (2) どのような教育プログラム（カリキュラム）を組むのか
- (3) どのような人材を入学させるのか

を明確にすると共に、継続して点検していくことが求められている。

全学のFD委員会では特別に大学院のFD活動についての議論はなされていないが、鹿児島大学の中期計画の中の平成24年度の実施計画について大学院のFDに関連が深い項目を見てみると、表1.1のような項目が上げられる。

表 1.1 鹿児島大学の中期目標と24年度計画

中期目標	中期計画
○知識社会を担う高度専門職業人や研究者等の育成をめざした大学院教育の質を向上する。	○大学院教育カリキュラムを整備・拡充するなど、大学院課程における学位の質を保証する方法を確立する。
○グローバル化の進展に対応した、国際的に活躍できる人材を育成する。	○幅広い国際的視野を育成する実践的な教育プログラムを実施する。

前述した項目は、大学院における修了生の質の保証と学位水準と密接に関連しており、理工学研究科のFD委員会も含めて全体で取り組む問題であると考えられる。理工学研究科のFD委員会ではこのような観点から、昨年度に続いて平成24年度の活動を行った。

1.2 理工学研究科FD委員会

理工学研究科は平成21年度から部局化に伴って新しい理工学研究科としてスタートした。前期課程は工学系が6専攻、理学系が4専攻の10専攻の機械工学専攻、電気電子工学専攻、建築学専攻、化学生命・化学工学専攻、海洋土木工学専攻、情報生体システム工学専攻、数理工学専攻、物理・宇宙専攻、生命化学専攻、地球環境科学専攻の各委員から構成されている。

本年度は理工学研究科のFD委員会を2回とメール会議3回を行った。委員会の議事録は参考資料-1に示している。ここでは、委員会の活動について述べることにする。

第1回（5月14日）の委員会では以下のような議論を行った。

- (1) 平成23年度研究科FD活動報告について
- (2) 平成24年度FD活動計画については以下の項目を実施することとなった。
 1. FD講演会の実施
 2. 海外実習報告

3. 学生による授業評価
4. 学生の研究活動と教育成果

(3) 委員の活動分担について

(1) FD 講演会の担当者として、仲谷委員長及び内山委員が選出され、了承された。

なお、(2) 海外実習報告、(3) 学生による授業評価及び(4) 学生の研究活動と教育成果については、取り纏めとして各 1 名を理学部及び工学部 FD 委員会で担当を選出報告願うこととなった。

(4) 平成 24 年度 FD 活動と FD 経費予算要求について

全学 FD 委員会における平成 24 年度予算配分方針について、FD 講演会等その他企画に係る経費要求の締め切りが 5 月 25 日(金)までとなることの報告があり、資料に基づき平成 24 年度 FD 活動計画・経費要求書(案)により、学生による授業アンケート及び FD 講演会の企画において予算要求することが了承された。なお、予算要求における配分の上限を超える分については、事務局に確認の上、要求することとなった。

第 2 回(3 月 11 日)の委員会では以下のような議論を行った。

(1) 平成 24 年度研究科 FD 活動報告書の作成割り当てについて

委員長から、資料 1 に基づき、平成 24 年度研究科 FD 活動報告書作成の担当割り当てについて諮られ、決定した。

(2) 学生の研究活動と教育効果の把握のための調査及び海外実習報告について

委員長から、資料 2 に基づき、調査票を専攻ごとに作成の上、提出することが承認された。

第 2 章 理工学研究科 FD 講演会と FD 活動

2.1 理工学研究科 FD 講演会と FD 活動

理工学研究科 FD 講演会 (仲谷英夫, 内山博之)

平成 24 年度の理工学研究科 FD 講演会は、工学部および理学部の FD 委員会と理工学研究科 FD 委員会との共同主催として企画され、平成 24 年 12 月 21 日(金) 16 時 00 分から 18 時 00 分まで、理学部 1 号館 101 講義室で開催された。名城大学総合数理教育センター長・川勝 博教授に講師を依頼し、「科学教育の国際的転換と科学リテラシー」という演題で講演が行われた。講演会への参加者は 30 名であった。

2.2 海外実習報告

鹿児島大学理工学研究科(工学系)では、学生の海外研修を支援するために、「岩崎国際学術交流基金」が設けられている。また、理工学研究科(理学系)を主たる実施母体として実施されている、独立行政法人日本学術振興会(JSPS)によるインター・ナショナル・トレーニングプログラム(ITP)大学院生の海外研修も継続して実施されている。これらの基金等の助成によって実施された研修の内容を以下に紹介する。

インド・カルナタカ国立工科大学での研修

平成 24 年 10 月 27 日～30 日に、理工学研究科・海洋土木工学科専攻の山口明伸教授と博士前期学生 3 名、博士後期学生 4 名が学術交流機関であるインド・カルナタカ国立工科大学(マンガロール)を訪問し、学術交流セミナーとテクニカルツアーに参加した。セミナーでは、インド・カルナタカ国立工科大学の教職員、院生等を対象とし、山口教授と博士前期・後期の学生計 8 名の英語による発表および質疑応答が行われた。さらに、カルナタカ国立工科大学長を表敬訪問するとともに関連分野の研究者との学

術交流を行った。なお、今年度の研修は、同じ時期にタイ・パタヤで山口教授と博士後期課程の学生4名が参加するアジアコンクリート連盟（ACF）主催の国際会議が開催される予定であったため、タイ国経由での研修となり、全体の旅程としては、10月23日～11月1日となっている。博士前期課程の大学院生にとっては10月24日～26日に開催された国際会議にも参加し、コンクリート工学に関する講演を聴講する良い機会が得られた。

鈴木研究室：学生（下西）がインドネシアの環境省推進費調査に2回（5月と10月）同行した。

鈴木研究室：ITPでD2の学生が2カ月インドネシアで研究を行った。環境省推進費の調査に同行した。

仲谷研究室：（アフリカと関連した地域における新生代哺乳類化石の研究として以下のような海外研修を行った）

半田直人（D3）：2012年8月19日～9月15日にケニアのケニア国立博物館で標本調査（科研費）、2012年10月30日～11月6日にスペインのMuseo Nacional de Ciencias Naturales、2012年11月7日～11月16日にイギリスのNatural History Museumで標本調査（藤原ナチュラリストリー振興財団）、2012年11月27日～12月5日にフランスのMuséum National d'Histoire Naturelle、2012年12月6日～8日にフランスのUniversité Claude Bernard Lyonで標本調査（笹川科学研究助成）、2013年2月3日～2月17日にケニア国立博物館で標本調査（藤原ナチュラリストリー振興財団）。

大出 悟（D1）；2012年9月3日～9月25日にエチオピア・アディスアババのエチオピア国立博物館で標本調査（科研費）。

田邊佳紀（M1）；2012年8月19日～9月15日にケニアのナカリで発掘調査。ケニア・ナイロビのケニア国立博物館で標本調査、2013年2月3日～2月28日にケニア・ナイロビのケニア国立博物館で標本調査（科研費）。

第3章 学生による授業評価

3.1 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

理工学研究科では、平成24年度も前年度と同様に授業評価アンケートを実施した。大学院の授業に対する学生の意見を適切に抽出するために授業アンケートの設問項目と内容は前年度と同じとした。

3.1.1 工学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（川越明史）

理工学研究科で実施されたアンケートの結果を表3.1.1に示す。この結果を見ると、ほぼ全ての項目において、4程度ないしはそれ以上の評価が得られており、大学院講義に対して学生は所定の満足を得ているものと判断できる。ただし、アンケート項目「②予習と復習は毎週どれくらいしましたか。（レポート作成時間も含みます）」の評価のみが3.00以下となっており、他の設問の評価に比べて低い結果が得られている。なお、アンケート項目「②予習と復習」の評価のみが低くなる傾向は、昨年度も同様に確認されている（参考のために、同一の設問と見なせる項目に対して、平成21から24年度のアンケート結果を比較した結果を図3.1.1に示す）。しかしながら近年は、徐々に上昇しており、授業改善の効果が得られていると考えられる。

理工学研究科の授業評価アンケートの設問は、大きく(A)授業態度、(B)授業内容、(C)授業法方に分類されるが、(A)に分類されるアンケート項目は、その他の項目と違い、定量的な数値を示して回答させるものになっている。アンケート項目「②予習と復習」において、特に低い評価が得られるということは、目標とすべき数値が、学生に十分理解されていない可能性がある。評価を向上させるためには、学生の努力が不足している実態を学生自身に理解させて、学習時間を確保するように指導していくことが今後も必要であると考えられる。

表 3.1.1 理工学研究科授業評価アンケートの結果（平成 24 年度）

図 3.1.1(1) 博士前期課程（工学系専攻）授業評価アンケート結果の推移

3.1.2 理学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（山本啓司）

図 3.1.2 の授業アンケート評価点平均値（理学系）をみると、前期開講の授業については予習と復習は毎週どれくらいしましたか」の項目を除き、4.0 前後の高い評価となっている。また、「出席」と「予習と復習」を除く、授業そのもの評価に関わる項目（質問番号 3 から 11）の数値は、4 年間をとおして見ると高い値を維持しているだけでなく、上昇傾向にある。各教員の努力によって授業が改善される傾向にあることが読み取れる。評価点の平均値が 4 を大幅に超えるようになる（大多数の学生が 5 と回答し、3 以下の回答がほとんどないような状況）ことは考えにくいので、4.0 以上の項目については十分に高い評価に到達しているものとみなすことができる。

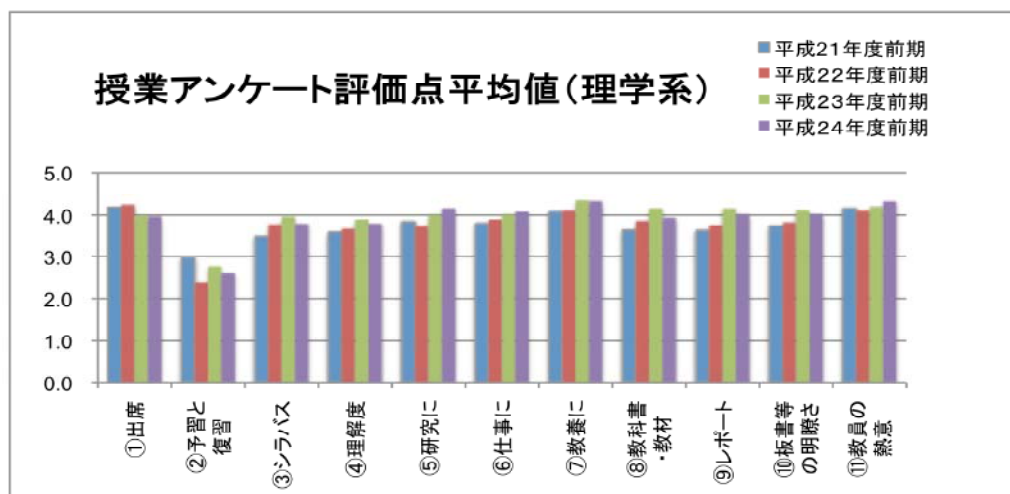


図 3.1.2(1) アンケート評価点平均値の比較（理学系・前期）

後期については、「出席」と「予習と復習」の 2 項目を除き、4.0 を超える評価点になっている。前期と同様に 4 年間をとおしてみると評価点が上昇傾向にあり、授業改善の努力が受講生による評価に反映されている。前期と比べて「出席」の評価点が低いのは、後期（2 期）になると研究活動が活発になるので学生本人が決定できない条件による拘束（学会、調査、観測など）が多くなり、欠席せざるを得ない場面が増えるためではないかと思われる。

「予習・復習」の評価点は年度ごとの変化が大きいが、前期、後期ともに他の項目と比べて一段階低い。これは、23 年度の報告書に書いたとおり、多くの教員が大学院生が研究活動に使える時間をなるべく多くとれるように配慮して、予習復習をあまり必要としない形式の授業を行っていることによると思われる。日本の大学院教育における「研究成果重視」の傾向は今後も短期的には変化しそうにない。自習時間を多く要するような授業形態は受講生の負担を急増させる恐れがある。この項目についての改善策は慎重に検討する必要がある。

図 3.1.2(2) アンケート評価点平均値の比較（理学系・後期）

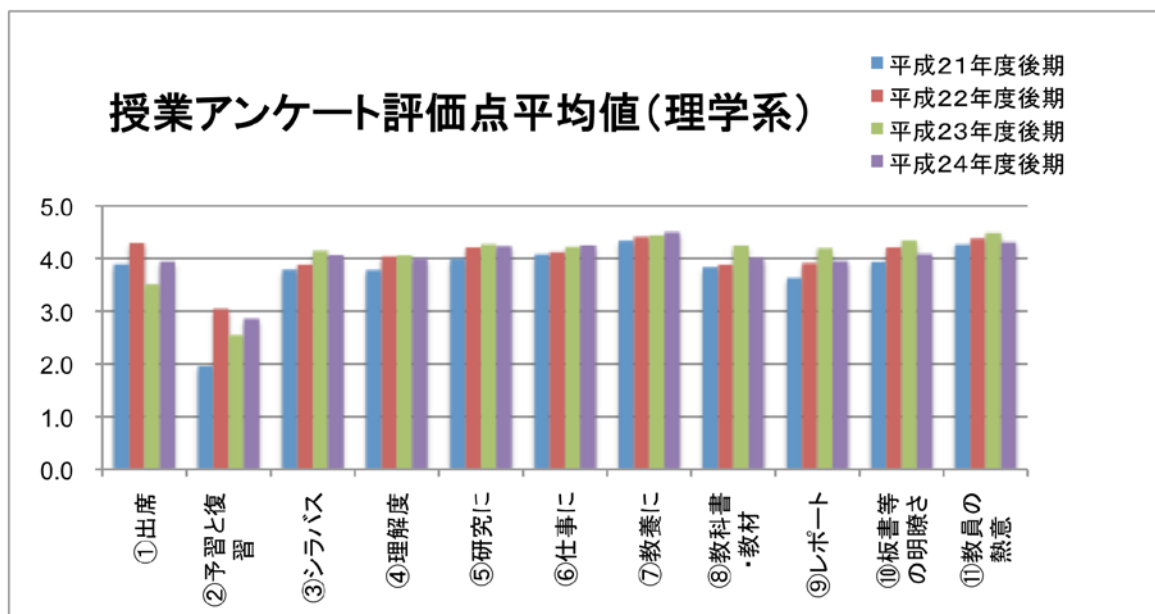


表 3.1.1 理工学研究科（理学系）授業評価アンケートの結果（平成 24 年度）

平成24年度前期											
項目	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意
数理情報科学専攻	3.96	2.79	3.77	3.94	4.12	4.17	4.31	3.92	4.02	4.19	4.40
物理・宇宙専攻	3.72	2.84	3.56	3.56	4.36	3.92	4.16	3.76	3.80	3.76	4.36
生命化学専攻	4.39	2.35	3.87	3.84	3.90	3.82	4.35	3.97	3.87	4.19	4.27
地球環境科学専攻	3.82	2.44	3.97	3.85	4.26	4.41	4.50	4.09	4.35	3.94	4.26
理工学研究科(工学系)平均値	4.39	3.14	4.05	3.81	3.92	4.09	4.21	4.01	3.94	4.01	4.28
理工学研究科(理学系)平均値	3.97	2.61	3.79	3.80	4.16	4.08	4.33	3.94	4.01	4.02	4.32
理工学研究科平均値	4.22	2.93	3.95	3.81	4.02	4.09	4.26	3.98	3.97	4.01	4.30
平成24年度後期											
項目	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意
数理情報科学専攻	3.70	2.73	4.08	4.05	4.08	4.41	4.43	3.95	4.11	4.24	4.38
物理・宇宙専攻	4.10	3.14	3.95	4.00	4.38	4.29	4.43	4.29	4.05	4.00	4.48
生命化学専攻	4.21	2.79	4.11	4.00	4.16	3.95	4.42	3.53	3.79	4.11	4.11
地球環境科学専攻	3.77	2.77	4.14	3.95	4.32	4.36	4.73	4.27	3.86	4.00	4.27
理工学研究科(工学系)平均値	4.25	3.05	4.12	4.01	4.10	4.32	4.40	4.19	4.11	4.21	4.46
理工学研究科(理学系)平均値	3.95	2.86	4.07	4.00	4.24	4.25	4.50	4.01	3.95	4.09	4.31
理工学研究科平均値	4.13	2.97	4.10	4.00	4.15	4.29	4.44	4.12	4.05	4.16	4.40

3.2 博士前期課程の各専攻における授業評価アンケート分析結果

3.2.1 機械工学専攻（井手英夫）

機械工学専攻の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの結果を図 3.2.1 に示す。この結果は、主なアンケート項目の評価点について1年間に開講された科目で平均した点の平成16年度から平成24年度まで、過去9年間における推移を示している。

理工学研究科 FD 委員会によるアンケートの実施は平成19年度後期から始められ、その際にアンケート項目の変更があった。平成21年度はアンケート項目の簡素化と精査が行われた。平成21年度から平成23年度は、アンケート項目の変更は無かった。授業改善への取り組みの効果を過去の評点の推移から検討するためにはアンケート項目はあまり変更されないことが望ましい。

図より、平成 23 年度の評点が全般に高く、平成 24 年度は平成 23 年度に比べ、評点が低下しているが、全体的に評点は右肩上がりの傾向にある。教員による継続的な授業改善の効果が表れていると云えよう。また、学部で行っている授業評価アンケートの評点と比べて全体的に高得点である。これは、学部で開講されている授業と比べて、専攻で開講されている授業は専門性が高く、学生が興味をもって授業を受けていることが反映していると考えられる。

項目「②予習と復習」について見ると、平成 22 年度が最も高い値を示し、平成 23 年度及び平成 24 年度がそれに続いており、全体的に年々増加していることが分かる。教員がレポートを積極的に課すことで、学生に授業に関する勉強時間を確保するようになった結果であろう。しかし、授業のレポートに多くの時間がとられて研究に割く時間が削られないように配慮する必要がある。予習と復習が重要な項目であると云うことが年々、認識されていることがわかる資料である。

項目「③シラバス」についても見ると、平成 20 年度から平成 21 年度は幾分低くなっているが、平成 22 年度から再び増加している。全般に、評価点が 4.0 以上であり、別のアンケート項目にある「受講申請に役立ちましたか」に対する回答が、4.0＝「そう思う」であるので妥当な評価であると考えられる。今後とも評点が良好な値を維持するためにシラバスの周知と実行を徹底する必要がある。

項目「④理解度」について、平成 19 年度、平成 20 年度はやや下降ぎみであったが、平成 21 年度から平成 24 年度にかけて比較的順調に上昇している。授業評価アンケートの結果がフィードバックされて、教員による授業改善が浸透している結果であると考えられる。年々、学生の学力が下がってきていることから今後は頭打ちの傾向が見られると予想されるので、継続的な授業評価アンケートの実施と分析が必要である。

項目「⑤研究に（役立つ）」については、平成 19 年度及び平成 20 年度は幾分、下降しているが、平成 21 年度から増加の傾向は回復し、平成 23 年度及び平成 24 年度は更に高い水準になっている。専攻の授業は専門性が高い分、専門分野が異なれば個々の学生の研究とは直接結びつかない傾向があるが、全体的に高い評価が維持されていることがわかる。

項目「⑥仕事に（役立つ）」と項目「⑦教養に（役立つ）」については、役立つと考えている学生が多く、今後ともこの評価が高い傾向を維持していきたい。項目「⑩教員の熱意」についても高い点を維持していることが分かる。今後とも、教員だけでなく学生自身も熱意をもって授業を受けることができるように授業評価アンケートを役立てていくことが重要である。

図 3.2.1 機械工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.2 電気電子工学専攻 (川越明史)

図 3.2.2(1), (2)電気電子工学専攻の過去6年分(平成18年度から24年度)の授業評価アンケート結果の推移を示す。および図 3.2.3 に、ほぼ同じ講義科目で比較できるように、前期と後期をわけている。図 3.2.2(1)が前期を、図 3.2.2(2)が後期を示している。なお、両図において、平成19年度前期以前の旧授業評価アンケートについては、現行の授業評価アンケート項目に該当するもののみ記載している。予習・復習時間が、近年は上昇傾向にある。この結果は、前後期ともに担当教員の演習問題やレポート、発表方法等の改善に向けた継続的な熱意と努力によると考えられる。その他の項目は例年通り高い水準を維持しており、本年度の授業評価アンケート結果を総体的に見る限り、授業改善は順調に進んでいると考えられるが、さらに講義形式の工夫、演習課題・レポートの質と量の改善などを継続していく必要があると考えられる。

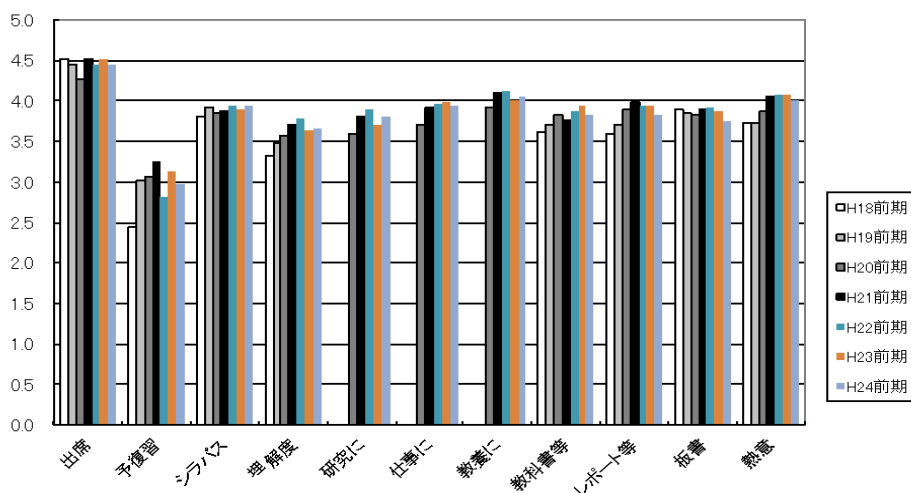


図 3.2.2(1) 電気電子工学専攻の授業評価アンケート結果の推移 (平成24年度前期)

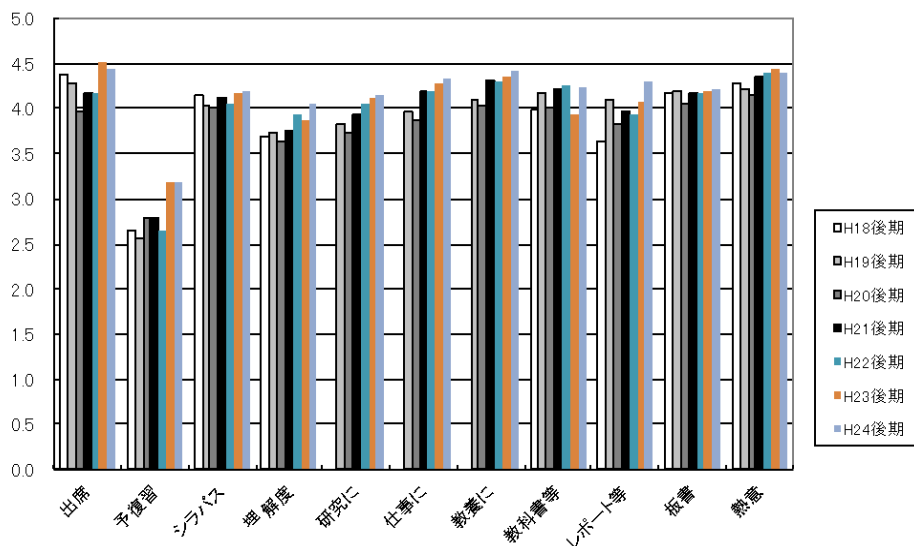


図 3.2.2(1) 電気電子工学専攻の授業評価アンケート結果の推移 (平成24年度後期)

3.2.3 建築学専攻（木方十根）

建築学専攻の平成24年度の授業アンケートについて、設問項目の平均を図4に示す。評点が高いのは、項目1の「出席」、項目6の「仕事に」、項目7の「教養に」、項目15の「教員の熱意」である。これは、コースワーク制度の充実と教員の授業に対する準備が整ってきたことによる効果と考えられる。これに対し項目4「理解度」が相対的に低い。専門分野に即した高度なレベルの授業内容を理解することが困難となっていることが考えられる。また項目5の「研究に」も低くなっているが、徐々に改善傾向にある。項目2の「予習と復習」は、前年に改善されたが再び低下しており、次年度以降の改善が望まれる。

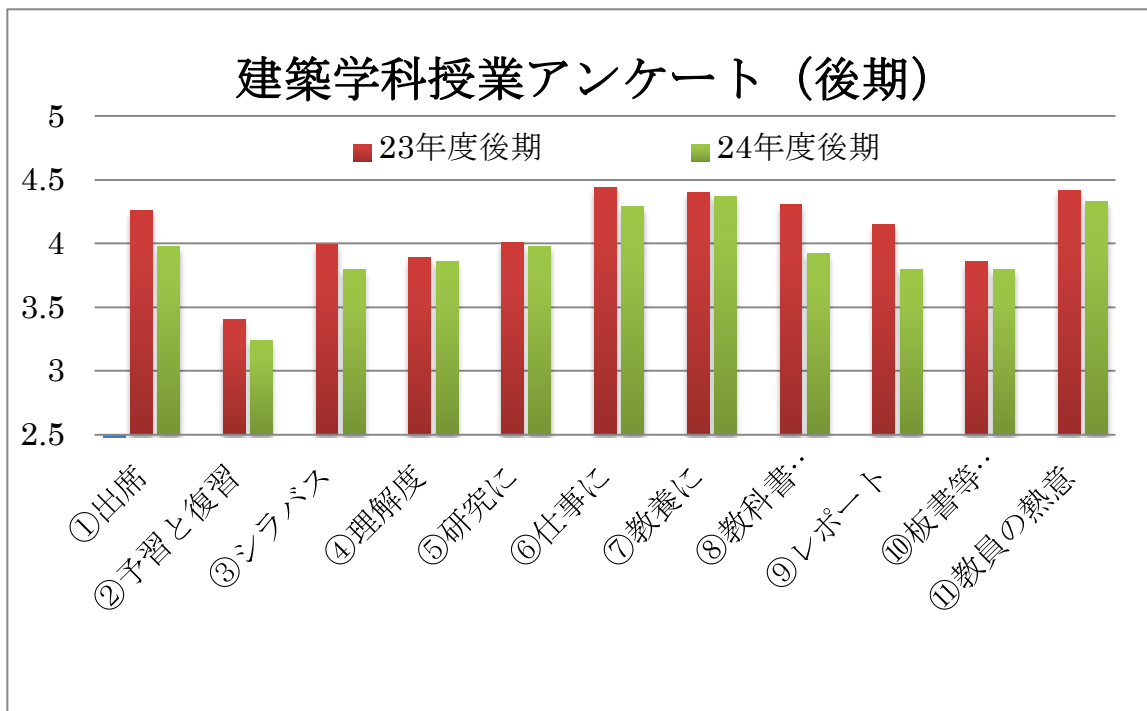
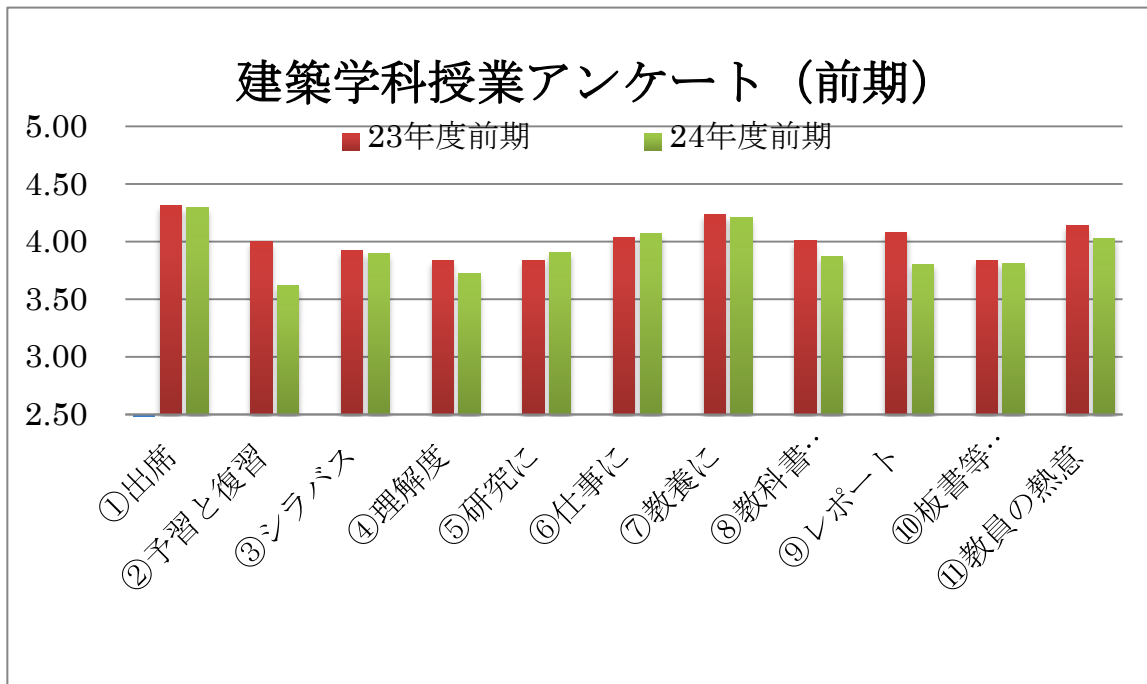


図4 建築学専攻の21年度の講義科目の授業アンケートの結果

3.2.4 化学生命・化学工学専攻 (下茂徹朗)

化学生命・化学工学専攻の平成 21～24 年度の授業評価結果の推移を図 5 に示す。ほとんどの項目が 4 年間をとおして 4.0～4.5 の高い評価となっている。なかでも項目⑥の「授業内容は目指す(職業上の)高度専門知識として役立つ」、⑦の「授業内容は自身の教養や学力を高める上で役立つ」の評価が高く、項目⑪の「教員の熱意が感じられた」も高いことから、各教員の研究活動の高さが授業にも反映されて

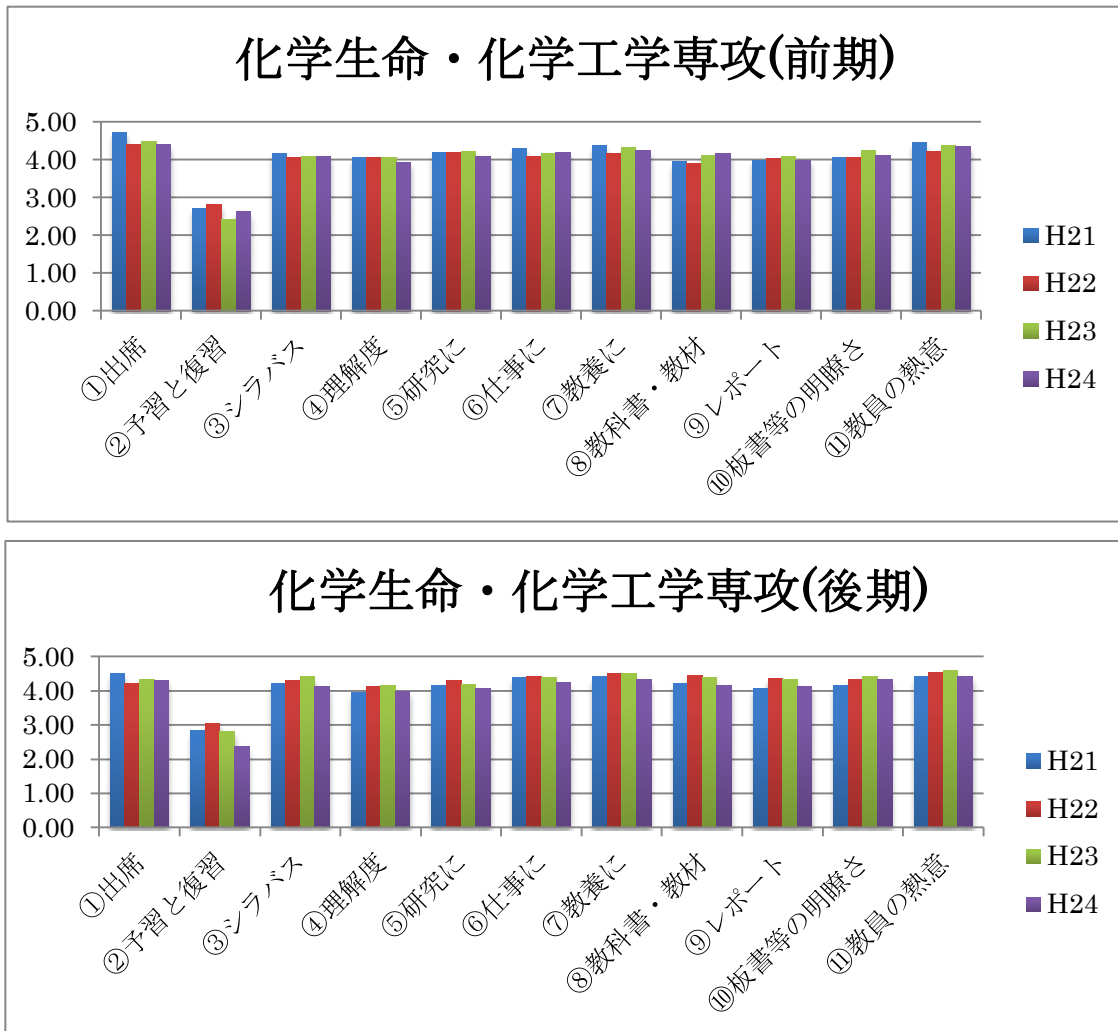


図 5 化学生命化学工学専攻の授業評価アンケート結果の推移 (平成 21～24 年度)

いると考えられる。それに比べて、項目④の「理解度 (授業はほぼ理解でき、学習目標は達成)」は 4.0 程度とやや低く、学部の講義とは違い高度な内容を理解させる工夫が残されていると思われる。学生の理解を向上させるための項目⑧「教科書・教材」、項目⑨「レポート (レポートなどは授業の理解に役立った)」、項目⑩「板書 (板書などは明瞭だった)」などは 4.2 程度とほぼ一定である。しかし、項目②の「予習と復習」にかかる時間は未だ不十分である。レポートのテーマや作成など、さらに工夫が必要と考えられる。

次に化学生命・化学工学専攻の研究科内での位置づけを分析するために、平成 24 年度の理工学研究科全体、理工学研究科工系および化生・化工専攻の集計結果 (前期、後期の平均) を比較した。その結果を図 6 に示す。化生・化工専攻は①「出席」が理工学研究科工系および全体を若干上回っており、②「予習と復習」、⑦「教養や学力を高める」が理工学研究科全体より若干低く、その他はほぼ同等であることがわかる。

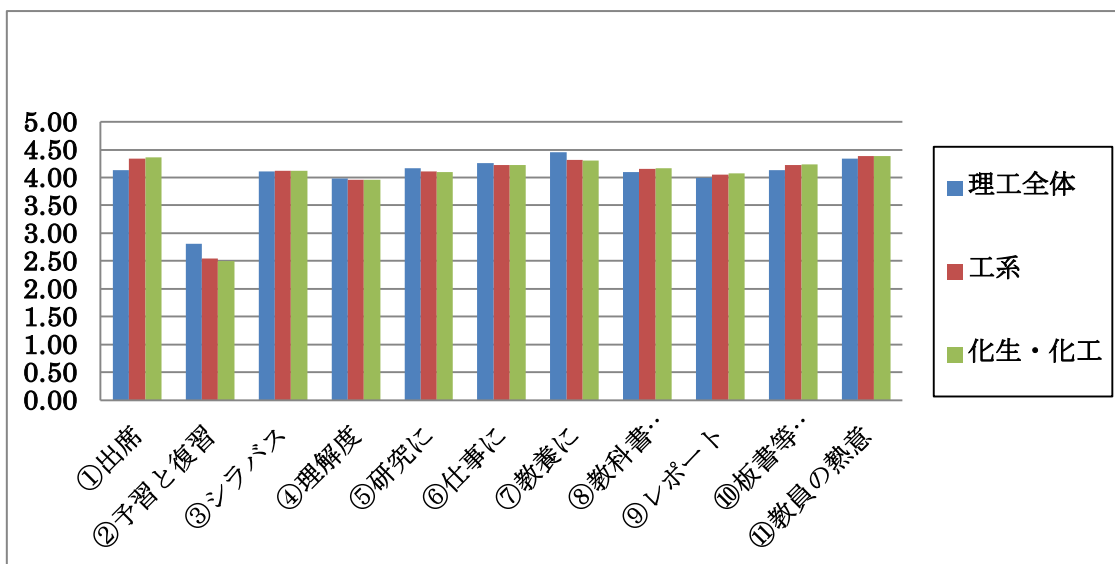


図6 化学生命・化学工学専攻、理工学研究科工学系、理工学研究科全体の集計結果
(平成24年度)

3.2.5 海洋土木工学専攻 (安達貴浩)

海洋土木工学専攻における過去4年間の授業アンケートの結果を表2に示す。この結果を見ると、ほぼ全ての項目において、4程度ないしはそれ以上の評価が得られており、大学院の講義に対して学生は所定の満足を得ているものと判断される。特に、平成24年度後期の評価は全般に高くなっているようである。ただし、設問②「予習と復習は毎週どれくらいしましたか。(レポート作成時間も含まれます)」の評価のみが2.62~3.30となっており、他の設問の評価に比べて極端に低い評価点となっており、評点が減少傾向にある。この項目については、前期授業において評価が3.3と比較的高くなっている。

表2 海洋土木工学専攻のアンケート結果

	①出席	②予習と復習	③シラバス	④理解度	⑤研究に	⑥仕事に
平成21年度前期	4.61	3.00	3.99	3.78	4.02	4.33
平成21年度後期	4.13	3.00	3.98	3.90	4.13	4.17
平成22年度前期	4.51	2.86	4.05	3.97	4.11	4.29
平成22年度後期	4.35	2.69	4.08	3.94	4.01	4.24
平成23年度前期	3.87	2.69	4.40	4.31	4.38	4.44
平成23年度後期	3.89	2.62	4.30	4.14	4.14	4.19
平成24年度前期	4.19	3.30	4.13	3.81	3.86	4.07
平成24年度後期	4.35	2.80	4.27	4.14	4.18	4.49

	⑦教養に	⑧教科書・教材	⑨レポート	⑩板書等の明瞭さ	⑪教員の熱意
平成21年度前期	4.40	4.13	4.05	4.14	4.44
平成21年度後期	4.19	4.06	4.13	4.06	4.40
平成22年度前期	4.38	4.10	4.03	4.20	4.43
平成22年度後期	4.25	4.31	4.20	4.18	4.39
平成23年度前期	4.44	4.31	4.09	4.33	4.60
平成23年度後期	4.35	4.32	4.30	4.32	4.68
平成24年度前期	4.20	4.00	3.95	4.11	4.43
平成24年度後期	4.53	4.45	4.31	4.37	4.65

3.2.6 情報生体システム工学専攻（加藤龍蔵）

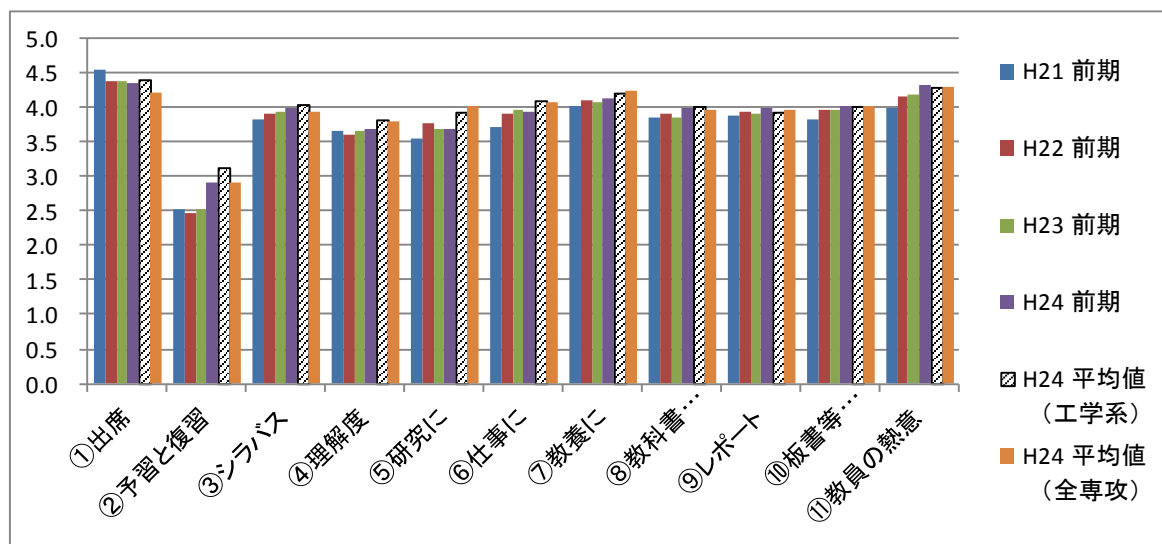
平成 21 年度に改組が行われ、情報工学専攻と生体工学専攻生体電子工学講座が統合して情報生体システム工学専攻が立ち上がり、4 年が経過した。情報生体システム工学専攻の FD 授業評価アンケートは平成 21 年度から 24 年度分の 4 年間のデータが収集されていることになる。ここではその 4 年間の経年変化を見ることにする。今年度の FD 活動報告書では、情報生体システム工学専攻のデータと平成 24 年度の工学系専攻の平均値及び平成 24 年度の理工学研究科全専攻の平均値と比較することによって評価と論評を加えたい。

平成 21 年度から質問内容に若干の修正が施されているが、比較対象となった項目は、

- ①出席
- ②予習と復習
- ③シラバス
- ④理解度
- ⑤研究に役に立つか
- ⑥仕事に役に立つか
- ⑦教養になるか
- ⑧教科書・教材は適切か
- ⑨レポート
- ⑩板書等の明瞭さ
- ⑪教員の熱意

の 11 項目である。

情報生体システム工学専攻の集計結果を前期および後期に分け、図 3.2.6(a)及び図 3.2.6(b)に示す。情報生体システム工学専攻の平成 24 年度の評価は、前期は 286 枚の平均値であり、後期は 98 枚の平均値である。また、集計した科目数は、前期と後期のどちらも 11 科目ずつであった。



図

3.2.6(a) 情報生体システム工学専攻の授業評価アンケート結果の推移
(平成 21~24 年度 前期)

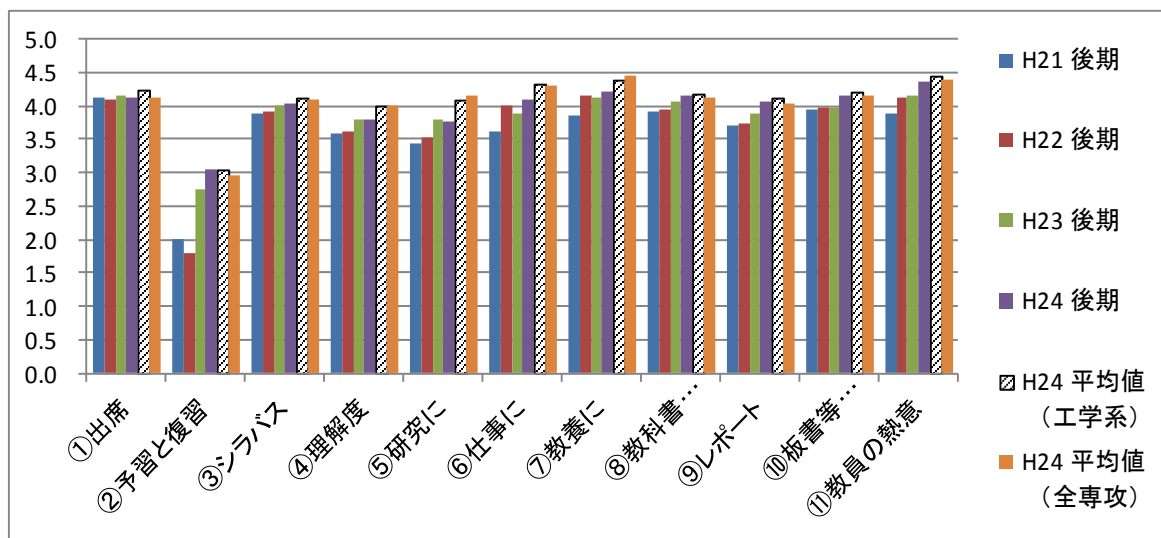


図 3.2.6(b) 情報生体システム工学専攻の授業評価アンケート結果の推移 (平成 21~24 年度 後期)

各項目の最高点は 5.0 であるが、4 年間の推移を見ると、両図とも「①出席」以外の項目は、右肩上がりの傾向となっている。各項目の評価は、「②予習と復習」以外の項目では、前期・後期とも 3.5 以上である。今年度は、ほとんどの項目の評価が向上しており、4.0 に達しているかその近傍である。「⑪教員の熱意」の評価が向上していることから、教員の授業に対する熱意が受講している大学院生に伝わり、大学院生の授業への評価が高まっている。

「①出席」の項目の評価は、前期・後期ともあまり変化がないが、4.0 を超えており平均値と比べてもほぼ同じ水準であり問題はないと考えられる。しかし、前期に比べて後期の評価は、0.2 ほど低くなっている。また、「②予習と復習」の項目は、右肩上がりの傾向にあるものの、他の項目と比べて評価が低く、3.0 に達していない。さらに、「④理解度」と「⑤研究に役に立つか」の 2 項目は、平均値と比べて、評価が 0.13~0.39 低くなっている。これらの点は、次年度以降、改善すべき課題である。

3. 2. 7 数理情報科学専攻 (近藤一男)

数理情報科学専攻では、受講者がきわめて少数の講義を除き、授業評価アンケートを実施した。専攻の授業評価アンケートの結果については各項目の平均値を表 3.2.7 にまとめた。

表 3.2.7 授業アンケート結果

項目	平成 24 年度前期の平均値			平成 24 年度後期の平均値		
	数理情報	理系全体	研究科全体	数理情報	理系全体	研究科全体
①出席	3.96	3.97	4.22	3.70	3.95	4.13
②予習と復習	2.79	2.61	2.93	2.73	2.86	2.97
③シラバス	3.77	3.79	3.95	4.08	4.07	4.10
④理解度	3.94	3.80	3.81	4.05	4.00	4.00
⑤研究に	4.12	4.16	4.02	4.08	4.24	4.15
⑥仕事に	4.17	4.08	4.09	4.41	4.25	4.29
⑦教養に	4.31	4.33	4.26	4.43	4.50	4.44
⑧教科書・教材	3.92	3.94	3.98	3.95	4.01	4.12
⑨レポート	4.02	4.01	3.97	4.11	3.95	4.05
⑩板書等の明瞭さ	4.19	4.02	4.01	4.24	4.09	4.16
⑪教員の熱意	4.40	4.32	4.30	4.38	4.31	4.40

また、授業の担当者は、各授業の授業評価アンケートに基づいて、授業計画改善書を作成し提出している。授業計画改善書に記載されている今年度の授業の評価（自己分析）と、来年度の授業計画（改善の方策）のコメントを抜粋する：

- 毎回出席をとったことと、小人数であるため、全員ほぼ毎回出席していた。
- 評点が専攻平均よりやや低い。予習、復習の時間をとるように少し課題を増やしたい。
- 第1回目の講義時にシラバスを配付、説明したためか、この項目の評点はかなりの高得点であった。これを継続したい。
- 講義資料を配付して、パワーポイントを用いて解説しているが、毎年講義資料を手直ししている成果が出ていると思う。
- 今回の講義では、事例研究と10分程度の口頭発表をとり入れた。これが高い評点になったのではないかと考える。
- 講義に関連した話題や基本的な知識についても解説したが、これが高い評点になったと思う。
- 講義のためのプリント資料を毎回配付しているが、今後も加筆修正など見直しなどを継続したい。
- 今年度は2回のレポート提出と1回の事例研究を行った。評点が高得点であるが、これを継続できるようにしたい。
- 講義はパワーポイントを利用し、適宜詳細な部分の説明にはホワイトボードに板書しながら説明した。
- テキストは自作のtex原稿。高評価で有り難いことです。
- 課題を提出するためには復習と演習が不可欠であり、概ね期待通り取り組んでくれた。
- 毎回、プリントを配布したが、好評だった。より内容を充実させたい。
- ほとんどの回で、自習用のプリントを配布しました。
- 以前から自習用プリントを配布していますが、これはよかったです。また頻繁に文献を紹介しました。気軽に読める読み物風の本も含めて紹介しました。実際に読んだ学生もいたようです。
- レポート課して、復習の機会を増やしたい。
- 具体例を増やして、少し易しい内容にしたい。
- 式が複雑なところは、プリントを準備したい。
- 専門が異なる（予備知識が不足している）学生に考えさせる授業をするのは難しい。出来るだけ丁寧な説明を行いたい。
- 板書方法は注意する必要があると思いますので工夫をおこないたい。
- 受講生の理解度を確認しながら講義を進めているのでシラバス通りにいかないのが現状である。
- 特に教科書は指定していないが、関連する話題について適宜資料を配布した。

3.2.8 物理・宇宙専攻（古川一男）

24年度、物理・宇宙専攻では、前期後期合計7科目でアンケートを実施し、のべ50人からの回答が得られた。大学院の授業の性格上アンケート実施が困難な科目が多々あるのはやむを得ない。

グラフ3.2.3は本専攻における授業アンケート各項目の平均点の平成21年度後期からの年次推移である。参考までに、右端3列には24年度の工学系平均値、理学系平均値、研究科平均値も挿入した。

設問①から⑩の詳細については他頁に資料があるので参照されたい。

なお数値については昨年度に習い、表3.2.3に24年度分を追加したものを示す。

グラフ 3.2.3 物理・宇宙専攻における授業アンケート各項目の平均値(平成 21 年後期～平成 24 年)

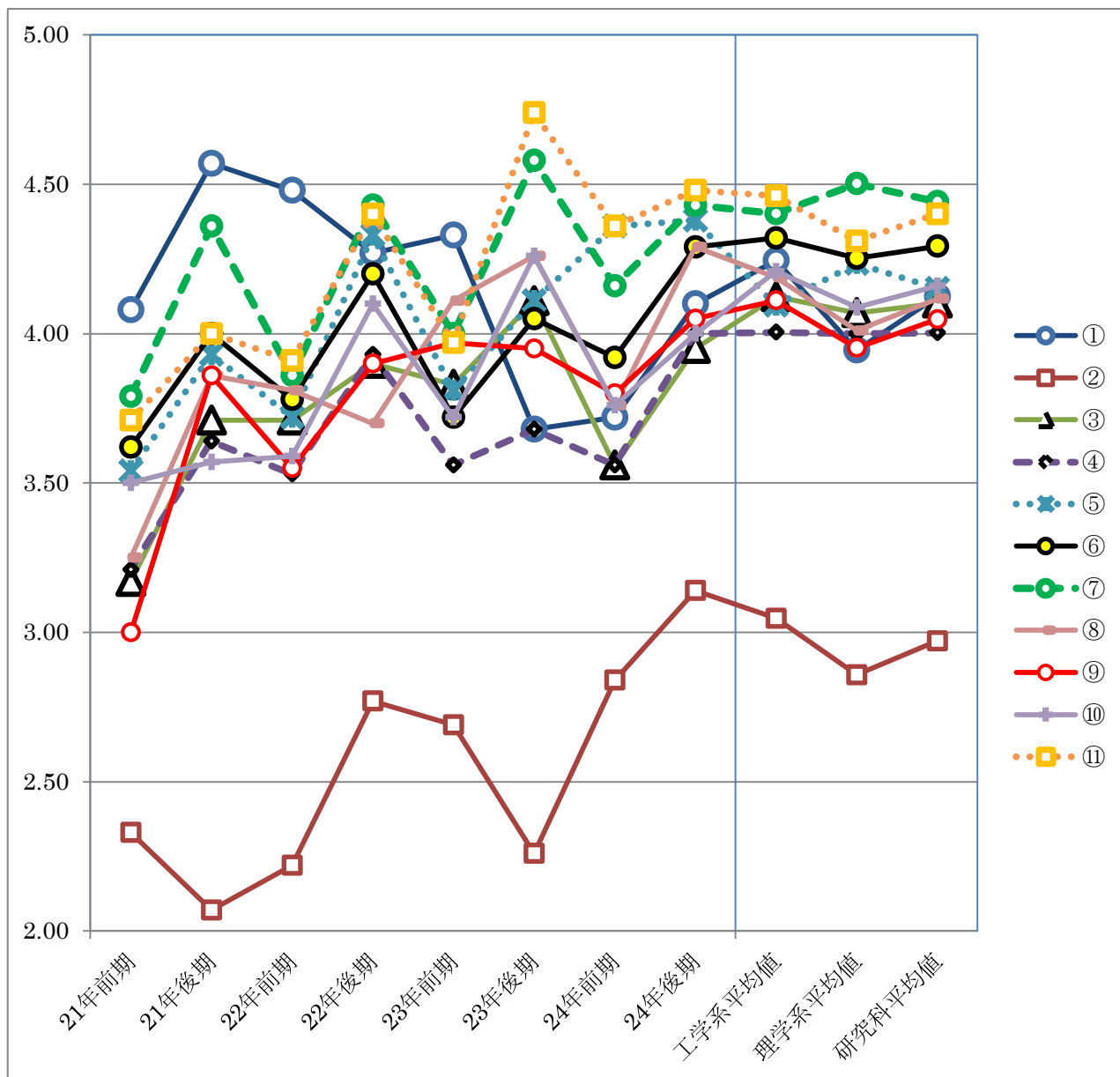


表 3.2.4 物理・宇宙専攻における授業アンケート各項目の平均値(平成 21 年後期～平成 24 年)

	24 年後期	24 年前期	23 年	22 年	21 年後期
① (出席)	4.10	3.72	4.15	4.41	4.57
② (予習と復習)	3.14	2.84	2.57	2.41	2.07
③ (シラバス)	3.95	3.56	3.91	3.77	3.71
④ (理解度)	4.00	3.56	3.59	3.67	3.64
⑤ (研究に)	4.38	4.36	3.89	3.93	3.93
⑥ (仕事に)	4.29	3.92	3.81	3.92	4.00
⑦ (教養に)	4.43	4.16	4.16	4.05	4.36
⑧ (教科書・教材)	4.29	3.76	4.15	3.77	3.86
⑨ (レポート等)	4.05	3.80	3.96	3.67	3.86
⑩ (板書等の明瞭さ)	4.00	3.76	3.87	3.76	3.57
⑪ (教員の熱意)	4.43	4.36	4.19	4.08	4.00

概して予測どおりで納得の結果だと思いが、グラフを一見して先ず気付くことは、見かけ上②（予習と復習）の項目が目立って低くなっていることである。それでも年度ごとに大きく向上していることが読み取れることは好ましいことであろう。さらに学生の努力を期待すると同時に教員の側も予習復習を促すような授業形態の工夫も必要だろう。

その他の項目も年度ごとにばらつくのは十分理解出来るものの、長期的にみれば概して多少なりとも改善しているように見える。授業の質が良くなっているのではないだろうか。ただ僅かではあるが本専攻の結果は他の三つの平均値より若干低めなっていることは気がかりである。

昨年度心配された①出席の結果は前期にさらに悪化したが、後期では改善が見られたのでそれ程心配することではないだろう。

受講生にとっては最大関心事であろう④（理解度）が低めに推移していることも気がかりである。大学院の授業である以上程度を下げる事には抵抗もあろうが、受講生の学習歴・学力を考慮して授業内容と方法の工夫の余地はあるだろう。でも⑤（研究に）⑥（仕事に）⑦（教養や学力に）⑪（教員の熱意）がしっかりと評価されている結果をみると概していい授業が行われていると判断していいのだろう。

3.2.9 生命化学専攻（濱田季之）

生命化学専攻では今年度も授業アンケートを前期と後期について実施した。表 3.2.9 は平成 21 年度から平成 24 年度の結果を示している。

前期										
年度	21	22	23	21-23平均	24	21	22	23	21-23平均	24
項目	生命化学専攻					理学系平均値				
①出席	4.7	4.4	4.2	4.4	4.4	4.2	4.2	4.0	4.1	4.0
②予・復習	3.0	2.5	2.6	2.7	2.4	3.0	2.4	2.8	2.7	2.6
③シラバス	3.7	4.0	4.1	3.9	3.9	3.5	3.8	4.0	3.7	3.8
④理解度	4.0	3.8	3.9	3.9	3.8	3.6	3.7	3.9	3.7	3.8
⑤研究に	4.0	3.7	4.1	4.0	3.9	3.8	3.7	4.0	3.9	4.2
⑥仕事に	4.0	4.0	4.1	4.0	3.8	3.8	3.9	4.0	3.9	4.1
⑦教養に	4.2	4.3	4.3	4.3	4.4	4.1	4.1	4.4	4.2	4.3
⑧教科書	3.8	3.9	4.3	4.0	4.0	3.6	3.9	4.2	3.9	3.9
⑨レポート	3.8	3.8	4.3	4.0	3.9	3.6	3.8	4.2	3.9	4.0
⑩板書等	3.6	3.8	4.0	3.8	4.2	3.7	3.8	4.1	3.9	4.0
⑪熱意	4.3	4.4	4.3	4.3	4.3	4.2	4.1	4.2	4.2	4.3

後期										
年度	21	22	23	21-23平均	24	21	22	23	21-23平均	24
項目	生命化学専攻					理学系平均値				
①出席	4.7	4.6	3.3	4.2	4.3	3.9	4.3	3.5	3.9	4.0
②予・復習	3.0	3.0	2.3	2.8	2.8	2.0	3.0	2.5	2.5	2.9
③シラバス	3.7	4.0	4.1	3.9	4.1	3.8	3.9	4.1	3.9	4.1
④理解度	4.0	4.3	4.0	4.1	4.0	3.8	4.0	4.1	4.0	4.0
⑤研究に	4.0	4.0	4.2	4.1	4.2	4.0	4.2	4.3	4.2	4.2
⑥仕事に	4.0	4.1	4.2	4.1	4.0	4.1	4.1	4.2	4.1	4.3
⑦教養に	4.2	4.5	4.4	4.4	4.4	4.3	4.4	4.4	4.4	4.5
⑧教科書	3.8	3.7	3.9	3.8	3.5	3.8	3.9	4.2	4.0	4.0
⑨レポート	3.8	4.1	4.0	4.0	3.8	3.6	3.9	4.2	3.9	4.0
⑩板書等	3.6	4.6	4.1	4.1	4.1	3.9	4.2	4.3	4.2	4.1
⑪熱意	4.3	4.3	4.3	4.3	4.1	4.3	4.4	4.5	4.4	4.3

表 3.2.9 生命化学専攻の授業評価アンケート結果の推移

各項目の評価値について、過年度3年間の平均値と今年度の結果を比較したところ、0.3ポイント以上の差があるところは、②予習・復習（前期、-0.3ポイント）、⑩板書等（前期、+0.4ポイント）、⑧教科書（後期、-0.3ポイント）の3箇所であった。統計的に優位な差かどうか判断が難しいが、今後も経年変化を注意深く観ていく必要はある。昨年度評価が急落していた①出席（前期・後期）、②予習・復習（後期）が改善した点は、FDの効果と考えてよい。

「予習・復習」の評価点は前期、後期ともに他の項目と比べて、また、他専攻と比較しても著しく低

く、改善すべき課題である。生命化学専攻では平均すると1時間程度であるが、理工学研究科でも平均1時間半程度とそこまで多いとはいえない。日本の理系大学院教育が授業を通しての学習よりも研究の成果を重要視する傾向にあり、多くの教員が大学院生の研究活動時間に配慮していると思われるが、自習時間の少なさはもう少し改善すべきである。

総合的に判断すると、教員側が授業改善に対して努力していると思われる。今後も継続的なFD活動を通して、勉学・研究がより良い方向に向かうことを期待する。

3.2.10 地球環境科学専攻（山本啓司）

地球環境科学専攻では、前期、後期について授業評価アンケートを実施した。ただし、論文講読、特別研究、および受講生が極めて少人数の授業科目については、「回答者が特定されてしまう」、「評価点（平均点）の解釈が困難」などの不都合が指摘されているためアンケートの実施については、各担当教員の判断にゆだねた。

表 3.2.4 授業アンケート結果

設問	平成24年度前期の平均値			平成24年度後期の平均値		
	地球環境	理学系	研究科全体	地球環境	理学系	研究科全体
①出席	3.82	3.97	4.22	3.77	3.95	4.13
②予習と復習	2.44	2.61	2.93	2.77	2.86	2.97
③シラバス	3.97	3.79	3.95	4.14	4.07	4.10
④理解度	3.85	3.80	3.81	3.95	4.00	4.00
⑤研究に	4.26	4.16	4.02	4.32	4.24	4.15
⑥仕事に	4.41	4.08	4.09	4.36	4.25	4.29
⑦教養に	4.50	4.33	4.26	4.73	4.50	4.44
⑧教科書・教材	4.09	3.94	3.98	4.27	4.01	4.12
⑨レポート	4.35	4.01	3.97	3.86	3.95	4.05
⑩板書等の明瞭さ	3.94	4.02	4.01	4.00	4.09	4.16
⑪教員の熱意	4.26	4.32	4.30	4.27	4.31	4.40

アンケート結果に基づいて、各項目の平均値を表3.2.4にまとめた。地球環境科学専攻の評価点平均値は、「予習と復習」を除くと概ね4前後である。評価点が4前後の設問については十分に高い水準を維持していると言える。特に、授業の内容そのものに関わる評価項目（5、6、7）は理学系および研究科全体の平均値を大きく越えていて、受講生から「役に立つ」と評価される内容の授業になっているようである。23年度はシラバスの評価点が理学系および研究科全体と比べて低い値であったが、24年度のシラバスの評価点は理学系および研究科全体よりも高くなっている。シラバスの記述が改善され、受講生に活用される度合いが高くなったと考えられる。「出席」と「予習と復習」の評価は、前年度と同様に相対的に低い。地球環境科学専攻では、研究を遂行する上で調査、観測、種々の実験装置の操作が必要になることが多い。調査に適切な季節や時間帯、あるいは観測・実験施設の運用スケジュールなどは学生個人の予定とは無関係に決まってしまう。教員側はそのような状況を承知しているので、「予習と復習」をあまり必要としないように配慮して授業を行っているようである。これらは「授業の改善」によって解決すべき問題とは性質が異なる。

スを読んで活用してもらうための周知の努力が不十分であったと考えられる。

3. 3 授業計画改善書の活用

(1) 機械工学専攻（井手英夫）

学部（学科）と同様に、専攻の FD 委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目 GPA とともに専攻教育評価委員会が整理して分析を行っている。専攻教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「専攻教育評価委員会報告書」としてまとめている。この報告書は冊子と CD-ROM の形で保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

(2) 電気電子工学専攻

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評価アンケート回答用紙（実施済みのもの）と共に学科事務室にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として理工学研究科 FD 委員が管理し、専攻 FD 委員会において授業改善に向けた活用方法等を議論している。

(3) 建築学専攻

授業計画改善書に関して、全科目の評点を学科内で公開して問題点を共有することになっている。建築学専攻ではコースワーク科目など複数教員で担当する科目も多いため、それらの科目では授業アンケートの結果を複数教員で確認し議論した結果を授業改善に結びつけている。

(4) 海洋土木工学専攻

海洋土木工学専攻は、環境システム工学講座と建設システム工学講座という 2 つの講座に分けられている。講座毎に専門性や取得すべき必修科目が異なっているため、各講座で科目部会（環境システム科目部会と建設システム科目部会）を開催し、担当科目数のバランスや授業改善等について検討を行っている。また、授業アンケートに対して担当教員は授業計画改善書を作成し、本専攻の教育点検を継続的に改善するために活用している。これらの取り組みは、JABEE 受審以降継続的に実施されている。

(5) 情報生体システム工学専攻

情報生体システム工学専攻では平成 22 年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能となるように管理している。各教員による授業改善への取り組み及び結果を教員全員で共有することで、情報生体システム工学専攻全体の教育内容への継続的な改善を試みる。

(6) 生命化学専攻（濱田季之）

授業アンケートを行った教員は、その結果を踏まえた授業計画改善書を作成し、各教員および FD 委員が保管しているが、他の教員に公開するような体制は今のところ取っていない。しかしながら、昨年度のマイナスポイントは、今年度大幅に改善されている点など、アンケートの結果を真摯に受け止めて改善に取り組む旨の記載が多く見られることから、改善書の作成業務自体が自らの講義の問題点の把握と改善につながっていると考える。

(7) 地球環境科学専攻（山本啓司）

担当教員は授業アンケートに対して授業計画改善書を作成し、それらを FD 委員がとりまとめて保管している。改善書によると、各教員とも各自の授業を見直し、授業形態や教材などについて受講生の状況に応じた様々な工夫を試みている。授業アンケートの結果を受けての改善書作成という作業の流れが定着しつつあり、継続的に授業の改善が図られている。

第4章 学生の研究活動と教育成果 (仲谷英夫)

大学院生の研究発表の支援はFD活動の目的の一つであることから、その実績を把握するために調査を実施した(表7)。また、論文・学会発表以外の特筆すべき成果についてデータを集めた(表8)。

表7 大学院生の研究成果の発表数

年度	分類		機械	電気	建築	化学	海洋	情報	数理	物理	生命	地環	合計
平成20年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	7	14	0	37	10	4	3	3	9	1	88
		国際会議以外	40	64	69	126	34	28	5	30	45	16	457
	論文	査読あり	21	28	11	46	18	18	2	16	16	3	179
		査読なし	4	16	64	25	24	17	5	2	1	1	159
平成21年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	9	5	1	34	6	1	1	2	16	7	82
		国際会議以外	31	67	46	125	42	32	8	28	35	15	429
	論文	査読あり	29	20	7	54	32	9	4	11	26	3	195
		査読なし	3	16	32	17	21	9	3	8	0	3	112
平成22年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	3	7	2	53	4	2	1	6	27	11	116
		国際会議以外	44	65	38	126	29	46	4	9	41	19	421
	論文	査読あり	19	12	3	39	17	19	1	4	29	2	145
		査読なし	7	30	26	20	2	36	0	6	7	2	136
平成23年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	1	5	1	49	2	6	0	3	8	11	86
		国際会議以外	15	60	38	135	34	35	1	14	26	26	384
	論文	査読あり	4	13	0	25	27	9	1	3	9	8	99
		査読なし	3	18	6	7	9	7	1	6	3	0	60
平成24年度	口頭発表 (含むポスター発表)	国際会議	6	21	2	43	20	3	0	9	15	3	122
		国際会議以外	32	66	46	141	18	28	0	49	52	20	452
	論文	査読あり	10	30	9	36	11	11	0	8	7	4	126
		査読なし	4	38	0	9	5	7	0	10	6	0	79

在籍者数(博士前期課程)

専攻名	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
機械	111	115	109	116	116
電気	97	98	106	105	104
建築	42	46	46	52	52
化学	97	116	132	88	88
海洋	35	36	39	32	32
情報	78	80	85	89	89
数理	24	23	25	24	24
物理	38	32	30	28	28
生命	32	37	36	32	32
地環	42	38	36	30	30
合計	596	621	644	596	595

表 8 受賞など

受賞者名	学年	受賞賞名等
金城七海	M1	精密工学会九州支部学生研究発表会ベストプレゼンテーション賞
唐鎌寛崇	M1	電気学会論文発表B賞受賞
河合史博	M1	日本知能情報ファジィ学会九州支部 学生優秀ポスター賞
満永一武輝	M1	日本知能情報ファジィ学会九州支部 学生優秀ポスター賞
神代英明	M1	日本知能情報ファジィ学会九州支部 学生優秀講演賞
沖田 裕介	M2	The International Association for Shell and Spatial Structures(IASS) HANGAI PRIZE (30歳以下若手研究者賞) 講演題目: 'Structural Morphogenesis for Free-Form Grid Shell Using Genetic Algorithms with Manipulation of Decent Solution Search'
永田洗大, 佐々木亜衣, 沖田裕介, 土持拳	M2	構造形態創生コンテスト 入選 作品名: 「Jenga Automaton」
沖田 裕介	M2	コロナキウム 構造形態の解析と創生2012 優秀講演賞 講演題目「優良解探索GAによるNURBSを用いた自由曲面グリッドシェル構造の解形態- 階数設定値と優良解形状の関係-」
窪田 真樹	D3	公益財団法人 LIXIL 住生活財団 若手研究助成
正入木未来	M1	第49回化学関連支部合同九州大会(ポスター賞)
荒毛知幸	M1	日本化学会低次元系光機能材料研究会第1回サマーセミナー 兼西日本ナノシート研究会第1回サマーセミナー 優秀ポスター賞
松村彰洋	M2	化学工学会九州支部学生賞
今古川博恵子	M2	第23回九州地区若手ケミカルエンジニア 討論会優秀ポスター賞
大木 悟志	M2	第23回九州地区若手ケミカルエンジニア 討論会優秀ポスター賞
野村晋太郎	M2	Poster Prize, Kyoto International Symposium on Biodegradable and Biobased Polymers 西日本ナノシート研究会第1回サマーセミナー 優秀ポスター賞
川畑壮太郎	M2	第49回日本ペプチド 討論会ポスター賞
柳原正宗	M1	化学工学会第44回秋季大会シンポジウム「材料・界面部会ポスターセッション」 優秀ポスター賞
上杉加奈子	M2	第23回九州地区若手ケミカルエンジニア 討論会優秀ポスター賞
柳原正宗	M1	鹿児島大学学長表彰
上杉加奈子	M2	鹿児島大学学長表彰
古川直樹	M2	The 14th International Symposium on Eco-Materials Processing and Design Conjugated with the China-Japan-Korea (CJK) A3 Foresight Program Seminar 「Evaluation of electric power using reformed biogas」 Best Poster Award of SOFC
小池賢太郎	M2	土木学会優秀講演賞
久徳寛大	M2	日本コンクリート工学会九州支部長賞
Dhruva Narayana Katpady	D3	日本コンクリート工学会九州支部長賞
山下 啓	D2	平成24年度鹿児島大学学長表彰
田畑勝幸	M1	地盤工学会九州支部 学生賞
大岩 孝輔	M2	平成24年度電子情報通信学会九州支部学術奨励賞
折橋 広樹	M1	日本磁気学会学生ポスター賞(平成23年9月)
折橋 広樹	M1	応用物理学会九州支部学術講演発表奨励賞(平成23年11月)
折橋 広樹	M1	鹿児島大学学長賞(平成24年1月)
折橋 広樹	M1	日本金属学会優秀ポスター賞(平成24年3月)
折橋 広樹	M2	鹿児島大学学長賞(平成24年7月)
折橋 広樹	M2	鹿児島大学工業倶楽部賞(平成25年3月)
春森浩平	M1	第4回半導体材料・デバイスフォーラム ポスター発表優秀賞(平成24年11月)
春森浩平	M1	学長表彰(平成25年2月)
畠中孝彰	D3	BIAsymposium 2012 (GE healthcare 主催)ポスター賞(2012年7月19日)
野添 久	M2	2012九州コロイドコロナキウム 優秀ポスター賞
半田直人	D3	藤原ナチュラルヒストリー 振興財団学術研究助成(東アフリカにおける後期中新世のサイ類エラスモテリウム亜科の系統分類学)
半田直人	D3	(財)日本科学協会 笹川科学研究助成
佐藤峰南	M2(論文発表当時)	2012年度日本地質学会小藤賞「佐藤峰南・尾上哲治, 2010 中部日本, 美濃帯の上部トリアス系チャートから発見したNiに富むスピネル粒子. 地質学雑誌.116, 575-578」(2012年9月15日)

第5章 今後の理工学研究科 FD 活動への期待

理工学研究科は平成 21 年度からの部局化により新しい組織としてスタートした。大学院教育における FD 活動は、「教員が授業及び研究指導等の内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」とされている。大学院教育の共通の認識として、「はじめに」で述べたように、

- (1) どのような学位を出すのか
- (2) どのような教育プログラム（カリキュラム）を組むのか
- (3) どのような人材を入学させるのか

を明確にすると共に点検を継続して実施することが重要になる。

一方、中央教育審議会（平成 23 年 1 月 31 日）の答申「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」では、大学院教育の改善の方向性が示されている。この中では、明確な学位プログラムとしての大学院教育を確立し、学生の質を保証する体系の整備が重要なものとして指摘されている。学生の質を保証する組織的な教育・研究指導體制の確立に関して、FD 活動に関連する項目としては次の項目がある。

- (1) FD の充実、ピアレビューの実施による教員の教育・研究指導能力の向上
- (2) 教員の教育業績や能力の評価の充実、人事や処遇への反映などの推進、教員の教育研究活動の評価に関する指標の開発推進

また、「教員の教育研究活動の適切な評価」に関しては、「教員の教育・研究指導能力を向上させるためには、組織的な研修体制の充実、学生に対する厳格な成績評価とともに、教員の教育研究活動を適切に評価する仕組みが一体となって機能することが必要である。その際、教員の教育研究活動評価においては、論文数のみではなく研究業績を適切に評価するとともに、授業の研究指導の実施状況、修了者の活躍状況など教育面の取り組みを可能な限り客観的に把握、可視化し、教育業績や能力の多面的な評価を充実させ、人事や処遇への反映せる工夫が必要である。」としている。

このように大学院のおかれた環境は、益々厳しい状況になっている。理工学研究科の教育プログラムでは、コースワークあるいはコア科目によるカリキュラム編成によって「大学院と学生の量的増大」の中で「学位プログラム等を通じた大学院教育の実質化」が図られている。すなわち、理工学研究科においても、各専攻の独自の教育・研究指導の実績に加えて、コースワーク科目により広範囲の学習を可能にした教育プログラムが実施されている。大学院の学生数が増大しことにより多様な能力を有する学生の教育・研究指導に対応したような大学院教育の展開も必要になってきている。これまでは各教員の能力に大きく依存してきた大学院の教育・研究を研究科として点検して改善していくことが必要になる。FD 活動に関しても、大学院教育の共通認識として前述した 3 項目の再確認を行ない教育・研究指導の点検と行うことで、理工学研究科の目標の実現を図ることができると考える。

このような観点から FD 活動の一つとして、学生による授業評価アンケートの実施がある。学生の意見、考えの一端を汲み取ることで、高度の学習・研究能力の育成といった学習目標の到達度に対する評価を行うことができると考えられる。また、今年度も昨年度に引き続き、学生の質の保証の一つとして研究発表の状況の調査を試みた。「どのような学位を出すのか」と言った要望に対して、本研究科の修了生の有する能力の評価の一つの指標なると思われる。単なる研究発表数だけでは、その質の評価になるのかと言った見方もあると思われるが、学外での評価を受けた指標の一つである研究発表数は、専攻による特性なども考慮することで本研究科の修了生の質の保証と学位水準の評価の指標の一つになるものと思われる。

FD 委員会では、研究科として「どのような学位を出すのか」、「どのような教育プログラムを組むのか」、「どのような人材を入学させるのか」の課題に継続的に取り組むことで、中央教育審議会から示された大学院教育の改善の方向性にも対応できると考えており、今後も修了生の質の保証と学位水準の明確化に貢献できるように FD 活動を実施することが望まれる。

参考資料－1

平成24年度 第1回 理工学研究科FD委員会 議事要旨

日 時：平成24年5月14日(月)10:00～10:25

場 所：共通棟203ゼミ室

委 員：1号委員；仲谷(委員長)

2号委員；井手、川越【大島(代理)】、木方 下茂、安達、加藤、
近藤【小櫃(仲谷代理)】、古川、濱田【九町(代理)】、山本

3号委員；内山

4号委員；中村事務部長

委員外：上白石研究科事務課長、野頭理学系事務課長、上村工学系事務課長、
永徳総務係長、吉村学生係長、竹下総務係員、稗田学生係員

議事に先立ち、各委員の自己紹介があった後、前回議事要旨が確認された。

議題

1. 平成23年度研究科FD活動報告について

委員長から、資料に基づき平成23年度中の活動状況等について、説明があった。

なお、平成23年度活動報告書については、印刷ではなくPDFでホームページに掲載することが確認され、委員長から、内容について本委員会で確認をお願いしたい旨述べられた。

2. 平成24年度FD活動計画について

委員長から、資料に基づき、大学が掲げている次期中期目標・中期計画中の「学位の質を保証する方法の確立」、「実践的な教育プログラムの実施」に係る本委員会の活動は、前年度の4活動項目に沿って実施したい旨提案があり、了承された。

- (1) FD講演会の実施
- (2) 海外実習報告
- (3) 学生による授業評価
- (4) 学生の研究活動と教育成果

3. 委員の活動分担について

委員長から、4活動項目における担当委員を選出したい旨提案があり、(1)FD講演会の担当者として、仲谷委員長及び内山委員が選出され、了承された。

なお、(2)海外実習報告、(3)学生による授業評価及び(4)学生の研究活動と教育成果については、取り纏めとして各1名を理学部及び工学部FD委員会で担当を選出報告願うこととなった。

4. 平成24年度FD活動とFD経費予算要求について

委員長から、資料に基づき、全学FD委員会における平成24年度予算配分方針について、FD講演会等その他企画に係る経費要求の締切が5月25日(金)までとなることの報告があった後、委員長から、資料に基づき平成24年度FD活動計画・経費要求書(案)が諮られ、学生による授業アンケート及びFD講演会の企画において予算要求したい旨説明があり、了承された。なお、予算要求における配分の上限を超える分については、事務局に確認の上、要求することとなった。

メール会議

日 時：平成24年6月13日(水)

議事

1. 平成24年度FD経費配分額について

委員長から、6月8日（金）に開催された全学の第2回FD委員会において、FD経費配分額が別添のとおり承認されたことが報告された。

メール会議

日時：平成24年11月22日(木)

議事

1. 理工学研究科FD講演会について

委員長から、理工学研究科FD講演会を総合研究大学院大学理事の池内先生にお願いしていたが、健康上の理由で辞退されたので、近いテーマで名城大学の川勝博先生にお願いしたことが報告され、FD講演会の開催について協力依頼があった。

メール会議

日時：平成24年11月22日(木)

議事

1. 後期授業アンケートの実施について

委員長から、後期授業アンケートは、前期と同様な様式で実施し、様式について修正等の意見があれば、12月26日（水）までに研究科総務係へご連絡願いたい。

予定としては、次の案が報告された。

- (1) 1月9日（水）までに、各専攻事務室に授業アンケート用紙を配布する。
- (2) 1月15日（火）～2月5日（火）：授業アンケートの実施期間

平成24年度 第2回理工学研究科FD委員会議事要旨

日時：平成25年3月11日(月)14:30～15:00

場所：共通棟4階会議室

委員：1号委員；仲谷(委員長)

2号委員；井手、川越、木方 下茂、安達、加藤、
近藤、古川(代理仲谷)、濱田、山本

3号委員；内山

4号委員；中村事務部長

委員外：上白石研究科事務課長、野頭理学系事務課長、上村工学系事務課長、
永徳総務係長、吉村大学院係長、入舟大学院係長、竹下総務係員

議事に先立ち、委員長の挨拶後、前回議事要旨が確認された。

議題

1. 平成24年度研究科FD活動報告書の作成割り当てについて

委員長から、資料1に基づき、平成24年度研究科FD活動報告書作成の担当割り当てについて諮られ、決定した。

なお、研究科FD活動報告書原稿締切期限を4月26日（金）とした。

2. 学生の研究活動と教育効果の把握のための調査及び海外実習報告について

委員長から、資料2に基づき、調査票を各専攻ごとに作成の上、提出期限3月29日（金）とすることが承認された。

理工学研究科博士前期課程
学生による授業評価アンケート（平成24年度・後期）

鹿児島大学大学院理工学研究科では、授業の改善と理解度の向上を目指して、授業を受けた諸君の評価や意見を参考にしたいと思います。以下の各設問に対して、選択肢の中から一つだけ選び回答用紙の該当する番号欄に○印を記入し、また、記述欄に意見を記入ください。なお、このアンケートは統計的に処理され、個人名が出たりすることはありませんし、成績評価にも関係ありませんので、適切な評価や率直な意見を記入してください。

A（受講態度等について）

設問1 授業にどれだけ出席しましたか。

5. 全て出席 4. 1回欠席 3. 2回欠席 2. 3回欠席 1. 4回以上欠席

設問2 予習と復習は毎週どれくらいしましたか。（レポート作成時間も含みます）

5. 3時間より多く 4. 2～3時間 3. 1～2時間 2. 30分～1時間 1. 30分未満

【自由記述A】その他、受講態度等を含めて感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

B（授業内容等について）

設問3 この授業のシラバス記載内容は受講申請に役立ちましたか。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問4 授業はほぼ理解でき、学習目標は達成できそうだ。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問5 授業の内容は自身の研究を進める上で役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問6 授業の内容は目指す(職業上の)高度専門知識として役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問7 授業の内容は自身の教養や学力を高める上で役立つと思う。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

【自由記述B】授業内容全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。特に、理解できない場合にはどこに原因があると考えますか。

C（授業方法等について）

設問8 使用した教科書や教材は授業の理解に役立った。（教材等を使用しなかった場合には記入しなくて良い。）

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問9 レポートなどは授業の理解に役立った。（無かった場合には記入しなくて良い。）

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問10 板書などは明瞭だった。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

設問11 教員の熱意が感じられた。

5. 大いにそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. 全くそう思わない

【自由記述C】授業方法全般について感想や授業改善に役立つと思われる意見を回答用紙の自由記述欄に簡潔に書いてください。

博士前期課程授業評価アンケート回答用紙

実施日 年 月 日

科目名: _____

※注意事項

- ・HB、Hの鉛筆又は0.5mmシャープペンシル(HB)で濃く記入し、それら以外のボールペンなどの筆記用具は使用しないで下さい。
- ・隣のマーク領域へかからないようにして下さい。
- ・間違った場所に○を記入した場合は、消しゴムできれいに消して下さい。

専攻コード

機械工学	電気電子工学	建築学	化学生命・化学工学	海洋土木工学	情報生命システム工学
21	22	23	24	25	26
数理工科科学 物理・宇宙 生命化学 地球環境科学					
31	32	33	34		

良い記入例 しっかり枠内に記入して下さい。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

数字は、枠線にかからないように真ん中にはっきりと書いて下さい。

開講専攻名: あなたの所属専攻名:

科目コード: 科目コードは右詰めで記入してください。

<設問の回答>

5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1
設問1 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	設問6 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	設問11 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
設問2 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	設問7 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
設問3 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	設問8 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
設問4 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	設問9 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
設問5 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	設問10 <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	

自由記述(枠線にかからないように楷書で記入して下さい。)

科目名:	
A関連	
B関連	
C関連	

参考資料－4

授業計画改善書（平成24年度 後期 講義・演習用）

1. 授業アンケート結果に基づいて、授業科目ごとに記載して下さい。
2. 複数で担当されている科目は、アンケートに応じて代表者の方あるいは分担者が記載して下さい。
3. この文書を3月22日（金）までに専攻のFD委員に添付ファイルで送付して下さい。
4. この文書は3年間保管して下さい。

記入年月日： 平成 年 月 日

授業科目名： _____

授業担当者（代表者）名： _____

※ Pt. 8 ゴシックで記入して下さい。

※自由記述欄については、授業評価アンケート実施の有無に関わらず記入してください。

評価項目		アンケートの評点			現時点での自己分析と改善の方策
		今回	前回	前々回	
(A) 受講態度について	①出席				
	②予習と復習	2.50	2.25	2.80	予習・復習の時間が1から2時間であり、本科目の内容を修得するためには不足しているので、課題を増やしたい。
	※自由記述				
(B) 授業内容について	③シラバス				
	④理解度	3.16	3.0	3.2	今年度は少し理解度を上げることができた。小テストなどで理解度の向上を図り、次年度は評点3.5となるようにしたい。
	⑤研究に				
	⑥仕事に				
	⑦学力・教養に				
	※自由記述				
(C) 授業方法について	⑧教科書・教材				
	⑨レポート等	3.70	3.20	3.50	今年度は5回のレポートを提出させた。昨年度は3回（評点は3.20）であったので、少し改善することができた。次年度は評点4.0となるようにしたい。
	⑩板書等の明瞭さ				
	⑪教員の熱意				
	※自由記述	特になし			

登録者数 = 14名： 受験者数 A = 14名： 単位取得者数 B = 14名： 比率 (B/A) = 100%

総括

- ・ 成績の評価基準：シラバスに従い、試験7割、レポート課題3割の割合で評価した。
- ・ 学習目標の達成：合格者の平均はC(7.8点)であり、大学院の成績としては、十分でないことが考えられるので、次年度は何らかの改善をしたい。
- ・ その他（自由記述）

※フォントの色は青から黒にして変更して下さい。

※青字の箇所は参考例を示したものです。あくまでも参考です。

（記述欄不足の場合は、続紙を設けて記述下さい。）

医歯学総合 研究科

医歯学総合研究科 FD 活動報告

1. はじめに

医歯学総合研究科 FD 委員会では、大学院教育の充実、活性化を目的として、学習支援システムの普及を FD 活動のひとつのテーマとした。遠隔授業や専門職教育での利用を促進することにより、教育機会の提供と教育の質の向上が期待されている。昨年度までの講習会で問題となっていた著作権の扱いや単位認定に関わる事項を含む講演会を行い、その後、実際に学習支援システムを活用するための実践的講習会を実施した。また、昨年度に引き続き大学院生の教育と研究状況を把握するための授業評価アンケートを行うとともに、従来の FD 活動は参加者が乏しく実際の教育改善への効果が不十分と考えられたため、質問表では把握できない大学院教育や学生の抱えている問題を理解するための学生のインタビューを企画した。また、他大学の大学院学生確保や研究環境改善の取り組みを視察して、情報提供を行った。

2. 講演会

医療系教育における e ラーニングと電子教材：その有用性および課題と対策

日時	2012 年 10 月 31 日 (水) 17:00～
主催	医歯学総合研究科 FD 委員会
共催	医学部 FD 委員会医学科部会
会場	鶴陵会館 中ホール
講師	吉田 素文 先生 (九州大学大学院医学研究院 医学教育学教授 附属図書館 副館長 (付設教材開発センター兼任) 大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻 教授)
概要	<p>九州大学では平成 15 年に合同学習プログラムの開発と教育リソースの共有化を目的とした医療系総合教育研究センターを設置し、学際的チーム医療教育の web システムを活用した学習用コンテンツの作成を行った。シミュレーション教育やオンラインテストは学生の自主学習を推進する教育であり、現代 GP 終了後も継続して実施する「情報統轄本部」の設置につながった。</p> <p>e ラーニングシステムを用いた双方向性授業は学生の授業中の態度を見違える程改善し、講師の意欲も向上した。講師が操作方法を修得し事前に準備する必要があり、慣れない教員のサポートをする技術職員も必要になる。大学の基盤整備や教員の e ラーニングリテラシーの向上が求められる。更にコンテンツの情報処理をめぐる諸問題の解決が必要である。九州がんプロフェッショナル養成プランの e ラーニング作業部会では大学間のネットワーク構築を行い、さらに筑波大学開発の e ラーニングクラウドへと移行した。この一連の活動を通じて医療系の教員が作成する教材は最新の科学的根拠を示す必要から他者の著作物が含まれており、著作物を教材として利用するための課題に直面した。九州大学では文科省への上申とガイドラインを作成した。</p> <p>教育目的のために著作物を複製することは許諾を得ずにできることになっているが、遠隔授業の場合は「同時中継」が条件となっているため、e ラーニングには適応されない。出版者等の著作権団体のガイドラインによると雑誌のひとつの記事や書籍の章から、図表は 3 つまで、1 冊の書籍からは 5 つまで許可無しに利用可能であり、出所の明示と原型保持が条件となる。この条件内での翻訳、翻案も可能である。これに該当しない場合は使用許諾を機関として申請する。現状に即した効果の高い教育を実施していくためには、医療者に適したガイドラインの作成や教育機関、行政の対応が求められている。e ラーニングによる遠隔授業に関しては、大学設置基準、大学院設置基準に基づき、教員若しくは指導補助者が授業終了後速やかにメールや掲示板で十分な指導を行い、対面授業と同程度の教育効果をあ</p>

げていると委員会、教授会で認めることが要件とされる。動画を配信するだけでは不十分であり、質問の機会やミニテストを実施することで、双方向の学習が保証される。卒業要件 124 単位のうち 94 単位は対面授業が必要となるが、30 単位以上を遠隔授業で実施することは認められている。

3. 講習会

桜ヶ丘キャンパス学習支援システムの活用

日時	2013 年 2 月 4 日 (月) 16 : 30 ~ 18 : 00
主催	医歯学総合研究科 FD 委員会
共催	医学部 FD 委員会 医学科 FD 部会
会場	共通教育棟 6 階 インテリジェント講義室
参加者	21 名 (対象 研究科、医学部、歯学部授業担当者、附属病院教職員)
講師	村永 文学 (医学部歯学部附属病院 医療情報部)
概要	桜ヶ丘の教職員 21 名が参加した。桜ヶ丘キャンパスで e-learning システムとして利用できる Moodle、学生の学習履歴書ともいえる e-portfolio システム、遠隔医療相談を実現する ITKarte システムの紹介の後に、参加者はテスト用の ID パスワードを用いて、Moodle システムを用いたオンラインでの教材の提供・レポートの収集・小テストの実施等、集合型対面教育の支援に役立つ機能を中心としたコース運営の実習を行った。事後アンケートでは、参加者の 75~85% が講習した機能の一部、あるいは十分に使える、80% が Moodle を用いた教育・研修を実施したいと回答し、今後の教育への活用が期待された。

4. 他大学の大学院教育、研究体制の視察

1) 広島大学における研究者育成 (平成 24 年 10 月 18 日、19 日)

諏訪 素子、志野 久美子 (医学部・歯学部附属病院歯科総合診療部)

● 広島大学医学部医学科医学部医学科医学研究者志向 A0 入試 (MD-Ph コース)

疫学・医病制御学 教授 田中純子氏より、説明を受ける。

広島大学では平成 23 年より、研究者をめざす学生を A0 入試で選抜している。

入試：出願者資格に科学オリンピックをいれ、自分でチャレンジする姿勢と新たなものを探求する姿勢を持ち、従来の価値観 (成績が良いから、収入がよい、学校の成績が全て etc.) とは異なる学生を求めている。

最終選考の小論文 100 点、面接 100 点 (2 日間、5 名の教授)、センター試験は 720 点以上を要件としている。

平成 23 年度は 1 名の受験者。センター試験 720 点を満たしていなかったため、不合格。

平成 24 年度は定数の 2 倍以上の受験者が全国 (九州~東京) から応募し、3 名 (広島 1 名) 入学した。

現在、基礎社会医学系研究室を順番に巡っている。3 人とも、将来医学研究に携わることを自覚できている。成績も、他学生 (一般入試) と見劣りしない。

入学後のカリキュラムは、1 年次から放課後・長期休暇時に、研究に従事する。4 年次に配属研究室での研究を開始し、大学院 1 年次の準備を行う。5 年目に大学院に入学する。できれば最短 3 年で博士 (医学) 取得を目指す。

医学部卒業後も研究マインドを持って、臨床研修ができることを期待している。研修後の進路に制限はない。

一般入試で入学した学生が、5 年目から大学院へ入ることはすでに可能なシステムに現在なっているが、さらに MD-Ph コースの学生に触発されて、大学院へ進学する学生が出てくる効果も期待している。

● 広島大学大学院医療人教育研究センター

学部長 菅井基行教授 学部長補佐 (研究・広報担当) 加藤功一教授より説明を受ける。

平成 20～22 年に実施したバイオデンティスト育成のプログラムを継承し、研究力・国際力・社会貢献力を備えた研究者の養成を目的として平成 23 年度より開始した。医歯薬保健学研究科の大学院生 約 100 名から希望者を選抜し、専任の教員 1 名と事務 1 名で運営している。

以下の科目を提供している。

(1) スタートアップ生命科学コースワーク (前期・後期 各 10 名 1 年生対象 5 名は留学生対象)

実験の手引き書 (実験器具・基本的な実験手技 例:細胞培養、PCR 法など) を用い、研究の基礎をマンツーマンで指導を受けながら学ぶ。

(2) アドバンスド生命科学コースワーク (後期 23 名 (①) 修了者)

5 コース中 2 コースを選択し、1 日/週 フルタイムで実施する。

(1) (2) は医歯薬研究科の基礎系講座教員 (生化学、生理学、細菌学 etc.) 餓死堂を担当する。

コースワークで一緒に学ぶことによって、部局間を超えたつながりができる。将来、研究の幅が広がる。

(1) (2) で使用する手引書は、いろんな科の方法を集約、統一した広島大学ブランドの方法として作成し、著作権の問題上、個人に渡すが門外不出となっている。

(3) English Presentation (前期・後期 各 5～10 名) 外国人講師が担当、10 回

ポスター作成・スライド作成・プレゼンテーションを学ぶ。ポスター (英語) 発表。2 回目以降、口演 (英語)

(4) English Rhetoric & Writing 日本人講師 (河本健先生) が担当、8 回

(5) 社会貢献推進論 集中講義形式 平成 23 年度は、福島へ派遣された医師の話

2) 山梨大学における研究者育成 (平成 24 年 11 月 6 日)

矢澤 和人 (医歯学総合研究科先進治療科学専攻神経病学講座神経筋生理学分野)

山梨大学大学院医学工学総合研究部 解剖学講座細胞生物学教室 竹田 扇 教授より説明を受ける。

● 山梨大学ライフサイエンス特進コース

山梨大学医学部では 2006 年より本コースによる研究医養成を制度化し、基礎および臨床医学系 18 講座がこのコースを採用している。このコースは、基礎臨床を問わず研究活動に興味をもつ学生を医学部入学直後から研究室に配属し、臨床実習が開始されるまでの比較的時的自由度が高い段階で研究に触れさせ、その中から本格的な研究者を育成していく**選択的プログラム**である。1 年間は自由に研究室を回って、適性等に合う研究室を決定する。各研究室の定員は 1 名/年であり、毎年約 10 名の学生がこのプログラムに採用され、現在 30 数名が在籍している。本コースの特徴は、(1) 所定の条件を満たして山梨大学医学部大学院に進学する場合、経済的優遇処置、学位取得優遇処置を設けている、(2) 教員、学生が連携して一体運営がなされている事である。

昨年度卒業したプログラム 1 期生 3 名のうち 2 名が臨床研修を行いながら、山梨大学医学部大学院に進学した。これらの学生は学部学生時に英文国際誌に筆頭著者として原著論文を発表している。一方で、理念を理解せずにクラブ活動の感覚で参画する学生や脱落者があり、継続して実質的な研究を行う者の数はそれほど増加していない。また学生の受け入れ側に問題がある事例もあり、上記(2)の教員・学生共同運営で問題の解決を諮っている。

● 関東 4 大学研究医養成コンソーシアム

本コンソーシアムは 2010 年に文部科学省の「研究医養成定員枠」2 名をスタートさせた東京大学の呼びかけに応じて千葉大学、山梨大学、群馬大学の 4 大学で組織された。その理念は研究医養成で直面する様々な問題を共有してその解決を行うと共に、各大学の教員、学生の交流を行いお互い切磋琢磨する緩やかな大学連合の形成である。

2010 年から毎年夏期に、開催地および主管校を変えてリトリートを開催している。企画運営は基本的には各大学の学生に任されており、その期間中は学生間の交流も積極的に行われています。また教員を対象とした Faculty Development により研究医養成システムを巡る情報交換も盛んに行われている。しかし、大学間交流は

夏期リトリートの開催と HP の開催に留まっており、実質的な学生レベルでの研究交流が今後の課題となっている。

3) 千葉大学における研究者育成（平成 24 年 11 月 7 日）

矢澤 和人（医歯学総合研究科先進治療科学専攻神経病学講座神経筋生理学分野）

千葉大学大学院医学研究院長・医学部長（薬理学） 中谷晴昭 教授

千葉大学大学院医学研究院分子ウイルス学（基礎カリキュラム部会長・学務部会長） 白澤 浩 教授
より説明を受ける。

千葉大学では平成 20 年度から「千葉スカラシッププログラム」を開始した。それ以前の学生の自主研究の基本概念は、「基礎医学における科学的思考方法を身に付け学問体系構築の筋道を理解する」ことであったが、この新たなプログラム概念とし大きな方針転換を図った。

このプログラムの特徴は(1) 6 年一貫＋選択性、(2) 具体的で到達可能な（実効性のある）段階的コンピテンシー設定、の 2 点が挙げられる。言い換えると 1、2 年次の目標は①医学的発見の基礎となる科学的理論と方法論を理解する、②科学的研究で明らかになった新しい知見を明確に説明できる、③実験室、動物実験、患者に関する研究の論理的事項を理解することであり、3、4 年次は①研究チームの一員として他の研究者とコミュニケーションをはかり、責任ある行動をとる、②未解決の臨床的あるいは科学的問題を認識し、仮説を立て、それを解決するための方法と資源を見いだせる、④臨床や科学の興味ある領域での研究を実施することを目標とする。5、6 年次からは選択（アドバンストコース）とし、研究成果を発表（千葉大学内）し、所定の審査を受け、成績優秀者には千葉医学会奨励賞を授与する。アドバンストコースに進む学生数は現在 10 名/年程度である。また 3 年次より MD-PhD コースを選択した学生は、短期間での大学院修了が可能（初期臨床研修 1 年目を休学するが 3 年間で修了）となります。

千葉スカラシッププログラムの問題は修了後のキャリアパスが整備されていないという点である。これに対して「**基礎および臨床系研究医が学位取得した後の早期留学促進および帰国後の期限付き特任助教のポスト**を用意する」ことを検討している。これにより彼ら若手研究医が、①大学院生の指導を行うだけでなく、②学部学生のリサーチメンターとして機能することとなる。また若手研究医に指導を受けた大学院生も学部学生の指導を行うことが可能となり、この「屋根瓦式指導」で研究医育成の効率化を狙っている。

5. 学生による授業評価アンケート

実施方法の概要

現在、授業科目の評価アンケート、演習・実験科目の研究環境と研究指導に関するアンケートを日本語と同じ内容の留学生用の英語のアンケート用紙により実施している。大学院係がアンケート用紙を作成、対象学生に配布、回収して集計業務を行った。集計結果は科目責任者にフィードバックするとともに、本年度は各講義科目評価の一覧も作成し教授会に報告した。

講義科目アンケート

講義を主体とする科目アンケートは授業評価 7 項目、自己評価 2 項目、全体評価とし、無記名により各項目について 7 段階の評定尺度で回答し、さらに自由な意見を記載してもらった。

前期に 5 科目 30 名、後期に 4 科目 14 枚の回答が得られた。

科目あたりの学生数が少なく、科目により評価傾向が異なることより、フィードバックした結果に基づいて、各科目での改善をお願いしたい。

演習、実験科目のアンケート

演習、実験科目についてのアンケートは後期に実施し、無記名で医系歯系の別、入学年度、演習科目の授業形態、内容と指導3項目、実験科目（研究指導）6項目、研究中断の有無について回答を求めた。選択項目以外は、5段階の評定尺度で回答した。

アンケート結果

医系 68 枚、歯系 14 枚の回答が得られた。

医系（表1）回答者数 68 名

入学年度は平成 15 年から平成 24 年にわたっており、卒業までの期間が昨年度よりも延長している。項目 7 で、「個人的理由以外での研究の中断」が 5 名（7%）となっており改善がみられない。演習科目の授業形態は講義、ミーティング、消毒会、実験・実習など多岐にわたっている。科目の有用性、教員の対応・支援は 7～8 割と昨年度と同様の高い評価をしている。自由記載では研究環境には概ね満足が得られているが、改善すべき点として

- 主要な論文でも電子ジャーナルとして閲覧できない。
- 共同の研究設備の充実と利用のためのセミナーを開いて欲しい。
- 教員との言葉の壁。英語で講義をする際の講師の話し方の改善。コミュニケーションが不十分。
- 学生への連絡不足（出席が必要な講習会の案内がメールされない）。

が挙げられた。

歯系（表2）

学生の在籍機関は 5 年間であり改善傾向が見られる。項目 6 教員の学習・研究支援に対し半数の学生がどちらとも言えないと回答しており改善が求められる。自由記載が少なかったが、満足していること、改善点として個人により指導体制に差があることが指摘された。

学生が指摘している改善点は昨年度も指摘されている事項を含んでおり、実際の教育・研究環境の改善に調査結果を反映させる必要性が明らかになった。

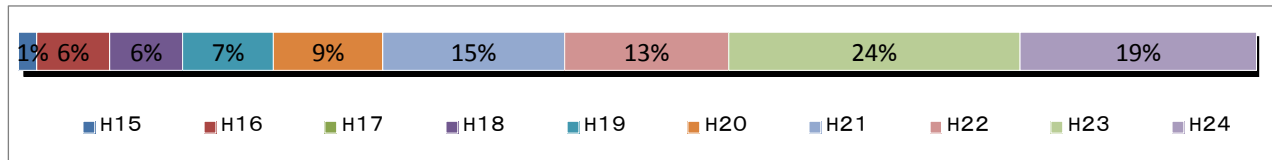
表 1

医 系

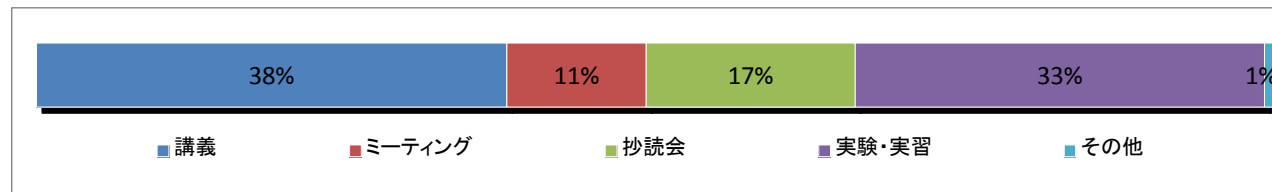
学生による授業評価アンケート(2013年 2月実施)

アンケート回収枚数(医系) 68枚

2 入学年度はいつですか



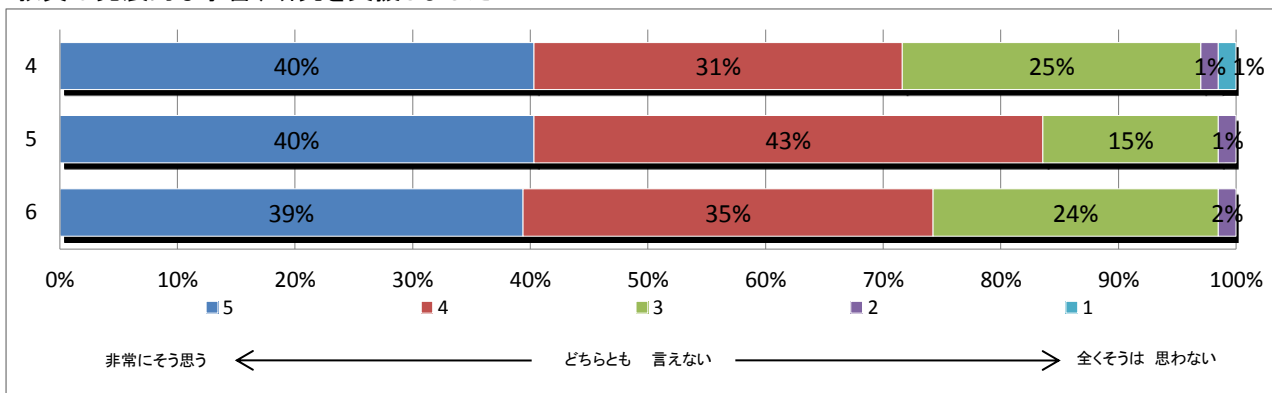
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

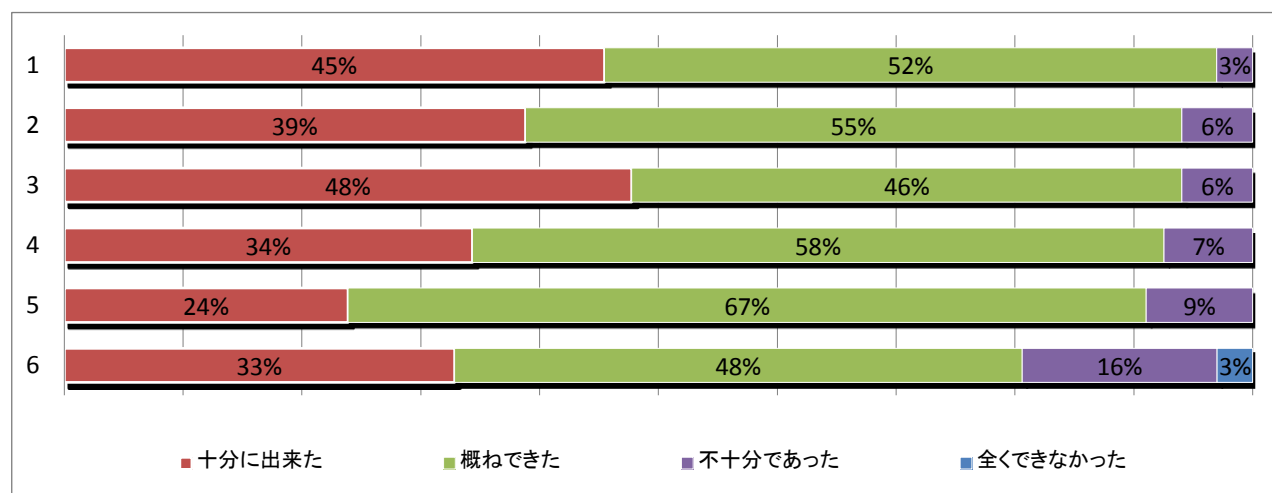
5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか



実験科目(研究指導)

- 1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることができましたか
- 2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか
- 3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか
- 4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか
- 5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか
- 6 論文作成を自ら行うための指導を受けましたか



7 個人的な理由以外で研究を長年にわたって中断せざるを得ないことはありましたか

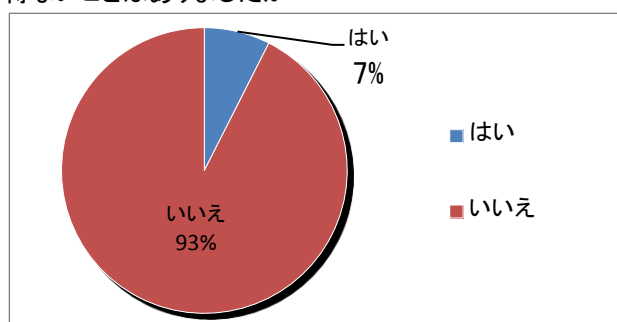


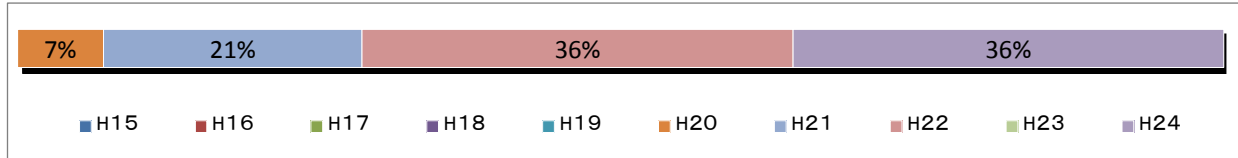
表2

歯系

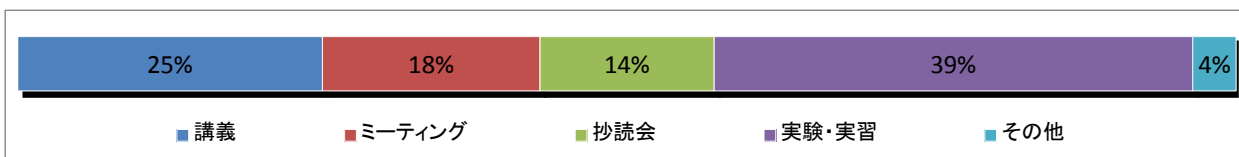
学生による授業評価アンケート(2013年 2月実施)

アンケート回収枚数(歯系) 14枚

2 入学年度はいつですか



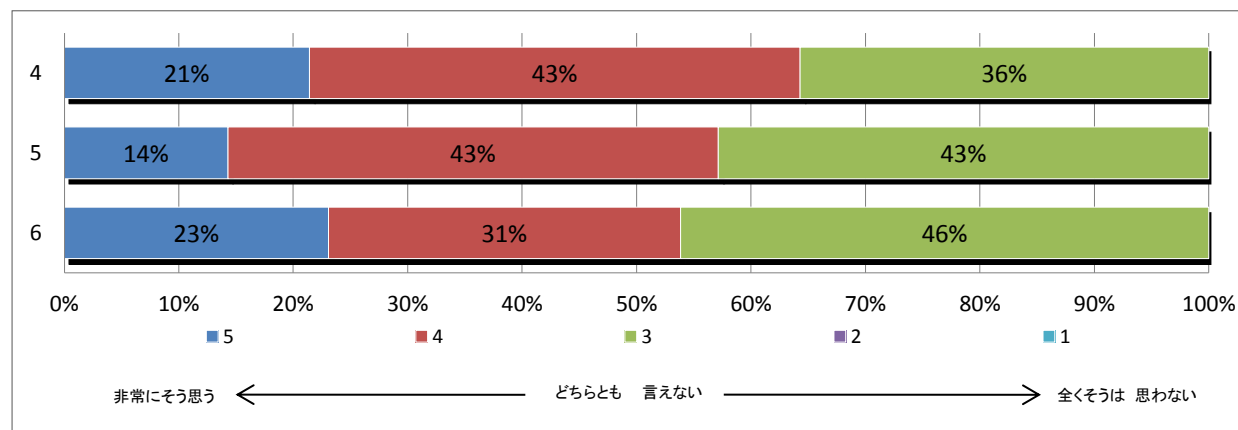
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

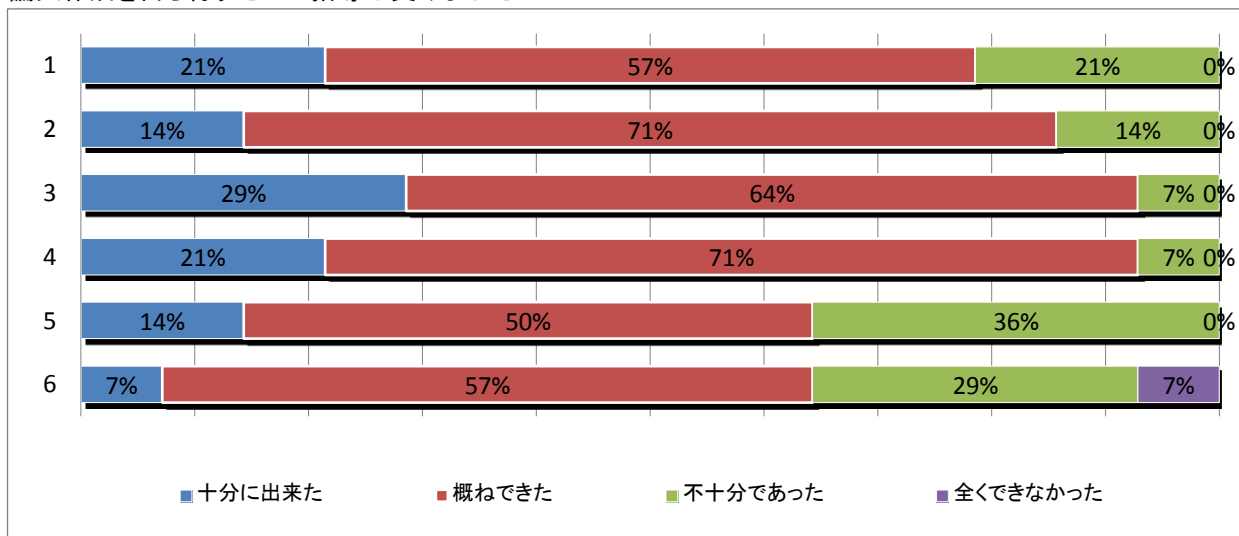
5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか

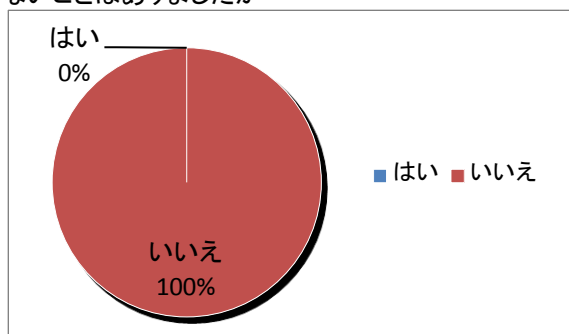


実験科目(研究指導)

- 1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることができましたか
- 2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか
- 3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか
- 4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか
- 5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか
- 6 論文作成を自ら行うための指導を受けましたか



7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありませんでしたか



6. 大学院教育に対する学生の評価と要望を把握するための学生インタビュー

日時 平成25年3月27日(水) 17:00~18:05

場所 桜ヶ丘共通教育棟2階201講義室

参加者 修士課程1年 2名 博士課程2年 1名、FD委員会委員 4名 大学院係長

授業評価アンケートでは大学院学生の意見を十分に把握できておらず、大学院教育の改善のために幅広い学生の意見が必要であることから、本年度の新しい試みとしてインタビューの機会を設けた。年度末に実施したため参加学生数が少なかったが、インタビューによる情報収集の有用性を検証することも目的とし、トライアルとして実施した。参加者の自己紹介の後に、学生が研究科に在籍して思うこと、困っていることなど自由な意見を聞き、教員からの質問と学生との意見交換を行った。

科目(講義)履修について

- 社会人大学院生であっても、18時以降の授業であれば出席できる状況である。
- 博士課程で専門内容を教授してもらっているが、十分な理解をするためには自分で本を読んで勉強する必要がある。自分のためにどこまで役立っているのかよくわからない。

eラーニングについて

- 大学に行って授業を受けることで、自分のスイッチが切り替わる感じがするので、個人的にはeラーニングが導入されたとしても、対面授業の方を選ぶ。
- eラーニングのような遠隔授業では、授業に集中しにくいと思う。

研究室を超えた学生間の交流について

- 横のつながりを保つため、3月に実施する修士課程中間発表会の後に「懇親会」などを設けてはどうだろうか。
- 社会科学系では例年8月に複数の分野合同で発表会を行い、その後に懇親会を行っている実例がある。
- 医系の博士課程にあっても、歯系大学院生発表会のようなイベントがあれば横のつながりが保てるのではなかろうか。
- 留学生と日本人学生が交流する場も必要ではなかろうか。

卒業後の進路と就職支援について

- 社会人学生で既に就職している学生は良いが、修了後に就職を考える場合は不安が多い。
- 良い研究成果を上げることが研究職に就職するためには重要であるが、鹿児島では難しい現状もある。
- 就職に関するメールは届いている。

学費の免除、奨学金等経済的支援について

- 奨学金を利用しているため、返済義務がある。学費の免除ができることが望ましい。

鹿児島大学の特色について

- 鹿児島大学としての特色はわからない。

今回の学生インタビューで、医師、歯科医師以外のバックグラウンドを持つ本研究科の学生が、研究環境にほぼ満足はしているものの、様々な改善点があることが明確になった。今後の課題は以下の3点であった。

- 1) 大学として学生間交流の場をいかに提供できるか、FD委員会から教育委員会に働きかける必要があるのではなかろうか。
- 2) 就職支援のための教員の一般企業とのコネクションには限界があることから、大学として就職情報を積極的に提供する必要がある。
- 3) RA以外にも何らかの形で院生の生活を支援できるような方策を検討する。

学生からの要望を直接聞くことは重要であり、来年度以降も定期的にも実施することが望まれた。

7. 授業公開

本研究科の授業公開の主旨を「優れた授業を公開し、参観をした教員が授業方法を学ぶ機会を提供する」とし、昨年度の学生による授業評価結果を参考に対象科目を選考した。後期開講科目のうち、各講師から承諾を得ることのできた修士課程1科目を公開授業として実施した。

臨床薬剤学概論（修士科目） 堀内 正久（環境医学分野 准教授）

平成25年1月11日（金） 6限目 テーマ：産業医の健康増進・維持への取り組み1 参観者2名

授業参加者からは授業のすすめ方が参考になったとの感想が報告された。また、授業を公開した教員からは、参加者から指摘された事項を今後の授業に行かしたいとのコメントがあった。例年参加者が少ない。授業公開は大学の方針であるが、本研究科においては準備の負担もあり、効果を検討する必要がある。

8. おわりに

平成24年度は、研究科で課題となっていた学習支援システムの普及を目的とする講演会、講習会を医学科FD部会と協働して桜ヶ丘地区の教職員を対象として実施した結果、その後学習支援システムの利用者が増加している。また、新しい試みとして学生のインタビューと他大学の視察を実施し、研究科の教育改善につながる有用な情報を収集することができた。多忙な教員がFD活動に参加するためには、より関心の高い事項について実践的なプログラムを計画することと、新たな情報を提供することが必要であり、教務、学生生活の委員会、また桜ヶ丘地区の学部、附属病院とも協力して活動を継続していきたいと考える。

保健学研究科

平成 24 年度 保健学研究科 FD 委員会活動報告

1. はじめに

平成 24 年度保健学研究科 FD 委員会の活動として、

(1)学生による授業評価、(2)TA アンケート、(3)教員による修士論文発表の評価、(4)講演会、を実施した。

それぞれに活動について、概略を述べる。

2. 学生による授業評価

平成 24 年度は、受講者少数の科目を除き、博士前期課程前・後期合わせて 15 科目において学生による授業評価を実施した。アンケート項目は以下のとおりである。

授業評価アンケート

あなた自身について

- 1 この授業科目のシラバスを前もって読みましたか。
- 2 この授業の予習または復習をしましたか。
- 3 この授業科目に関連のある本(参考書や文献等)を読みましたか。
- 4 授業中にノートを取りましたか。
- 5 この授業を何回ぐらい欠席しましたか。

(0 回、1・2 回、3・4 回、5 回以上)

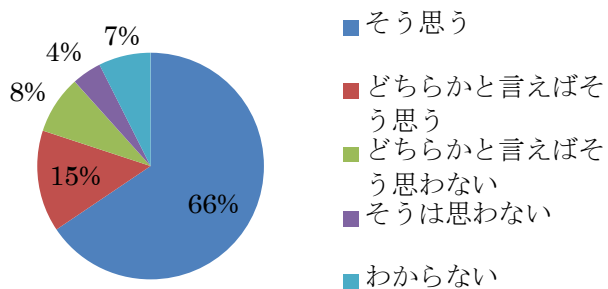
授業に対する評価

- 6 授業はシラバスに沿った内容でしたか。
- 7 配付資料は適切であり、授業に役立ちましたか。
- 8 授業内容に興味を持ってましたか。
- 9 授業の進め方は適切でしたか。
- 10 教員は授業に対する熱意がありましたか。
- 11 授業中の話し方、声の大きさ、明瞭さは良かったですか。
- 12 学生の質問に対して適切な対応がなされましたか。
- 13 授業を受講して、知力・学力の向上に役立ちましたか。
- 14 この授業は、全体的に満足できるものでしたか。

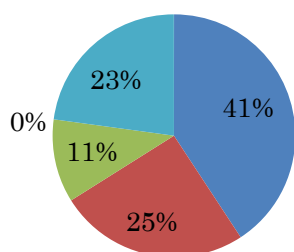
自由記述

この授業に対して、上記以外に考えたこと、良かった点、その他授業改善に役立つ意見があれば書いて下さい。

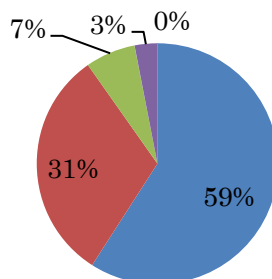
【問1】 共通科目



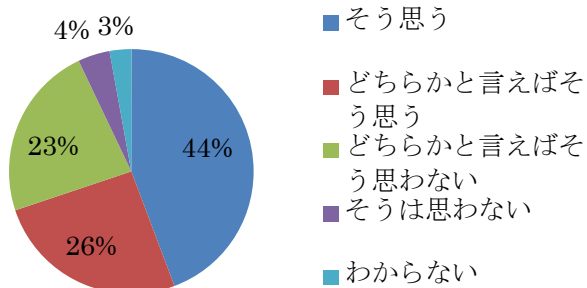
【問1】 看護共通



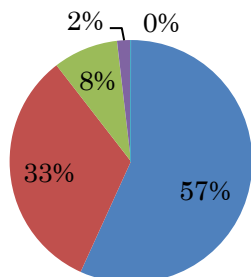
【問1】 理作専門



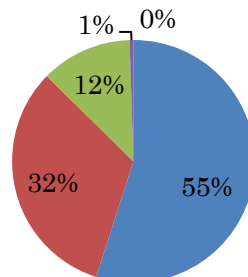
【問2】 共通科目



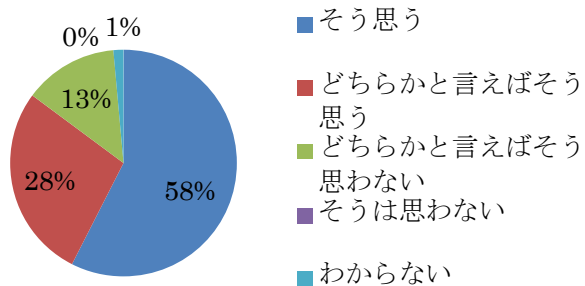
【問2】 看護専門



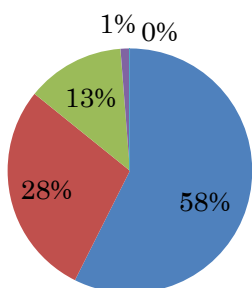
【問2】 理作専門



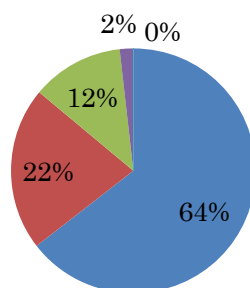
【問3】 共通科目



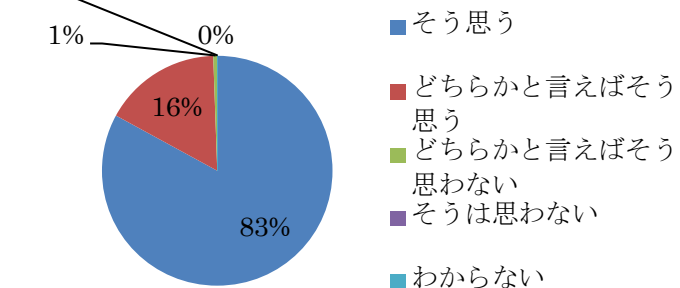
【問3】 看護共通



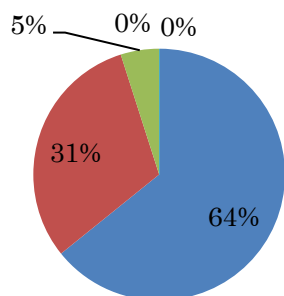
【問3】 理作専門



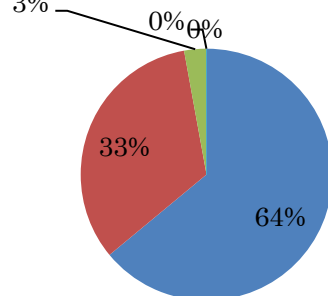
【問4】 共通科目



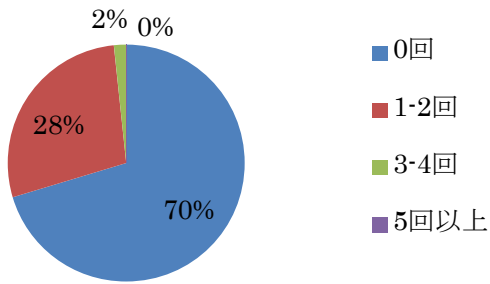
【問4】 看護共通



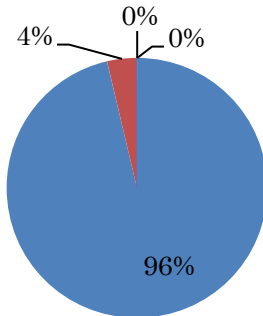
【問4】 理作専門



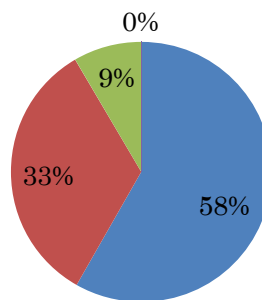
【問5】 共通科目



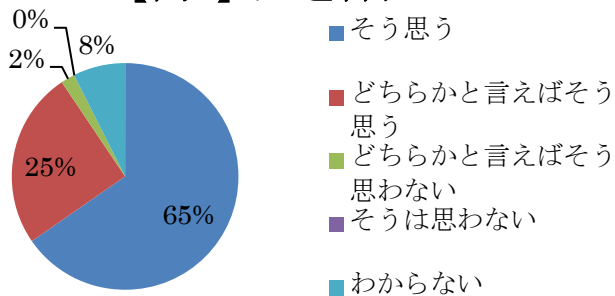
【問5】 看護共通



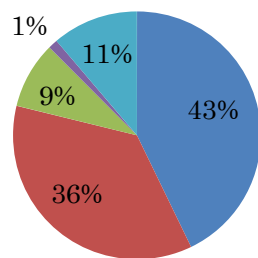
【問5】 理作専門



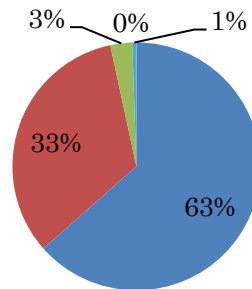
【問6】 共通科目



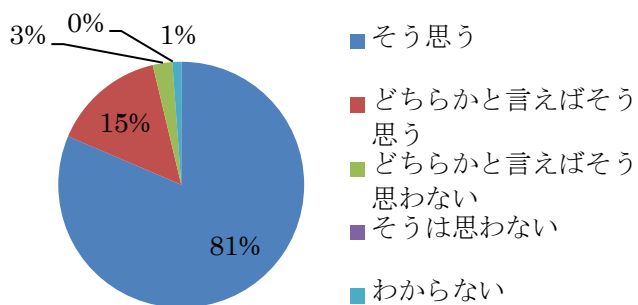
【問6】 看護共通



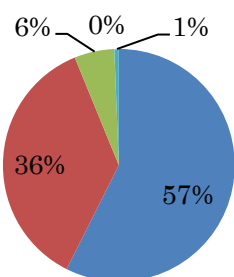
【問6】 理作専門



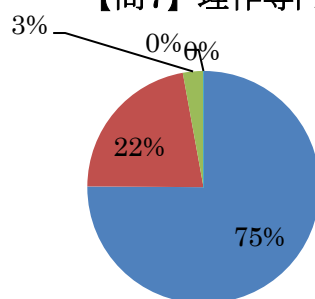
【問7】 共通科目



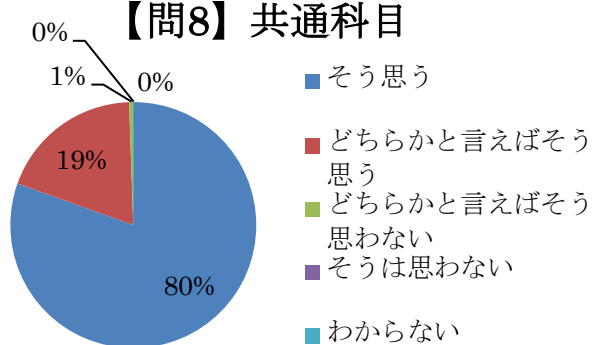
【問7】 看護共通



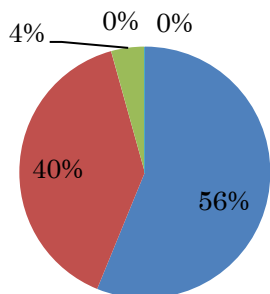
【問7】 理作専門



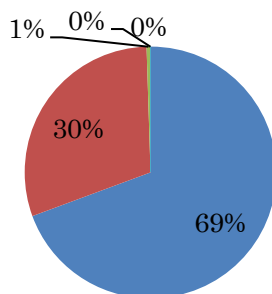
【問8】 共通科目

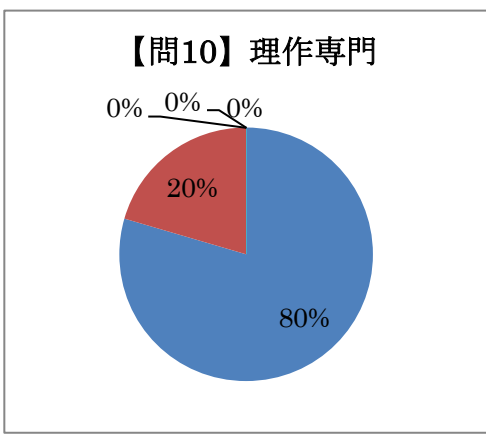
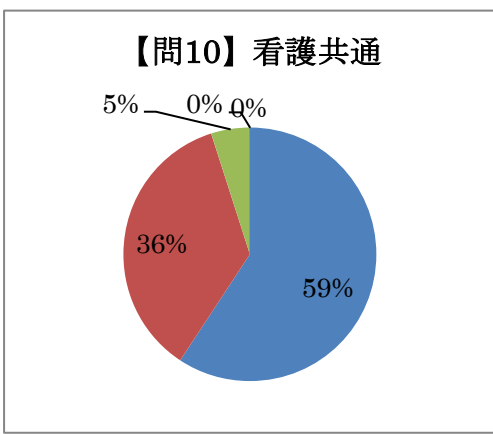
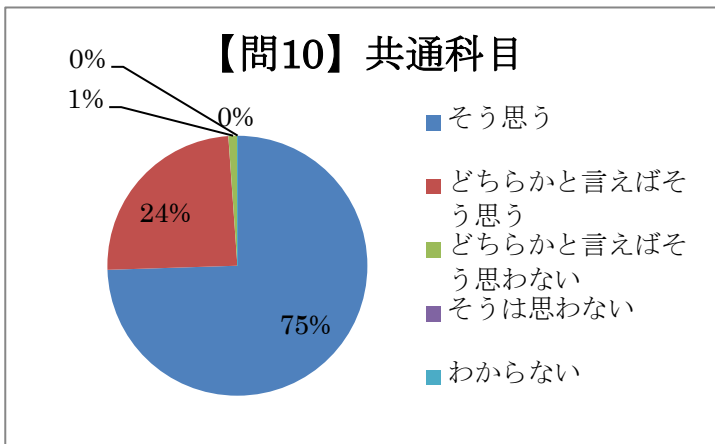
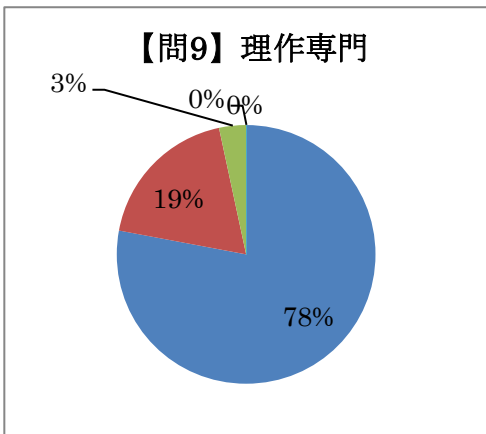
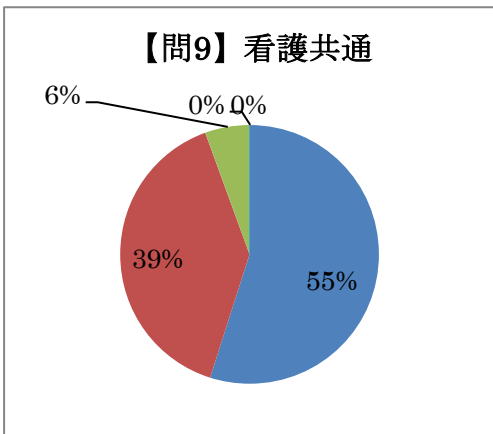
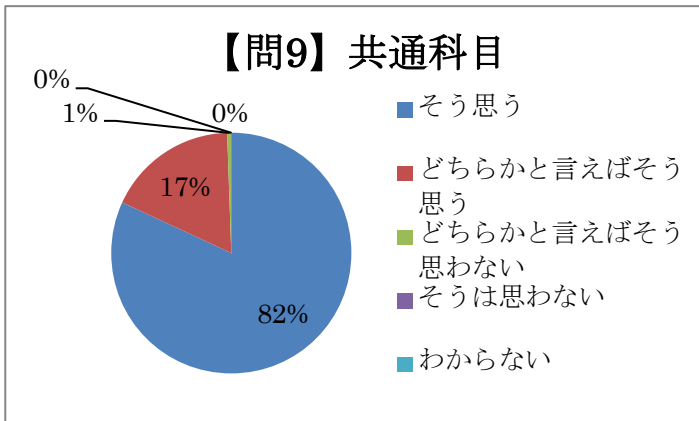


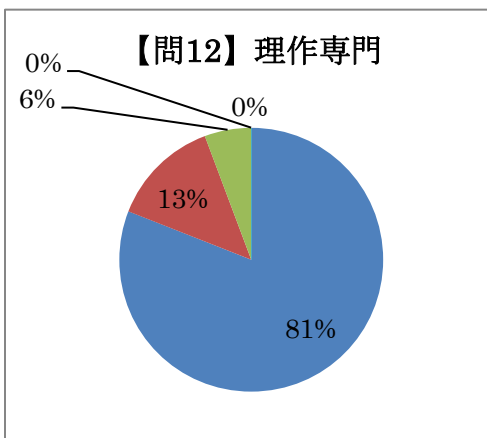
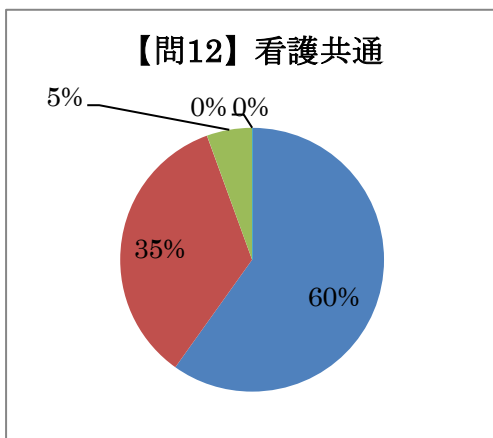
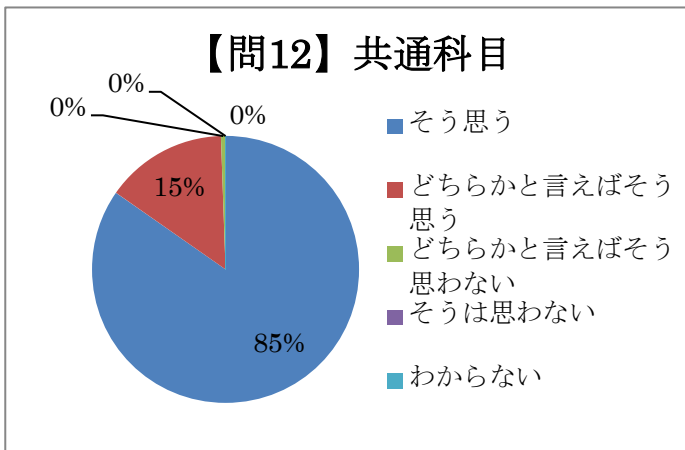
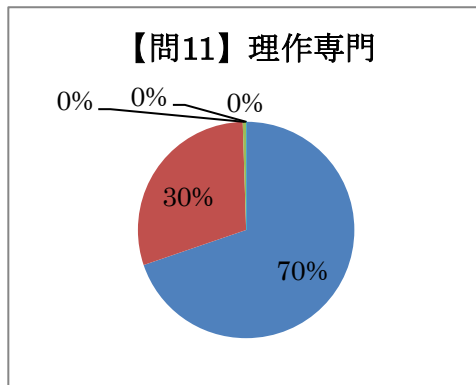
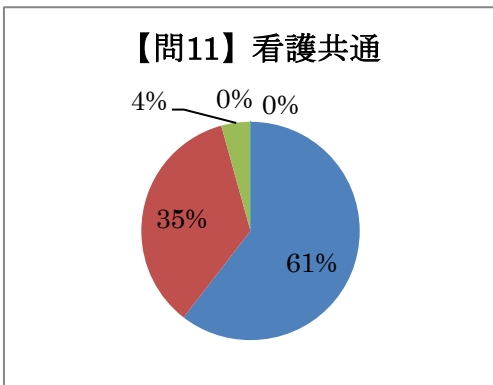
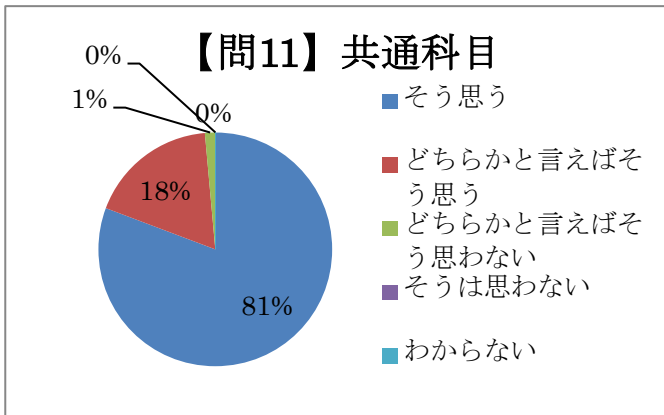
【問8】 看護共通

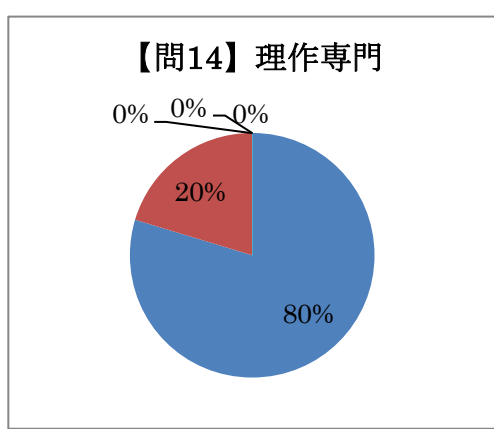
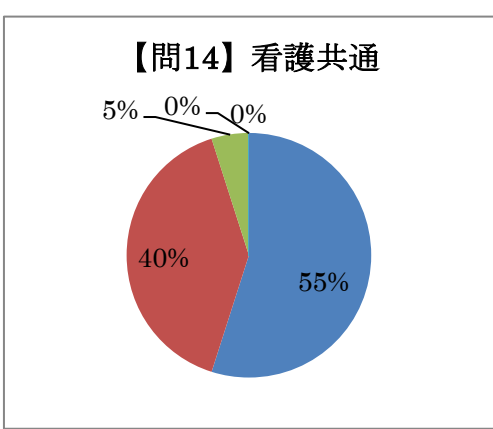
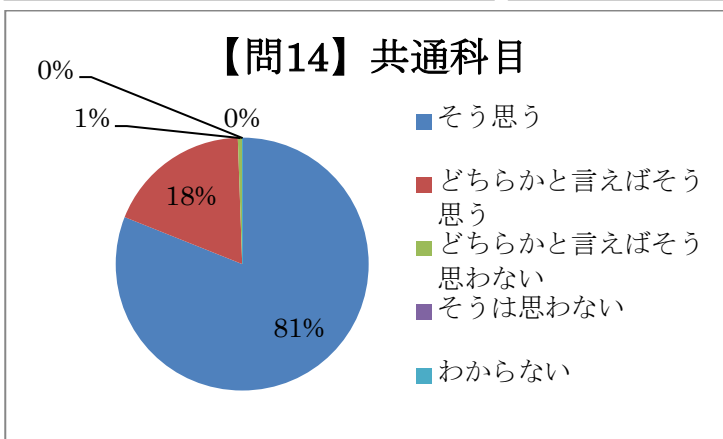
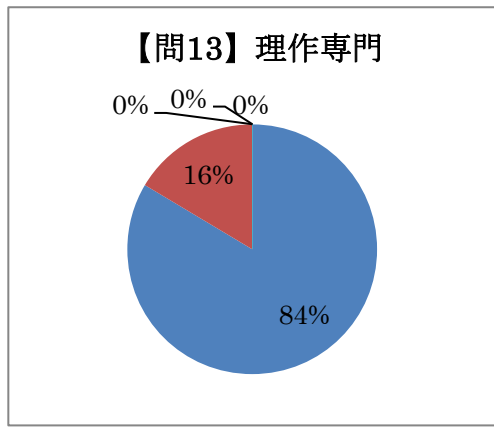
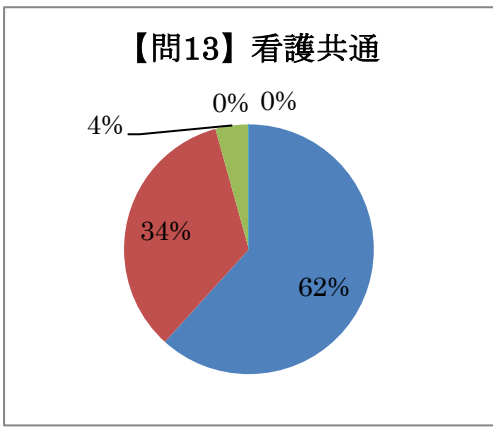
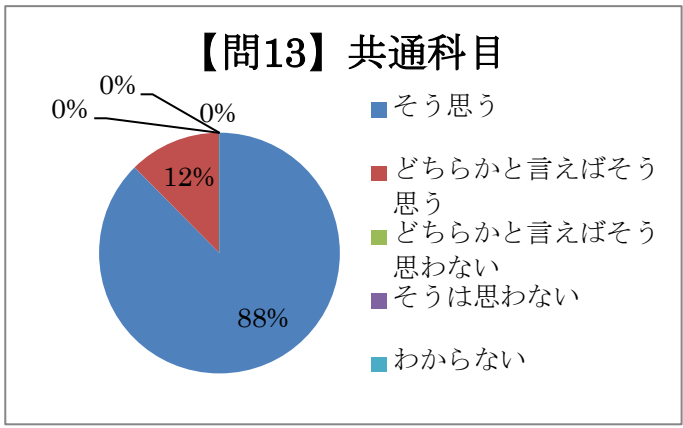


【問8】 理作専門









対象となった 15 科目を、

全領域共通科目（以下、共通科目） 5 科目

看護学領域共通科目（以下、看護共通科目） 3 科目

理学療法・作業療法学領域専門科目（以下、理作専門科目） 7 科目

に分類して、分析した。

(1)あなた(学生)自身について 【問 1～5】

「シラバスを前もって読みますか」という【問 1】に対しては、3 科目とも比較的低い割合となった。特に看護共通科目では「そう思う」と答えた人が 40.7%と低かった。これは大学院の授業の場合、あまり受講科目の選択肢が多くない上に、時間割の曜日等によって制限されるためと考えられる。

【問 2】の予習復習と【問 4】のノート取りについては、共通科目ではノート取りの割合が高く、看護共通科目・理作専門科目では比較的予習復習の割合が高くなった。これは各々の科目における授業形態の相違が影響していると思われる。

【問 5】の出席状況では、3 科目とも高い出席率となった。特に看護共通科目では欠席 0 が 96.3%と非常に高い割合であった。ほぼ全受講者が昼間勤務し、夜間時間割を選択していることを考えれば驚くべき数字である。学生本人の努力と共に、職場等周囲の理解と協力によるものと考えられる。

(2)授業に対する評価 【問 6～14】

各問を通して、全体的に満足度の高い結果となった。

【問 6】の割合が低めであったのは、【問 1】でシラバスそのものを前もって読んでいる学生が少なかったためであろう。

共通科目、理作専門科目では各問とも高い割合であった。特に共通科目については、看護学と理学療法・作業療法学の両領域の学生が一緒に受講し、多職種の情報、考え方等を直接議論できる場であることが、高い満足度につながっていると考えられる。より魅力的な大学院授業をめざすためには、今後このような科目群を増やすことも検討に値すると思われる。看護共通科目も、各問とも高い割合ではあったが、他の科目に比較すると低い傾向が示された。各問とも同じような比率であることから、おそらく何人かの学生が各問に対して低く評価したと推測される。少数ではあるにせよ、このような学生がいることについて、授業の早い時期に担当教員にフィードバックできる工夫が必要だろう。

3. TA アンケート

今年度も、授業における教育支援者としての TA のあり方を検討するための資料とすることを目的として、TA アンケート（8つの設問と 2つの自由記述）を実施した。（結果については省略）

4. 教員による修士論文発表の評価

各領域で、修士論文発表会において発表内容について教員が評価を行った。評価項目は、

- (1) 発表の態度・仕方は良かったか
- (2) 発表の内容は良かったか

- (3) スライド等は良く整理され、分かりやすかったか
- (4) 質問に対して的確に答えていたか
- (5) 独自の発想で研究したことが感じられたか

である。各項目について秀（5点）・優（4点）・良（3点）・可（2点）の4段階で評価した。それぞれの結果は、各指導教員にフィードバックされ、学生への指導に活用された。

5. 講演会

今年度、保健学研究科 FD 委員会は医学部 FD 委員会保健学科部会と共同主催で、講演会を実施した。

「高度専門職の養成に向けた現状と課題への取り組みについて－修士課程における保健師・助産師・NP 教育が人々の生活の質の確保と学術の向上に及ぼす効果について」

日時：2013年1月10日（木） 17時～19時

場所：鹿児島大学医学部鶴陵会館

講師：村嶋 幸代（大分県立看護科学大学学長・東京大学名誉教授）

主催：医学部 FD 委員会保健学科部会・保健学研究科 FD 委員会

共催：全国保健師長会鹿児島支部、社団法人鹿児島県看護協会

参加者は保健学科教員、学部生、院生、鹿児島県内の看護師・保健師等、約 150 名だった。講演は、講師による自己紹介の後、

- ・全国的に、新人保健師と中堅保健師の育成が課題となっている
- ・保助看法が改正され、教育年限が1年となり、修士課程での教育に道が開けた
- ・成果が求められる現在、保健師の専門性と活動成果を明示するにはどうしたらよいか?

などの、話題提供の趣旨についての説明があり、その後、

- (1)保看統合化カリキュラムの問題点と保健師教育の動向
- (2)保健師の専門性と必要な実習
- (3)修士課程における保健師教育の紹介
- (4)修士課程における助産師教育と NP 教育
- (5)学士課程における看護師教育と受験生への説明

について、綿密なデータと具体的なケースを挙げながら説明された。その内容は、高い専門性に裏付けながらも、広範な職域に関わる教員・社会人、さらに院生・学生の理解をも可能にするものであった。さらに、講演後の自由討論においては、大学院教育に関するもの、鹿児島県における保健活動に関するもの、など多くの質疑応答がなされ、活発な議論が交わされた。

（文責 医学部保健学科 深野 佳和）

司法政策 研究科

1 組織体制

本学大学院司法政策研究科（以下、「法科大学院」という）におけるF Dを企画・実施する組織として、鹿児島大学大学院司法政策研究科運営規則に基づき、教育活動点検評価委員会（以下、「F D委員会」という）が設置されている。

F D委員会の役割は、本学法科大学院の教育内容の点検・評価・改善に関すること全般にわたり、具体的な活動は、「教育活動点検評価活動の実施に関する申し合わせ」に基づいて、各年度のF D委員会が定める活動計画によって決定される。毎年実施する活動としては、以下の各活動が挙げられる。

- ① 法科大学院における教育指針・到達目標の検討
- ② 学生による授業評価アンケートの実施
- ③ 学生による期末試験等に対するアンケートの実施
- ④ 教員相互の授業参観
- ⑤ 教員自身による映像での自己点検
- ⑥ 成績評価総括の取りまとめ
- ⑦ 授業改善のための取組みに関する報告・検討会
- ⑧ 教員の外部研修の推進
- ⑨ 外部の実務家による授業評価の実施
- ⑩ 法科大学院認証評価および国立大学法人としての各評価への対応
- ⑪ F D報告書の作成

本学法科大学院におけるF D活動は、すべての教員を対象として実施している。研究者教員と実務家教員の双方とも、専任教員及びみなし専任教員も含めて、F D活動に参加している。F D懇談会の開催は、学期の始めに非常勤教員に対しても案内されている。

授業評価アンケート、授業のビデオ録画、教員相互の授業参観については、専任教員の担当科目のみならず、非常勤教員の担当科目も含めた全科目を対象としている。

2 F D活動の概要

平成 24 年度に行ったF D活動の概要は、以下のとおりである。

- | | |
|-------|--|
| 4月10日 | 第1回F D委員会 年間計画の作成，啓発スローガンの作成，成績評価総括報告書の承認 |
| 4月11日 | F D懇談会 平成 24 年度前期F D活動実施計画，F D活動スローガンの策定，「共通的到達目標」の位置づけの検討 |

4月25日	第2回FD委員会 前期中間授業評価アンケート実施計画, 成績評価基準の共通化の検討
5月16日	FD懇談会 授業評価アンケートに対する所感と対応の記載方法について, 成績評価方法の統一的記載方法について
5月下旬	前期中間授業評価アンケート実施
5月30日	第3回FD委員会 成績評価基準の共通化, 授業評価アンケート集計結果, 「最低限修得すべき内容」の検討
6月上旬	各講義のビデオ収録
6月13日	FD懇談会 前期中間授業評価アンケート結果, 成績評価方法の統一的記載方法
7月11日	FD懇談会 成績評価方法の統一的記載方法, 九州大学授業参観報告, 前期中間授業評価アンケート「所感と対応」の検討
7月下旬	前期最終授業評価アンケート実施
9月5日	第4回FD委員会 成績評価総括報告書の承認, 前期最終授業評価アンケート結果, 期末試験アンケートの実施方法, 成績評価方法の統一的記載方法の検討, 後期FD活動実施計画の策定
9月12日	FD懇談会 平成24年度後期FD活動実施計画, 前期最終授業評価アンケート結果, 九州大学授業参観報告
9月26日	第5回FD委員会 「法科大学院において最低限修得すべき内容」の検討, シラバス記載方法の見直し, 期末試験アンケートの実施
10月5日	臨時FD委員会 「法曹に必要なマインドとスキル」「法科大学院において最低限修得すべき内容」の検討
10月10日	FD懇談会 「法曹に必要なマインドとスキル」「法科大学院において最低限修得すべき内容」の検討, 司法研修所における意見交換会報告
10月31日	第6回FD委員会 前期期末試験・成績評価総括報告書アンケート結果, 「法曹に必要なマインドとスキル」「法科大学院において最低限修得すべき内容」の検討, 成績評価総括報告書の開示方法, 後期中間授業評価アンケート, 講義録画について
11月上旬	後期中間授業評価アンケート実施
11月中旬	各講義のビデオ収録
11月14日	教授会において, 「法曹に必要なマインドとスキル」「法科大学院において最低限修得すべき内容」の承認
11月14日	FD懇談会 前期期末試験・成績評価総括報告書アンケート結果, 「法科大学院において最低限修得すべき内容」を意識してシラバスの記載方法
12月5日	第7回FD委員会 前期中間授業評価アンケートの集計, アンケート「所感と対応」の作成, 講義録画ビデオの活用方法, 前期授業評価を

	踏まえた特定科目の検証結果，弁護士による外部評価の実施計画
12月12日	F D懇談会 九州大学授業参観報告，後期中間授業評価アンケート結果，同「所感と対応」の検討
1月8日	第8回F D委員会 後期最終授業評価アンケートの実施方法，授業改善報告会の企画，チューター・起案指導担当弁護士へのアンケート実施計画
1月16日	F D懇談会 授業改善報告会（報告担当：土居教授・志田教授），弁護士による外部評価の実施計画
1月下旬	後期最終授業評価アンケート実施
2月6日	第9回F D委員会 後期最終授業評価アンケート結果，小規模科目の授業評価アンケート実施方法，授業参観結果のとりまとめ，チューター・起案指導弁護士へのアンケート実施方法，弁護士による外部評価の実施計画
2月13日	F D懇談会 後期最終授業評価アンケート結果，後期期末試験・成績評価総括報告書アンケートの実施方法，チューター・起案指導弁護士へのアンケート実施方法，弁護士による外部評価の実施計画
2月下旬	チューター・起案指導弁護士へのアンケート実施
3月5日	第10回F D委員会 自己点検・評価報告書の承認
3月11日	第11回F D委員会 成績評価総括報告書の承認，自己点検・評価報告書の承認
3月13日	F D懇談会 後期最終授業評価アンケート所感と対応，チューター・起案指導弁護士へのアンケート結果総括，弁護士による外部評価実施要領の検討
3月中旬以降	弁護士による外部評価を開始（平成25年度4月まで）

3 F D活動の内容

(1) 学生による授業評価アンケートの実施

教育内容や教育方法に対する学生からの評価は，①授業評価アンケート，②「学期末試験」「出題の趣旨／採点のポイント」に対するアンケート，③クラスワークによる担任との相談や懇談，④その他の方法を通じて実施された。

法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目については，①授業中間アンケート（授業のおよそ半分を経過した，前期は5月，後期は11月），②授業終了時のアンケートを実施している。講義終了時だけでなく，進行中の授業に対する学生の評価を把握し，開講中の講義の改善に当該学生の評価を活かすために行った。

「学期末試験」「出題の趣旨／採点のポイント」に対するアンケートは法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目について，期末試験が終了したのち，各科目の成績評価総括報告書が公開された時点で，学生に対するアンケートを実施して，①期末試験の出題が「基本的な法的知識や体系的理解」「法的思考能力」「事

案の事実を把握し分析する能力」をそれぞれどの程度問うものであったか、②成績評価総括報告書に記載された「出題の趣旨／採点のポイント」が自身の答案を見直して復習するのに資するものであるかどうかを評価した。

上記すべてのアンケート結果は、授業で用いている電子シラバス・システムに掲載されることにより、当該科目の履修者のみならず、すべての学生に向けて公開された。また、最終アンケートについては、翌年度の担当教員が同一である場合は、翌年度のシラバス・システムの欄にも、参考データとしてアンケート結果が掲載された。

授業評価アンケート（中間・最終）の結果が通知されたのち、法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目については、担当教員がアンケート結果に対する「所感と対応」の作成を行った。

（2）クラスワークによる担任との相談や懇談

クラスワークによる担任との相談や懇談では、学生を3～5名程度のクラスに分けて、これに対して1名の担任と1名の副担任を割り当てて、教員が学生の学修全般や学生生活をケアした。

（3）教員相互の授業参観

本学法科大学院においては、各教員はすべての授業を自由に相互参観することができる。また、学期ごとに最低でも1回は、他の教員による授業を参観した。

授業参観の感想・評価等については、各教員から報告書として提出され、報告書は、当該科目の担当教員に送付されると同時に、FD懇談会において回覧され、授業改善のための検討資料とされた。

（4）授業のビデオ収録参観

授業を学期ごとに1回ずつビデオ収録し、ネットワーク上のサイトで随時閲覧できる体制を構築している。各教員は、自分自身の講義をこのビデオ映像で視聴して、改善点や成功している点を自ら点検するためのツールとして活用した。

（5）外部研修等への参加とくに九州大学法科大学院に出かけて授業参観

教育連携を結んでいる九州大学法科大学院のFD活動への参加がある。各学期、九州大学法科大学院が実施する授業参観に参加し、他の法科大学院の授業の様子を見学して、FD懇談会で報告した。また、法科大学院協会が主催する司法研修所の授業参観等にも教員を派遣した。

その他、本学法科大学院は、PSIMコンソーシアム（法実務技能教育教材開発コンソーシアム）の参加校である同コンソーシアムが主催する研修に教員を派遣した。

（6）外部の実務家による評価

平成24年度から新たに2つの取組みとして、①課外における学生の学修支援を依頼

している鹿児島県弁護士会所属の若手弁護士に対するアンケートを実施し、日頃の学生の状況を通じて感じる本学の教育の問題点などを調査した。その結果は、平成25年3月13日開催のFD懇談会において教員に開示し、平成25年度以降の教育活動に反映させるための方法が議論された。

次に、②独自の第三者評価制度として、鹿児島県弁護士会所属の弁護士による授業評価を実施した。平成24年度は、法学未修者を対象とする1年次の講義科目3つを対象として選定し、3名の弁護士が、シラバス、教材、期末試験、成績評価総括報告の内容を検証し、実務家および法科大学院修了者としての目線から、その内容の妥当性を審査する。平成24年度後期開講科目の成績評価等を評価対象として、平成25年3月に審査を実施した。

(7) 成果に結びつかせるための方策・工夫

本学法科大学院のFD活動は、教員間の問題意識を共通化するとともに、その取り組みを具体的な成果に結びつけるため、①情報伝達の双方向・多方向性、②日常的な意見交換の実施を重視している。

本学法科大学院におけるFD活動は、月例で開催されるFD懇談会を中核的な「場」として実施している。授業参観結果、授業評価アンケートの結果、授業評価アンケートに対する応答内容、各教員が参加した外部研修など、各教員がそれぞれに行ったFD活動は、すべて定例のFD懇談会の席上で全員に対して資料により開示される。そして、懇談会では、各種報告書等の内容に基づいて、自由な意見交換が行われる。これによって、個々の活動を記録・蓄積するだけでなく、その成果を常に全教員がリアルタイムに近い形で共有し、即時に議論の対象とすることによって、個々の活動により得られた知見を多面的に検証し、共有している。

また、この懇談会を教授会と同頻度で定例化することによって、授業改善のための情報交換・意見交換を特別な「行事」に仕立てるのではなく、日々の教育活動や研究科運営と一体化した日常的な取り組みとしている。懇談会では、FD委員会が設定したテーマに限らず、各分野や各教員から授業や学生の状況に関する悩みや問題提起を自由に行う時間帯を設けている。

臨床心理学 研究科

臨床心理学研究科 FD 活動報告

1. はじめに

臨床心理学研究科FD委員会では、平成24年度FD活動として学生による授業評価アンケート、GPAによる厳格な成績評価、ならびに教員による授業公開・授業参観などを実施したので、その概要を以下に報告する。

2. 学生による授業評価の実施

(1) 実施時期

原則として、24年度前期第1回目が6月11日(月)～15日(金)、第2回目が7月23日(月)～27日(金)、後期第1回目が11月26日(月)～30日(金)、第2回目が1月21日(月)～25日(金)であった。休講や補講の日程調整から、いくつかの科目では上記以外の時期に行われたものもある。

「臨床心理地域援助実習」(いわゆる学外実習科目)は、その科目の特殊性を考慮し、各セメスター終了後の1回のみの実施とした。

(2) 各科目の評価項目

専門職大学院である本研究科では、幅広い領域で活躍する高度専門職業人養成に特化した授業科目を網羅しているため、科目の特殊性に鑑み、それぞれ独自の質問項目を設定している。また、それらの質問項目は普遍的なものではなく、必要に応じて、よりふさわしい評価項目への修正・改定が柔軟に行われることが望ましい。そのことは、学生の声を満遍なく拾い上げ、それらを最大限、授業改善に役立てるためのツールのメンテナンスと言える。

現時点での評価項目を以下に挙げる。

<講義科目>

1. 授業を総合的に5段階で評価してください。
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか(テキスト・資料等を使用した場合のみ回答してください)。
3. 授業の内容は理解できましたか。
4. 授業の内容に満足していますか。
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか。
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか。
7. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

<演習科目>

1. 授業を総合的に5段階で評価してください。
2. 授業の内容は理解できましたか。
3. 授業の内容に満足していますか。
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか。
5. 授業を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか。

6. あなたは授業を熱心に受講しましたか。
7. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

＜実習科目＞

1. 実習を総合的に5段階で評価してください。
2. 実習での体験に満足していますか。
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか。
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか。
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか。
6. この授業に対するご意見を自由に書いてください。

また、「エスノグラフィック心理臨床論」と「臨床心理関連行政論」における評価項目は以下のとおりである。前者は、担当教員の意向から従来の項目から若干の修正が行われた。

「エスノグラフィック心理臨床論」

1. 授業を総合的に5段階で評価してください。
2. 心理臨床を行う上で、状況や文脈の大切さを理解することができましたか。
3. 事象を観察し、意味を考える大切さが理解できましたか。
4. 授業に意欲的に取り組むことができましたか。
5. レポートなどの課題に意欲的に取り組むことができましたか。

「臨床心理関連行政論」

1. 授業を総合的に5段階で評価してください。
2. 授業の内容は理解できましたか。
3. 授業の内容に満足していますか。
4. 授業を通して臨床心理実践と社会システムとの関係に関心が高まりましたか。
5. あなたは授業を熱心に受講しましたか。

(3) 結果

結果は以下のとおりであった。

表 1. 前期第1～2回目の講義科目における授業評価(2科目平均評価点)

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.5	4.7	5.0	4.0	4.7
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.5	4.6	5.0	3.5	4.7
3. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.5	4.5	5.0	4.0	4.7
4. 授業の内容に満足していますか	5.0	4.0	4.8	5.0	3.5	4.7
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.5	4.7	5.0	4.5	4.9
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	4.0	4.6	5.0	4.0	4.7

表 2. 前期第 1～2 回目の講義科目における授業評価(1 科目評価点)

(科目名) 臨床心理関連行政論	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	3.0	4.6	5.0	4.0	4.9
2. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.0	4.5	5.0	3.0	4.7
3. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.0	4.6	5.0	3.0	4.7
4. 授業を通して臨床心理実践と社会システムとの関係に関心が高まりましたか	5.0	3.0	4.5	5.0	4.0	4.9
5. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	4.0	4.7	5.0	4.0	4.9

表 3. 前期第 1～2 回目の演習科目における授業評価(7 科目平均評価点)

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	3.3	4.4	5.0	3.7	4.5
2. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.3	4.2	5.0	3.4	4.3
3. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.0	4.3	5.0	3.3	4.4
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.3	4.6	5.0	3.4	4.7
5. 授業を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.6	4.5
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.5	4.4	5.0	3.6	4.5

表 4. 前期第 1～2 回目の学内実習科目における授業評価(2 科目平均評価点)

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	3.0	4.3	5.0	3.5	4.3
2. 実習での体験に満足していますか	5.0	3.0	4.3	5.0	3.0	4.2
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	5.0	3.5	4.5	5.0	3.5	4.4
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.0	4.4	5.0	3.0	4.3
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか	5.0	3.5	4.6	5.0	3.5	4.5

表 5. 前期第 1～2 回目の学外実習科目における授業評価(2 科目平均評価点)

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に 5 段階で評価してください				5.0	4.5	4.7
2. 実習での体験に満足していますか				5.0	4.5	4.8
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	(実施なし)			5.0	4.5	4.8
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか				5.0	4.0	4.6
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか				5.0	4.5	4.8

表 6. 後期第 1～2 回目の講義科目における授業評価(4 科目平均評価点)

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	3.0	4.4	5.0	3.5	4.6
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	2.8	4.3	5.0	3.5	4.6
3. 授業の内容は理解できましたか	5.0	2.8	4.2	5.0	3.0	4.5
4. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.0	4.3	5.0	3.3	4.6
5. 授業を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.3	4.6
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.0	4.3	5.0	3.0	4.5

表 7. 後期第 1～2 回目の講義科目における授業評価(1 科目評価点)

(科目名) エスノグラフィック心理臨床論	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	3.0	3.7	5.0	3.0	4.2
2. 心理臨床を行う上で、状況や文脈の大切さを理解することができましたか	5.0	3.0	3.9	5.0	3.0	4.4
3. 事象を観察し、意味を考える大切さが理解できましたか	5.0	3.0	3.9	5.0	3.0	4.5
4. 授業に意欲的に取り組むことができましたか	5.0	3.0	3.9	5.0	3.0	4.3
5. レポートなどの課題に意欲的に取り組むことができましたか	5.0	3.0	4.0	5.0	2.0	4.4

表 8. 後期第 1～2 回目の演習科目における授業評価(7 科目平均評価点)

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 授業を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	3.6	4.5	5.0	3.7	4.4
2. 授業の内容は理解できましたか	5.0	3.4	4.3	5.0	3.3	4.3
3. 授業の内容に満足していますか	5.0	3.1	4.4	5.0	3.0	4.4
4. 授業を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.6	4.7	5.0	3.3	4.5
5. 授業を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.4	4.6	5.0	3.6	4.5
6. あなたは授業を熱心に受講しましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.3	4.3

表 9. 後期第 1～2 回目の学内実習科目における授業評価(2 科目平均評価点)

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	3.0	4.0	5.0	3.0	4.3
2. 実習での体験に満足していますか	5.0	3.0	4.0	5.0	3.0	4.2
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	5.0	3.0	4.2	5.0	3.0	4.2
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.0	4.1	5.0	3.0	4.2
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか	5.0	3.0	4.3	5.0	3.0	4.3

表 10. 後期第 1～2 回目の学外実習科目における授業評価(2 科目平均評価点)

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. 実習を総合的に 5 段階で評価してください				5.0	4.0	4.8
2. 実習での体験に満足していますか				5.0	4.0	4.6
3. 実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	(実施なし)			5.0	4.0	4.7
4. 実習体験の中で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか				5.0	4.0	4.6
5. あなたは実習に熱心に取り組みましたか				5.0	4.0	4.9

3. 厳格な成績評価制度について

(1) 成績評価方法 (表 11)

成績評価方法は、表 11 のとおりである。なお、この厳格な成績評価制度は、講義科目と演習科目に限られる。

表 11. 講義、演習科目の評価基準

	評価	評価得点	
合格	A+	90 点以上	特に優れた成績を示した者
	A	80～89 点	優れた成績を示した者
	B	70～79 点	合格と十分認められる者
	C	60～69 点	合格と認められる最低限度の成績を示した者
不合格	F	60 点未満	

(2) GPA (Grade Point Average) の計算方法 (表 12)

①GPA は、各科目の GP (Grade Point) に各授業科目単位数を乗じ、その総和を GPA 適合の履修登録科目総単位数で割って算出する。

②GPA 評価対象科目は受講生 10 名以上の講義、演習科目であり、受講生が 10 名に満たない授業ならびに実習科目は含まれない。

$$\text{例) GPA} = \{(\text{臨床心理学原論 GP} \times 2 \text{ 単位}) + (\text{臨床心理面接学原論 GP} \times 2 \text{ 単位}) + (\quad) + (\quad) \dots\} / \text{GPA 適合の履修登録科目総単位数}$$

表 12. GPA 適合科目 (講義・演習) の GP 配点表

	評価	評価得点	GP 得点	
合格	A+	90 点以上	4.0	特に優れた成績を示した者 (受講者の上位 20%までの人数につけることができる)
	A	80～89 点	3.0	優れた成績を示した者 (A+と A の学生が、合計で 40%以内の人数になるようにつける)
	B	70～79 点	2.0	合格と十分認められる者
	C	60～69 点	1.0	合格と認められる最低限度の成績を示した者
	不合格	F	60 点未満	0.0

※GPA の最高点は 4.0 であり、通常の 5 段階評価とは異なる。

4. 授業公開・授業参観

平成 24 年度の授業公開・授業参観は以下のとおりであった。例年のことだが、個人情報保護や守秘義務の観点から、授業公開の対象が研究科内に限定される。臨床心理学や心理臨床においては、なまの事例を検討対象にすることが多いため、やむを得ないことである。

以下の表 13、14 にて、平成 24 年度に実施された授業公開一覧を示す。

表 13. 平成 24 年度前期 臨床心理学研究科授業公開（研究科内のみ公開）

科目名	担当教員	公開日時	講義室等名
臨床心理関連行政論	土岐篤史	6 月 28 日（木）4 限	総研棟 4 階カンファレンス ルーム
医療心理臨床論	金坂弥起	6 月 29 日（金）3 限	総研棟 4 階カンファレンス ルーム

表 14. 平成 24 年度後期 臨床心理学研究科授業公開（研究科内のみ公開）

科目名	担当教員	公開日時	講義室等名
臨床心理面接学原論	中原睦美	1 月 11 日（金）3 限	総研棟 4 階カンファレンス ルーム

5. F D 研修会

平成 24 年度は下記のとおり、25 年度より着任予定の 2 名の新任教員を招き、F D 研修会を開催した。専門職大学院やそこでのカリキュラムの特徴、実習、特に学内実習に相当する鹿児島大学心理臨床相談室の業務についてガイダンスが行われた。

平成 24 年度 F D 研修会

日時：2013 年 2 月 12 日（火）13:30～16:30

場所：総合教育研究棟 4 階カンファレンスルーム

テーマ：本研究科における教育、研究のあり方について（研究科長：安部恒久）

- ①専門職大学院について
- ②カリキュラムについて
- ③実習について
- ④鹿児島大学心理臨床相談室について
- ⑤その他

6. その他

鹿大版 F D ガイド第 5 号「心理学に学ぶコミュニケーションの難しさについて」（平成 25 年 3 月発行）を、F D 委員長・金坂が執筆した。

文責：平成 24 年度 F D 委員長・金坂弥起

連合農学 研究科

大学院連合農学研究科 F D 活動報告

1. はじめに

大学院連合農学研究は、農学系の博士養成を目的に、佐賀大学、鹿児島大学、琉球大学の3大学4研究科が連合した博士課程のみからなる大学院で、平成24年5月1日現在日本人学生70名外国人留学生63名計133名が在籍している。平成19年度宮崎大学の離脱に伴い、21年度に大幅な組織改組を行い、3専攻9連合講座として再出発し、また単位制の導入を行った。学位申請に12単位必須で、新カリキュラムとして職業人教育や国際感覚を養うことを意図した人材養成セミナーや国際農業概論などを創設することで大学院教育の実質化を目指している。地理的に離れた構成大学間の教育をスムーズにするために、年に一度連大生が一堂に会して行う農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）の実施や、多地点制御遠隔講義システムを用いた授業を行うことで教育方法等の工夫を行っている。

また、本研究科では、学生1人に対し、主指導教員1人、副指導教員2人の計3人による指導体制をとっており、1年次の学生には「中間報告会」、2年次の学生には「中間発表会」を課し、その達成状況検証している。

F D活動に関しては、平成19年度に代議委員会のサブ委員会としてF D委員会が設けられ、農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）を中心とした授業アンケートの集計・解析評価を行い、改善に向けて取り組んでいる。

平成22年度は、3年に1度実施してきた自己評価・自己点検を行った。そして、さらにその自己評価書に基づき、平成12年度以来途絶えていた外部評価も受けて、21年改組後の連合農学研究科の教育システムや改善状況を把握することにした。

平成24年度のF D活動としては、F D委員会を4回開催し、大学院博士課程における「教員の研究指導能力の向上」を検討テーマに掲げ、アンケートのデータ分析、それに伴う改善に向けた検討を継続して行った。

また、本研究科における学位の質の保証を確立するために、平成23年度からアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーの整備に着手し、平成24年度に3つのポリシーを策定した。



(多地点制御遠隔講義システムを用いた授業)

2. 連合農学研究科における3つのポリシー

(1) アドミッションポリシー（入学者受入指針）

農林水産学分野、すなわち生命科学に基づく食料生産や生物資源環境に対する興味と問題意識を持ち、学位取得に至るまでの熱意と能力を備え、課題解決と学理探究を目指す、学生および社会人を国内外から積極的に受け入れる。

(2) カリキュラムポリシー（教育カリキュラム・学習指針）

本研究科では、「生物生産科学」、「応用生命科学」、「農水圏資源環境科学」のそれぞれの専攻分野で、次に掲げる学位プログラム教育と高度人材養成教育を行う。

学位プログラム教育：農学に関連する幅広い学問と高度な専門知識・技能を修得させ、研究指導をとおして諸課題を探索・解決する能力を向上させる。

高度人材養成教育：博士課程学生として確かな分析力・俯瞰力・説明能力を身につけさせるとともに、困難な課題に挑むチャレンジ精神やグローバルな視野の獲得など、実社会の発展に貢献できる能力を育てる。

(3) ディプロマポリシー（人材養成指針）

本研究科の定める所定の単位を履修するとともに、学術誌に発表した主論文に基づき作成した学位論文の審査及び最終試験に合格することが学位取得の要件である。なお、取得時には以下の能力が具備されていることが期待される。

1. 「博士」として社会から期待される品位と高度な専門知識を持ち、農林水産分野の課題探求と解決に至るまでの研究を、自立的に遂行できる能力を具備していること。
2. 「研究者・技術者・教育者」として、地域社会から国際社会まで幅広く活躍できる能力とリーダーシップ精神が涵養されていること。

3. 「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」の開講と改善に向けたアンケート調査の結果と分析

本研究科では、3構成大学（4研究科）に配属されている学生が一堂に会し、3日間の集中講義形式で「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」を実施しており、1年次及び2年次の2回受講（2単位）することを必須としている。

本セミナーは、全学生を対象として、個人の専門に偏らない幅広い農林水産学分野の知識の習得を目的としており、6名の内外の講師による講義、全学生を4班に分けて1年生が各自の研究発表を行う専攻セミナー、2年生全員（未発表の3年生を含む。）が研究成果報告を行うポスターセッション（情報交換セミナー）で構成されている。

講義は、広範囲で専門的に高い水準のものであり、研究の視野が広がることが期待される。また、専攻セミナー及びポスターセッションは、学生にとっての発表訓練に役立つものであり、国籍を超えた貴重な交流の場でもある。

また、開設した当初から、受講生を対象にアンケート調査を行い、その集計結果の分析を参考に、授業内容等の改善を図ることがFD活動の第一の取り組みになると考えている。

平成24年度は、琉球大学担当により、11月5日～7日の3日間の日程で開催され、学生74名、教員15名の参加があり、外部講師を交えて連大教員・学生による交流会も併せて実施された。

平成24年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科・農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）日程表

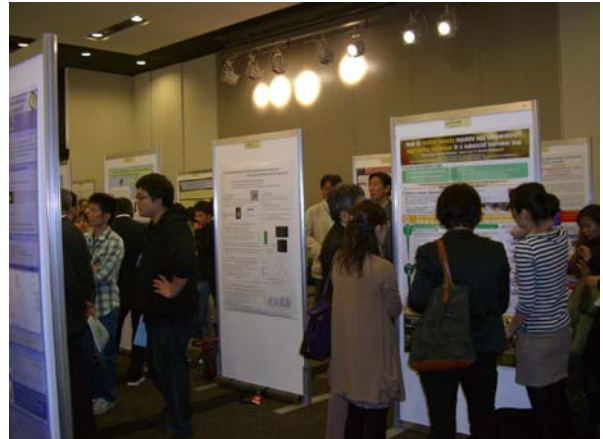
時 日付	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
11/5(月)						13:30	14:15	15:00	17:00		19:00
						受 付	開 講 式 写 真 撮 影	専攻セミナー		交 流 会	
1/6(火)	9:00	10:30	10:40	12:10	13:10	14:40	14:50	16:20	16:30	18:30	
受 付	セミナー-A 「ウイルス感染症とワクチン」 園田 善博 一般財団法人化学及血液 検査研究所 第二研究所 主任研究員	休 憩	セミナー-B 「生物多様性保全の意義と 課題」 五箇 公一 独立行政法人国立環境 研究所 主任研究員	昼 食	セミナー-C 「鹿児島の野生植物の 多様性」 宮本 旬子 鹿児島大学理学部地球環境 科学科 准教授	休 憩	セミナー-D 「ICTを利用した遠隔圃地 リアルタイムモニタリングの 基礎と応用」 塚口 勝 東京大学大学院農学生命 科学研究科 教授	休 憩	情報交換セミナー (ポスターセッション)		
11/7(水)	9:00	10:30	10:40	12:10	12:40						
受 付	セミナー-E 「メチン分解酵素系の多様性 と宿菌性メチンの酵素分解 メカニズム」 渡邊 剛志 新潟大学農学部 応用生物化学科 教授	休 憩	セミナー-F 「エビジェネティクス概論： 遺伝子発現のエビジェネティ ク制御と世代を超えた伝達」 佐藤 英俊 沖縄科学技術大学院大学植物 エビジェネティクスユニット	閉 講 式							



大学院連合農学研究科 農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）



「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」の講義



ポスターセッション（情報交換セミナー）

「農学特別講義 I（一般セミナー）」参加学生から徴した平成 24 年度のアンケートの集計結果は次表のとおりである。〔参加学生：74 名 アンケート提出者：59 名 アンケート回収率：79.7%〕

セミナーの理解度について						
〔回答項目〕	セミナー A	セミナー B	セミナー C	セミナー D	セミナー E	セミナー F
ほぼ理解できた	39名 (66%)	47名 (80%)	32名 (54%)	42名 (71%)	20名 (34%)	25名 (42%)
半分程度理解できた	17名 (29%)	12名 (20%)	25名 (42%)	17名 (29%)	28名 (47%)	25名 (42%)
理解できなかった	3名 (5%)	0名 (0%)	2名 (3%)	0名 (0%)	11名 (19%)	9名 (15%)
セミナーの運営・企画等について				専攻セミナーについて		
〔回答項目〕	日程 (時期)	日程 (日数)	会場	〔回答項目〕	グループの分け方	
良い	57名 (97%)	55名 (93%)	54名 (92%)	良い	53名 (90%)	
悪い	1名 (2%)	2名 (3%)	3名 (5%)	改善すべき	6名 (10%)	
その他	1名 (2%)	2名 (3%)	2名 (3%)	無回答	0名	
専攻・情報交換セミナーについて						
〔回答項目〕	プレゼンテーション		ポスターセッション		交流会について	
意義がある	45名 (76%)		53名 (90%)		37名 (63%)	
少しは意義がある	10名 (17%)		6名 (10%)		17名 (29%)	
その他	4名 (7%)		0名 (0%)		5名 (8%)	
無回答	0名 (0%)		0名 (0%)		0名 (0%)	

平成 24 年度農学特別講義 I（一般セミナー）アンケート調査結果

①セミナーの理解度について

本研究科の特徴の一つに、外国人留学生が多いことが上げられる。過去に実施したアンケートで、外国人留学生から「英語による講義の実施」を希望する声が多かったことを受け、英語中心の講義に移行していく中、アンケートの自由意見で「英語での講義が難しかった」との意見が見られた。

平成 23 年度に引き続き、平成 24 年度もほとんど日本語と英語の併用で実施したことにより、理解度が上がっていると思われる。

また、ほとんどの講義について、「非常に解りやすく、有意義なテーマだった。」「具体的な研究事例、試行と結果に興味深く拝聴した。」「リアルタイムモニタリングの講義が新鮮だった。」等の意見が見られ、学生にとって、非常に有意義であったと思われる。

今後は、外国人留学生と日本人学生全員に伝達するための対策として、日本語と英語の併用に統一することを視野に入れ、講義資料作成を見直していくとともに、普段の授業や講義においても、学生が興味を示し、理解しやすい内容となるよう、表現の方法、話し方、内容の組み立て等を考える上での参考にしたいと思う。

②セミナーの運営・企画等について

「時期」「日数」「会場」については 90%以上の学生から「良い」との評価を得られているため、今後も従来どおりのスタイルを踏襲したいと考える。

③専攻・情報交換セミナーについて

専攻別セミナー・ポスターセッション（情報交換セミナー）は、なるべく人数の偏りをなくすた

めに3専攻を4グループに分けて実施したので、グループ分けについては90%の学生から「良い」との回答が寄せられている。

「プレゼンテーション」「ポスターセッション」「交流会」とも、『意義がある』『少しは意義がある』を合計すると90%以上の学生が意義を感じていると思われる。

④セミナー全般について

- ・段取り、説明等がもう少しスムーズにいくように打合せが必要ではないか。
 - ・交通費等の補助について検討してほしい。
 - ・せっかく構成大学の学生が一堂に会する機会なので、施設見学等現場の実態に触れる機会も設けていただければさらに有意義だと思う。
 - ・専攻セミナー及びポスターセッションでは、スライドやポスターは英語に統一方がよい。
- などの意見があり、一部はすでにFD委員会や代議委員会で検討し、改善を図っており、今後も平成25年度の本セミナー実施に向けて改善事項を検討したい。

4. 人材養成学生支援セミナー I・II

平成22年度から、本研究科では、博士課程修了者が社会から何を求められているかを理解し、今後の修学姿勢及び社会へ出る際の心構え等の修得に役立てることを目的に、各方面の第一線で活躍する方々からより実践的な講演をしていただく機会として、「人材養成学生支援セミナー I」を開催している。

本セミナーは、選択科目であり、集中講義形式で行われ、1単位となっている。

平成24年度は、8月2日、3日に8コマ8名の外部講師により、多地点制御遠隔講義システムを使用して各構成大学に配信して実施し、連大生21名、修士課程学生18名の参加者があった。

平成24年度から、連大学生だけでなく、研究者を目指す修士課程や学部の学生及び教職員の参加も推進しており、講師の方々の広い視野からの有意義な講話は、今後企業や研究機関の研究者を目指している学生にとって、大きな励みと貴重な教訓になったと思われる。学生のみならず、教員にとっても教育指導を考える上で、参考になるものが得られたのではないだろうか。

今後もより広い分野の講師を迎えて、多くの学生及び教職員の意識向上につながるよう実施していくとともに、より一層の協力体制を築けるように、企業及び研究機関の開拓に努力していくことも必要になってくると思われる。

平成24年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科「人材養成学生支援セミナー I 2012」日程表

		8:50	9:00	10:20	10:30	11:50	13:00	14:20	14:30	15:50	16:00	17:40		
1日目 8月2日(木)	開講挨拶	講義1	「公設試験研究機関の研究現場」 広瀬 直人 沖縄県農業研究センター	休憩	講義2	「バイオ企業で求められる人材とは何か?」 今村 健一 (株)医学生物学研究所 営業部長	昼食	講義3	「大学院博士課程における研究教育の必要性:大学教授への話」 水光 正仁 宮崎大学農学部 教授	休憩	講義4	「研究支援関連業界で働かれようとする博士号を持つ方へ期待する事」 上田 昌宏 フロムガ(株) 社長	休憩	日本たばこ産業(株) 黒木 豊 & 総合討論会交流会
		9:00	講義5	「こんなことで、こんなことやってます。ー農研機構の概要と研究内容の紹介ー」 上地 奈美 (独)農研機構果樹研究所 主任研究員	休憩	講義6	「先端科学と社会を結びつけるベンチャー起業-経営」 高橋 修一郎 (株)リバネス 代表取締役 COO	昼食	講義7	「皆さんにできること ～試みに飛び出してみた人間による報告～」 篠島 智行 (株)海邦総研 事業支援部研究員	休憩	講義8	「研究者のキャリアパス 歴史と展望」 榎木 英介 近畿大学医学部 病理学教室	開講挨拶
2日目 8月3日(金)														

開催場所:琉球大学農学部2階会議室 / 各大学 SINET 設置教室(鹿児島大学連合農学研究科3階会議室 佐賀大学:農学部1号館南棟1階学生演習室)

また、10月には、水産学部の練習船「新かごしま丸」に乗船して、我が国の国土とそれを取り巻く水

圏に関する総合的理解を持った人材養成の一翼を担うことを目的とした「人材養成学生支援セミナーⅡ（洋上セミナー）」を実施しており、平成24年度は、連大生3名、修士課程学生4名、学部学生24名が参加した。

人材養成学生支援セミナーⅠ・Ⅱともに継続実施し、地域社会、国際社会で幅広く活躍できる能力と意識の養成に繋がるよう、今後も整備していかねばならない。

5. 英語論文作成指導セミナー

平成23年度から、学生の英語論文作成のための知識の習得・向上のために英語論文の作成法及び書き方などの指導としてのセミナーを、2回に渡り、一部インターネットを使用して、多地点制御遠隔講義システムにより各構成大学へ配信して実施した。

本セミナーは、学生及び教員からも高評価を得ており、継続的な開催を希望する意見が多く、学位論文作成のみでなく、グローバル化に対応した、国際的に活躍できる人材を育成する上でも、実践的な教育として、今後も継続して開催していくこととしている。

平成24年度は、英語論文のみならず、研究者の「書く」能力の向上を図ることを目的として開催し、添削作業を取り入れ、より実践的な指導が行われた。なお、佐賀大学配属1名、琉球大学配属5名、鹿児島大学配属6名の計12名の学生の参加があった。

6. 分野別セミナーの開催

平成24年度に、琉球大学と鹿児島大学において、構成大学間の連携を促進し、さらに地域特性に根ざした産学官の連携も視野に入れて、連大生を中心とした若手研究者の意欲の向上に資することを目的として「分野別セミナー」を開催した。

「九州沖縄における昆虫学の展開」、「分野別セミナー（農芸化学）」、「熱帯・亜熱帯果樹の生理・生態と栽培」の3件の分野別セミナーにおいて、特別講演、口頭発表及びポスター発表があり、活発な討論、意見交換が行われた。

なお、これらのセミナーには、学内外からの研究者、学生及び地域の生産者の多数参加があり、3件のセミナーで合計184名が集い、有意義なものとなった。今後は、他の分野においても開催する機会を広げ、分野ごとに議論、研究・教育を行える環境を整備し、大学間及び地域と共同・連携した共同研究プログラムの推進にも繋がるものと期待するところである。



「分野別セミナー（農芸化学）」



「熱帯・亜熱帯果樹の生理・生態と栽培」



「九州沖縄における昆虫学の展開」

7. 修了生を対象としたアンケートの実施

例年3月と9月に、修了生を対象としたアンケートを実施している。

これは、自己点検・評価の参考とするため、平成18年4月に、平成11～17年度修了者を対象に郵送により実施したのが始まりで、以後は修了時に学生から回答してもらう形を取っている。

平成23年度及び平成24年度の修了生アンケートの集計結果は以下のとおりである。

平成23、24年度修了生アンケート結果

質問項目	評価内容	分布(%)	
		H23年度	H24年度
共通セミナー(一般)の内容について	よい	68	76
	よくない	8	12
	どちらとも言えない	4	12
共通セミナー(特別)の内容・方法について	よい	80	92
	よくない	8	0
	どちらとも言えない	12	8
教員の指導に満足したか	満足した	84	92
	改善して欲しい	16	4
	どちらとも言えない	0	4
中間発表は効果があったか	効果があった	92	80
	効果がなかった	4	8
	どちらとも言えない	4	12
実験または調査を計画・遂行し、データを正確に解析・考察し、かつ説明する能力が身についたか	身についた	96	88
	身につかなかった	4	0
	どちらとも言えない	0	12
専門的な知識及び技術を駆使して、課題を探求し、解決する能力が身についたか	身についた	88	92
	身につかなかった	4	0
	どちらとも言えない	8	8

社会の要求に対して様々な情報を収集・分析し、問題点と課題を理解し、適切に対応する能力が身についたか	身についた	84	96
	身につかなかった	8	0
	どちらとも言えない	8	4
研究設備に満足したか	満足した	80	80
	改善して欲しい	20	16
	どちらとも言えない	0	4
他構成大学との情報交換や交流があったか	よくあった	24	20
	たまにあった	44	40
	ほとんどなかった	32	40
学位申請条件のレフリー付き学会誌2編の要求はこのままでよいか	このままでよい	100	88
	厳しくすべき	0	4
	優しくすべき	0	8

回答学生 H23 年度（日本学生 12 名、留学生 13 名）、H24 年度（日本学生 9 名、留学生 16 名）

（出典：H23. 9、H24. 3、H24. 9、H25. 3 修了生アンケートまとめ）

上記の連大で実施される共通セミナーへの意見、教員の研究指導及び学生自身の能力向上、研究設備や学生生活に関する集計結果は、今後開催されるFD委員会へ提出し、意見交換を行い、検討することとしているが、平成23年度、平成24年度とも各セミナーの内容、教員の指導、研究設備等への評価が高い中、他の構成大学間の情報交換や交流については、あまり交流が図れなかったとの意見が多かった。

学生からは、他の大学の学生とのコミュニケーションを深める機会を望む声が多く、今後は、平成24年度に開始して大きな成果を収めた分野別セミナーの継続などを視野に入れて、構成大学間、日本人学生と留学生間の学生交流の機会の必要性を検討していくこととしたい。

また、コメントには、フィールドワークを希望する声、研究成果と社会のニーズとの関連性・情報分析などへの対応能力を修得したい、高度な研究設備があるが有効的に活用できていないなどの意見があり、平成25年度におけるFD活動の一環として反映させるようにしたい。

本アンケートについては、今後も継続して実施し、データ分析を行い、FD活動の源として本研究科の教育研究の将来に役立たせていきたいと考える。

8. その他のFD活動

①ティーチング・アシスタント制度による活動実態把握

ティーチング・アシスタント（TA）制度は、大学院学生の処遇の改善とともに、指導者としてのトレーニングの機会提供を目的としているが、平成17年度まではTAに採用された学生の意見を聞く機会を設けていなかったため、平成18年度からTA業務に従事する連大生を対象に、アンケート形式の「TA活動実施報告書」を提出させ、その内容を分析することにより、TA活動の実態把握に努めている。さらに、平成19年度からはTAの指導を受けた学生を対象にした、アンケート形式の「TA活動評価調査」も実施している。

平成25年度にあっては、「指導者になるためのトレーニングとして有益であったか」との質問に対し「とても参考になった」「まあまあ参考になった」と回答した学生は同実施報告書提出学生全体の93%であった。具体的には、1) 学生個々の個性及び理解度に応じた指導の必要性、2) コミュニケーション能力、伝達・指導方法の修得、3) 授業・実験の事前準備の必要性や安全管理の重要性、4) 時間・スケジュール管理等を学んだとの意見が多く、人に指導することで自分自身の知識向上にも役立ったとの意

見もあった。学生に指導することで、自分自身の研究への理解を深め、研究指導能力の向上に繋がるものと思われる。

また、平成 21 年度から、T A採用学生及び当該学生の指導教員を対象に、「大学の教育理念とT Aの心構え」「T A業務に関わる注意事項」「安全衛生」を指導することを目的とした「T A研修会」を構成大学毎に実施して、T A活動に携わる学生への事前指導を遂行している。

9. おわりに

本研究科のFD活動については、平成 18 年度末から平成 19 年度にかけて、FDに関する規則や委員会の整備を行い、教育研究のより一層の充実に向けた体制が整ったといえる。一方、これまでのFD活動を顧みたとき、各種アンケートを実施し、その集計結果に対してFD委員会で意見交換することで完結していたように思われるが、平成 24 年度においては、次年度に反映できるようFD委員会及び代議委員会において早急に検討し、改善できる部分については、見直しを図ることができた。

今後は、本研究科でのFD委員会を含むさまざまなFD活動を、いかに今後の教育力、特に博士課程学生に対する研究指導能力の向上に反映させていくかが検討課題であると思われる。

現在、本研究科では標準修業年限内での学位取得率の向上が課題となっている。これまでも学位取得率向上対策の一環として、1 年次に中間報告、2 年次に中間発表会を義務化させ、主指導教員から 1 年次終了時点で「研究指導報告書」を、2 年次終了時点で「研究経過の『中間報告会』終了報告書」を提出させ、研究の進捗状況を確認するシステムを導入していた。この制度をさらに実効化するために、平成 23 年度からは、2 年生対象の「中間発表会」は、多地点制御遠隔講義システムを利用して、専攻ごとに合同で行い、お互いに相対的な進捗状況等を把握できるようにした。さらに、平成 24 年度からは、関係講座にかかわらず、学生及び教員ともに他の講座の発表にも参加するように推進し、自己研鑽の要素となり、更なる学力向上にも繋がると思われる。

今後は、標準修業年限内で学位論文を提出できる研究指導を目指すとともに、過年度生を出した場合は、FD委員会で原因を見極めて検証するなどの対応策を整備し、学生及び指導教員双方を対象とした取り組みを検討していくべきであると思われる。

また、平成 24 年度に制定した連合農学研究科の 3 つのポリシーについて、学生指導等にどこまで反映されているかを検証し、カリキュラム等にも反映させていくことが必要となる。

そして、「大学院博士課程におけるFD活動とは何か」という原点に立ち返り、教育研究力向上のための一層の努力をしていきたいと考える。